

越谷市郷土研究会会報 第十四号

古志加具谷

平成十九年十一月刊

当会のありかたについて

今年はずいぶと、越谷出身、江戸時代の日本一の力持、三ノ宮卯之助の生誕二〇〇年にあたります。当会でも記念講演会、卯之助の力技の流れを伝える深川睦会の公演や記念史跡めぐりの実施を予定しております。県内でも郷土史研究の団体は数多くありますが、こういうイベントをここまでやる場所は他にはないのではないか、と思われまます。

なぜ、私たちは、そこまでやるのでしょうか。たとえば、越谷に市民が誇るに足る「なにか」、特色のある「なにか」があれば、こういうことをしなかつたかも知れません。

たとえば、草加市であれば、誰でも知っている「草加せんべい」がありますし、春日部市であれば中世の領主「春日部重行」、桐だんす、麦わら帽子。越谷に何かがあるのか。三十二万都市とはいえ、あまりにも特徴のない都市ではありませんか。

そこに住む市民は何かをほしいのです。誇るべき何かが一。

越谷の場合、誇るべき何かを、だれが市民の皆さんに提供するのか。その「タネ」を一番多く、持っているのは当会ではないでしょうか。郷土の歴史や民俗の中に、そういう「タネ」が埋もれている可能性が多いと思うのです。

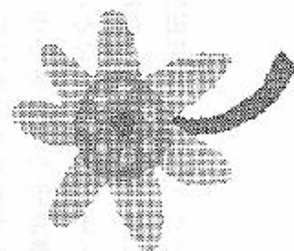
常任顧問・高崎力先生の働きも、単なる「郷土史研究者」「郷土史家」というスタンスではありません。先生の情熱は「越谷市民に何とかして、郷土に対する誇りを持つてほしい」ということに注がれていると思います。

もうおひとりの常任顧問・谷岡隆夫さんとは、以前に観光協会に乗り込んで、越谷には名物がない、これを何とかしてほしいとお話したことがあります。越谷市商工会の青年部が「鴨なべ」を越谷の名物にしようと思き出される、ずっと以前の話です。

私たちの敬愛する、このような先輩方のおこころを引き継いで、越谷の市民の方々に誇りや市民のきずなを強める共通の話題を発信する当会でありたいと思います。当会以外にそういうことをやってくれるところはあつてでしょうか。また、市民の誇りとは、行政をあてにするものではなく、市民自らがつくるものだと思います。

私たちには強みもあります。ほかのNPOでは、あまり会員同士の友好の場はないようですが、当会には月に一回の史跡めぐりがあります。そして、その参加費や年会費の一部は前述の市民のための活動に振り向けられています。会員が楽しみながら、郷土のためにも役にたつてい。そんなシステムをますます活かしてゆきたい、そんなことを考えております。ご理解のうえ、ご協力をよろしくお願いいたします。

このたび、編集委員の方々のご努力、ご協力で、会報十四号が発行されることになりました。ありがたくお礼を申し上げます。とくに編集委員長・原田民自さんのご努力については特筆されるべきものがありました。ここから感謝の意をささげる次第です。



# 古志賀谷 第14号

## 目次

巻頭言

会長・宮川 進

今はなき不動道 越谷市内の不動道の道標

加藤幸一

近藤勇と越谷

宮川 進

越谷周辺の近代交通のあけぼの

山本泰秀

東武劇場再現図始末記

三浦栄市

越ヶ谷・大沢娯楽の殿堂 東武劇場

原田民自

日光道中ぶらぶら歩き

和泉 守

中世初期よりの開発 新方庄と新方氏について(考察)

岩井 茂

増林のねんね河岸の河童

山本泰秀

大沢の七ツ池

高崎 力

昭和十年 越ヶ谷町電話番号簿

谷岡隆夫

大沢小学校の『青い目の人形』

水上 清

越ヶ谷宿・三鷹屋嘉兵衛奉納の石燈籠

木原徹也

戦後六十年の幻の菟島飛行場

磯谷知子

大沢の天神前土橋

谷岡隆夫

砂利供養塔(蒲生一丁目)について

高橋正澄

旧街道沿いの旧越ヶ谷郵便局

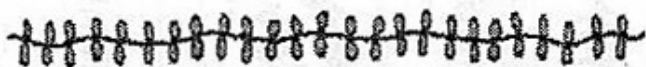
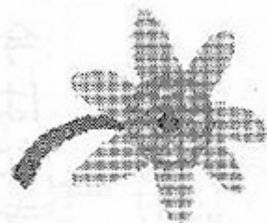
原田民自

増林河岸の跡

鈴木進志

97 94 93 92 90 88 86 85 83 82 80 67 64 48 28 11 1





活動報告	講演会報告
------	-------

越巻村（現・新川町）出身の力士 荒井山大蔵

高橋 清

古写真と絵葉書でつづる大正時代の越ヶ谷

見田方遺跡発掘四十周年記念講演

斎藤豊作 越谷からパリへ

三ノ宮卯之助 生誕二百年記念講演

天嶽寺前 寺橋・由来について

映像で見る懐かしの越谷

小学校歴史講座「河川探検隊」「戦争中のくらし」

文化財パトロール

親子で作ろう かわいいおひなさま 郷土研・恒例イベント

史跡めぐりの記録一覧 第三四三回く三七〇回

史跡めぐり報告

アンケート

展示作品一覧

会報バックナンバー

研究会発表報告リスト

会員名簿

役員名簿

『夢空感』へお越してください

夢空感にある「通い徳利」のこと

あとがき 編集後記

165 164 163 162 160 156 152 149 137 111 110 109 108 106 105 104 103 102 101 99 98



# 今はなき不動道

加藤幸一

## 1. 不動明王像付き道標

茶屋通り神谷家(蒲生一五十一)路傍



## 2. 道標石塔

植竹家(場所三一六一一四) 邸内

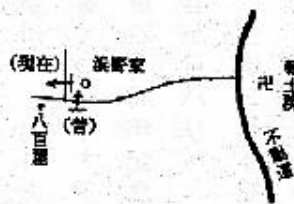


## 3. 道標付き文字庚申塔

〔側面〕



孫野家(兼戸二六一四〇)路傍



## 4. 道標付き文字庚申塔

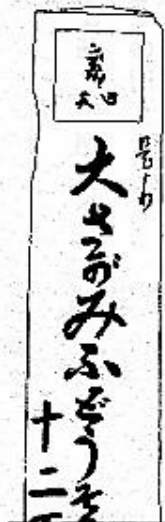
〔側面〕大らかと道



官前通りと八幡越谷線の交差点

## 5. 『不動尊』道標石塔

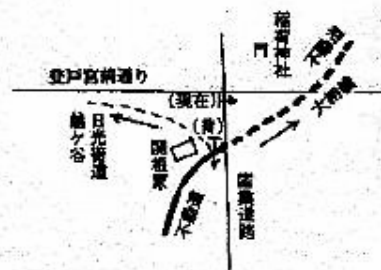
大蔵寺



## 6. 道標付き文字庚申塔

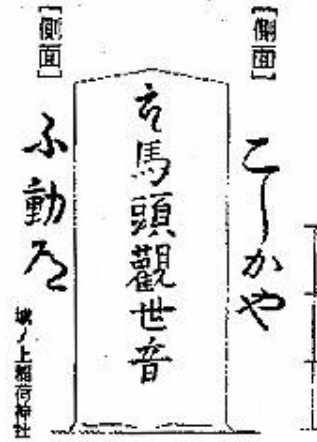
〔側面〕

西 大らかと道  
北 大らかと道





13 道標付き「馬頭観音」文字塔

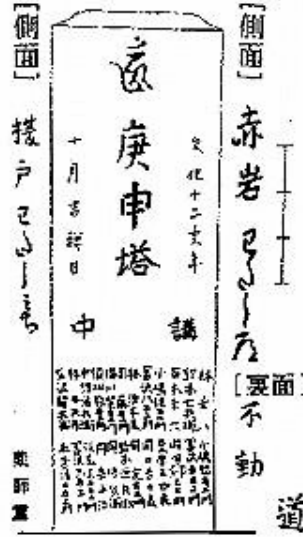


城ノ上稻荷神社

14 道標付き「不動明王」文字塔



15 道標付き文字庚申塔



16 道標付き文字庚申塔



本来の所在は地不明の道標「白塔」

不明1 道標付き文字庚申塔



不明2 道標付き文字庚申塔



不明 3 道標付き文字庚申塔

印村文(東町二一八六) 陸奥

〔側面〕 西ふぶとうる



〔側面〕 南そとうる

不明 4 道標付き文字庚申塔

〔側面〕 こたはる



不明 5 道標付き「馬頭観音」文字塔

西安東(増林二一三六九) 陸奥

〔側面〕 古こーかやる

安永言六月五日

馬頭観世音供粮塔

安永三年九月十九日

〔側面〕 丸ふぶとうる



今はなき不動道

―越谷市内の不動道の道標―

解説編 II 加藤 幸一



茶屋通りから始まる不動道

不動道は、茶屋通り(日光街道)の「大相模道(不動道)の道標石塔のある地点、つまり日光街道沿いの不動道の入口から始まり、蒲生の光明院の前を通って北進し、蒲生一五二五の手前で西に曲がり、稻荷神社(地元では、茶の木が周囲にあつたので、俗称「茶稻荷」と呼ばれた)の西側を通って、現在の県道柿ノ木・蒲生線を越え、植竹家[蒲生三二一六・一四]の西側を通り、その後北進し、突き当たりの関根家(登戸一九二〇)で北東に進み、登戸の稻荷神社の東側を通って、葛西用水沿いに北進して、流橋(ながればし)から大相模の不動尊(大聖寺)へと進む道である。



不動道1 所在地 茶屋通り（日光街道）神谷家〔蒲生一・五〕

一〔路傍（西向き）〕

〔正面〕 是より大きき道（是より大相模道）

※日光街道のこの地点から日光街道から分かれて北東に進む不動道で、不動尊に通じる。

不動道2 所在地 植竹家〔蒲生三・一六・一四〕邸内〔本来は道路に面していた〕

路に面していた

※江戸時代は、大相模の不動尊に通じる大相模道（不動道）

の、蒲生三・一七と三・二五の間の路傍（南向き）にあつたと推定できる。

〔正面〕 是より左大きき道（是より左・大相模道）

※道なりに行かずに、茶稻荷の手前を左に折れて北進すると、不動尊に通じる。

不動道3 所在地 浜野家〔登戸二・六・四〇〕路傍

※本来は、この道路の反対側に北向きに置かれていたと推定できる。

〔右側面〕 ふどう道（不動道）

※この道を東進すると、報土院の前に出る。そのT字路を北進する。途中でこの道は途切れてしまい、それから先の道は現在は存在していないが、江戸時代は流橋に通じる道があり、不動尊に通じていた。

不動道4 所在地 宮前通りと八潮越谷線の交差点

《本来の所在地は登戸一四一二〇の関根家東側の不動道路傍（南向き）》

※この石塔は、もとは登戸一四・二〇の関根家東側にあつた。

関根家南側にある北東から南西に走る斜めのわずかな道路（長さ十五メートル）は古道（不動道）の跡で、その

古道の南側路傍（産業道路の東側歩道地点、現在の登戸一四七）にあつたという。

この古道は、蒲生の茶屋通りの不動道入口（奉行地）から続く道である。

〔左側面〕 是より 大きき（大相模）道

※北東の方向に進むと、不動尊に通じる。

〔右側面〕 是より 日光道中

こしかや（越ヶ谷）

※この石塔から西進する道がかつてはあつたと思われる。

その道を西進すると日光街道に合流し、北進すれば越ヶ谷に通じる。

### 日光街道から始まる不動道

次にあげる不動道5の道しるべは、もとは日光道中に面した南越谷一・四・八〇の角地にあつたもので、後に宮前通り向かい側の南越谷一・一・三八の常陽銀行の角地に移り、さらに大聖寺境内の東門通りに移転してきた。現在の場所、東門の外への移転は、平成十六年七月である。

しかし江戸時代には、日光街道沿いの、かつての不動道の入口（現、南越谷駅北東の南越谷二・一四・三一あたり）に西向きに置かれていたと思われる。この不動道は流橋を通過して不動尊に通じていた。流橋のすぐ上流に架かる使用禁止の橋は、昔の不動道の名残の旧・流橋である。

不動道5 所在地 大聖寺《本来の所在地は、南越谷駅北

東の日光街道に面した所と推定》

〔正面〕 大きがみふどうせん□ (大相模不動尊)

十二丁

※日光街道から、不動尊に通じる道があった。

不動道6 所在地 西方の閻魔堂橋 (現在は東向き、かつては南東向き)

〔左側面〕

西 ぢおんじ (慈恩寺)

北 こしかや (越ヶ谷)

ふどうせん (不動尊)

※八条用水に沿って西進すると、越ヶ谷や慈恩寺に通じる。

※閻魔堂橋を渡って八条用水に沿って東進して、すぐに北進すると、不動尊に通じる。

〔右側面〕

南 草加道

※南西に進むと、草加や江戸に通じる。

不動道7 所在地 平野家〔増林一二七〇〕そば十字路 (西向き)

〔左側面〕

左ふどう道 (左・不動道)

※南進すると、千間堀の宮野橋を渡って直進し、猿島道に合流し、不動尊に通じる。

〔右側面〕 右のだみち (右・野田道)

※用水路沿いに西進すると、野田 (猿島) 道に合流し、野田に通じる。

不動道8 所在地 定使野共同墓地 (《本来の所在地は猿島道沿いにあった (西向き) と推定》)

〔左側面〕 ふとう道 (不動道)

※猿島道を南進すると、越ヶ谷や不動尊に通じる。

〔正面〕 右こしがや道 (右・越ヶ谷道)、

左さしま道 (左・猿島道)、

〔右側面〕 のだほうし花道 (野田・宝珠花道)

※猿島道を北進すると、野田、宝珠花、猿島に通じる。

不動道9 所在地 吉川道の路傍南側 [瓦曾根一・二・三二] (西向き)

《日光街道より吉川に分かれる地点に設置された道標である》

〔正面〕 是より大きかみ道 (大相模道)

※北東に進み、瓦曾根溜井に突き当たって吉川道を東進すると不動尊に通じる。

不動道10 所在地 箕輪家 [越ヶ谷中町八・二〇] 邸内 (《本来の所在地は別の所》)

《本来の所在地は、現在の越谷市役所 (元荒川の河川敷) の西側にある土手道 (日光街道ができる前は、この道が奥州道と推定) に面した、越ヶ谷5丁目の観音堂の当時の境内東端の道路に面した地点 (現、越ヶ谷五・三・五六) に東向きにあったと推定》

〔左側面〕

このた (野田) 道  
此方 ほうしゆはな (宝珠花)

※北進すると、野田や宝珠花に通じる。

〔右側面〕

大さがみ (大相模) 道  
此方 よし川 (吉川)  
なりた (成田)

※南進すると、大相模の不動尊や遠くは成田山 (新勝寺) に通じる。

〔裏面〕

はどがや (鳩ヶ谷) 道  
此方 かわくち (川口)

※西進すると、日光街道を横断し、赤山道 (鳩ヶ谷道) を通って鳩ヶ谷、川口に通じる。

不動道 11 所在地 西方の浜野家 「相模町二二二三」の角

(西向き)

※「馬頭観(ばとかん)」との屋号のある浜野家の角にある。

なお、馬頭橋は平成四年に架けられたもので、それ以前はなかった。

〔左側面〕 草加迄二里

越ヶ谷迄十二丁

※西進すると、越ヶ谷や日光街道に出て草加に通じる。

〔右側面〕 是より

左 不動尊道

※北進すると、不動尊に通じる。

「ばば渡し」と不動道

「ばば渡し」は増林村と対岸の上赤岩村を結ぶ古利根川にかかる渡しであった。

「ばば渡し」の「ばば」は、耳で聞くと「婆」を連想してしまう。そのためか、単に「渡し場」、あるいは地元が中組なので「中組の渡し場」ともいう。「ばば渡し」の「ばば」の由来は不明である。「婆さんが渡し場にいたから」との言い伝えもあるが、もともとは「馬場」という意味だったのであろう。

千代田橋 (旧称、二子曾根橋) そばに道標 (道しるべ) が刻まれた石塔がある。

その石塔に、「ばば渡し道」、「不動道」、「松伏道」の文字が刻まれている。もとは、新方川が拡張される以前の千代田橋 (旧称、二子曾根橋) の南東側旧土手の上にあった。

この石塔に刻まれている『橋向左ば、わたし(橋向こう左、ばば渡し)』とは、橋 (二子曾根橋) の向こうの道が古利根川にある「ばば渡し場」に通じる道であることを示している。

橋を渡るとすぐに分かれ道 (今はない) になっているが、向かって左の道 (今はない) を多少蛇行しながら真北に進んで行く。するとかつての古道に突き当たる。それを左に曲がる。すると間もなく現在の新道 (平方東京線) と合流

する。さらに六十メートル先に進み、右に曲がり古利根川に通じる道を進む。突き当たりの上手が渡し場跡で、向かって左側あたりが渡し守りの人がかつて住んでいた所である。

渡しは、戦後のカスリン台風が開東を襲った昭和二十二年頃まで行われていた。

また『向ふどふみち（向こう、不動道）』とは、橋を渡らずに南に向かう道が不動尊に通じる道を示している。今もその名残の道が一部ある。この不動道を道なりに行くと突き当たりが百木家となる。この丁字路を右に曲がって西に向かい、元荒川に架かる不動橋を渡る。昭和三十一年に不動橋が架かるまでは「不動の渡し」があった所である。明治十三年の地図を見ると橋が架かっていたことがわかる。江戸時代は、ここは参詣のために頻繁に行き来するので橋は欠かせなかつたのであろう。東に向かうと、森西川（もりにしかわ、増森村西川）や吉川に通じる。

不動道12 所在地 増林の千代田橋（旧・二子曾根橋）そば

にあつて南向きであつたと推定

〔左側面〕 橋向左ば、わたし道（橋向こう左・ばば渡し道）

※二子曾根（ふたごそね）橋の先の二手に分かれる内の

の左側の道は「ばば渡し」に通じる。

〔正面〕 向ふどふみち（向こう・不動道）

※南進して、元荒川に架かる橋を渡つて不動尊に通じる。

〔右側面〕 松ぶし道（松伏道）

※千間堀に沿つて西進して猿島道に出てから松伏に通じる。

不動道13 所在地 城ノ上稻荷神社（本来の所在地は神社そばにあつた（北東向き）と推定）

〔左側面〕 こしかや（越ヶ谷）

※かつては、西進して越ヶ谷の久伊豆神社東側に通じる道があつた。

〔右側面〕 ふ動道（不動道）

※かつては、南進して元荒川に架かる橋を渡つて不動尊に通じる道があつた。

不動道14 所在地 薬師堂（本来の所在地は増森一・二二二の

そば三差路（北向き）と推定）

〔左側面〕

西 こしかや（越ヶ谷）

大さかみ不動（大相模不動）道

東 赤岩わたし（赤岩渡し）

のだ（野田）

※西進すると、不動道を通つて不動尊や越ヶ谷に通じる。

※東進すると、赤岩渡しやその渡しを渡つて野田に通じる。

〔右側面〕

南 よし川（吉川）道

※南進すると、遠回りだが古利根川の中島の渡しを渡つて吉川に通じる。

不動道15 所在地 薬師堂（増森一七二四の一の北東角地周辺

にあつた（北東向き）と推定）

〔裏面〕 越ヶ谷 不動道

※南西に進んで千間堀を渡り、不動尊や越ヶ谷に通じる。

〔左側面〕 赤岩わたし道（赤岩渡し道）

※かつては北西に進む道があつて、古利根川にかかる赤岩渡しに通じる。

〔右側面〕 榎戸わたしミチ（榎戸渡し道）

※南東に進むと、古利根川（現在は無い）にかかる榎戸渡し（さんこう渡し）に通じる。

不動道 16 所在地 森西川集会所（本来の所在地は増森五二

五の路傍（南向き）と推定）

〔左側面〕 古川道

※東進すると、古利根川の中島の渡しを渡り古川に通じ

〔右側面〕 越ヶ谷 大相模不動道

※西進すると、不動尊や越ヶ谷方面に通じる。

〔裏面〕 榎戸 赤岩 渡 のた（野田）道

※北進すると、増森橋を渡って古利根川の榎戸渡しや赤岩渡し、さらに野田に通じる。

不動道《不明 1》 所在地 東小川の香取神社（本来の所在地は不明）

〔左側面〕 吉川道 不動道

不明道《不明 2》 所在地 越巻の中新田の稲荷神社（本来の所在地は不明）

の所在地は不明

〔左側面〕 みぎ 大相模ふどうそん（不動尊） ミチ（道） こしかや（越ヶ谷）

不動道《不明 3》 所在地 南百の中村家（東町二・一八六）路傍（本来の所在地は不明）

〔左側面〕 西 ふどう道（不動道）

〔右側面〕 南 そうか道（草加道）

不動道《不明 4》 所在地 増林の勝林寺（増林村内の不動道のどこにかあつた（東向き））

〔左側面〕 わたしバ道（渡し場道）

※不動道を北進すると、古利根川の「ばば渡し」に通じる。

〔右側面〕 ふどう道（不動道）

※不動道を南進すると、元荒川を渡って不動尊に通じる。

不動道《不明 5》 所在地 増林の岡安家（増林二・三六九）

《本来の所在地は不明》

〔左側面〕 右こしかや道（右・越ヶ谷道）

〔右側面〕 左ふどうそん道（右・不動尊道）

# 今はなき不動道

— 地図編 —

— おもな不動道

ばば渡し ■■■ 今はなき不動道

— 古道

----- 今はなき古道

赤岩渡し

榎戸渡し

吉川市

中島渡し



平成17年3月、越谷市広報広聴課発行の「こしがや案内図」(第30号)を使用し作成しました。

また古道については、明治十三年測量の「2万分1フランス式色彩地図」(日本地図センター発行)

などを参考にして推定して描いたものです。

平成19年9月18日 加藤 幸一

# 近藤勇と越谷

宮川 進

近藤勇の最後については、一般には次のように言われている。すなわち、「流山で捕まり、板橋に送られて、処刑された」というのである。そして、その「板橋へ送られる間に越谷を通った」とも言われている。

「通った」だけでなく、「泊まった」という説もあり、また、「綾瀬川の一の橋畔にあった（現在の越谷市大間野町）、よしずやという茶屋の藤をながめ、辞世を詠んだ」という話もある。

これらについて、検証をおこなってみた。

## 1. 近藤勇は、流山で捕まったか

流山市にある近藤勇陣屋あとの碑には「ここで捕縛された」、表示板には、「近藤勇がここで自首した」と、記されている。文献でも、「近藤勇が流山で縛についた」とするものも、少

数ではあるが存在する。「千葉県東葛飾郡誌」（千葉県東葛飾郡教育会編・刊 T 12・6）も、その一つである。

「時は慶応4年4月15日なり。是より先き、勇等はれを探知すれども、將軍慶喜の旨を奉じ兵を鎮撫して敢て動かしめず、自ら官軍の軍門に至り陳述するところあらんとす。歳三深く諫むれども肯かず、飄然香川（宮川註・官軍参謀）の本営に到る。途にして伏兵大に起り近藤を捕へんとす、近藤立ち処に数人を倒し、大声叱咤して懲憑縛に就く。」

この話は、「流山のむかし」（流山市立博物館市史編さん係編著・流山市教育委員会刊 H 14・3）によると、「地元の言い伝え」を収録したものとされている。しかし、この「流山のむかし」によると、別に「地元の言い伝え」を収録した「驍將近藤勇來歴」（岩田信助著・発行年欠）では「捕縛」ではなく、「官軍と戦うは慶喜公の志にそむき且つ此流山を兵火の災にあわせ諸人を苦しめざるを得ない。吾一人身を殺して諸人の難を救うことが出来れば死んでも恨みはない」と遂に心を決し、単身、香川の陣所へ到りました」と「自首説」のような書き方がされている。

「流山の史跡をたずねて」（高橋一元編・流山市教育委員会刊 S 49・1）も、この流れをうけつぎ、「意を決して自首したのです」としている。これらの、「捕縛説」「自首説」は、「地元の言い伝え」であり、官軍と新撰組が武器をもって対峙しているとき、その現場に「地元の人」がいたとは考えられないから、細部については「想像」によってつくられた話と考えてもよいのではなからうか。

もう一つ、近藤勇の「捕縛」を記しているような資料がある。それは、この時、流山に官軍として来ていた岡田隊（美濃国揖斐川現・岐阜県揖斐川町）にあった旗本岡田家（五千石で構成）に加わっていた富田重太郎が書いた「官軍記」（原本・慶応四年 明治維新討幕軍従軍記 所載・「揖斐川町史 史料編」揖斐川町編・刊 S 45・3）である。

同（宮川註・四）月二日・三日

一 越ヶ谷宿泊り翌日、祖式釜（ママ）八郎殿春日部宿より結城へさして御繰入、香川敬三殿は流山さして在閑道を進む、斥候有馬藤太殿、上田楠次殿探索し戻り候処、流山と申処に賊軍数多屯致居候由、但し利根川渡船場へ有馬藤太殿御越、弥々流山に集り居事儘と探索の由注進有之間、香川殿付彦根隊岡田隊岩村田等進出、当在町半にて玉込用意致し進む、流山間近く相成る凡半道斗の所、かけ足にて押掛け、流山町端迄行く処、先陣有馬殿付添彦根人数より、当陣を見かけ三発斗擦り打ち致し候も、手答え致さず南方へ引上に相成り、扱て南方より上田楠次殿馬上先へ、侍五人義経袴にて来り、西の方より後詰香川殿付添岡田隊右の方より出会、馬上より御訂し候処、当陣屋詰寄参旨申立候て、余り怪しきものにても無之に付、愈々陣屋を固く相守可申旨仰せ含み、夫より賊討取可申旨馬上にて御三君相談、彼の味噌屋を指して進み、前後左右取囲み居り、香川殿、有馬殿御両所、右味噌屋へ乗込搜索有之、賊の隊長大久保大和（宮川註・近藤勇が当時使っていた変名）並家来両三人罷居り候に付、御訂し大久保の答に拙者共は許より官軍内分隊にて、能き折を見て御加勢可申所存、嘗て官軍に敵対致さず候旨申聞候、尤も外に稱名院

二屯居致居候由に付、夫より右隊長に案内為致、吟味を遂げ候処、賊は今日四ツ頃、官軍の斥候見付追々兵器捨置き離散、捨置し小銃二百五十丁分捕彦根隊より本陣へ送る

一 始め宿内入口より北へ廻り、岡田隊斗御旗護衛致し追々味噌屋舖の方へ進み候処、北山の方繁みより賊輩御旗を見て五六発打ち掛く、此時矢突し丘をうなり行、既に打止められし処、すかさず畔の端にすくみ戦争の用意を致し候処、隊長柴山氏、味噌屋門前にて旗をふり知らせ有之に付、此処へかけ足にてすゝみ申候て同家西の方に固め居候、然る処大久保大和（宮川註・近藤勇が当時使っていた変名）儀生捕に相成候、此時残逃去る、但し（原註・鎌力）を持ち或は常体に風俗を変え山の方さして散乱す、但し当所より酒汲呑、むすび夥敷出す、其内日暮候間本陣にて洗足休息致し、四ツ過俄に軍驛有之出立、越ヶ谷へ卯の刻到着

△宮川註・この文の最初、「春日部」という書き方には疑問がある。須賀芳郎著・刊の「かすかべの歩み」（H 2・1）によると、春日部は中世末期から「糟ヶ辺」または「糟壁」と書かれており、近世に「粕壁」の文字に変化しているという。「春日部」の文字が全く使われていなかったのではないようであるが、数日しか滞在していない富田重太郎が、慶応4年になぜ、「春日部」と書いたのだろうか。

後半を読むと、「生捕」となっているから、まさに「逮捕」である。しかし、前半では、香川と有馬は大久保大和と会話をし、別働隊へ案内をさせてはいるが、「捕まえ」てはいないようである。



その他にも、「捕縛」としてあるものもある。

「宇都宮藩家老縣信緝日記」(『栃木県史 史料編 近世7』  
栃木県史編さん委員会編 栃木県刊 S 53・3)には四月五日ノ項に「東山道総督の兵、有馬藤太・上田楠次二氏等越谷駅ヨリ下総流山ノ賊ヲ伐テ其將近藤勇ヲ捕ヘ——(略)」とある。縣信緝は宇都宮藩が幕軍に攻められることをおそれ、板橋の官軍へ支援を求めた家老であるが、宇都宮にいての情報不足あるいは、日記体での簡潔な記録という制約から、このような記載となったものと思われ、正確なものということはいえない。

「復古記外記稿本」(後記)の引くところの「總督府日記」も「——(略)大久保大和守之義ハ、新撰組隊長近藤勇ニ付、彦藩ヨリ応接之上、召捕リ送り付ケ候事」とし、復古記外記稿本所載の他の史料にも「速捕ニ捕縛」としたものがあつたが、これらは、記事を簡潔にするため、結果だけを記載しているもので、正確を期しているものではない。

子母沢寛は、「新選組始末記」(後記)のなかで、後述の有馬純雄の回顧談が発表されるまでは、依田百川の「譚海」(風文社刊 M 17・7)に記載の、次のような話が信用されていたと書いている。

○ 北陸官軍参謀香川敏三は千住駅に至つて近藤勇が流山に

○ 彼の武勇を恐れ、「彼は武勇はあるが、策略はない。計をめぐらして、生捕りにしたい」と、使いを遣わして「あなたの名は以前から聞いています。暴徒を鎮圧したいから、

話し合いにきてほしい」と言させた。

○ 近藤勇は、兵が期待していたほど集まらず、策もないので、招きに応じようとした。

○ 土方歳三は、「官軍には騙されることが多い。行かない方がよい」と諫めたが、近藤はそれを聞かず、単身、官軍陣営に乗り込んだ。

○ 官軍陣営では、その人物を惜しんで、こちらではたらくよう説得したが、近藤勇は笑つていった。「こと、ここにおよんで、なにを言つてもはじまらない。刑に臨んで心も顔色も変わらさず、従容として刃を受けるのみだ」と。そして、縛を受けた。

○ これも、「捕縛説」であるが、この「譚海」は歴史的エピソード集のようなもので、話の出典も不明である。

また、「自首・出頭」説を記す資料としては、近藤勇の墓のある三鷹・龍源寺住職の林正禅著「近藤勇略伝」(S 10・3刊)が、次のように書いている。

○ 流山で近藤勇は、徳川の脱走兵たちを百数十人集め再起しようとしていたが、官軍に探知され、「北陸道軍本陣の出張所・越谷」に出頭するよう命令を受けた。そこで、勇は「予て期しめたる事故少しも躊躇せず、唯二三の従者を召連れて官軍陣営に赴いた」

○ 官軍隊長の前では大久保大和として答えた。  
○ 隊長は、彼が近藤勇とは分ならず、帰ることを許そうとしたが、そこに元新撰組隊士の加納雅雄がいて、はから

○ ずも近藤を見て、本人であることを隊長に告げた。隊長は勇に降伏をせまった。彼は手を自ら後ろに回し、従容として縄を受けた。

しかし、この話の出所は不明であり、他の文献からみると根拠薄弱のように見える。しかも、大きな疑問は、この時のことを記した他の文献と、その「いきさつ」が合っていないことである。

○ 「私の明治維新 有馬藤太聞き書き」(上野一郎編・産業能率短大出版部刊 1976.7)は有馬純雄(藤太)が大正6年、同氏81歳のとき、請われて明治維新を語った「維新史の片鱗」にもとづくものである。これには次のとおり、書かれている。

(子母沢寛は、その著書「新選組始末記」のなかで、有馬純雄の話の大正12年の初冬のこととしている。)

○ 有馬藤太は「宇都宮方面の状況が不明であり、幕兵が各所に出没しているから状況を偵察してくるよう」という命をうけ、彦根藩の兵をつれて板橋を出発した。

○ 近藤勇の一隊が流山へ向かい当地を通過したとの情報もあった。

○ 翌三日、粕壁に着いた。翌日は兵を遊ばせて、その地へ宿営し、「明日は古河へ前進する」と言っておいた。

○ 五日の午前4時、「流山へいく」号令をだした。

○ 新利根川の渡しを渡って、兵を駐止させ、足軽・坂本十郎を連れて流山の偵察に出かけた。近藤の木陣と配備を

見極めて、兵を散開させ、村落を包囲した。敵もこれに気づき、あわてて射撃を開始した。

○ 壮士二人が大將らしき人を護衛してやつてきた。

○ 「大久保大和」と書いた名刺を差し出した。私も「有馬藤太と申すものであります」と名乗った。

○ 「朝早くから、射撃をまじえたが、菊の御紋章の御旗を見て、官軍とわかった。誠に申しわけない。私の方は射撃中止の命令を出したので、そちらも攻撃を中止してください」という

○ そこで、攻撃を中止させ、「御旗に向かって発砲したからには、一応軍法をもつてたださねばならないので、粕壁まで同行されたい」といった。

○ 承知したというので、「兵器、弾薬を引き渡し、兵を解散してもらいたい」といった。

○ 近藤は「それも承知したが、後始末もしたので、しばらく時間をほしい」といった。

○ なかなか、近藤がやってこないで、12時頃、兵器の催促をしたら、午後4時頃、砲3門、小銃200挺あまりを持ってきた。

○ 夜になっても、近藤はこない。有馬藤太は5名の兵と坂本十郎を連れて出かけ、「大久保さんにあいに来た」といった。書院の縁先に腰をかけて、しばらく待つと、近藤が紋付袴で出てきた。

○ 二人の壮士が粕壁までお供させてほしいというので、これを許した。

○ 粕壁に着いたのは12時頃であった。準備してある宿舎に案内をさせ、「入浴は？ 食事は？」ときいたが、みな済ま

せてから参つたといわれた。

○ 翌朝、本営へ出てみると、網はりの駕籠があるので、「一方の大將を乗せるのに、罪人用の駕籠とは何事か」とし  
かった。

○ 近藤に、「ここで参謀がお会いするはずだったが、病気で  
会えないので、板橋の東山道軍総督府まで行ってもらい  
たい」といった。

○ 上野の彰義隊を顧慮して、間道を板橋へ護送させた。

ここでは、「捕縛」逮捕ではなく、あくまでも「任意同行」  
のように書かれている。

「山内豊範家記」(所載・『復古記外記稿本』豊原資請纂輯  
東京帝国大学蔵版 内外書籍刊 S 5・12)も次のように  
記している。

○ その隊長の大久保大和があるいは近藤勇ではないかとの  
疑いをもったが、確証はなかった。

○ ただちに捕縛すれば、激戦になる可能性もある。そのた  
め、上田楠次などが相談して、大久保大和へ「あなたは  
隊長だから一応、総督府へ出頭して、始末を申上げ、お  
詫びをすべきだろう」といった。

○ 大久保大和はそれに従った。

新撰組が流山に集結しているという情報があり、実際に「近  
藤勇らしき隊長」が、眼の前に現れたとしても、「それが、本  
当に本人なのか」の確証がなかったようである。彦根藩の兵

士として官軍に従軍していた西村捨三が口述した「御祭草紙」  
(内村鷹三著 大林帳簿製造所刊 M 41・1)によると、同  
藩の小隊長・渡辺九郎左衛門は、以前、京都施業院の会議の  
おり、近藤勇を見ていて、本人であることを見破っていたが、  
敵中にて逮捕を強行すれば、肝心の宇都宮辺を鎮撫すること  
が出来なくなるような騒ぎになることをおそれて、ともかく  
も「連行して処分すべき」としたとしている。

また、この有馬藤太や山内家と別の立場にあったもの、つ  
まり、新撰組の隊士、島田魁は、その後、函館で降伏したひ  
とであるが、その遺稿集(「島田魁遺稿集」 所載・『統新選  
組隊士列伝』 新人物往来社編・刊 S 49・7)で、次のよ  
うに書いている。

四月三日ノ昼敵兵不意ニ襲来ル。此時薩藩有馬藤太ト申者  
応接トシテ本営ニ来ル。右ニ附土方公出會ス云々有之。近藤  
某ト附添野村利三郎村上三郎右有馬ト同道ニテ板橋駅官軍本  
営ニ至ル。

もう一人、同じく新撰組隊士であった近藤芳助(維新後、  
川村二郎と称した)も、その書簡、「新撰組往時実戦譚書」(近  
藤勇「流山出頭事件」論争 横田淳著より 所載・『新撰組原  
論 別冊歴史読本 86』 新人物往来社 01・10)に記してい  
る。

折柄隊中ノ者式三名ヲ除クノ外、歩兵ヲ引率シ野外練習之  
為、宍式里ヲ隔ツ山野ニ有リ、力戦スル事能ハズ。勇ハ己ニ  
割腹ノ決心ヲ以ッテ暫時時間ノ猶予ヲ乞ヒ、式階ニ昇リ三四

名会合ス。

土方ノ曰ク、「此所ニ割腹スルハ犬死ナリ。運ヲ天ニ任せ、板橋総督へ出頭シ、説破スルコソ得策ナラン。」ト云フ。此ノ議ヲ諾シ、若徒老人、口取頭老人、馬上ニテ板橋ニ出頭スル事ニ決スルヤ、大兵残ラズ引揚ゲ、使者ハ飽迄温順ヲ装ヒタリ。逮捕者に付き添いはない筈だから、これも「任意同行」である。同じようなことが、官軍、新撰組の両方から書かれていたのである。

ほかに、「捕縛や自首ではない」という証言がある。それは、元新撰組の隊士・加納離雄（加納通広）の史談会における証言の記録・「史談会速記録第104集（合本17）」（史談会編 相川得寿刊 明35・2 原書房復刻 S47・12）である。

「障子の穴から見ると近藤である、それから双刀を取り上げて置くから逢つて呉れと云ふことで、それは逢ひませう、向ふも双刀を持って居ぬから戦ふては困るから命を下して双刀を取り上げやうと言つて調べ掛りの者が一応調べる筋があるから」といつて双刀を取り上げて置き、それより其座敷へ調役平田九十郎（故平田宗高）兩人立入り自分言つて曰く大久保大和、改て近藤勇と声懸けますと近藤は実にエライ人物でありましたか其時の顔色は今に目に附く様で甚だ恐怖の姿でありました」としており、その時まで、近藤勇が両刀を携えていたことになる。

自首してきたり、逮捕したりしたものの武装解除はするのが当然であるが、それをしていない。この「面通し」が行なわれたのが、どこであるかについては後述するが、官軍の板橋本陣での可能性が強い。そこまで、近藤勇が両刀を携えていたということは、「任意同行」で連れてきたことを示していると思われるのである。

以上を総合すると、俗説の「近藤勇は流山で捕まった」というのは、正確ではなく、むしろ、「任意同行を求められ、それに従つた」ということであろう。

## 2. 近藤勇は任意同行をもとめられて、

### どこへ向かつたか

これについては、「越谷へ向かつた」という説と「粕壁へ向かつた」という説がある。この他、「板橋へ向かつた」という説もあるが、これは最終の目的地を板橋とするものであつて、「流山↓板橋直行」説をいうものではない。流山から、まず「どこへ」向かつたのであろうか。

(1) 「越谷へ向かつた」という説

「越谷へ向かつた」、「粕壁へ向かつた」という二つの説は、越谷、粕壁のどちらから流山へ向かつたのか、つまり、当日の出发点はどこかという説とセットになっているのが基本的

である。つまり、朝、粕壁を出発したという説なら、その夜、粕壁に戻ったのだし、越谷を出発したのなら、越谷へ戻ったという説になるのである。

・前述の「御祭草紙」では、次のように書かれている。

○ 千住に四月二日の夜着いた。

○ 翌三日に越谷に着いたが、そこから「引き返し」、流山に行った。

○ そして、近藤勇を越谷に連れ帰った。翌日、渡辺九郎左衛門が板橋へ護送した。

・「官軍記」も同じように書いている。

○ 四月二日、越谷に泊まった。

○ 三日、流山へ進み、大久保大和を生捕りにした。

○ そのうち、日が暮れたので、洗足、休息した。四つ（宮川註・午後10時）過ぎに命令があり出発した。

○ 越谷に卵の刻（宮川註・午前5時〜7時）に着いた。

○ 翌日、四つ（宮川註・午前10時）過ぎまで休み、朝飯食べ、湯に入った。

○ 大久保大和は板橋へ送った。

・「御祭草紙」の口述者、西村捨三が所属した彦根藩の公式記録である「井伊直憲家記」（所載・『復古記外記稿本』 豊原資請纂輯 東京帝国大学蔵版 内外書籍刊 S5・12）は次のように記している。

○ 四月二日、粕壁駅に宿陣した。

○ 賊徒が流山宿に在るとの情報で、三日の早朝、越谷宿へ「操返し」、利根川を渡り、流山宿へ向かった。

○ 近藤勇を任意同行させて（原文は「召連」）、越谷駅に行つた。

○ 翌四日、渡辺九郎左衛門隊が近藤勇を板橋へ護送した。

いったん、粕壁で宿営し、その後、越谷を経由して、流山に向かったとしており、「御祭草紙」とは差異がある。

出発は粕壁、帰着は越谷とする説は他にもある。

・「香川敬三事蹟」（所載・『復古記外記稿本』 豊原資請纂輯 東京帝国大学蔵版 内外書籍刊 S5・12）では次のとおりである。

|| 香川敬三は、この宇都宮救援軍の大軍監である。しかし、有馬藤太は、彼は総督の「御旗扱」を勤めていたに過ぎないとしてゐる ||

四月一日、粕壁駅ニ至ル、是ノ夜告ル者アリ、賊軍流山ニ向ト、急ニコレヲ襲フ、賊徒為スアタハス、賊長近藤勇ナル者、出テ降ヲ請フ、即夜近藤勇ヲ引テ越ヶ谷駅ニ至リ、明日、板橋駅帯陣ノ総督府ニ叡送ス。

（香川敬三には、「香川敬三略伝」があり、それには、「一日単騎、敵營に到り、偽計を以って、其の將、近藤勇を本軍に誘致し、之を擒にす」と書かれているが、新撰組側の記録によると、単身、乗り込んできたのは有馬藤太であるのであ

ることに間違いはない。「香川敬三略伝」は、大正4年に、香川が亡くなってから書かれたもの。以上、「続新選組隊士列伝」(今川徳三著 新人物往来社刊 S 49・7)より)

また、新撰組の隊士であり、流山で本隊から離れた永倉新八はその手記(所載・『新選組戦場日記』 木村幸比古編・訳 P H P 研究所刊 98・10)において、出発したところについては新撰組サイドから記述であるために記載していないが、近藤勇が馬にのり、二人の部下(相馬肇・野村利三郎)とともに出頭したのは「越ヶ谷宿」としている。

帰着地は不明であるが、出発地を越谷としているものもある。

・「太政官日誌」第1巻(石井良助編 東京堂出版刊 S 5 5・3)に所載の「因州藩より届書之写」では、官軍兵300余が、有馬、上田の兩人に率いられて越谷から流山の賊を襲い、大久保大和を捕え、御本営へ送る」とある。

## (2) 「粕壁へ向かった」という説

代表は、前述の「有馬藤太」説である。近藤勇の部下の「粕壁までお供させて頂きたい」という言葉、近藤勇の「粕壁まで何分よろしく」との言葉、「粕壁についたのは、夜の十二時ごろであった」の記述がある。

そして、この説を採用した子母澤寛の「新選組始末記」(中央公論社刊 初版S 3・7)は、有馬藤太説のとおり、「粕壁へ着いたのは、夜の十二時前後であった」としており、池波正太郎の「近藤勇白書」(講談社刊 S 44・5)も「官軍部

隊と共に、粕壁へ到着したのは真夜中であった」としている。小説の分野では森満喜子の「新選組青春譜」(新人物往来社刊 94・4)など、この説が多数説となっているようである。

この説が有力なのは、軍隊が「粕壁」を出発しているのだから、戻ったのも「粕壁」だろうというところである。

・「復古外記稿本」(第11冊 東山道戦記 豊原資請纂輯 東京帝国大学蔵版 内外書籍刊 S 5・12)そのものは、「内参謀祖式金八郎等は粕壁駅に宿営していた。賊兵が流山に集結しているという情報を聞いて、兵を分散して、その方へ向けた。賊将・近藤勇(昌宣)は、兵器を差し出して、降伏を願った」としているが、帰着地については触れていない。

・「彦根藩家譜」は『幕末維新の彦根藩』(彦根城博物館叢書 彦根藩資料調査研究委員会編 彦根市教育委員会刊 01・3)によると、粕壁に宿陣し、流山に進軍し、近藤勇を引き立てて板橋の本陣へ引き渡したと記しているとのことで、「越谷」には触れていないようである。

これも出発地点だけの記載であるが、「官軍凡三百人も粕壁杉戸から御越、昨三日夕七ツ時頃流山へ出張」と書いているのが「泉吉使茂助山上書」(所載・『下総境の生活史(境町史史料編近世I)』)「近藤勇の流山陣営確認につながる新史料の考察」より 流山市史編纂執筆委員長 山形紘著 所載・『流山市史研究 第17号』 流山市立博物館編 流山市教育委員会刊 H 14・3)である。これは境町の小笠原家文書に

含まれるもので、史料を紹介されている中村勝氏は「茂助を小笠原家の使用人とされている」とのことである。(山形絃著の前掲書による)

この時の官軍の人数は、太政官日誌に記載の「因州藩より届書之写」(『太政官日誌第一卷』 石井良助編 東京堂出版 刊 S 55・3)によると「三百余」とある。それだけの人数が、突然やつてこられては、宿場だつて大変というか、応対不能ではなからうか。戦場で宿営するのなら、いざ知らず、宿場を頼つての行動のようであるから、いきなり、越ヶ谷宿に、しかも、夜おそくに行くことはないだろうと思われるのである。

粕壁から越ヶ谷を通つて、流山に出陣したという説の場合には、その道すがら、「当夜の宿泊を依頼しておけばよい」と言えるかもしれないが、戦局がどう展開するかも知れない前に、「予約申込み」をするのか、どうか―実際的ではないと思われる。

また、流山を攻める場合に、越ヶ谷からであると、江戸川を敵の近くで渡らねばならない。敵前の大河を渡ることは、常識的には「してはならない」ことである。

新撰組がどれくらい勢力を持ち、どのような布陣をしているか、わからない時点では、出来るだけ、流山を離れたところで川を渡るべきであろう。そうすると、粕壁から流山へ進軍したという説の方が、戦術面でも「あるべきよう」に思えるのである。

そして、それは、当時の記録からも裏打ちされるのである。

前夜の宿泊先から流山までの進軍過程について、記事のある「有馬藤太・聞き書き」と「富田重太郎・官軍記」を比較してみると、有馬の方に「兵隊が粕壁を出発すると同時に、私は単身、馬を新利根川の渡し場へ飛ばし、付近の状況を詳細に視察した」とあり、富田の方に「但し利根川渡船場へ有馬藤太殿御越」とある。この場合の「新利根川」「利根川」は「馬を飛ばす」という距離感からして、「江戸川」と思われるが、その後について、有馬は「あけ方近く兵隊が到着するのを待つて、ただちに前岸へ渡し、そこに駐止させ、坂本(宮川註・従士)一人を連れて流山の偵察に行った」とし、富田は「弥々流山に集り居事儘と探索の由注進有之間、香川殿付彦根隊岡田隊岩村田等進出、当在町半にて玉込用意致し進む、流山間近く相成る凡半道斗の所、かけ足にて押掛、流山町端迄行く処、先陣有馬殿付添彦根人数より、当陣を見かけ三発斗擦り打ち致し候も、手答え致さず南方へ引上に相成」と書いている。

これらの「前泊地から江戸川」、「江戸川から流山の新撰組陣地」の距離感を考えると、流山から距離のある春日部あたりで渡河したと思われ、越ヶ谷經由説は現実においても疑わしいのである。

出発については、上記のように「粕壁説」の方が正しいと思われ、そうであれば宿泊地も「粕壁」とすべきであるように考えられるが、それを「越ヶ谷」とする説については、現時点では、反論の根拠をもたない。西村(彦根藩)、富田(岡田

家)が「越谷発・越谷帰着」を、彦根藩家記が「粕壁発、越谷經由・越谷帰着」を、香川が「粕壁発・越谷帰着」を記している理由については、この段階では解決不能である。解明は将来に委ねざるをえない。

いずれにしても、任意同行中の近藤勇が板橋へ向かう途中、越谷を通ったことは確実である。しかし、名譽ある「通過」ではなく、「大久保大和」と変名をして、任意同行されていく途中のことである。これを、越谷市民としていかに取り上げるかは、非常にむづかしいところではないかと思われる。

### 3. 大久保大和は、どこで見破られたか

もう一つの疑問がある。それは、大久保大和と名乗っていた近藤勇が、どこで、見破られたかということである。

「越谷で見破られた」という説の一つは林正禪の「近藤勇略伝」であり、前述のとおり、根拠薄弱で信じられないが、多分、この説を下敷きにしたと思われるのが、「越谷町秘話」(八島理著・刊 S 32・9)である。――八島氏は埼玉日報越谷支社長であった人――

- 近藤勇は流山へ行き、名前を大久保大和と変名した。
- 武器弾薬がなかったため表面は官軍に恭順の意を表しつつ徳川家脱走兵を取締るために来ていると称した。官軍

からは首領に出頭を命じた。

- 出頭表面の理由は取締るための相談であった。土方歳三は近藤に往くのは奇険(ママ)だと諫めたが勇は聞き入れなかった。官軍の本営、越ヶ谷村へ一人で来たのである。

○ いまの越谷町本町二丁目堀伊佐工門が当時越ヶ谷宿の名主でこの家は勇が取調べを受けたところらしい。谷干城(宮川註・官軍参謀Ⅱ土佐藩出身)は勇の材幹を借しんで官軍へ味方することを勧めたが勇は断固として断つ官軍の中に勇の変名を知った者があったので近藤はその場で捕えられた。

八島氏は次の著書でも、次のように書いている。「越谷今昔物語り」(八島晃正―前名・理―著・刊 改訂3版 S 41)である。

千住へ先発した官軍から通知が来た。首領に出頭せよ。浪人取締りの相談という事であった。土方は一人出頭の危険を説いたが勇は聴かなかった。勇は単身馬で指定された越ヶ谷へ来た。当時の名主堀伊左(ママ)エ門―本町三丁目の奥座敷―官軍の中に勇の顔を知る者があつて変名がバレ、その場で捕えられた。

最近では、平成8年の越谷市市民文化祭の郷土研究部門(展示)において、市内の研究者である堀切祥民氏が「近藤勇 越ヶ谷宿にて逮捕」というタイトルで、この「越谷今昔物語」(正確にいうならば「越谷今昔物語り」)にもとづき、次のように発表されている。



彼（宮川註・近藤勇）は名主（宮川註・越ヶ谷宿の名主、堀伊左（ママ）衛門）宅で治安隊だと主張したが、近藤勇本人であることが発覚、奥座敷で逮捕された。

なお、鈴木亨は「新選組99の謎」（PHP研究所刊 93・10）という著書のなかに記している。

「近藤勇の身柄は粕壁の屯営から更に板橋の本営に送られることになった。有馬は駕籠まで提供して礼を尽くしている。しかし越ヶ谷まで来たとき扱いは一変した。すでに板橋の本営では有馬からの報せで大久保大和がじつは近藤勇だということを知っている。

そこで確認のため、高台寺党の生き残り加納道之助を首実驗に越ヶ谷へ派遣した。加納が障子の穴からのぞいて見ると、まさしく近藤だ。そこで刀を取り上げておいてから座敷に入り、声をかけた。「大久保大和、改めて近藤勇と声かけますと、近藤は実に偉い人物でありましたが、その時の顔色は今に目につくようで甚だ恐怖の姿でありました」と加納は語っている。

この後半は、記されているとおり、加納通広が史談会というところで語ったものを記録した「史談会速記録第104集（合本17）」（史談会編 原書房復刻 相川得寿編・刊 原本 M35・2 S47・12）によるものであるが、前半は加納通広の語りを、鈴木亨が主観をいれて書き直したものである。

正確に加納通広の語りを記すなら、次のとおりとなる。「それならばお前さんは板橋の本営に出て貰ひたい何の為め

に此処に居るといふことを申立て、貰ひたいといふと、それでは参るであらうが誰が参謀でありますと尋ねた宇田栗園が参謀であると答へた、かれなれば私しか参つて申開を致すと云つて大久保大和と云うが送られて参つた其時分にドウも近藤勇の顔に似たものであるが大久保大和と云ふは聞かぬがドウか近藤を見しりの者誰れかあるまいか、それでは加納、武川は近藤を知つて居ると云ふことで、これから兩人に幕臣を連れて来て居るから見現わして呉れと申しました。それから調所に参つて彼れの居る処の行きませうといふと能く下見をしてから行けと言つて障子の穴から見ると近藤である」と続くのである。

そして、それがどこであつたのかは言われていない。「越ヶ谷」という地名も全くでてきていないのではあるが、何も言われていないだけに、そこに上記のような解釈が生じる余地がある。

何も言われてはいない。ただ「板橋の本営に出て貰ひたい」とは言われている。もし、この発覚が板橋以外の場所であつたのなら、明言されているはずではないだろうか。この証言には、加納通広が動いたという気配はない。越ヶまで行つたというのであれば、そのように言っているはずなのに、何も言っていないのである。素直に読めば、面通しは近藤勇が板橋の本営に連れてこられてからのことである。

「復古外記稿本」（第11冊・東山道戦記 豊原資請纂輯 東京帝国大学蔵版 内外書籍刊 S5・12）の引く「山内豊範家記」によると、「大和（宮川註・近藤勇）畏り、楠次（宮川註・上田楠次）土佐藩出身）ニ従ヒ板橋ニ来ル、上田則其ノ

始末並ニ疑フヘキヲ督府ニ上申ス、是ヨリ先、伊東甲子太郎ノ勇等ノ為メニ京師ニ横死スルヤ、其ノ徒薩藩ニ投ス、此ノ役從テ薩軍ニ在リ、彼レ本新撰組ニ入ルヲ以テ、能ク勇ヲ識ル、乃チ彼ヲシテ大和ヲ視セ令ム、果テ勇ナリ、於是縛シテ獄ニ投ス」とある。

さらに、現場にいたひとの証言ではないが、前述の彦根藩の隊士、西村捨三の「御祭草紙」に次のように書かれているのも傍証である。

○ 大久保大和を越ヶ谷に連れ帰った

○ 翌日、板橋の総督へ「異心ないこと」を陳述させるため、渡辺九郎左衛門隊が護送した。

○ 官軍は宇都宮へ進軍した。

○ その後、大和の実名を暴露しようとして、以前、新選組に入っていた二人のものが次の間から、唐紙を押し開いて入り、近藤勇は「計らざる対面」と一言いった。

越谷発覚説は成立しないと考えるものである。

#### 4. 近藤勇は綾瀬川畔で辞世を詠んだか

越谷には、近藤勇が板橋に送られる途中、綾瀬川畔の茶屋「よしずや」で休息し、そこにあった「弁天藤」の下で「綾なる流れに、藤の花匂う、わが生涯に悔いなし」と辞世を詠んだという伝説が残っている。残念ながら「原本」ではなく「コピー」ではあるが、色紙を見たというひともあるが、この話は本当なのだろうか。

近藤勇の辞世というのは、前記の「新選組始末記」によると、次のものといわれている。

孤軍援絶作俘囚 願念君恩淚更流  
一片丹衷能殉節 睢陽千古是吾儔

靡他今日復何言 取義捨生吾所尊  
快受電光三尺劍 只將一死報君恩

四月四日

このような漢詩をつくることが出来、書道も小さい頃から学んでいたという勇としては、上記の歌とも俳句ともつかぬものを自作といわれれば、憤慨するのではなからうか。少なくとも、辞世ではないのである。ちなみに、四月四日は、粕壁または越谷から板橋への護送の日である。

#### 5. 越谷市内において聴取した事項

(1) 越ヶ谷本町・会田金物店・会田氏からの聴取事項(郷土研究会・谷岡会長、宮川 H 15・5・28 AM 10:20 ~ 10:40)

話を聞かせてほしいとか写真をとらせてほしいとか、うるさくて困っている。

・同金物店は鍛冶忠商店からの分家。分家するにあたって、以前、富田屋・堀家であった空家を買取り、そこで金物店をはじめた。三代前のことである。

・堀家と会田家とは、親戚筋ではない。天嶽寺の堀家墓地の清掃などをしていたのは、「地先祖」という意味でしていた。今は堀家が墓参に来られているようだが、どこに住んでおられるかは知らない。

・現在も、堀家の祀っていた「富稲荷」（富田屋の「富」をとった）が邸内にある。建物は、当時のままである。

・近藤勇が、ここに宿泊した——などの話は、聞いていない。（伝わっていない）

・会田氏の母は、いま、福島にいますが、母がいても伝わっている話はないというだろう。

・建物は当時のままで、たんす階段や戸棧（とざし）——帯戸——建物入り口の梁などが残っている。

・「わが町の歴史・越谷」（竹内誠・本間清利著 文一総合出版刊S59・7）の裏表紙の写真是現・会田金物店で、写っている人物は会田氏と奥様の実父。

（2）越谷市郷土研究会会員・関根正直氏からの聴取事項  
（郷土研究会・谷岡会長、宮川 H15・6・4 AM10:20  
11:00）

・関根正直氏宅（大間野町5・178）は、旧赤山街道が綾瀬川を渡る「一の橋」の約50メートル北にある。「よしずや」関根家の本家にあたるという。同氏は15代目とのこと。火事で文書が焼け、自分の系図はすこし分かったが、よし

ずや関根氏が、いつ分家したのかは不明。

・よしずやの前当主の良男さんは、地元のこともよく知っていたが、先年逝去。

・故良男氏は三人姉弟で、長姉の「とみこ」さんが市内西新井の高橋「利お」さんへ嫁している。そちらへ正直氏から電話で問い合わせてもらったが、勇のことも、色紙のことも知らないとのことであった。

・故良男氏の息子・弘良（ひろよし）氏に、正直氏から架電していたのだが、不在。その後、正直氏が電話してくれたところ、弘良氏は「何も知らない」「何も伝わっていない」とのことであった。

・よしずやは、川と赤山街道の間に建っていたが、川の改修で倉庫を残し、新街道沿いで「セブンイレブン」を経営。自宅は正直氏宅の北に建てた。この移転の際はまだ、良男氏はご存命であった。

・正直氏、夫人ともに、勇がここを通ったこと、藤の歌のことも、これまで聞いたことはなかったとのこと。

・地元のことには「やぎしたくにお」氏が知っているかも知れない。（15・9・20 午後6時 八木下氏に架電したが、同氏は「近藤勇とよしずやの話は知っているが、証拠はない。話だけであるので、何とも言うことは出来ない。」とのことであった）

谷岡補足

・近藤勇が板橋へ連行途中、よしずやの藤を眺め、休息し、辞世の句を残したとの説がある。この藤は綾瀬川改修で平成3年2月、出羽公園へ移植された。通称「弁天の藤」、樹

齢350年と伝えられている。

念のために――

・復古記Ⅱ戊辰戦争を中心とする記録を集大成した史書。原本は「復古記」150巻、「復古外記」148巻。刊本は全15冊、菊判。戊辰戦争研究のための最も重要な基礎資料である。明治5（1872）年に太政官正院に歴史課を設置し、長松幹を主幹として編纂事業を開始、旧大名に対して史料として、慶応3（1867）年10月以降、戊辰戦争期の諸願書、履歴、諸伺、その他、諸記録の編集、提出が命じられ、明治22年12月に完成した。

・太政官日誌Ⅱ明治初期の政府の機関紙で、官報の前身。慶応4年（明治元年・1868）2月20日に、第1号を刊行。（いずれも、吉川弘文館刊の国史大辞典（S58・10）より）

この小論を作成するについて、次の方々から史料、情報をご提供いただいたり、ご教示をいただいたりしました。お名前を記し、感謝の意を表します。（敬称略）

越谷市郷土研究会 谷岡隆夫 高崎 力 高橋正澄 西村

功 鈴木徳治 増岡武司 本間清利

越谷市立図書館 小野 肇

越谷市教育委員会 社会教育課長・那倉保夫 文化財係

長・長谷川士郎 文化財係・橋本充史

この小論は越谷市教育委員会の依頼にもとづいて作成したものです。文中、「越谷」「粕壁」の表記については、引用文においては原文のとおりとしたが、その他については、必ず

しも統一していないことをお断りしておきます。

## 史料リスト

最良の史料というべきものは、当時、現場にいた第三者が、その事件を、直ちに、客観的に記述したものであるが、本件に関しては残念ながら、それは存在しない。

### ○第一次史料

〈現場に、その当時いた当事者が事件を記述したもの、あるいは口述したことを書き留めたもの〉

1. 「官軍記」Ⅱ富田重太郎著 「明治維新討幕軍従軍記」 原本・慶応4年 所載・『揖斐川町史 史料編』揖斐川町編・刊 S45・3 〈官軍として従軍した「岡田家」隊士〉
2. 「私の明治維新 有馬藤太聞き書き」Ⅱ有馬純雄（藤太）口述 口述・大正6年 「維新史の片鱗」によるもの 所載・『私の明治維新 有馬藤太聞き書き』上野一郎編 産業能率短大出版部刊 1976・7 〈官軍副参謀〉
3. 「御祭草紙」Ⅱ西村捨三口述 口述時不明 所載・『御祭草紙』内村鷹三著 大林帳簿製造所刊M 41・1 〈官軍として従軍した「彦根藩」隊士〉
4. 「島田魁遺稿集」Ⅱ島田魁著 原本記載時不明（本人M3 3.3死亡以前） 所載・『続・新選組隊士列伝』新人物往来社編・刊 S49・7 〈新撰組隊士〉

5. 「新撰組往時実戦譚書」 近藤芳助著 原本記載時不明  
 所載・『新選組原論 別冊歴史読本86』の「近藤勇「流  
 山出頭事件」論争」 横田淳著より 新人物往来社編・  
 刊 2001・10 〈新撰組隊士〉

なお、この「近藤勇「流山出頭事件」論争」には、他の  
 新撰組隊士・中島登の「中島登覚え書」が釣洋一著「新  
 選組再掘記」(新人物往来社刊 S47)からの引用で記  
 載されている。しかし、「中島登覚え書」は、どういう訳  
 か、上述の島田魁遺稿(「島田魁日誌」ともいう)と、ほ  
 とんど同一の語句で綴られている。

6. 「史談会速記録第104集(合本17)」 加納通広口述 口  
 述・明治34年 所載・『史談会速記録第104集(合本  
 17)』史談会編 相川得寿刊 M35・2 原本刊 原書  
 房復刻 S47・12 〈元新撰組隊士で官軍に参加〉

### ○第二次史料

(現場に、その当時いた当事者などからの聞き書きや報告  
 書によるとと思われるもの)

7. 「井伊直憲家記」 所載・『復古記外記稿本』(豊原資請纂  
 輯 東京帝国大学蔵版 内外書籍刊 S5・12)  
 8. 「山内豊範家記」 所載・『復古記外記稿本』(豊原資請纂  
 輯 東京帝国大学蔵版 内外書籍刊 S5・12)  
 9. 「因州藩よりの届書之写」 所蔵・『太政官日誌第1巻』  
 (石井良助編 東京堂出版刊 S55・3)  
 10. 「復古記外記稿本」 所蔵・『豊原資請纂輯 東京帝国大学蔵  
 版 内外書籍刊 S5・12』  
 11. 「彦根藩家譜」 所載・『幕末維新の彦根藩』(彦根城博

物館叢書 彦根藩資料調査研究委員会編 彦根市教育  
 委員会刊 2001・3)

12. 「泉吉使茂助口上書」 所載・『下総境の生活史』(境町  
 史史料編近世I) 近藤勇の流山陣営確認につながる  
 新史料の考察)より 流山市史執筆委員長 山形紘著  
 所載・『流山市史研究 第17号』 流山市立博物館編  
 流山市教育委員会刊 H14・3)

13. 「宇都宮藩家老縣信緝日記」 縣信緝著 所載・『栃木県  
 史 史料編 近世7』(栃木県史編さん委員会編 栃木  
 県刊 S59・3)

14. 1 「総督府日記」 所載・『復古記外記稿本』(豊原資請  
 纂輯 東京帝国大学蔵版 内外書籍刊 S5・12)

14. 2 「新撰組始末記」 西村兼文編 所載・『日本史協  
 会叢書 別編30 維新之源他』(日本史籍協会編 東  
 京大学出版会刊 S49・4 覆刻)

14. 3 「新選組戰場日記」 永倉新八の手記 木村幸比古  
 編・訳 P H P 研究所刊 1998・10 (永倉新八は  
 新選組元隊士であるが、流山で近藤勇と離反している  
 ため、同地での争いについては、伝え聞きである)

### ○第三次史料

(第一次史料からみて正確性に欠けると思われるもの)

15. 「近藤勇略伝」 林正禅著 S10・3  
 16. 「香川敬三事蹟」 所載・『復古記外記稿本』(豊原資請  
 纂輯 東京帝国大学蔵版 内外書籍刊 S5・12)  
 17. 「譚海」 依田百川著 鳳文社刊 M17・7  
 18. 「越谷町秘話」 八島理著・刊 S32・9

19 「越谷今昔物語り」 〓 八島晃正著・刊 S 41

20 「新選組 99 の謎」 〓 鈴木亨著 P H P 研究所刊 1993・10

21 「近藤勇 越ヶ谷宿にて逮捕」 〓 堀切祥民 平成8年・越谷市市民文化祭・展示出品

22 「千葉県東葛飾郡誌」 〓 千葉県東葛飾郡教育会編・刊 T 12・6

23 「驍将近藤勇來歴」 〓 岩田信助著 発行年欠 所載・『流山のむかし』(流山市立博物館市史編さん係編著 流山市教育委員会刊 H 14・3)

24 ○その他 I (新撰組研究書)

「近藤勇のすべて―流山の朝―捕縛までの日々」 〓 菊地明著 新人物往来社刊 1993・4 (有馬藤太の話に基づくが、出頭地は越谷とする)

25 「近藤勇と新選組―統幕末を駆け抜けた男たち―」 〓 今川徳三著 教育書籍社刊 1989・9 (島田日記と加納通広の話によっている)

26 「新選組隊士列伝」 〓 今川徳三著 新人物往来社刊 S 49・7 (有馬藤太の話を正しいとしている)

27 「新選組裏話」 〓 万代修著 新人物往来社刊 1999・4 (「御祭草紙」と加納通広の「史談会速記録」で説明している)

28 「新選組日記」(下) 〓 菊地明・山村竜也編 新人物往来社刊 1995・8 (「新撰組往時実戦譚書」「島田魁日記」「中島登覚え書」「井伊直憲家記」「官軍記」

「御祭草紙」「私の明治維新 有馬藤太聞き書き」を引用)

29 「三百藩戊辰戦争事典」(下) 〓 新人物往来社編・刊 2000・1 (「井伊直憲家記」を中心に書く)

30 「幕末・維新こぼれ話」 〓 万代修著刊 H 3・5 (土佐藩の記録である国立公文書館蔵の「跨閩日記」を記載。この日記では「流山で近藤勇をいけどり」として

いる由)

31 ○その他 II (流山市関係)

「新撰組の流山一件」 〓 山形絃著 所載・『流山市史研究 第15号』(流山市立博物館編 流山市教育委員会刊 1999・2) (史談会速記録にある元新撰組隊士

・田村銀之助の話を紹介している。その他「官軍記」「復古記」有馬藤太の「聞き書き」も引用)

32 「史談会速記録第309集A田村銀之助君の函館戦争及其前後に關する実歴談」 〓 田村銀之助口述 口述時不明 相川幾太郎刊 T 10・8 原本刊 原書房復刻 S 50・9 (元新撰組隊士の口述。流山にあった駿河田中藩本多家の飛び地を支配していた「田中の陣屋」を乗っ取るという新撰組の計画に言及。流山の争いにい

ない)

33 「新撰組流山始末―幕末の下総と近藤勇一件―」 〓 山形絃著 崙書房刊 2002・6 (流山の争いについて、「官軍記」を中心に、有馬藤太の「聞き書き」等も引用して記述。元新撰組隊士の立川主税の「立川主税

戦争日記」の次の記事を紹介している。「四月三日官軍不意ニ押来ルト云ヘドモ防禦スルコト能ハズ、官軍有馬藤太ト云フ人來ル、土方先生応対ニ依テ近藤先生有馬ト板橋本營ニ至ル」

34. 「流山の史跡をたずねて」 高橋一元編 流山市教育委員会刊 S 49・1 (近藤勇は流山に兵火をあげることは、流山の人々を苦しめることになるとして、自首を決意した」と記述)

○その他Ⅲ (越谷市関係)

35. 「越谷市史 第1巻」 越谷市刊 S 50・3 (近藤勇が流山で逮捕、越ヶ谷本町の名主富田屋伊左衛門方に一泊して板橋に護送されたと伝えられていると記述)

35・1 「越谷の歴史物語 第2集」 越谷市教育委員会刊 S 62・3 (四月三日に捕縛された近藤勇は四月四日、越ヶ谷宿で一泊したともいわれ」と書いています)

36・2 「わが町の歴史 越谷」 竹内誠・本間清利著 文一総合出版刊 S 59・7 (上記36と同一の記載)

37. 「越谷のれきし」 所載・『広報こしがや S 62・1・15』 (近藤勇は流山で投降。流山出発午後10時、越ヶ谷到着は翌日午前6時。一行は本町の名主の家で一ねむりし、風呂に入った朝食をとったりしてから、赤山街道を板橋に向かった。「よしずや」で一休みして歌を口ずさんだ。これをよしずやの主人がおぼえていて後で書きとめておいた」と記載。)

38. 「市史編さんだより」 所載・『広報こしがや S 49・3・

15』(四月三日に捕縛された近藤勇は四月四日、越ヶ谷宿で一泊」と書く)

○その他Ⅳ (フイクション)

39. 「新選組始末記」 子母沢寛著 中央公論社刊 初版 S 3・7 S 42・11 (小説ではあるが、有馬藤太の口述を紹介、これまで、多くが依田百川の「譚海」を信用していたことに言及。)

40. 「近藤勇白書」 池波正太郎著 講談社刊 S 44・5 (有馬藤太の口述をベースとしている。)

41. 「新選組青春譜」 森満喜子著 新人物往来社刊 1994・4 (新選組始末記) 子母沢寛著をベースとしている)



## 越谷周辺の近代交通のあけぼの

山本 泰秀

### 《冒頭》

江戸時代の人々の移動はもっぱら徒歩であった。このことは、道端にある道しるべや各寺院に残る巡礼塔などでもわかる。駕籠に町人が乗れる様になったのは、江戸時代の中頃からであり、運送手段としては舟運や牛馬の背や人に頼るしかなかったのである。明治二年（一九六九）になり、和泉要助によって荷車の改良型人力車が発明され、すぐに全国的に普及した。明治三年、外国製馬車を輸入して、横浜東京間に六人乗り乗合馬車が運行された。これこそが近代交通への第一歩といえるのである。

## 一 近代交通の略年表

### 形成期に向けての自動車

明治二年

和泉要助が人力車を考案し、知人の鈴木徳次郎・高山圭助との連名で東京府の許可を得て、翌三年に日本橋南

詰西側の高札場で「御免人力車処」の旗を立て人力車の営業を開始。

明治三年

横浜・東京間に六人乗り馬車が運行開始する。

明治五年三月六日

人力車鑑札を交付し、税金は一輛一ヶ月七銭とした。

明治五年九月十二日

新橋・横浜間の鉄道開業式が行われ、日本の鉄道の幕開けとなる。

明治五年

浅草・新橋間に一般乗合馬車の運行を開始する。

明治八年

旧増林村には、人力車九輛あり。内訳は、二人乗り二輛、一人乗り七輛。

明治十一年一月九日

古利根川の渡舟免許台帳によると、増森・赤岩間的人力車の渡し賃は四厘。

明治十五年六月

新橋・日本橋間に馬車鉄道が開業する。

明治二十一年五月

日本最初の石油会社「日本石油株式会社」が生まれる。

国内石油の採掘と内外石油の精製が行われる。

明治二十三年

国産自転車一号が生まれる。上流社交の乗り物として始まる。

米国スタンダード社（石油会社）が、石油の東洋市場拡充を目指して横浜にその支店を開設する。石油の販路



を図ったが、当時の需要は灯火用、或いは発動機用に過ぎず、伸び悩んだ。

明治三十年

横浜在住外国人エベリーハイムが、蒸気自動車「オリエント（一八九七）号」を米国から購入し、使用する。

明治三十三年

明治屋洋酒店が、英国製アール号で商品の運搬を始める。警視庁番号一が付与され、わが国の貨物自動車運送業の開始となる。

英国ロイヤルダッジシエル・ライディング社が、日本に石油会社として進出する。

明治三十四年十一月

松井民次郎が経営するモーター商会は、銀座二丁目にて自動車「オリエント号」を販売する。日本最初の自動車店となる。

明治三十五年八月

自転車仕入れのため米国より帰国したオートモビル商会の店主・吉田真太郎が、自動車エンジンを初めて輸入する。二気筒十二馬力エンジンである。

明治三十六年四月

広島県に横川・出雲間の乗合自動車が出現する。これは、東京モーター商会より購入した米国製ホリゾタルエンジンを乗合馬車に取り付けたもので、十二人乗り（時価八、五〇〇円）である。日本最初のバス運行となる。

明治三十六年八月三十日

愛知県は「乗合自動車取締規則」を公布する。これがわ

が国における最初の自動車取締規則となる。

明治三十七年五月七日

国産自動車第一号の蒸気自動車が、山羽虎夫によって中国路の岡山の中心街を行進する。

明治三十七年八月

神奈川県は、県令第2号を以て「自動車取締規則」を制定し、公布した。

明治四十年二月

警視庁令を以て、東京府下に「自動車取締規則」を公布する。

明治四十年四月

東京自動車製作所は、乗用一号車「タクリー号」で有栖川宮によって多摩川への三十余里を無事に走破する。

明治四十年十二月三日

帝國運輸株式会社は、貨物自動車運送業を車輛「プロスト号」十五台と乗用二台で開始する。

明治四十一年

東京電燈株式が電気自動車を米国から購入する。これをスケッチして日本自動車に製作させて完成する。これが、わが国における電気自動車の始まりとなる。

明治四十二年

岡山県の山羽虎夫によって自転車に装備した二輪オートバイが完成する。

明治四十二年九月

英国ダンロップ護膜（極東）株式が、神戸に設立される。翌四十三年に生産を開始する。

明治四十三年

草加町全体で使用の自転車の台数が四十六台。  
明治四十五年八月十五日

東京有楽町数寄屋橋畔に「タクシー自動車」が創立される。使用車輛はフォードT型六輛である。日本最初のタクシー業が開始する。

明治四十五年十月

ガソリンスタンドが全国に百十ヶ所設置される。

大正二年三月二十日

改進黨（橋本増次郎）が、「気筒V型十五馬力エンジン前進一段・後退一段・前照灯アセチレン灯小型車を製作する

大正三年

改進黨が、大正三年の大正博覧会に出品する。DAT号は、今日の日産自動車ダットサンの前身となる。

大日本全国商工人名簿に越ヶ谷の前田自転車店が掲載される。

宮田製作所が小型自動車の試作を行う。

大正四年五月

梁瀬商會が創立される。

ビュイクモーター、コンパニー、カデラックモーターとの日本販売に関する代理店契約をし、ゼネラルモーターコーポレーションを設立する。

英国ウーズレー自動車と販売契約などを結ぶ。

大正六年

国産ゴーハム三輪乗用車が完成する。

東京護謨が、①の商標でタイヤの製造販売を開始する。わが国タイヤ製造の元祖と称する。

ハーレーダビットソンの日本での輸入代理店「日本自動車」が、東京赤坂溜池に設置される。

大正八年

「自動車取締令」が内務省から出て運転免許制度が成立する。運転免許は、試験に合格した者に与える。（第四十一条）小型車の運転免許の試験は、行わなかった。實用自動車製造が、創立される。

ゴーハム式小型四輪リラー号を製作する。

浅野物産「ヴィナス中型自動車製作」が二十台程を市販する。

大正八年三月

東京市街自動車（上野・新橋間の営業を開始するにあたり、ウーズレーを百数十台を購入する。

大正十年

名古屋の三菱は、イタリア製フィアットをモデルにして三菱フィアットを製作する。

大正十二年九月一日

関東大震災復興後、自動車は急速に普及す。

震災により破壊された鉄道や軌道などに代わる交通手段として自動車が急速に普及しはじめた。また、震災後の復興のため、運送業者による自動車への需要も高まった。大正十三年

梁瀬自動車は、米国のミルバーン電気自動車の代理権をとり、（一九二四）雅叙園主の細川力蔵に販売する。

当初、梁瀬自動車は、この電気自動車が大きいと売れると思つたが、主要地点に充電設備がない限り電気自動車は誠に不便であることが半年程して分かった。蓄電池の寿

命も短く、値段も高い。その上、蓄電池そのものの重量も重かった。時期も悪かったのか、売り抜くことができなかった。

大正十四年三月

日本フォード自動車㈱（資本金は四百万円）が、横浜工場でコンベヤーシステムによって組立を開始する。

大正十五年

ダット自動車製造が、創立される。

ダット自動車商会と大阪実用自動車会の合併によって生まれ、資本金が五十万円の自動車製造会社となる。

昭和二年

石川島造船所は、英国ウーズレ自動車㈱より同社の製作権を譲渡され、六気筒を完成する。社名を公募して「スミダ」と命名する。

昭和二年四月十五日

日本ゼネラルモーター㈱（資本金は八百万円）が、大阪工場で組立を開始する。

昭和二年四月十五日

別府亀井ホテル遊覧バスが、開業する。バスガール付きの観光バスの最初となる。

昭和二年三月十日

閣議において、自動車事業の監督権が、逋信省から鉄道省に移管される。

昭和三年

三昭自動車㈱（三井物産傍系）が設立され、グラハム乗用とスチワート貨車を取り扱い、市販を開始する。

昭和四年

昭和四年頃より、国産愛用の国策の波にのってリヤカー時代が再興される。

A型フォードがデビューする。

昭和四年五月

日本シトロエン自動車㈱が、東京青山に設立され、ドイツ製ベンツ自動車の市販を開始する。

昭和五年

東京・姫路間で木炭自動車を試運行した結果、木炭自動車が完成する。

自転車店主の越ヶ谷の岡本人兵衛と松伏の鈴木巳三郎の兩人が、大日本商工人名簿に載る。

発動機製造のダイハツや、東洋工業、マツダの三社が、三輪自動車を生産する。三輪車の基礎を築き、三輪自動車時代に移る。

昭和六年三月一日

日本タイヤ㈱が、久留米に設立される。

昭和六年三月二十五日

ダンロップ極東ゴム会社工場の披露式が神戸で行われる。昭和六年

ダット自動車㈱が、ダットサンを試作を完成する。そして、昭和七年に市販を開始する。

昭和八年八月六日

松方日ソ石油は、ノルウェー備船「ノール号」によって、石油を一〇九九トン入荷し、九月一日に販売を開始する。

これまでの石油会社は、英国ライジング社（貝印）、スタンダードバガサス米國、小倉、三菱、日石、三井石油

の六社であった。

昭和八年

（株）豊田織機製作所は、乗用車「トヨタ号」の試作を開始する。資本金は一、二〇〇万円、社長は豊田利三郎、副社長は豊田喜一郎である。（後のトヨタ自動車工業（株））

昭和八年十二月二十八日

戸畑鋳物（株）が、自動車部を分割して、自動車製造（株）設立。翌年の6月、自動車製造（株）が、日産自動車（株）と改称する。

昭和九年六月

瓦斯の発生炉設置奨励制度ができる。

合格車に三百円の補助金が支給される。

昭和十年五月

「トヨタ号」（乗用車）の試作車が完成する。

同年十一月には、トラックの試作車も完成する。

昭和十年

GM社のシボレー低床式バスシャーシーの市販が開始する。

日中戦争拡大にともなって、自動車燃料が逼迫する。

代用燃料（木炭、瓦斯、薪）の活用を奨励する。

昭和十一年五月

自動車製造事業法が制定され、商工省は昭和九年八月以前の事業範囲を限定する。

日本ゼネラルモーター（株）には九四七〇台、日本フォード（株）には一二三六〇台の制限を加え、日産とトヨタ自動車には各六〇〇〇台の生産計画を指示する。

昭和十三年四月五日

自動車のタイヤチューブ配給統制規則が発令される。

昭和十三年五月一日

ガソリンの切符制が実施される。

支那事変（日中戦争）の目的完遂のために戦時体制の確立を目指して実施された。

昭和十三年八月四日

商工大臣の通達により、乗用車の生産は禁止状態となる。

昭和十三年十一月

タクシーは、全国的にメーター制となる。

昭和十四年二月

「石油消費規正に関する自動車対策に関する件」が発令される。

七月二十六日付けで再び同件の通達がされ、自動車の代燃化は、これにより実施される。

昭和十六年七月十四日

ガソリンの国策燃料不足に対して、貨物自動車に代用燃料の装置を取り付ける場合、なるべく古い年式より取り付けることになる。

昭和十六年八月一日

米国が対日石油の輸出を禁止する。

昭和十六年九月一日

乗合自動車に対して、石油供給の廃止と徹底再統合の通達をする。

昭和十七年九月二十一日

乗合自動車統合令が出される。

各交通圏において事業の基礎運営の規模等により、最も適当な事業を選定し、これを主体として事業の譲渡又は

会社の合併をさせる。

昭和十七年十二月二十八日

貨物自動車統合に関する統合の要綱が出される。閣議決定後、鉄道省により国策として各府県に貨物自動車の統合の要綱を出す。

昭和十八年

埼玉県第一区のパスの合併。

東武自動車

加須精米俵他、一譲受 十八年一月十九日

長谷川要 他、一譲受 十八年三月 五日

上武自動車 十八年十一月二十五日

行田自動車(株)他、四譲受 十八年十二月二十九日

蓮田自動車(合名)他 一 廃止

(注) 右、被統合体中越沼茂安経営路線のうち、粕壁・越ヶ谷間及び藤の牛島・松伏間、上武自動車経営路線のうち鬼石・坂原間、いずれも除く。東武鉄道と馬車鉄道の競合となった。

昭和十九年三月二日

東武鉄道(株)と総武鉄道の合併。

## 二 鉄道

(一) 鉄道馬車にかかわる人物

越谷住民とともに

旧日光街道に馬車鉄道が運行されたのは、明治二十六年(一九九三)のことである。千住茶釜橋(現在の荒川放水路の千住新橋東側付近の川の中あたり)から大沢まで旧日光街道に鉄のレールを敷設し、その上を馬に車両を引かせて走った。つまり、赤塗りの箱の中へ客を乗せ、馱者が手綱を引き締め、真ちゅうラッパを片手にしてトテトと吹き、馬を静かに走らせたのである。この地方で唯一の交通機関となった。開通時の旅客運賃は、片道十五銭、所有時間は、二時間程であったという。社名は「千住馬車鉄道(株)」といい、社長に渡辺湜氏(慶応元年一月生)がなる。北葛飾郡桜田村(現、鷲宮町桜田)生まれで、浅草雷門で栄盛舎という旅館をやっていたという。

この馬車は、明治三十年七月二日その後、千住馬車鉄道(株)の施設を譲り受け、草加馬車鉄道(合資)によって千住茶釜橋・大沢間の乗合馬車鉄道が再開されるが、明治三十二年八月には、千住・久喜間に東武鉄道の鉄道が開通し、時を同じくして東武鉄道と馬車鉄道の競合となった。汽車は、黒い煙を吐いて、何百人かを一度に運び、早いし、安い運賃である。そこで、鉄道馬車は段々と乗客が減って、経営難に陥った。草加馬車鉄道は、明治三十三年二月二十八日をもって廃業に追い込まれた。

この草加馬車鉄道の廃業にかかわっている人物が増林にいた。現在の増林小学校の敷地に住んでいた今井甲子松である。

草加馬車鉄道の社長は、生島玄益といい、草加町長一期を勤め、恵風堂という医院を経営していた。彼の伯父に当

たる人物が増林の通称「油医者」に養子に来ていた宗順である。油医者は、代々農業を営み、農閑余業として灯火油を販売していた。

時は江戸時代のこと、初代の医者である今井正順は、有名な漢方医の東洞（とうどう）の門下生として、吉益衛に師事し、帰省して増林で開業医となった。

その二代目医師となった宗順は、草加生まれの生島玄佐の子で、生島玄益の伯父に当たり、幼少時、いづみ丸と呼ばれた。その後、今井正順の養子となって改名し、宗順と名乗ったのである（「寝民夫々へ」勝林寺蔵）。

その油医者の家と親戚関係にあったのが今井甲子松である。今井甲子松（元治元年八月生まれ）は、江戸時代末期、増林村の名主を勤めた家柄の出で、兄幸助が名主を勤めていた。今井甲子松は、明治初期に現在の増林小学校校庭の松の木の周辺に、幸助の分家となって独立し（「越谷の史跡と伝説」昭和三十五年）、養豚業も営んでいたという。明治三十三年二月の草加馬車鉄道の廃業にあたって、清算人として、今井甲子松の名が連ねられていた。ゆえに、今井甲子松は草加馬車鉄道の経営にも参画したと考えられる。草加馬車鉄道の清算の完了後、甲子松は、東京へ行ってしまった。跡地は郡村宅地となった。増林の上組に住む鈴木治兵衛（現、上組駐在所前）は、明治三十九年に上組にあった増林小学校（現、川鍋家周辺）の移転願いを知事宛に出した（埼玉県公文書館）。その後、明治四十一年四月十一日に今井甲子松の跡地に増林小学校の新築の認可が降りたのである。

なお、医師の宗順の子、玄晋は、三代目の開業医となり、

内科、外科医として活躍し（明治三十年、埼玉県南埼玉葛二郡公民必携より）、江戸からの「油医者」の通称名を受け継いだ。

草加馬車鉄道での人と人とのかわりあいでは生まれた話である。

## (二) 鉄道の略年表

明治二十六年二月七日

千住茶釜橋・越ヶ谷間（旧日光街道）の馬車鉄道が開始する。  
《千住馬車鉄道綱》

明治二十六年六月一日

越ヶ谷から粕壁まで伸び、千住・粕壁間の運行を開始する。

明治三十年七月二十七日

千住茶釜橋・粕壁間（旧日光街道）の馬車鉄道は、特許取消となり、廃止する。

明治三十一年四月三日

千住茶釜橋・大沢間（旧日光街道）の馬車鉄道を再開する。  
《草加馬車鉄道（合資）》

明治三十二年八月二十七日

千住・久喜間（用地買収）の鉄道が開通する。  
《東武鉄道綱》

明治三十三年二月

千住茶釜橋・大沢間（旧日光街道）の馬車鉄道が廃止す

る。

明治三十五年四月一日

千住・業平間の鉄道が開通する。

《東武鉄道備》

明治四十四年五月九日

柏・野田間の鉄道が開通する。

《千葉軽便鉄道備》

明治四十四年

武総鉄道と岩槻電気軌道の起業計画がなされる。

武総鉄道は、国鉄常磐線の我孫子駅を起点とし、国鉄東

北本線の大宮駅に連結する鉄道である。

経由地は、流山町、埼玉県北葛飾郡早稲田村、吉川村、

南埼玉郡増林村、越ヶ谷町、荻島村、新和村、和土村、

岩槻町、柏崎村、北足立郡大砂土村である。

千葉県北西部と埼玉県東部の地域産業の発展に大きく

貢献することが期待されていた。しかしこの鉄道計画は、

大正三年の第一次世界大戦の勃発の影響を受けて、建設

資材の高騰と資金調達などの理由から全く建設に

踏み切れず、大正五年には計画を中止せざるを得なかつ

た。

大正九年四月十七日

越ヶ谷駅が現在地に開設される。

大沢にあった従前の越ヶ谷駅（現、北越谷駅）は、武州

大沢駅と改名される。

昭和二年十月一日

東武伊勢崎線が全線の電化を完了する。

昭和五年十月一日

大宮・野田間がつながり、柏・大宮間の全線が開通する。

《総武鉄道備》

昭和六年五月二十五日

業平橋・浅草雷門間が開通する。《東武鉄道備》

（久喜以遠に関しては、ここでは省略する）

### 三 越ヶ谷乗合馬車と乗合自動車

その頃の時代背景

(一) 越ヶ谷乗合馬車

馬車鉄道が廃業したのが、明治三十三年二月である。その馬車鉄道で馭者をしていたのが黒田西蔵であった。黒田氏は、廃業した馬車鉄道の車両と馬を譲り受けて、地元で乗合馬車を運行することになった。それまでに居住していた弥十郎から越ヶ谷駅（現、北越谷駅）の駅前に転居し、乗合馬車を開業するのである。その越ヶ谷駅（現、北越谷駅）を中心として、吉川（よしかわ）、蒲生（がもう）、金杉（かなすぎ、松伏）方面に運行していたという。

越ヶ谷駅（現、北越谷駅）を出発した金杉行き乗合馬車は、増林、堂面橋（どうめんばし）を経て、金杉迄の行程であった。運賃は、定使野（じょうつかいの、現、花田二丁目）から田島まで二銭、七歳以下は無料であった。金杉停留所は、現在の野田橋上流百メートル程行った江戸川辺りにあり、そこが終点であった。そこには交替用の馬が五頭程つながれていた。金杉から出発した乗合馬車と、越ヶ谷駅（現、北越谷駅）から出発した乗合馬車が、現在の堂面橋付近ですれ違ったという。

大正九年（一九二〇）十二月、越ヶ谷町と吉川間にバスが運行されるようになった。乗合馬車と乗合自動車（バス）の競合が始まったのである。当時の越ヶ谷、吉川間の道は、元荒川添いの土手道（大相模の不動尊の裏側）で、道幅は狭く、曲がりくねっていた。

乗合自動車の発車運行時刻の五分前に乗合馬車が出発していたが、途中、西方の大聖寺（大相模の不動尊）近くで、乗合自動車が乗合馬車に追いつく状態だった。ちょうどこのあたりは、道幅が狭く、曲がりくねった道で、乗合自動車が追いついたものの、馬車を追い越せないでいた。また、馬は途中で糞尿を排泄するたびに止まるという始末であった。早いはずの乗合自動車は、吉川に着くのは、馬車と同じ時になってしまふのが常であった。この様な例は、他の地域でも大方見られていた。例えば、梁瀬長太郎によると、修善寺新井旅館からバスが発して伊東まで行く間に道路がいかに狭かったため、豆腐屋のラッパを吹く乗合馬車に前進を阻まれ、だだっ子をなだめすかす様にして気をもみ、並大抵の仕事ではないとしている。

乗合馬車と越ヶ谷自動車のバスの競合は半年間も続いたが、やがて双方の話し合いの結果、乗合馬車は運行を取りやめることになった。

## （二）越ヶ谷乗合自動車

岡庭善一は、明治二十六年四月二十三日、旧八木郷村長登呂（現、三郷市長登呂）に生まれる。自動車運転免許取

得年齢に達した明治末期に東京に行き、運転免許を取得するのである。

自動車運転免許の制度は、明治三十八年、警視庁で自動車取締令の着手がなされ、明治四十年、自動車取締規則の公布となる（日本自動車史と梁瀬長太郎）。実地試験は、日比谷交差点周辺で行われた（「警視庁史」）。

その後、明治四十五年六月に民間による運輸、

手養成所が有楽町吉田商店内に開設された。

岡庭家の言い伝えによると、善一氏は、芝浦で免許を取得したそうである。「写真1」は、

芝浦の運転手の養成所の時のもので、後部座席の手前に若き日の岡庭善一氏が乗っている写真である。

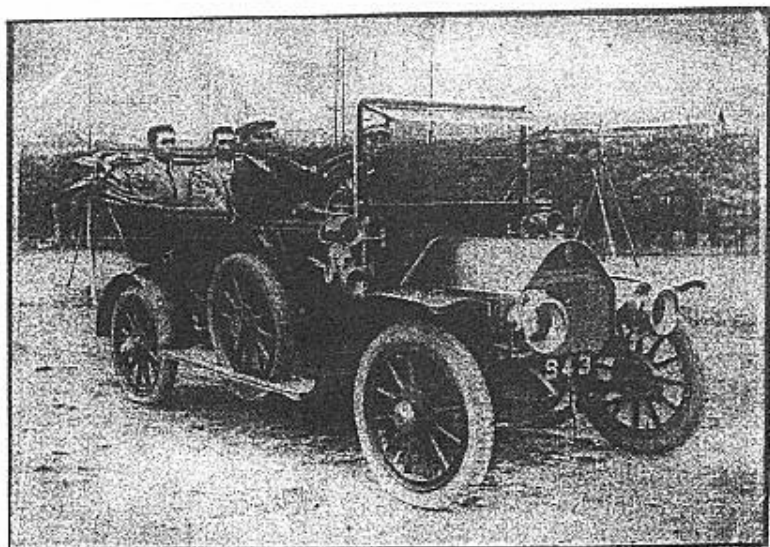


写真1 東京芝浦にて（後部座席の手前に若き日の岡庭善一氏）



芝浦は元々海岸であつた所を、明治三十九年から埋め立てを始めたのである。当初、その埋め立て地には、ガス会社と隅田川改修事務所の建物しかなかった。明治四十四年から四十五年にかけて本格的に埋め立てがなされた（角川地名事典）。当時の芝浦の様子を永井荷風の随筆文「日和下駄」より読み取ることができる。抜粋すると次の通りである。

「芝浦の埋立地も、目下家屋の建たない間は、同じく閑地と見るべきであろう。

現在、東京市内の閑地の中でこれほど広々とした眺望を直す処は他にはあるまい、夏の夕べ海の上の月昇るころ、広々した閑地の雑草は、一望煙のごとくか

すみ渡つて彼方此方に通ずる掘割から荷船の帆柱が見える景色など、まんざら捨てたものでない。」

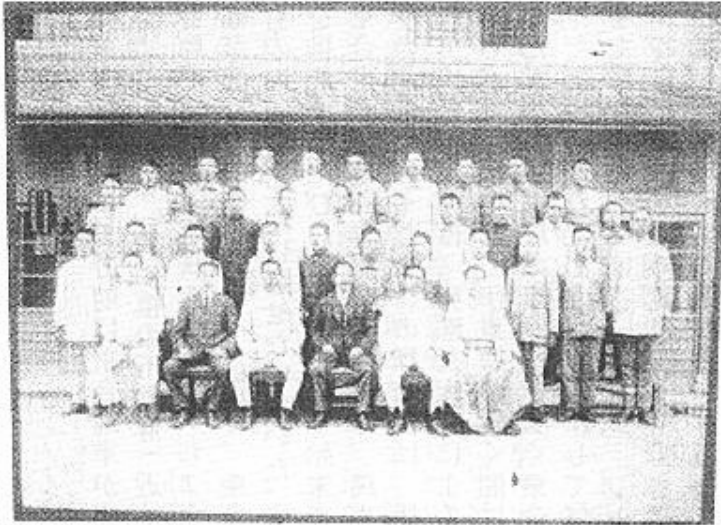


写真2 大阪の運転手の養成所での卒業式（前列左から三人目が岡庭善一氏）  
大阪講習所第6回卒業生の集合（大正7年6月撮影）

岡庭氏は芝浦で運転免許を取得し、大阪へ赴く。そして、自動車運転手養成所開設にかかわることになる。

「写真2」は、大阪の教習所での卒業式の時の写真で、前列左から三人目が岡庭善一氏である。大正二〜三年当時、普通の会社員の月給が十四円〜二十五円、最高でも三十円ほどであった。自動車運転手は最低でも四十五円、しかも手当や心付け等で一ヶ月五十円に達することも希ではなかった。まさにこの頃、主要府県下に自動車運転手養成所、自動車学校が設立された（自動車日本史上）。この内の一つが、岡庭氏が校長をした学校なのであろう。

次に、「大阪府統計書」による資料を紹介する。

◎「大阪管内自動車保有台数(官公車を除く)」

	貨物車	乗用車
明治43年		2
" 44年		5
大正元年		20
" 2年		22
" 3年	2	21
" 4年		30
" 5年	1	111
" 6年	5	225

大阪から帰省した岡庭氏は、野田金杉間の架橋の機運が高まってきたのを知り、大正八年三月一日に野田・越ヶ谷

間の運賃許可を取得するが、実際に野田橋が架橋されたのは、かなり後であった。大正九年十一月七日、越ヶ谷・吉川間のバスの運行許可を得た。しかしこの路線には既に乗合馬車が運行しており、既存権など諸問題を抱え、バス運行をしばらく躊躇したが、大正九年十二月二十五日にバスの運行を開始した。その後には岩槻・越ヶ谷間（岩槻市史民族資料編）、昭和三年四月一日、野田橋の開通にともない野田・越ヶ谷間、その他、各地域へと路線を拡大していった。

〔写真3〕は、昭和7年頃の野田橋を渡っている乗合自動車である。拡大一方の越ヶ谷自動車であったが、当時の世相を読み取って、いち早く総武鉄道に対して、バス事業の譲渡活動を始めたのが昭和十一年十二月である。それから、再度十二年五月にも総武鉄道に対して譲渡申請を申し出ている。このことは、善一氏の子息の正義氏が、当時、鉄道省に勤務しており、合併という官庁の動きを察知したものと思われる。当時の日本は、支那事変へと突入し、ガソリンの消費規制が始まった。支那事変一周年後の昭和十三年七月八日、監督局長、燃料局長、官連名で次の内容の通達が出された。すなわち、バス路線の相互並行するものは、買収し共同経営をさせ、経営の合理化をし、消費の節約思想の徹底と工夫や、事業計画内容の再検討等をはかるべきなどとした。

事業の統合は、戦時経済を通して各事業について行われた現象で、特にバス事業に限ってということではなかったが、石油消費規制の強化に伴い必然的に強要された性質のものであったと思われる。

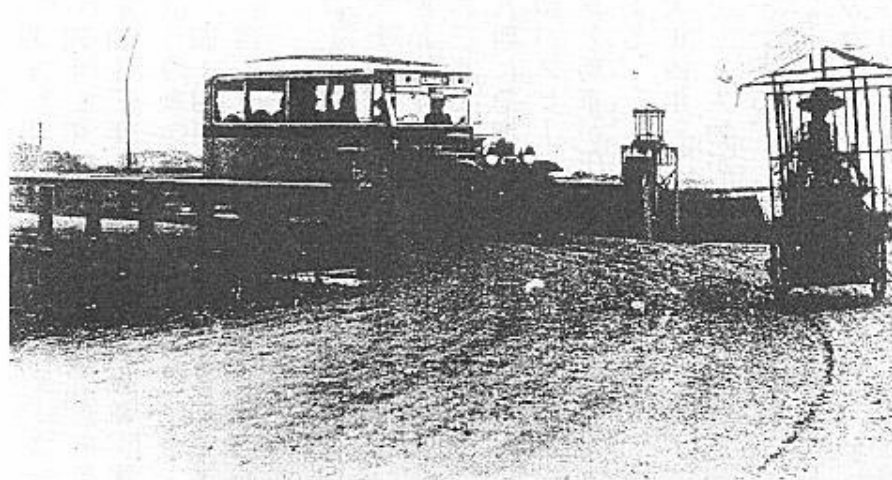


写真3 野田橋を渡る乗り合い自動車（昭和7年頃）「写真が語る野田歴史文化」より転載

戦局が益々拡大傾向にあったので、越ヶ谷自動車では、すばやい譲渡を行動し、任意譲渡の形をとったのであろう。任意譲渡という手法であったため、国立公文書館の鉄道省関連の資料には、越ヶ谷乗合自動車の総武鉄道への譲渡の記録が残されていないのである。

### （三）貨物自動車での下肥の販売

増森西川の山崎治平は、明治末期から舟運での下肥の引き取りと販売業に携わってきたが、昭和十一年にフォード四トン車を購入して、舟運から自動車運送に乗り換えた。

いう。浅草松屋裏手の今戸の地に事務所を設け、中央清掃会社を設立した。汲み取り人を四人雇い入れ、集荷にあたらせた。集荷された下肥は、一台のトラックに九十樽を積み、下肥販売をした。販売先としては、江戸川区の鹿骨（しほね）、千葉県の松戸や柏、埼玉では、岩槻、蒲生、新方（にいがた）方面であった。地元で販売しなかったのは、近隣の舟運での販売業者との競合を避けたいからであろう。当時は、今日の交通量とは比べものにならない程の少なさだったので、勿論渋滞はなく、一日に四往復もしたという。運転手に新田村槐戸（さいかちど、現、草加市八幡町）在住の浅井助左衛門（明治三十七年生まれ）がなつた。下肥の販路もフォード車の保管場所も遠方だったので、増森の地元の人々には知られていない話である。売上は、月五百円程度で、純益は百円位だった。

昭和二十年三月十日、米軍機三百機が飛来し、江東区をはじめ、下町全域が壊滅状態となり、十万人が死亡、二十三万戸が焼失したという。この時に浅草今戸の中央清掃の事務所や自動車も焼失し、その後、廃業した。

#### (四) 自家用車

日本国内で自動車が行したしたのは、明治三十年のオリエント号という蒸気自動車であった。明治三十七年には、国産一号車が生まれた。それから国産自動車の生産は明治以降、わずかな台数が継がれていった。明治年間における国産自動車の生産概数は次の通りである。

#### ◎国産自動車の生産概数

年	型式	台数
明治三十七年	山羽式	一台
三十八年		〇台
三十九年		〇台
四十年	タクリー号	十七台
四十一年	タクリー号	三台
四十二年	タクリー号、宮田	五台
四十三年	後藤、東京自動車、米山、タクリー号	六台
四十四年	右に同じ、外軽便平四	五台
四十五年	右に同じ、快進社	六台

以上、四十三台である。なお、エンジンを輸入して組み立てた車、又は、陸軍にて製作したものは、除外してある。

明治四十一年三月の東京市内の車体ナンバーは、一から一六三までであった。大正二年には七六一、大正四年には一二八四に急増している。この多くが自動車の出現で、交通機関がスピードアップされ、速度がのろくて非能率的な人力車と馬車が圧迫されていったことは、自然的な成り行きである。

大正四年（一九一五）、フォードT型車を購入して自家用車とした人物がいる。後の越ヶ谷乗合自動車の社長の岡庭善一である。

「写真4」は、岡庭善一氏の自宅の庭での一九一五年型のフォードの写真である。その後、昭和五年頃になり、現、越谷市域となった旧町村の地主や医師が自動車を購入して

自家用車とする  
ようになった。  
最初は免許のい  
らない二輪車か  
ら購入して運転  
をしてい  
たようである。

内務省令は、  
罰則を主とする  
取締に重点を置  
いたので、自動  
車の根本的条件  
となる機構、形  
式などを見過ご  
していた。明治  
時代より自転車  
の監札で使用し

ていたオートバイ、これに類した三輪車（オートバイの類とみなされていた）等は、自動車の規定外とした。つまり、オートバイ、三輪車は、自動車に非ず、小型自動車とし、無免許運転でよしとした。やがて、二輪車にあきた人々は、普通自動車に乗り換え、余暇には日光へ鹿追いに、また、秩父に出掛けて熊や鴨取りをし、また、銚子まで海釣りに出掛けたということである。

「写真5」は、昭和十一年頃の秩父での岡庭善一氏の鴨打ちの写真である。やがて、日支事変以降、戦局が深まり、ガソリンの消費規制が厳しくなり、個人持ちの自家用車は

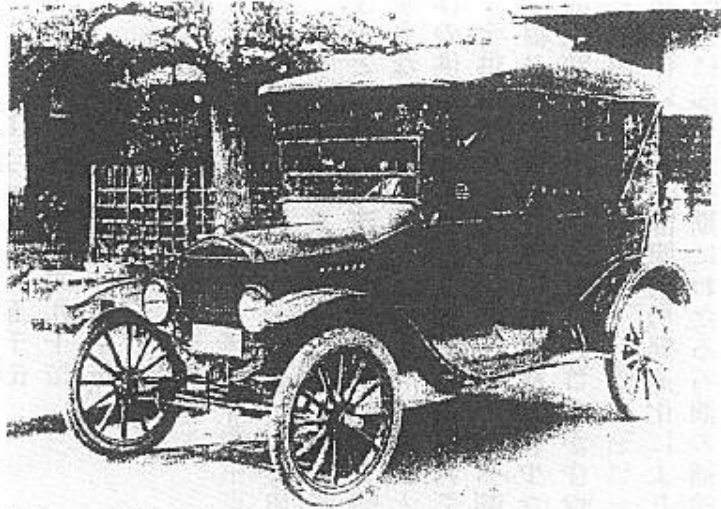


写真4 大正4年頃の岡庭善一氏の庭での1915年型のフォードT型車  
「ふるさと思い出写真集」より転載

処分されてしま  
った。ただ、医  
師のみが公益の  
業務に準ずると  
みなされ、使用  
することが認め  
られていた。

次は、昭和十  
六年八月三十日  
の読売新聞の記  
事から抜粋した  
ものである。

越ヶ谷・吉川  
両警察署管内で、  
来月一日からガ  
ソリンの使用禁  
止から医者のみ

家用自動車のみ、ガソリンの特配をするので、管内自家用自動車所有医師が従前の如く自家用車で往診して患者の家から車料金を徴収する行為は交通事業法違反なので、今後絶対になきように違法行為発見しだい、ガソリンの配給停止を行う旨警告を發した。

当地でも、各学校の校医は、そのほとんどが車にて検診に来ていたとされる。



写真5 昭和11年頃の秩父での岡庭善一氏の鴨打ち

## （五）代燃自動車

わが国の石油事情については、大東亜戦争以前は全く米英に左右されていたことは言うまでもない。米国スタンダードは明治二十五年に東洋市場獲得のために早くも横浜に支店を設置したし、明治三十三年には英国ロイヤルダッヂシエル系のライヂングサンがわが国に進出して来た。この二社の競争の中で、わが国の石油産業が成り立っていたということである。

昭和十年のガソリン供給統計は次の通りである。

内地製油高	一五八八五千缶
国内産原油精製高	一三六九千缶
輸入原油	一四五一六千缶
製品輸入高	一六六一五千缶
製品輸出高	七五千缶
製品移出高	一三六二千缶
内地への供給高	三一〇六三千缶

右の計数からすると、純国産高は、全供給高の四分四厘(四・四%)にすぎない。

なお、石油全体の供給高としては、純国産高は八二九三〇〇〇缶にして、全供給高八五二二〇〇〇缶の約一割弱にあたるのだが、ガソリンの純国産高の供給割合の少ないのは、わが国産出の原油がガソリン分を含むことが少ないことを示している。

支那事変の勃発に伴い、且つ国際情勢緊迫化により、国内石油事情の貧弱性に即して長期にわたる石油の補給策が

急務となり、これがためには石油の配給制限と消費の節約が先決条件となったので、政府は昭和十二年、商工省燃料課を外局とし、燃料政策の万全を期すとともに、行政権の適当な運用に凡そ一割程度の節約を期することとなった。これが第一次石油消費規制である。その後も戦局の推移と共に、国内においての諸統制強化が増大し、航空燃料に重点が置かれる様になり、ガソリンの消費規制は一段と厳しくなり、自動車の代燃化が加速されていった。

すでに昭和五年、東京・姫路間の木炭自動車試験運行がされ、木炭自動車の完成をみるに至っていた。また、昭和九年六月には、ガス発生炉設置制度で合格車には、三百円の補助金が支給されるようになった。ガソリン消費規制に伴い、代用燃料も木炭、薪、コーライト、圧縮天然、液化ガス等、多種類に及び、代用燃料は急速に増強の方向を示した。一般的には、代燃自動車は、木炭が多かったが、次に東京市内でのガス自動車について紹介したい。

昭和十四年十月、梁瀬自動車芝浦工場内に「天然ガス自動車係」を設け、天然ガス自動車の業務にあたり、一般の普及に努めた。天然ガスを充填するポンベは住友金属製であった。

ポンベに関する資料は次の通りである。

ポンベの容量 一本の重さ 一車当たりの取り付け本数

乗用車 一九立方 三二瓩(キロ)

三、五本  
トラック 四〇立方 六五瓩(キロ)

このボンベの耐圧試験は二五〇気圧、使用気圧は一五〇気圧であった。木炭ガス発生装置を取り付けると自動車のボデーの一部を損傷してしまうことがあったが、この天然ガスを使用する場合には、決して自動車のボデーを損傷する恐れがなく、しかも取付工事が早くて済み、取付後もなから自動車の姿態において見苦しくないという点で大いに天然ガス化が進んだ。当時、梁瀬自動車芝浦工場で取り扱った天然ガスは、主として千葉県茂原と大多喜の天然ガスであった。また、この梁瀬式天然ガス装置は、自家用関係一般ユーザー側の好評を得て、東京における乗用車の八十%は梁瀬式を取り付けていたということである。

## (六) 越ヶ谷乗合馬車と

### 乗合自動車の略年表

明治三十三年二月

草加馬車鉄道(合資)が廃業する。

越谷で、黒田西蔵が乗合馬車業を開始する。

草加馬車鉄道の馭者をしていた黒田西蔵が馬と車輛を譲り受け、乗合馬車業を開業する。

最初は、越ヶ谷駅(旧・武州大沢駅、現・北越谷駅)から吉川まで、その後は、蒲生・金杉(松伏)へと運行を拡大する。

〔越ヶ谷今昔物語〕

大正三年

〔黒田清康(昭和十年四月生)氏の談〕

梁瀬自動車(ビュイックの2A型というシャーシ)で、半分トラック、半分乗用車なる自動車を使って、武州川越(現、川越市)と越生(お)せ)間の十一里(約四十四キロメートル)のバス事業を開始する。

大正三年七月一日

〔日本自動車史と梁瀬長太郎〕

浦越社は、越ヶ谷駅(旧・武州大沢駅)・浦和間に乗合馬車の運行を開始する。片道三十五銭、往復六十銭である。

大正四年

〔越谷市史五〕

岡庭善一(後の越ヶ谷乗合自動車の社長、東武バス㈱の基礎を築く)がフォードT型車(一九一五年型)を購入。自家用車とする。

〔岡庭氏が購入したフォードT型車は、一九一五年型であることを、英国の「CHELSEA LIBRARY」所蔵の書籍、書名「Classic Car Profiles Volume 2」出版社名「Haynes Publishing Group」によって確認した。山本〕

フォードT型車は、一九〇八年(明治四十一年)に製造の計画が発表され、翌年二月に座席数五の車が八五〇ドルで発売された。その後、いわゆるオートメーション化によりシンプルで価格も下がり、一九一六年には三六〇ドルまでになっていた。

大正五年一月

〔フォードその栄光と悲劇「産業能率短大・S43」〕

岩槻自動車線が発足する。  
岩槻・大宮間の乗合自動車の運行を開始する。

〔岩槻市史民族資料編〕

大正五年六月二十八日

鳩ヶ谷自動車が、鳩ヶ谷・川口間の約六kmを運行する。

〔バス事業50年史〕

大正六年六月二十八日

岩槻自動車線が、岩槻・粕壁・越ヶ谷・蒲生を経て、草加・千住までのバスと貨物の運行計画を立てる。

〔東京日日新聞〕

大正八年三月一日

越ヶ谷・野田間の乗合自動車の運賃が許可される。野田橋建設前のことである。その時の経営者は、岡庭善一（明治二十六年四月二十三日生）である。

〔東武博物館〕

実際の運行は昭和三年の野田橋の開通後である。  
大正九年

岡庭善一は、八木郷村長戸呂（現、三郷市長戸呂）から越ヶ谷駅（現、越谷駅）前へ居を住み替え、その後のバスの営業の拠点とする。

〔岡庭正樹（昭和十六年十二月二日生）氏の談〕

大正九年四月十七日

越ヶ谷町に新たに越ヶ谷駅が開設される。大沢にあった越ヶ谷駅はこれ以後、武州大沢駅と改称する。

〔駅名事典〕

大正九年四月

越ヶ谷駅開設にともなって、黒田西蔵は、武州大沢駅

より越ヶ谷駅前には居を住み替えて乗合馬車の営業拠点とする。

〔黒田清康氏の談〕

大正九年十一月七日

越ヶ谷を中心に乗合自動車（バス）の運行が許可される。

〔埼玉年略〕

大正九年十二月二十五日

越ヶ谷・吉川間の五、五キロメートルを、越ヶ谷乗合自動車の岡庭善一がバス（乗合自動車）の運行を開始する。

〔バス事業五〇年史〕

当時の運賃は、馬車は十銭、バスは二十銭であった。

〔越ヶ谷風土記〕

大正十年

越ヶ谷・吉川間で、乗合馬車と乗合自動車が競合となり、双方の話し合いの結果、岡庭がバス業、黒田がタクシー業を行うということで決着する。乗合馬車は廃業となる。

〔襲名井橋吉蔵（大正三年五月十五日生）氏の談〕

大正十一年

井橋吉蔵商店（旧日光街道沿い）が、石油の販売業を開始し、戦時下において石油の配給元となる。

〔井橋吉蔵氏の談〕

大正十二年九月一日

関東大震災で東武鉄道線の汽車が三週間にわたり不通となる。北千住から井橋吉蔵商店前（旧・日光街道）の間に、黒田タクシーと森田タクシー（増森三丁野の生まれ）の二社で無料タクシーが運行される。

井橋吉蔵商店は、タクシーの燃料を無料提供する。

〔井橋吉蔵氏の談〕

大正十二年九月一日

関東大震災の際の救援のため、自動車七台、運転手十二人を岡庭善一（越ヶ谷乗合自動車社長）が提供する。後の昭和四年四月三十日に県知事より表彰状をもらう。

〔ふるさとへの想い出写真集 三郷〕

大正十四年十一月十五日

埼玉県自動車営業組合が設立される。

公認営業者七五〇名。車輛六〇〇台（乗用四八〇台、貨物一二〇台）。組合長は平沢常一郎。

県下の二十三警察署管内に二十三支部を置いた。越ヶ谷支部長に岡庭善一がなった。

〔日本自動車交通事業史〕上〕

昭和三年四月一日

野田橋の開通式が行われる。この橋は大正八年十二月に計画され、昭和三年二月に完成する。幅は四間、長さは一八〇間である。

〔東京日日新聞、野田市年表〕

越ヶ谷・野田間のバスが運行されるのは、これ以降である。

昭和三年七月十八日

全盛の自動車は増加の一途をたどり、一層、乗合馬車を圧迫。県統計係で行った交通機関調査によると、自動車の数は、乗用車が前年より百三十台増えて四百九十五台、トラックが百五十台増えて五百三十二台、自転車とリヤカーを合わせた数は八千五百八十六台も急増し、十

九万八千八百四台である。これに反して、人力車は減る一方で九百五十三台、同じ運命の岩槻・吹上方面にある乗合馬車も半減し十八台となる。荷車は、農業の発展とともに増加して、七千四百九十一台（内訳は、牛車が増加して千二百十四台、馬車が減少して三千八百六十四台である）。

〔東京日日新聞〕

昭和五年五月五日

越ヶ谷乗合自動車は、吉川から早稲田（現、三郷市）、金町（現、葛飾区）までの路線を延ばす。

〔ふるさとへの想い出写真集 三郷〕

昭和五年

自動車運送業の欄に大沢町：大沢運送 〇岩瀬時松 〇岡安重三越ヶ谷町：〇黒田録郎 〇岡庭善一（越ヶ谷自動車乗合貸切業）と、それぞれの名前が記載されている。

〔大日本商工人名簿〕

出羽村在住の野口八郎左衛門は、台東区上野の小川内燃機より、ハーレーダビットソンのサイドカーを購入して、自家用車とする。後に、フォード車に乗り換える。

この車では日光に出掛けては鹿追いに興じた。やがて、日支事変（日中戦争）が始まるにつれて、ガソリンが配給制となったことにより、この車は処分される。

〔野口侃一（大正十一年九月二日生）氏の談〕

昭和六年

増林村在住の滝田正文は、二輪自動車を購入する。翌年にハーレーダビットソンのサイドカーに乗り換える。昭和八年にフォードに乗り換える。昭和十三年に処分す



る。

〔渡辺治雄（大正十一年二月二十七日生）氏の談〕

昭和七年

増林村在住の渡辺伝三郎氏は、二輪自動車のスミスモーターを越ヶ谷町の前田自転車店より購入する。時価は二四〇円である。

この車で、成田山や筑波山にも遊びに出掛けた。戦時中は、石油不足の時代が到来し、物置に格納した。戦後のわずかな期間に乗り回す。

〔渡辺治雄氏の談〕

昭和七年九月一日

越ヶ谷・野田間の運賃は片道三十銭である。総武鉄道関連の資料の中の「沿線乗合自動調べ」による。

〔東武博物館〕

昭和十一年

越ヶ谷乗合自動車が三郷市域に三系統走る

〔三郷あゆみ〕

この頃の越ヶ谷乗合自動車の運行規模は、最大に達し、越ヶ谷駅を中心として岩槻、吉川、野田、安行、草加方面、吉川からは三郷、金町方面へと拡張していた。バスは二三台、乗用車は四台で、運転手・車掌は四六名であった。

〔ふるさと想い出写真集 三郷〕

増森の山崎治平（明治二十一年生）は、フォード製トラックの四トン車、時価四千円で購入する。

日露戦争後、舟運による下肥の販売を手掛けてきたが、浅草松屋裏の今戸に中央清掃会社を設立し、トラックでの下肥販売業に転業する。

〔山崎正二（大正七年一月八日生）氏の談〕

昭和十一年十二月

越ヶ谷乗合自動車の岡庭善一は、旅客貸切自動車運送事業譲渡申請を総武鉄道に出す。

〔東武博物館〕

昭和十二年五月

越ヶ谷乗合自動車の岡庭善一は、大型自動車旅客運送事業譲渡許可申請を総武鉄道に出す。

〔総武鉄道事業報告・昭和十一〜十五年、東武博物館〕

昭和十三年五月二十日

越ヶ谷自動車では、ガソリン統制による配給減のために、五月二十日から左のように減車と運休を断行する。

安行線は運休、野田線は半減、草加線は三往復減、金町線（早稲田・彦成）は二往復減。

〔東京日日新聞〕

昭和十四年四月十一日

国策自動車考案される。チューブの無いタイヤである。増林村大字増森新田の宮川慶喜（32歳）という自転車屋が、国策にのってタイヤとチューブの代用品を、川口重工業の指導所長の梅田益次郎氏の下に考案し、十二月に特許を出願した。

〔東京日日新聞〕

昭和十五年九月十九日

越ヶ谷管内の自動車業界で、合同（合併）会社が二つできる。

越ヶ谷警察署管内のトラック業者二十四名は、九月十八日に越ヶ谷署で合同（合併）に関する最後の協議をして、翌十九日に越ヶ谷合同貨物自動車有限会社を設立することを決定する。資本金は十五万円。

一方ハイヤー業者六名も同様に越ヶ谷合同乗用自動車有限会社を設立する資本金は三万円。

〔東京日日新聞〕

昭和十五年九月二十日

戦時下の第一統合令に基づき、自動車業界の合併が見られる。

貨物自動車業界では、岡安商店の十七台、黒田氏の十四台などが一つに合併する。タクシー業界では、平和タクシー（金子氏経営）、鈴木タクシー（大相模村の南巨）、鋪野タクシー、黒田タクシーなどが一つに合併する。

使用の車種は、一九三四年のダットサン、一九三七年のフォード・シボレーなどである。「黒田清康氏の談」  
昭和十五年十一月十四日

越ヶ谷にも代用タクシーが出現する。ボディはダットサンそっくりで、サイドブレーキもあり、ギアを入れ替えれば坂も平気で二人の客を乗せられる車が登場する。タクシーの営業主は秋元酒店である。目下新案特許を申請中で、十一月十四日から三台を動員して営業を開始する。  
「東京日日新聞」

昭和十六年四月、七月

越ヶ谷乗合自動車の岡庭善一の経営が総武鉄道に譲渡される。仲介者の井橋太郎兵衛（味噌醤油販売業）が千葉県野田の野田醤油と話し合い、総武鉄道に譲渡することを決定する。

「井橋順一昭和六年六月六日生」氏の談  
昭和十六年七月十五日

バス譲渡命令が発せられる。鉄道・内務の両省が、昭和十三年制定にかかわる陸上交通事業法第二条に基づき、第二段階として、旧市内路面交通事業の東京市への統合命令を発する。東京市に統合するのは、青バス、黄バス、

城東電車、王子軌道バス、城東乗合自動車、王子電車である。さらに東横バス、京王バス、葛飾バス等の一部の路線バスをも統合し、これによって一元化することとなった。東京の旧市内の交通調整は一応これで終了した。  
「朝日新聞」

昭和十六年八月一日

米国が対日石油の輸出を全面禁止する。

昭和十六年八月十二日

「東武鉄道が育んだ一世紀軌跡」

東武自動車線の鉄道省へ申請の路線延長が、十一日付で許可された。延長された路線は次の通りである。南埼玉郡蒲生村瓦曾根一三九八番地から同郡大沢町三七五七番地（一・三軒）同郡大沢町一〇二二番地から同町三八〇三番地（〇・一軒）同郡越ヶ谷弥生町七〇八番地から同町新石町四六五一番地（〇・三軒）  
「東京日日新聞」  
昭和十六年九月一日

東武バスの運行回数が減る。ガソリン統制に協力するために、草加・吉川間の東武バスは従来の二十一往復から十七往復。

草加・鳩ヶ谷間の総武バスも十二往復から六往復になる。何れも九月一日から実施される。「東京日日新聞」

総武バスの運行回数が減る。総武バス越ヶ谷営業所では、来月（九月）一日よりガソリンの使用禁止によるバスの運転 臨戦態勢実施対策を考究中であつたが、草加発鳩ヶ谷町經由安行村行バスを、従来十二往復を半減の六往復、吉川発早稲田經由金町行を一回と、各運転減を一日から実施する。なお、他の路線は代燃車を運転してい

る為、従来通り運転する。

〔読売新聞〕

鉄道省より乗合自動車に対して、石油の廃止と徹底再統合の通達を出す。〔日本自動車交通事業史 上〕

昭和十八年九月

貨物自動車第二次統合命令が出され、県内の貨物自動車会社は四社に統合される。県内にある貨物自動車の会社は、埼玉自動車（熊谷）、埼玉自動車（浦和）、埼玉自動車（越ヶ谷）、武蔵自動車（川越）の何れかの貨物自動車会社に統合される。〔日本自動車交通事業史 下〕

埼玉自動車は、越ヶ谷、春日部、杉戸、羽生、加須、幸手、岩槻、草加、吉川に各営業所を設け、貨物自動車六十七・八台で運行する。社長に黒田清康氏となる。

〔黒田清康氏の談〕

昭和十九年三月一日

東武鉄道が総武鉄道と合併し、東武自動車協が総武鉄道の自動車事業を引き継ぐ。

同年九月十六日に、越ヶ谷・野田間のバスの営業許可を取り直す。

〔東武博物館〕

《後記》

越ヶ谷周辺で走っていた初期自動車に関する話をまとめようと思つてから三年が過ぎた。その間に多くの人たちと接してきた。まとめていく中で、昭和期の戦争という記憶の空白、爆弾投下による資料・書類の焼失などの難題がいつぱい出会った。それでも人と人とのかかわりを通して協力していただきながら支えられ、概ねまとめ

ることができた。ここで関与しご協力いただいた方々に深くお礼申し上げます。今日の自動車社会に至るまでの前段として、その当時の様子を読み取っていただければ幸いです。

平成十五年十二月 山本泰秀

《主な参考文献》

「自動車日本史 上下」 自研社、S 30・10

「日本自動車交通事業史 上下」

全国乗用自動車協会、S 38・9

「日本自動車史と梁瀬長太郎」 刊行会、S 25・5

「草加市史研究九号」 草加市、H 7・3

「東武鉄道が育んだ一世軌跡」 東武鉄道

「資産家地主総覧 埼玉編」 ㈱日本図書センター

「ふるさとの思い出写真集 三郷」

㈱日本図書センター

東京日日新聞、朝日新聞、読売新聞

「埼玉年略」 埼玉年略刊行

「バス事業50年史」

社団法人日本乗合自動車協会 S 32・10・25

国立国会図書館

「モーターサイクル」 八州出版 77 国産アルホ増大

号

「越ヶ谷今昔物語」 大塚伴鹿著、越谷市立図書館蔵

「越ヶ谷風土記」 真藤兼雄著

「岩槻市史 通史編・民族資料編」

「総武鉄道事業報告」 東武博物館

# 東武劇場再現図始末記

三浦 栄市

## ■ 越谷市史に載った東武劇場

平成十七年春、大沢一丁目の地元の人、若い時から知り合いの人を中心に東武劇場を調べ始めた。調査のきっかけは、越谷市史二通史下六六二頁「劇場の出現」を見たからである。通史にはわずかに七行で劇場の紹介がなされている。『旅芸人、旅役者による小屋掛けの演芸のみが見られた越谷の地に、はじめて劇場が出現したのは大正一四年一月元旦であった。大沢一丁目の「東武劇場」がそれで、二階建て、花道、廻り舞台付き、平戸間と柵席とがあり、一、〇〇人を収容できた。経営者は今となっては不明だが、株主は東京本郷の結城力太郎という人が七〇%、大沢の荻野磯五郎が三〇%であった。荻野は大沢町役場の兵事係であったが、演芸好きで有名であった。開業のこけら落としには、東京から歌舞伎役者を呼び、「勸進帳」を演じたが、以後平常は旅役者による草芝居式のものであった。これも映画が進出してくると（越谷の人びとは浅草へ出やすかったから映画を見る機会も多くなっただろう）、時代の波に勝

てず、昭和十二年からは、東武劇場も映画館となってしまった」

以上が東武劇場の記録であるが訂正する箇所がいくつある。まず収容人員の一〇〇〇人は半分の五〇〇人程度である。これは私と同年配の人達の記憶の中の証言でもある。経営者は今となっては不明の箇所、多くの人は黒髭の助川さんをご存じです。それからもう一点、昭和十二年から映画館、いや芝居の合間に映画を上映していた。

## ■ 東武劇場の焼失

市史の発行が昭和五十二年五月、（焼失の時から）二十年の時が流れているが焼失年月もない。もう少し劇場の回りを調べていけば正しい記録が残せたはずと思う。ただ、「夏の暑い日であった」と当時の人は異口同音に答えていた。市史の記録を見て不明な点を調べようと焼失時の新聞記事を探し始めた。県立図書館に昭和三十二年八月二十日（火）付け四紙に、火災記事があることが分かり、草加市図書館の職員の多大な協力のおかげでそのコピーが得られた。埼玉新聞が社会面だが不鮮明、毎日埼玉版に一段十七行、朝日は同じ埼玉版二段十三行、産経が埼玉版二段十七行。四紙とも写真入りの記事、記事の内容と写真の鮮明さから産経新聞を参考に紹介する。

見出しは『東武劇場など全焼、映写室隣から漏電』

《十九日午後四時頃南埼玉越谷町大沢一の三八五七七東武劇場経営者助川覚元助氏(五五)の映写室付近から火が出て同建物二百五十坪を全焼、火の粉がさらに五百メートル離れた同所三七九四会社員高橋勝太郎さん(四八)方にとび、同家ワラびき平屋建十五坪を全焼。また隣家の会社員小野沢武夫方にも移ったが一部(五坪)を焼いただけで消しとめた。なを劇場では観衆が約三十名くらいいたが避難が早かったため人がはでなかった。越谷署の調べでは映写室隣室の配電器の漏電かららしい。損害総額七百五十万円》  
劇場建物二百五十坪は四紙共同じだが損害額は朝日には記入がなく、埼玉は火災時の報道は詳細だが損害額の記入はない。毎日には四百万円、産経との差三百五十万円、助川さんの名前も全部違う。毎日には覚之さん、朝日は覚之助さん、埼玉新聞は覚治さん、産経は覚之助さん。(後に助川額次さんが正しいお名前と分かる)  
二十日の朝刊にのせる時間とのたたかい、火災の現場写真と記事、大変なことと思う。報道の難しさ。  
この年に、元荒川の土手に桜の苗木が植えられる。

この年昭和三十三年、埼玉県の映画館は百八軒あり、東武沿線では羽生が二館、加須三館、久喜一館、鷲宮二館、幸手一館、杉戸一館、春日部は東武座一館、草加は草加劇場、草加東映、谷塚に一館。越谷は越谷映画劇場と大沢東武劇場の二館である。

もし、東武劇場が健在ならば一年四カ月後の昭和三十三年十一月の市制誕生の祝賀会場になっていただろうと

思う。

焼失から今年(平成十九年)は五十年になる。

### ■ 斎藤一男(いちお)氏の思い出

平成十八年十二月十八日、知人より、東武劇場について参考にしてくださいと斎藤一男さんの半生記「波瀾坂」中に書かれている東武劇場の記事の切り抜きが送られてくる。斎藤さんは市内は大袋地元の方で、大正十四年生まれ、八十一歳。「波瀾坂」は平成十七年十一月十五日に発行されたばかり。

戦前の劇場の様子が綴られている。

『私は小学一年生のことはほとんど覚えていないから、記憶力はあまりよくなかったかもしれないが、なぜか遊びのほうに記憶していることが多いから不思議である。殊に同じ町内にあつた東武劇場の印象は深い。』

この劇場は恐らく大正の末頃に建てられたものだろうが、外観はこんな田舎には不釣り合いなくらい洒落た洋風の二階建てだった。内部の造作は昔ながらの芝居小屋風であった。入口には下足番がいて脱いだ下駄や草履を整理して紐に通し、いの一掃とか、ろの二番などと大きく筆書きをした下足札二枚のうちの一枚は客に、もう一枚は履物に付けて奥の下駄箱に預かっておいてくれる。

観客席の三方には廊下があり、内部は薄縁(莫蔭の大判型)が敷きつめてあり、舞台に向かつて左右、中央に座席

より二十センチくらいの高さに、幅四、五十センチの木製の通路が三、四本通っていた。

さらに両側の一段高いところには木製の手摺の着いた柵席があり、左側柵席と一般座席との間に、客席の後方から正面の舞台に向かって、座っている客の頭の高さで幅二、三メートルの花道が通じていた。

舞台右袖に楽隊の席、左側に活動写真弁士の席、二階左前方の一番劇場内がよく見えるところに警官席が設置されていた。後方両側に階段があつて柵席の多い二階に通じており、便所は階下右奥、その手前が売店だった。活動写真(映画)や芝居の始まる前や幕間などに「ええ、おせんにあんぱん。ラムネはいかがですか」という売り声を続けながら、首から紐で下げた箱や箆にお菓子などを入れて売りが通路を売り歩いていった。

私の遠い記憶では、その頃この劇場では芝居よりはむしろ活動写真の上映のほうが多かったように思う。無声映画であった。上映開始を知らせるベルが鳴ると館内の明かりが消え、ピアノやパイオリンなどの楽隊の演奏が始まり、活弁士が独特の口調で挨拶を始めると、観客は一樣に声を呑んで静まり返った。観客席後ろの映写室の小窓からパツと青白く光度の強い光がスクリーンに当たり映画が始まる。弁士による映画説明の発声には一種のアクセントがあり、画面にはひっきりなしにナレーター代わりの文字が映し出されるので、観客はその文字も読まなければならず、けつこう神経を使った。

(中略)小学校一年生の頃、私は近所の子供達とよくこの

劇場へ遊びに行った。殊にその休みの日は誰もいないので、広い建物の中は子供達のよい遊び場だった。時々奈落(劇場の花道の下や舞台の床下の地下室のこと)の中央にある回り舞台の木製の傘型轆轤を回して遊んだものである。太平洋戦争終結後この劇場は火災のため借しくも焼失してしまった。ここに長さんというちんどん屋がいて、映画が替わると必ず町中を鉦太鼓で調子を取り、おどけながら回り歩いていった。その後ろを子供達がぞろぞろとついて回ったものである。』

※斎藤一男氏著「波瀾坂」より引用いたしました。

## ■ ■ ■ 長谷川昇劇団の思い出

三郷市でボランティア活動中の長谷川昇劇団が、平成十七年の四月三日に公演した「花見の仇討」の舞台写真と一座の履歴が載せてある資料を入手することができた。早速三郷市役所に電話、同市の鷹野文化センターを紹介される。センターの婦人職員が長谷川さんに連絡すること、家の電話番号を伝える。丁度十一時、長谷川昇さんの奥さんから電話、三十分近くの長電話になる。私の質問に奥さんが聞き、長谷川さんの答を私に奥さんが応える仲立ち電話。

「舞台の間口は十間、奥行きは六間か七間くらいあったと思います。回り舞台は戦後、使用できず、大きさは五間

あった。花道も下手に巾四尺で五間、七三にスッポン巾三尺、長さ五尺、下手上手の袖は二間半ずつ。楽屋は舞台裏の四尺の廊下を挟んで大部屋が一部屋、三十畳あったかしら。その楽屋の並びに経営者の助川さん住居、私共の座組は四十人から五十人、楽屋に宿泊はできず、越谷の新石町の白屋という旅館を貸し切り、化粧落としては大沢湯と御殿湯を借りたことも。戦争の終わり頃、入場料を二円にするのと税金を高く取られるので、一円九十八銭で通しました。草加の劇場と春日部の東武座にも出ましたが両方共映画館で芝居には向いていません。そこへいくと東武劇場は芝居小屋、私共役者は一番好きな小屋でした。盆と正月の興行はほとんどこの小屋でした。長谷川の常打ち小屋と他の劇団に言われていました」

東武劇場に出演する役者さんたちは、越ヶ谷の旅館「白屋（しらや）」で集団で宿をとっていた。昭和二十四、五年頃、長谷川昇劇団一座の人たちが大沢の銭湯「大沢湯」（鯉鈍屋さんの斜め前、ふくもとや青果店の裏にあった）の仕舞風呂で、化粧落としをしているのを洗い場で見たことがある。カツラをはずした浴衣姿で「大沢橋を渡ってどこへ行くのかな」と思っていた。その訳が分かった。

さらに大沢一丁目の昔からの知人、朝日屋蕎麦店主人を通して、女友達杉田さんから百歳を越えてもお元氣な元「山本屋」のお上さん桑原さんを紹介される。記憶の確かさ、ご主人を東武劇場へ送り迎えした話、歌手岡晴夫の舞

台の思い出など。昭和二十年、三十年の町並みの賑やかさ。桑原さんの部屋のこたつを囲んで昔を振り返る。

## 大沢生まれの大沢育ちの 友人MさんとSさんの思い出話

「学校から帰ると一目散に東武劇場へ。三光堂の手前の狭い路地が劇場へ行く近道でね」と話を始めたMさん。土曜日の学校は半ドン、ほとんど毎週お袋に十銭貰い、入場料が五銭、中の売店で、パンと駄菓子で五銭で昼飯替わり。無声映画のチャンバラが好きでね。弁士の説明と楽隊の伴奏もチャンバラの時は何時も同じだが、それが良くてね。ただフィルムがいい場面で良く切れたね。一本の映画が四十分か四十五分、休憩時間は十五分、明るくなると同級生が四、五人、何時も同じ顔ぶれが来ている。大沢小学校の生徒だけじゃない。越谷小学校の生徒も来ている。昼敷きの客席、舞台に近い前の方に俺達子供が集まる。客は男の年寄りと子供で、五十人前後。雨の日は母親が小さい子供を連れて遊び場替わり。階段と二階席は子供を追い回す母親の声でうるさい。男の年寄りが大きな声で注意するが二、三分で、又賑やかに。弁士がたまらず「お二階のお客様、お静かにお願います」。劇場を出て行く子供の泣き声が今でも耳に残っていますよ。昭和十一年の二・二六の頃です。

お袋にその事を言うとお前も小さいときはそうだったよ。売店でラムネを買ってやると飲んでいる内だけ。後は廊下を駆けずり回る。見たい芝居も見られない。何度木戸銭無駄にしたことかと。

劇場はまだ出来たばかりで客も多く、芝居だけだったそうです。

兵隊に行く前、越谷の二、七の市で知り合った娘と東武劇場の二階で待ち合わせる。そう言う組み合わせが何組もいましたよ。映画は堅い戦争ものだけで実際には見てはいない。小さな声で家のことや自分のことを互いに話す。今の女房がその時の娘。兵隊から帰って三ヶ月で一緒になりました。子供ができるまで二年、二人でよく映画を見に行きました。若かったね。何時も二階の同じ場所。劇場が焼けた年は何年だったかね。八月の盆の前後かなあー。

今年でもう十三回忌。ご夫婦は夏と冬に他界。東武劇場の焼失年月日、この古い友人Mさんも知らなかった。

またSさんの話はこうである。

劇場の回り舞台の下と花道の下、それに左側の便所が水浸しで使えなくなったのは昭和二十二年のカスリーン台風の後からよ。あの時、今の大沢一丁目の交差点の回りまです水浸しだったからね。その後も毎年よく台風が来たからね。新国道もまだ通っていないかったし、排水設備もよくなって、少しの雨でも水溜まり。東武劇場のあの路地も通る

のは大変だった。私は映画が好きだった。だから替わる度に見に来たけど、入場料は二十円か三十円だったと思う。いい映画だと日曜日は立ち見が出るくらい混むの。そうするとトイレが大変、一ヶ所だからねエ。それでよくモギリのおばさんに断って島田屋さんのトイレを借りに行ったの。だから私は右側の枡席で、出来るだけトイレの近くに座るのよ。内の父親が浪花節が好きで、よく聴きに來ていたわ。昼間は映画で夜は浪花節。路地の入口でチンドン屋さん呼び込み。今と違って夕方の道は買い物客で賑やかだったね。三浦さんのおばさん(私の母)に頼まれて、岡晴夫の切符を二枚。午後二時から一回目、混むといけないからと昼前の十一時に切符を買いに行ったら三十人も並んでいるのよ。十二時から売出し、買って出てみたら二列に並んで、野田街道の魚金の先まで。驚いておばさんに早く行くようにと。まだ二丁目にいた時分、女の足じゃ急いでも十分はかかる。妹さんは工場の友達と二人で、駆け足。二階の一番前の席、私がおばさんを出入り口で待ったの。モギリのおばさんがあんたも見に行きなさいと言ってくれたけど、こんな人混みは御免と帰ったわ。

入場料八十円、昭和二十四年浅草の封切館も八十円だった。東武劇場の焼けたのは市になる前の夏、さあ何年だったのか思い出せないですね。

平成十七年の春、妹の古い友人Sさん。この人も焼失年月日を知らない。



## 私の思い出

越谷在住六十年、現在(平成十九年八月)、私は八十二歳になる。

二十代の若い頃、たしか昭和二十五年の頃か、大沢町青年団の素人芝居に裏方として手伝い、その時、経営者の助川さんを紹介された。鼻下に黒々とした髭をたくわえた親切な人であった。もう一人、チンドン屋の長さん、おどけた足取りで町を行く、あとから子供達がチンドンに合わせて踊りながらついて行くのを何回か見ている。

その後、浅草松竹座でよく公演していた女剣劇の不二洋子一座が興行、その時、持ち込みの大道具の組み立てを手伝い、朝日屋さんと助川さんと食事をした記憶がある。その朝日屋は現在店仕舞い、だが表の造り、店の中、調理場は昔のまま懐かしい。一丁目界隈を一回りして、コップ酒に盛り蕎麦一枚が若い我々の定番だった。東京へ勤め始めてからは助川さんと会うこともなかった。

東武劇場の記憶に残る人はこのお二人だけで、劇場の位置は分かっていたが、大きさ、内部の詳細な様子など分からないことが多かった。

日光街道が元荒川に架かる大沢橋を渡り、百メートル余り先、大沢一丁目を右に折れて行く道が野田街道。ここ一丁目が街道の起点で、千葉の野田を通り茨城県の猿島までの街道。昭和二十一年当時、この野田街道をお年寄り猿

島道と呼んでいた。

大沢橋から一丁目の街道両側と野田街道の一角は飲食店が多く、橋向こうの越谷の町並みより夜の遅い街だった。

東武劇場があった場所は野田街道に折れた向こう側、日光街道の角から二軒目と三軒目の小料理屋の間の路地の奥にあった。道幅三メートル足らず、右側は野田街道に並ぶ商店の裏口で大和堀の目隠しが劇場の裏まで続いている。左側は小料理屋の奥に、カフェが一軒あった。そこから劇場まで七、八メートルで、五十坪前後の広場が広がる。その広場が自転車と年寄りや子供を乗せてくるリヤカーの置き場になっており、また近所の子供達の遊び場でもあった。

雨の日はこの路地三十メートルはぬかるみ。駒下駄のときはぬかるみを避けて扉際を歩いた。年寄りをリヤカーに乗せて引いてくる農家の嫁さん、モンペ姿に地下足袋、神明下から谷中村に近い方で、平方や大相模、新田からも来ている。映画の予告はチンドン屋の長さんが町の中から路地の奥まで、踊るような足さばきと口上の面白さに子供達がついて行く。歌手の岡晴夫のコンサートも大変な人気で、昼夜二回とも満員御礼。その後人気のある歌手が何人か来ている。

## 助川さんのお身内の方からの聞き書き



符売場、表に予告のウインドウがあります。

二階席は前列が一人席の棧敷で、二列目は四人席が並び、その後ろが三尺の通路、これを挟んで三列目の四人席が並びます。二階席の左右の階段昇降口の間で、開演を知らせる音楽を楽士さんが外に吹き流す。風の向きによって元荒川を越えて越谷中町の先まで聞こえたそうです。非常階段は劇場の両サイド左右に六尺幅で表の空き地に降りていきます。劇場前の空き地は観客の自転車やリヤカーの置き場で、近所の子供達の遊び場でもありました。

劇場正面、山形の屋根から二階までの額縁の中に、上り藤の家紋と東武劇場の切り文字が、元荒川を渡る下りの東武電車の中から見えました。

空き地から日光街道へ向かう九尺幅の路地の左側は、野田街道に面した商店の裏口で、大和屏で仕切られています。日光街道を前にしてお多福という小料理屋、隣が野田街道の角で、会田屋さん、その後には星山さんという人がパチンコ屋を開業します。右側は路地と空き地の角にキヨというカフェ、その先が喜楽屋という小料理屋で日光街道に面していました。路地を挟んで隣のお多福との間に、軒先より高くポスターを貼る予告板が通る人の目を惹いていました。劇場の裏方で大道具の大塚五郎さん、越谷本町の人です。広目屋（チンドン屋）の長さん、この人も本町の人で、劇場の宣伝に頑張っていました。手が空けば売店の中売りを手伝っていたそうです。映画や芝居より戦前戦中は浪花節が人気で、越谷大沢の町内の人ばかりか村方の蒲生、増林、桜井、出羽、遠くは松伏あたりからも自転車で

来ました。一階の柵席の引き戸まではずして客を入れました。大入満員です。戦後は岡晴夫、津村謙の歌手に浅草松竹座に出ていた不二洋子一座、長谷川昇劇団、松竹歌劇団も公演しています。

助川額次さんのその後は、大沢二丁目にある市の体育館で管理責任者として永く勤められました。鼻下に口髭、眼鏡の奥の優しい目。大沢の名士の一人です。

## 東武劇場再現図の完成

この聞き書きで、改めて再現図を作成しましたのが添付図面です。押入の位置、窓の高さなど細かい証言は、お身の妹さんの記憶のお陰です。

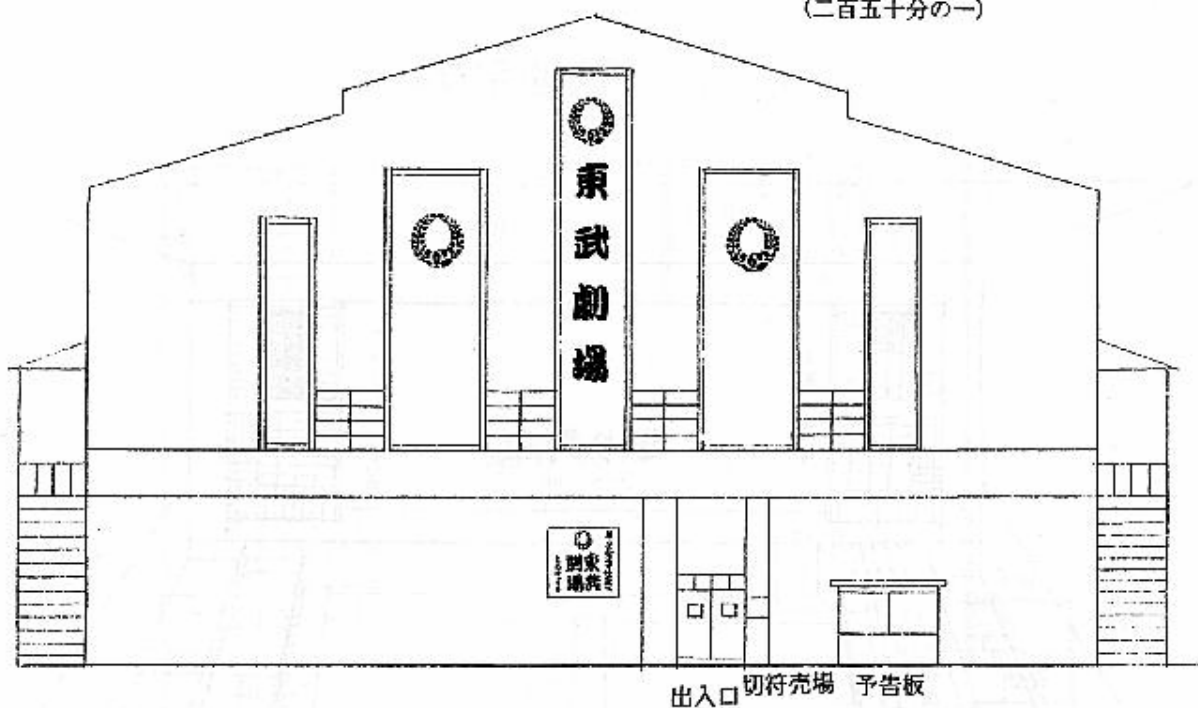
今まで私の取材に協力していただいた大沢町の皆さんにこの図面を回覧、納得していただきました。

### 添付図面

- ①「東武劇場の表側正面姿図」と「東武劇場入口路地と商店」
- ②「東武劇場舞台客席1階展開図」③「一階平面図」④「二階観客席平面図」と「舞台から見た観客席姿図」⑤「裏手内側姿図」と「舞台正面姿図」⑥「建物正面の内側姿図」と「裏手外側壁面姿図」⑦「下手観客席姿図」と「上手外側壁面姿図」⑧「上手観客席姿図」と「下手外側壁面姿図」

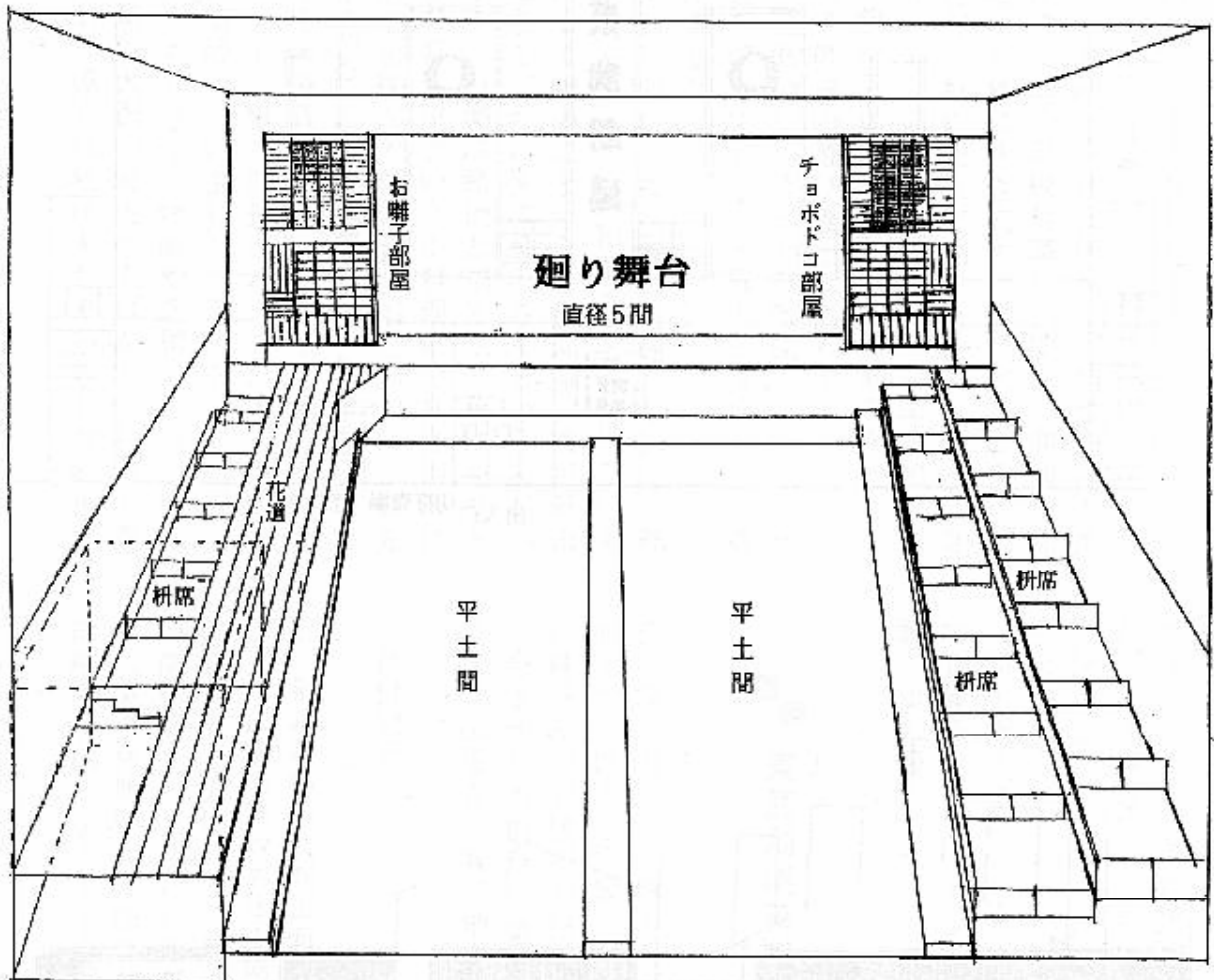
# 東武劇場の表側正面姿図

(二百五十分の一)

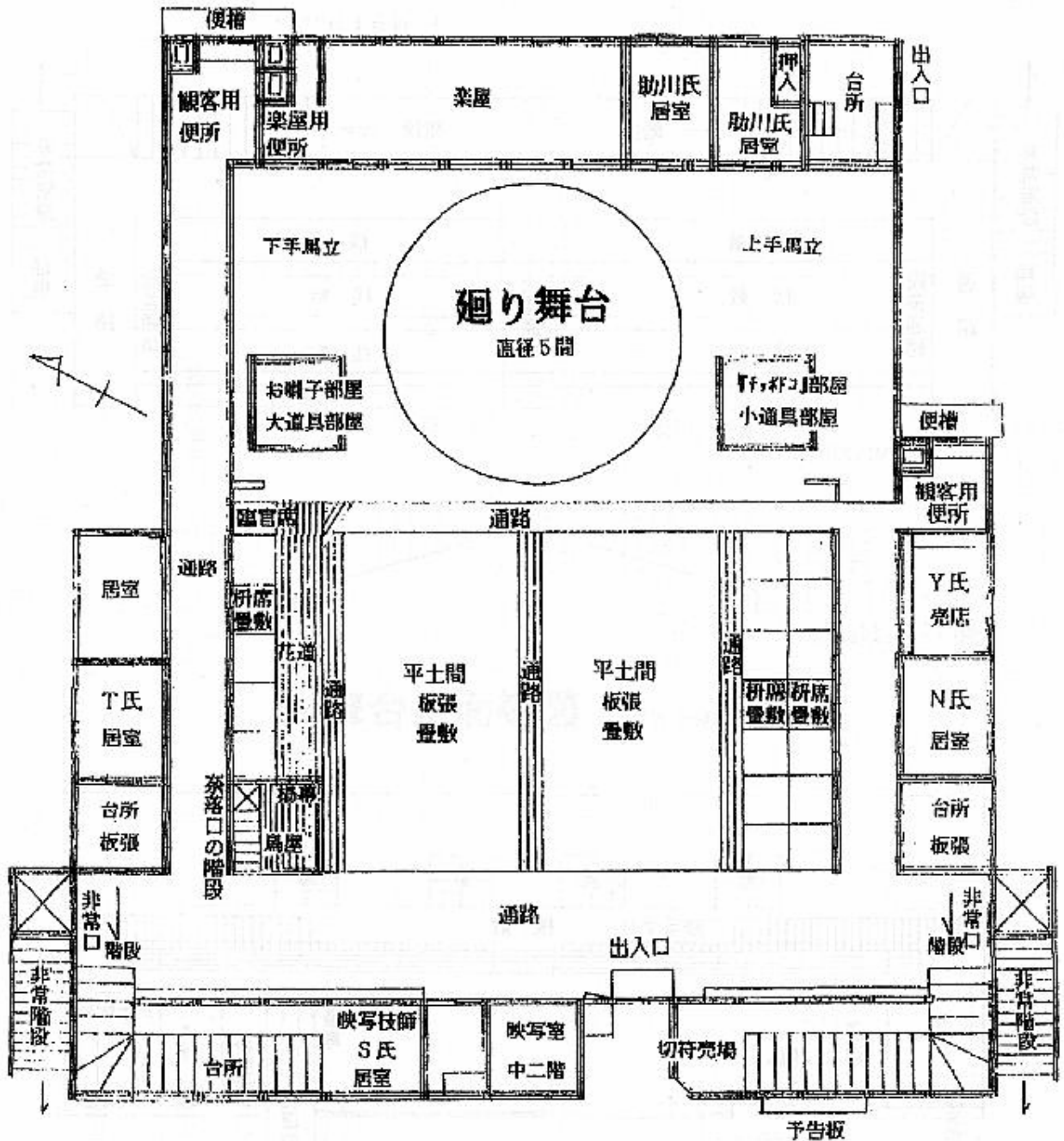


東武劇場入口路地と商店

# 東武劇場舞台客席1階展開図



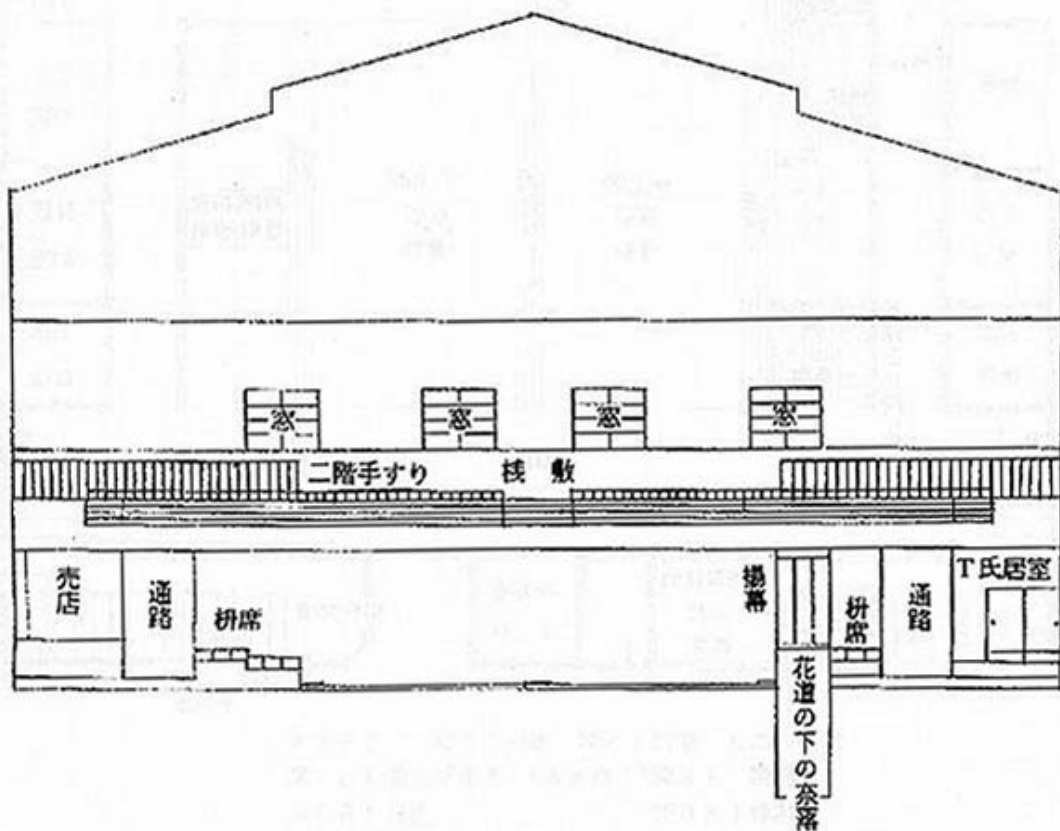
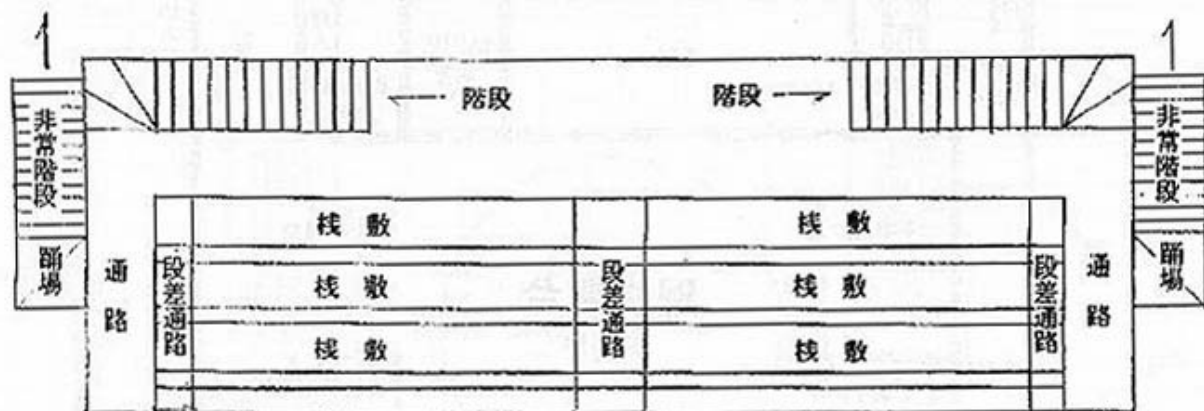
# 1階平面図 (二百五十分の一)



建物の広さ 間口15間 奥行17間 255坪  
 1階拵席 19席(1拵4人) 1階平土間304席  
 2階棧敷140席 合計463席  
 入場総客数 520名

# 二階観客席平面図

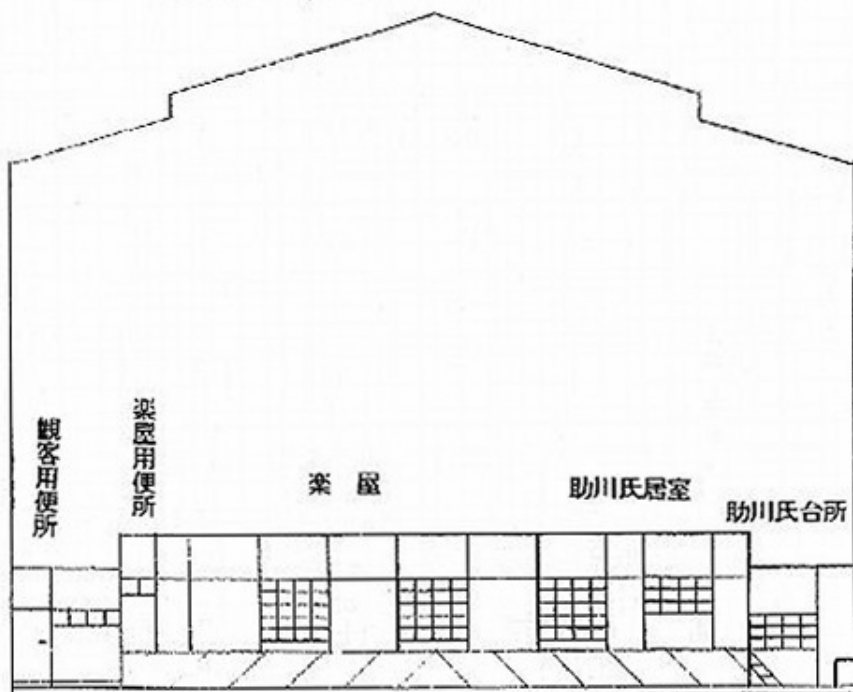
(二百五十分の一)



# 舞台から見た観客席姿図

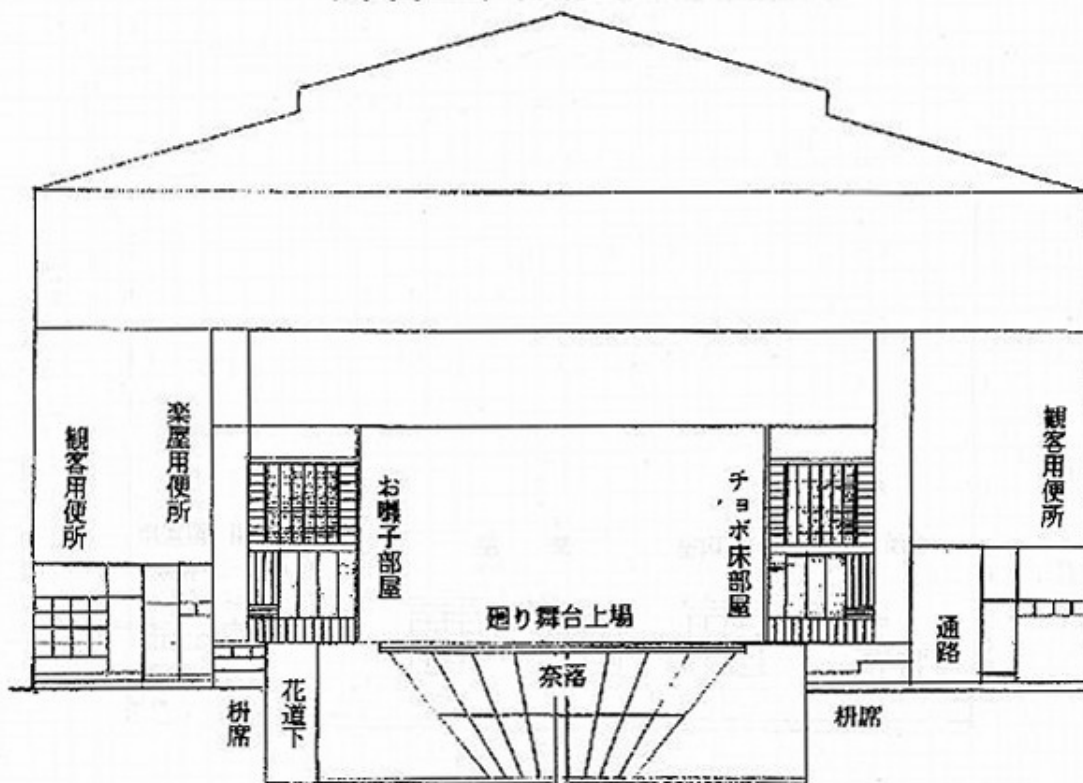
(二百五十分の一)

裏手内側姿図 (二百五十分の一)



助川氏居室への階段

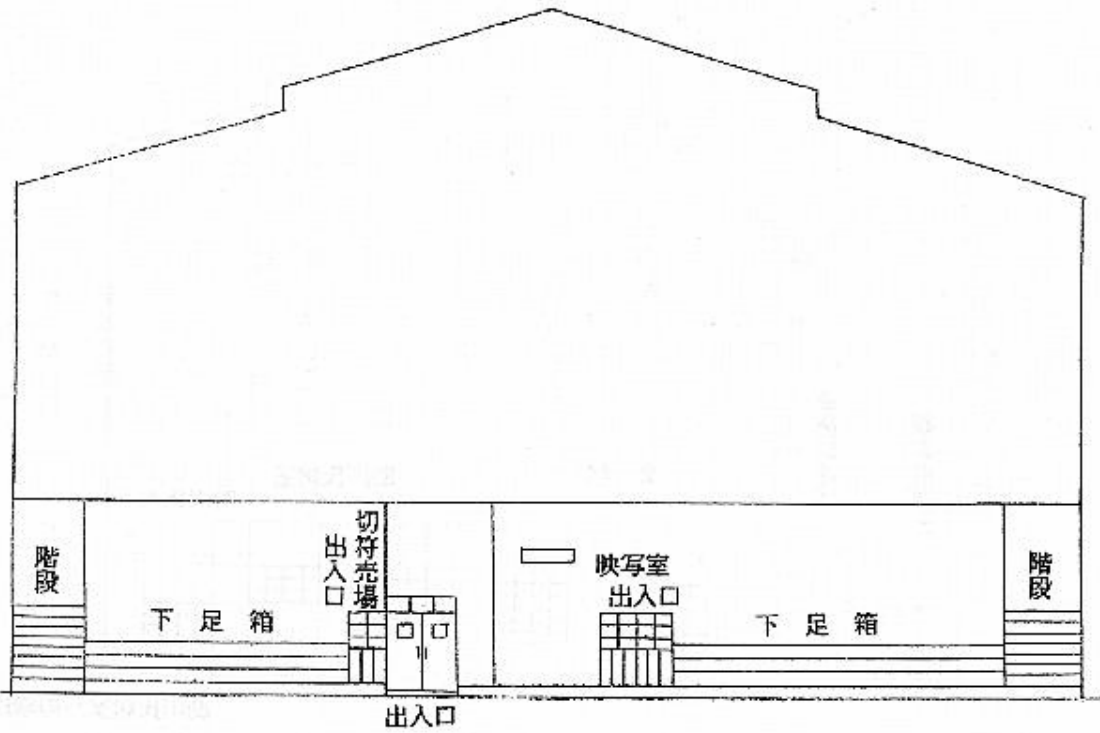
舞台正面姿図 (二百五十分の一)





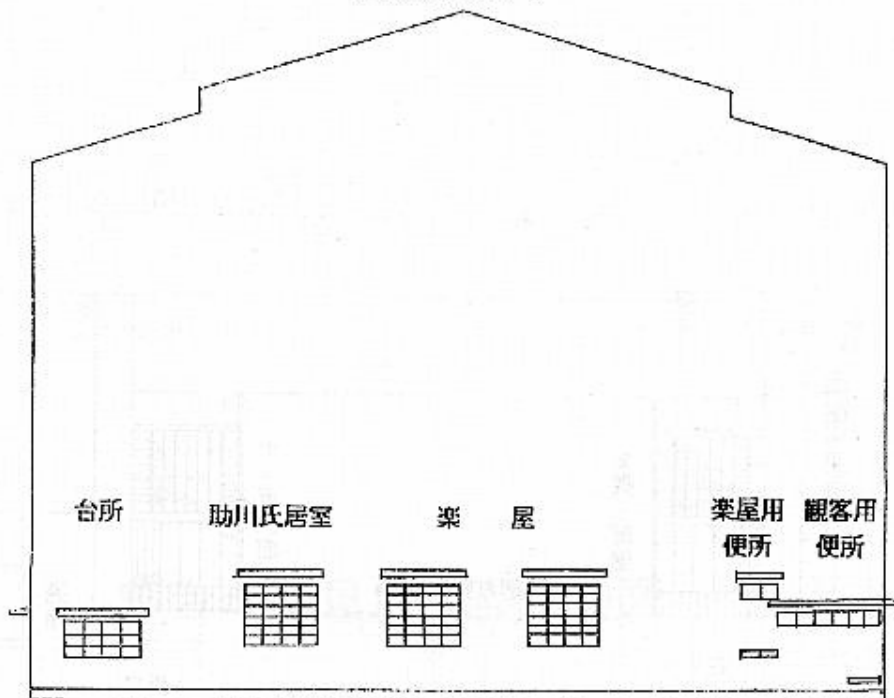
# 建物正面の内側姿図

(二百五十分の一)



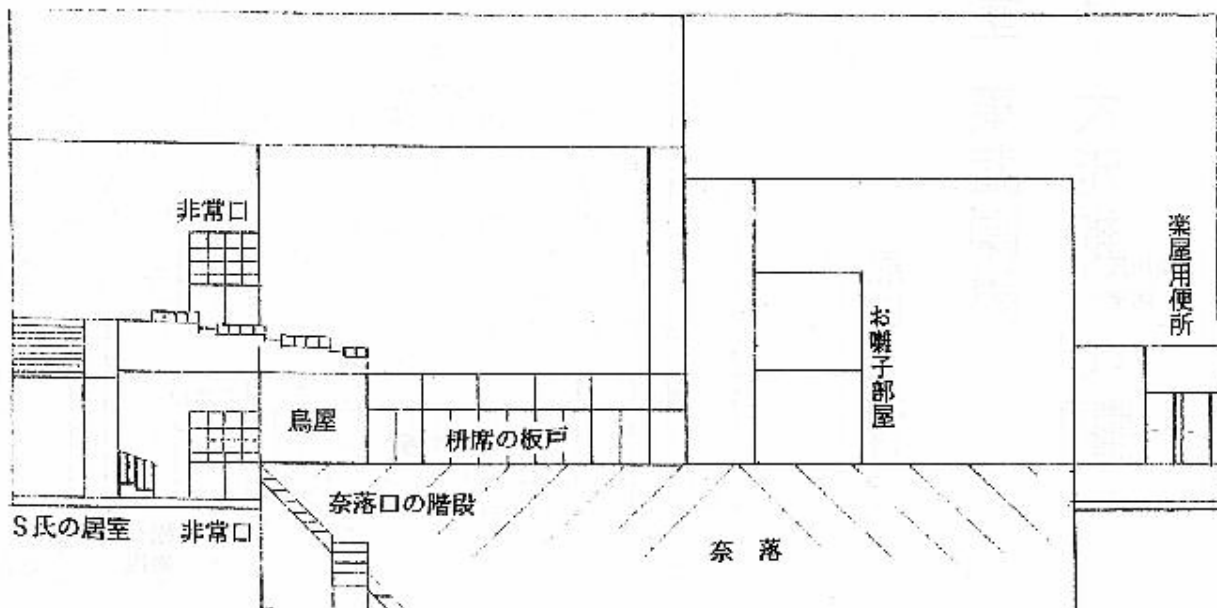
# 裏手外側壁面姿図

(二百五十分の一)



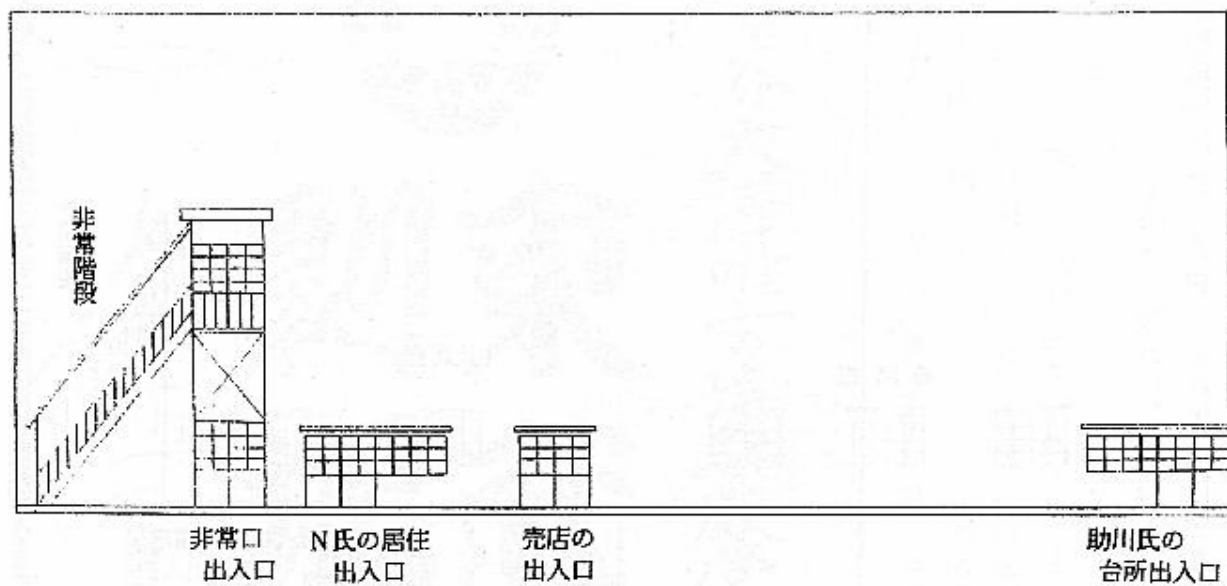
# 下手観客席姿図

(二百五十分の一)



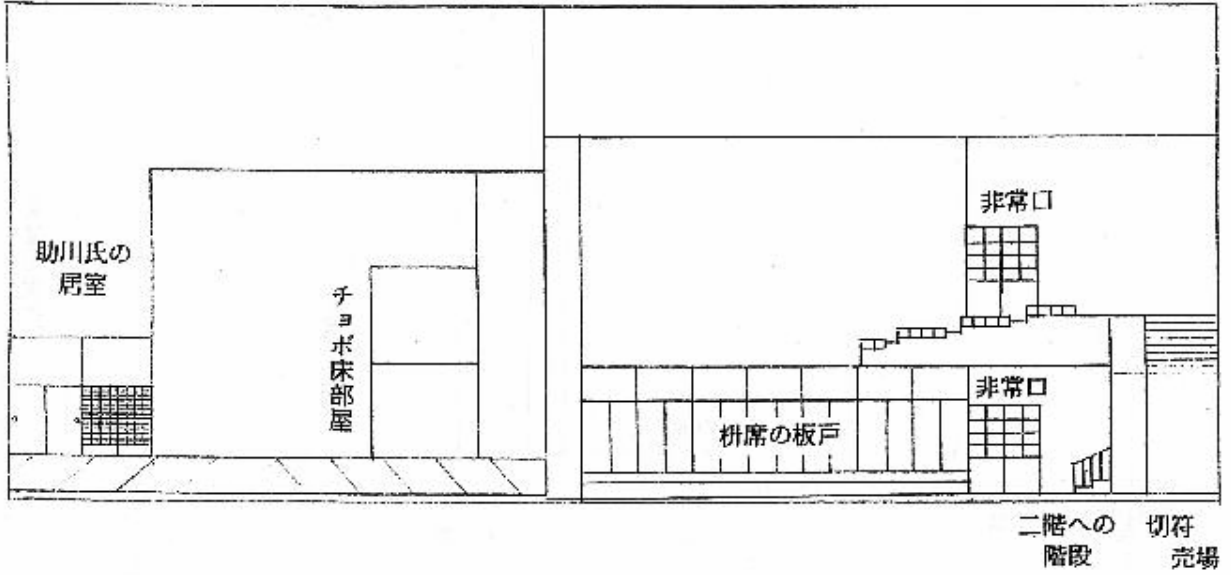
# 上手外側壁面姿図

(二百五十分の一)



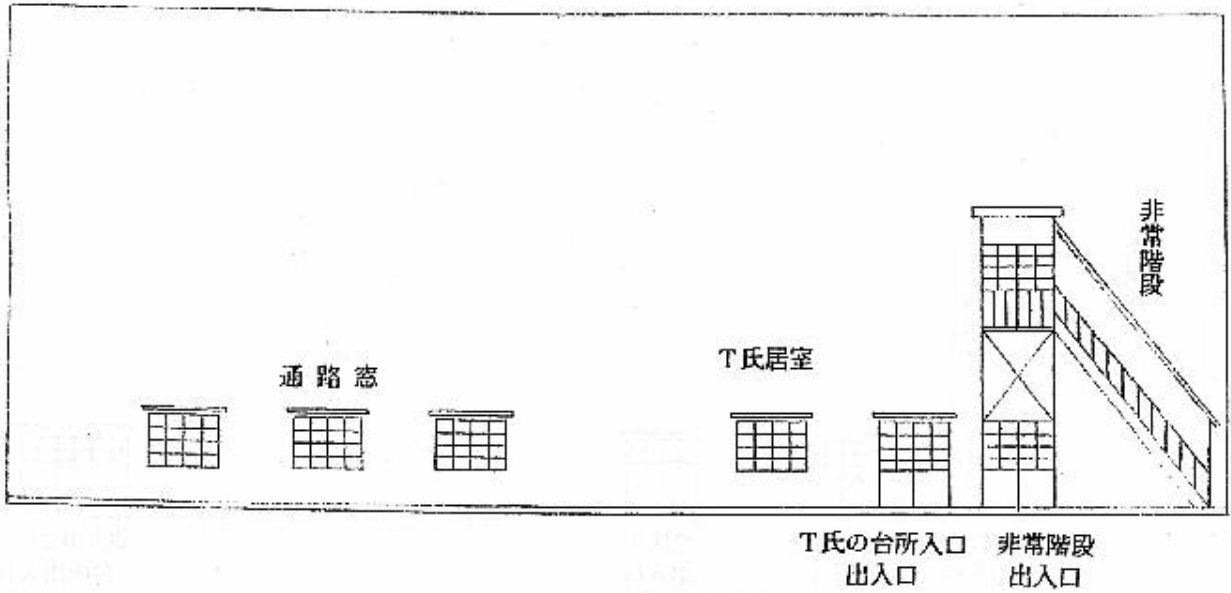
# 上手観客席姿図

(二百五十分の一)



# 下手外側壁面姿図

(二百五十分の一)



## 越ヶ谷・大沢唯一の

### 娯楽殿堂 東武劇場

原田 民自

大正十四年（一九二五）一月元旦、大沢橋先の大沢一丁目、「越ヶ谷大沢唯一の娯楽殿堂」という触れ込みで東武劇場が落成した。そして、昭和三十二年（一九五七）八月二十日の新聞によると、東武劇場は火事で焼け落ちたと報じられた。その間、三十二年、東武劇場は越ヶ谷と大沢地区の人たちにとって正に娯楽の殿堂であったようだ。

現在、東武劇場の跡地は住宅が立ち並び、場所を探すのも容易ではなく、そこに劇場があったのすら忘れ去られている。東武劇場とはどのような施設だったのか、実際に利用された方からお話をうかがい、また資料を探すことで少しでも明らかにしようと思う。

東武劇場は大沢一丁目の新旧国道にはさまれた場所にあった。当時から営業していた三光堂印刷所脇の細い道を入って行き、新国道という現在の足立越ヶ谷線の通りに出る手前の場所にあった。劇場の周囲には多くの立ち木があった。劇場の規模は二階建てで、付属建物を含めると二〇〇

坪を超える建物だった。入場できる観客の規模は越ヶ谷市史によると一〇〇〇人とあるが誤りで、それにしてもかなり大きな劇場であった。

劇場内に入ると舞台から客席を縦断するように張り出した花道があり、回り舞台があり、客席には座布団を敷いて座る広い平土間と樹席があった。そして開演時間になると、舞台関係者によって左右に幕が引かれて演劇が始まっ



日本一の梅と藤 越ヶ谷名所案内 昭和7年（1932）



東武劇場は火事で焼失した 昭和32年8月20日付 産経新聞

たという。

入口には下足番がいて履物を預かり、引き換えに下足札が渡された。劇場左右の廊下の奥にはトイレがあった。売店が右側の廊下側にあった。

時々、ちんどん屋が特別の催しの際に、劇場の前や周辺を人目を引く服装をして、平たく丸いかねや太鼓・三味線・クラリネットなどの楽器を鳴らしながら宣伝していた。劇場内にもちんどん屋がいることがあり、舞台で行われるショーを盛り上げていた。

越谷市史によると、東武劇場の株主に大沢町の荻野磯五郎という人物がいた。荻野は大沢町役場の兵事掛であったが、演芸好きで有名だったという。開業のこけら落としには、東京から歌舞伎役者を呼び、勸進帳を演じたが、通常の演劇は旅役者による草芝居式のものであった。

観客席を入ると、通路を挟んで左右に「殿方席」「婦人席」と書かれた木札が下がっていて、男女別々に座った。戦前、花道の隣には警察席のようなものがあった。そこには警官が常駐していて舞台で行われる催しを監視していたものだ。そして、時々、開演中の舞台の前に出て、何かを叫んで静止したこともあるという。

昭和七年（一九三二）には、大沢の双葉組合の芸者連が東武劇場の舞台で横六列になって扇子を持ちながら「越ヶ谷音頭 御座の松踊」を踊る姿が写真に記録された。芸者連が踊る舞台の後ろには東武劇場の「上り藤」の家紋が見られる。

この家紋「上り藤」は、劇場の正面中央にひとときわ大きく貼り付けられていて、その下に東武劇場という文字があった。入口付近には「のぞき窓」があって、その奥には「切符もぎ」をする近所のおばさんがいた。

戦争中には劇場で多くの市民を集めて防空演習が行われた。戦後、東京からSKD（浅草国際劇場で公演していた松竹歌劇団）が来たこともあった。

客席は、大正十四年の開場からしばらくして椅子席に変わった。越ヶ谷・大沢は東武鉄道で容易に浅草へ行ける立地条件であり、浅草で映画を見るのが流行したことで、東武劇場

も時代の波に勝てず、昭和十二年（一九三七）からは映画も上映するようになった。

越ヶ谷音頭師匠ノ松屋



イサコト 松の座の私と前とつと  
 松の座の私と前とつと  
 松の座の私と前とつと

イサコト イサコト

## 双葉組合 電話九五番

東武劇場の舞台上で「越ヶ谷音頭」を踊る双葉組合の若者達  
 昭和7年（1932）「越ヶ谷名所案内」より

映画の看板が劇場の周りにたくさん貼られていた。映画は二本立てで美空ひばりの子供のころの映画もここで見たこと

英画に電車及自動車の改正時間あり <b>油醫上最</b> ギカヤジフ <b>素</b> 依田三三郎 場工造屋柳		川魚 料理 仕出し <b>天芳</b> 電話越ヶ谷十七番		英画に電車及自動車の改正時間あり 千葉縣野田町 <b>鈴木醫院</b> 電話野田一〇番		越ヶ谷町御殿 代たのみやせんべ店	
所賣專谷ヶ越聞新本日				前田自轉車店 城玉越ヶ谷町		印刷劇八前場三光堂へ	
早川齒科醫院 越ヶ谷町		岩松齒科醫院 越ヶ谷町		商科一般診療科 <b>アサミ齒科醫院</b> 越ヶ谷町停車場通下		武里清酢庭 北町三丁目	
名内待發賣元 秋元酒店 城玉越ヶ谷町		正宗 北町三丁目		北町三丁目 中山利右門		北町三丁目 中山利右門	

印刷八劇場前之三光堂へ 昭和6年（1931） 76年前の広告

がある。劇場内の売店でお菓子や飴などが売られていた。戦後、劇場から少し離れた大沢小学校では、郊外活動の一環として、先生に連れられた生徒たちが学校から列をなして歩いて映画を見に来ていた。

火事で焼け落ちる少し前の昭和二十年後半になると、娯楽映画とともに成人映画も上映されていたそうだが、

昭和三十二年の火災後、再建されることなく跡地は三十八年ごろまでは基礎のコンクリートがむき出しになっていた、子供たちの恰好の遊び場となっていた。

大沢橋先の大沢一丁目にあった東武劇場とは、このような施設であった。

## 日光道中ぶらぶら歩き

— 日本橋から伝馬町まで —

和泉 守

江戸開府四〇〇年が喧伝された四年前、熟しやうしい私は、日光街道を歩いてみようと思ひ立つた。当時、街道沿いの越谷に住んですでに四半世紀、五街道の中では一番なじみがあったからである。今の世の中、車で走るのが普通かもしれないが、あいにく運転免許も持たず、車とは無縁。ただし、歩くことには抵抗がない。

前年、午歳総開帳の秩父札所めぐりをしたときも、すべて徒歩でつないだ。しかし札所めぐりは、ひたすら先を急ぎすぎたきらいがあるので、今度はのんびり歩くことにしたが、ゆっくりしすぎて、まだ歩き終わっていない。そこで、今回はもう一度最初から、歩き直すことにした。

歩くについては二つ原則をたてた。一つは今の日光街道ではなく、江戸時代の日光街道を歩くこと。もう一つは、ただ道なりに歩くのではなく、自分の興味の赴くところ、勝手気ままに寄り道をするこゝである。「日光道中

ぶらぶら歩き」と題した所以です。

全長一四〇kmのこの道中を、昔の人々はおおむね三泊四日で歩いたというが、一日三十五kmという速さ。それに比べると私の旅は何日かかるものやら、自分でも見当がつかない。今回は伝馬町までしか歩けませんでしたが、気ままな道中歩きにお付き合いいただければ、嬉しい限りです。

### 日本橋にて その一

日本橋が架けられたのは、家康が征夷大將軍になった慶長八年（一六〇三）、江戸入府から十三年後のことである。翌慶長九年、この橋は五街道の基点と定められた。そして現在も国道一号（東海道）、四号（日光街道）、六号（水戸街道）、十四号（京葉道路）、十五号（第一京浜）、十七号（中山道）、二十号（甲州街道）の基点となっている。

橋の中央部には、五十cm角の砲金製のプレート「日本国道路元標」が埋め込まれているが、車がひっきりなしに行きかうので、歩道から眺めるしかない。私は以前、信号待ちでその真横に止まったバスの窓から、運よく見下ろすことができた。ただし橋の北詰西側の「元標の広場」には、レプリカが展示されているので、バスから現物を見て嬉しがることもない。

「広場」には10m以上ある「東京市道路元標」が立っている。明治四十四年（一九一三）、ルネッサンス様式の現在の橋に架け替えられた時、路面電車の架線ポールを兼ねて、橋の中央に建てられたものである。昭和四十七年（一九七二）都電の廃止に伴い、現在のプレート「日本国道路元標」に代わった。「広場」にはほかに御影石の「里程標」が二つあり、それぞれ七都市までの里程を示している。北の都市では宇都宮市が一〇七軒、札幌市一一五六軒、南では京都市五〇三軒、鹿児島市一四六九軒となっている。

幕末、文久三年（一八六三）の江戸切絵図（尾張屋板）には「此橋上ヨリ御城并富士山見エテ絶景ナリ」とわざわざ橋の脇に注が入っている。風景画家歌川広重の晩年の作「名所江戸百景」は、その御城と富士山を望む雪景色の日本橋を描いた「日本橋雪晴」で始まっている。日本橋は江戸見物には欠かせない名所であった。

日本橋が正真正銘の橋であるのは、その下を日本橋川が流れていることから明らかである。今、日本橋川の川面はほとんど陽の目を見ず、川には不釣り合いな丸くて大きなコンクリート柱が、によきによきと立ち並んでいる。オリンピック開催決定後、「空中作戦」と称して急ピッチに進められた高速道路建設が、昭和三十九年（一九六四）に完成し、すっぱりと橋と川を覆ってしまったからである。東京オリンピックのあったこの年、東海道新幹線も

開通。オリンピックを境に東京は大きく変貌した。

東京生まれの二人の作家の言葉を借りよう。池波正太郎は「何しろ、東京の中心である日本橋の上へ高速道路で蓋をしてしまう世の中なのだ、高速道路を造るのに反対なのではない。いかになんでも、これはひどすぎる。この口惜しさは、いくら書いても書き足りないのだ。」と言っている。杉本苑子は「江戸の歴史にも、東京の人々の心情にも、なんら理解のない地方出身の公団関係者が、たんに工学上の理由から、なさけ容赦もなく図引きした傲慢の象徴といえるだろう。」とその怒りをぶつけている。

昨年九月、奥田元経団連会長を含む四人のメンバーからなる「日本橋川に空を取り戻す会」は、前年十二月の小泉首相の引退間際の指示に対して、高速道路の撤去・移設を含めた「日本橋プロジェクト」の提言をした。移設には高架化と地下化があるが、その費用は概算五、〇〇〇億円は要するという。効果は費用の数倍あると試算しているが、石原東京都知事は反対と。あるアンケート調査では、三分の二が移設に賛成というが、実現するとしても、十年、二十年も先のことであろう。

東京で多くの堀や川が姿を消したのは、ほとんどこの六十年くらいのことである。敗戦後、戦災跡地の焼けた建物・コンクリート片や土砂などを早急に処分するよう占領軍から命じられた東京都は、手っ取り早くその残土



を埋め立てに使った。その一環で、かつて東京駅前（八重洲側）にあった江戸城外堀と、その堀にかかっていた呉服橋・鍛冶橋・有楽橋・教寄屋橋が消えた。今はただ「外堀通り」とそれぞれの交差点にその名を残すだけである。

それに追い討ちをかけるように、オリンピックのため的高速道路建設で、また多くの川が消えた。川がなくなれば橋も無用になる。消えた橋や川のことを思えば、日本橋は川が残されただけ幸せと  
いうべきかもしれない。堀や川は新しい流通手段に道を譲って、その役目を終わったかのようにある。

日本橋の北詰の東側一帯はかつて魚河岸であり、江戸開府の頃から日夜賑わった。摂津国佃村の名主、森孫



船から見る日本橋と高速道路

右衛門が御着御用を務めよとの内命を受け、一族七人と漁民三十数人を連れて江戸に来た。將軍家御用の白魚を獲って納め、残りの魚を売りさばく市場をここに開いたことに始まる。大正十二年（一九二三）の関東大震災で焼失するまで、三〇〇年以上続いたが、震災後築地に移転した。

彼ら漁民は拝領した干潟を埋め立て、正保元年（一六四四）、新しい島が誕生、彼らはそこを佃島と名づけた。木下柰太郎の詩「築地の渡し」（明治四十三年——一九一〇）には「房州通いか、伊豆ゆきか。／笛が聞こえる、あの笛が／渡わたれば佃島。／メトロポオルの燈が見える。」とうたわれ、隅田川で最後まで残っていた佃の渡しも、佃大橋の完成によって姿を消した。これも昭和三十九年のことである。

橋の北詰めには、乙姫像の「日本橋魚河岸記念碑」が建てられ、像の下の銅板には、魚河岸の歴史を述べた久保田万太郎の撰文と次の句が刻まれている。

東京に江戸のままとのしぐれかな

## 通り町にて

日本橋から真っ直ぐ南に伸びる通りは、昔の東海道で

ある。「通り町」(とおちちょう)という、幅が十間もある「大通り」が、京橋・銀座・新橋を通り、浜松町はずれの金杉橋まで一里半以上も続いていた。今は国道十五号(第一京浜)で「中央通り」という。何故か国道一号(東海道)は十五号・二十号(甲州街道)と一緒に南下するが、二〇〇m足らずで永代通りに達すると、二十号を引き連れて右手(西)に曲がってしまう。

高島屋を左に見ながら中央通りを四・五分も歩けば、八重洲通りに達し、左手にブリジストン美術館、右を見れば東京駅が見える。この美術館の斜め裏手、現在の京橋一丁目は、江戸時代大鋸町(おがちちょう)と称したが、その狩野新道に町絵師歌川広重が嘉永二年(一八四九)から亡くなるまでの十年間を暮らしていた。切絵図には、御用絵師「狩野永徳」の屋敷の隣に、「画廣重」と明示されている。切絵図に町絵師が載せられるのは異例のこと、その人気の高さを証明するものという。広重の風景画集「繪本江戸土産」は江戸観光のみやげ物として、切絵図とともに人気を集めていた。

広重が家の前の通りを西に歩き、「通り町」を横切って真っ直ぐ行くと、三・四分で御堀(外堀)に行き当たる。右手五町先には呉服橋が見え、左手二町半先には鍛冶橋がかかっていた。広重にとって鍛冶橋近辺は、懐かしい故郷そのものであった。鍛冶橋御門を入り六町先の馬場先御門の手前右手に、広重が生まれ育った定火消屋敷が

あったからである。懐かしさで足がつい鍛冶橋に向かう時、剣術稽古の元気な声と音が、亡くなる五年ほど前から、広重の耳に届いたはずである。

新材木町から移ってきた千葉周作の弟定吉の小千葉道場が、鍛冶橋のすぐそばにあった。坂本龍馬は剣術修行のため、嘉永六年(一八五三)四月江戸に到着、この道場に入門した。時に十九歳。同年六月、ペリー提督率いるアメリカ艦隊が浦賀沖に来航。江戸詰め藩士とともに龍馬も三ヶ月間品川に召集された。翌安政元年(一八五四)六月帰国。このとき龍馬がどこに宿泊したかは分かっていない。鍛冶橋御門を入ったすぐ左手、今の東京国際フォーラムのあたりに七三〇〇坪の土佐藩邸があったが、ここは上屋敷である。郷土坂本龍馬は恐らくここではなく、二度目と同じく築地の下屋敷に泊まったと推定されている。

安政三年(一八五六)九月、龍馬は再度剣術修行のため江戸に来て、二年後の安政五年九月に帰国した。安政の大獄が始まった時である。広重が「名所江戸百景」の最初の五景の刊行を始めたのは安政三年二月、二年後の安政五年に完成させた後、九月コレラにかかって急逝。享年六十二。龍馬の二度目の遊学の時期と広重の「名所江戸百景」制作の時期はほとんど重なりあっている。

龍馬が再度江戸に来た時、「築地屋敷」を宿所としたこ

とは、彼の手紙で明らかになっている。そこは今の築地一丁目、中央区役所がある一画に、六五〇〇坪の土佐藩下屋敷があった。ここから道場に通うには屋敷を囲む堀（後の築地川）を渡り、さらに三十間堀の真福寺橋を渡り、すぐに今度は京橋川の白魚橋を渡った後、楓川（もみじがわ）沿いに行くか、あるいは上流の京橋をわたって、「通り町」を歩く手もある。どの道をとろうと十二町ほどだから十五分もあればいい。

龍馬が渡った堀や川は埋め立てられて今はなく、その橋もない。川端を歩いたと思われる楓川は、弾正橋をはじめ江戸橋まで今も橋は残されている。しかし、橋の上から見下ろせば、流れているのは水ではなくて、車ばかりである。いまや、楓川は首都高速都心環状線に変貌し、日本橋につながっている。真福寺橋・白魚橋・弾正橋は三十間堀・京橋川・楓川が交差する場所にあったので、三つ橋と俗称された。この三つの川には、八丁堀もつながっていた。今の首都高速の東銀座出口あたりである。

しかし龍馬は神田お玉が池の千葉周作の道場にも通っていたようである。それには楓川をそのまま北上し、日本橋川に出て、日本橋の東隣の江戸橋を渡るのが一番早い。今、この道は「江戸・もみじ川通り」と名づけられている。道場から道場へ行く場合には、日本橋や一石橋を渡ったであろう。いずれにしろ下町の繁華街一帯を歩いていたことになる。

広重もまた「名所江戸百景」百十九景のうちの三十九景をこの下町や御堀のそばで描いている。絵師広重がスケッチしている姿を、龍馬が見かけたことはなかつたろうか。二人が御堀端か「通り町」あるいは楓川端のどこかで、すれ違ったことはなかったろうか。江戸切絵図を見ながら、そんな想像をするのは楽しいものである。

俳人長谷部さかな氏は四年前、まだ誰も挑戦したことがない「回文いろは歌留多」を出版された。回文とは「夕ケヤブヤケタ」のように上から読んでも下からよんでも同じになる文をいうが、「こ」は次の句である。

恋喧嘩竹刀でいなし寒稽古

（こいけんかしなしいなしかんけいこ）



新場橋から見る元楓川

見事な回文俳句であるが、作者自身の解説によれば「この句は坂本龍馬のイメージでつく」られ、恋喧嘩の相手は小千葉道場主千葉定吉の長女佐那である。「なみの男より強くても龍馬には軽くあしらわれてしまった」と。作者が勤めていた水産会社はかつて、築地一丁目の中央区役所のある一画、龍馬が泊まった「築地屋敷」の跡地にあったが、これも何かの縁であろう。

## 日本橋にて その二

日本橋に戻る。日光は北である。幅十間の「通り町」は北にも伸び、今の神田の万世橋あたりの神田川まで続いていた。国道四・六・十四・十七号は仲良く揃って「中央通り」を進む。私は東側の歩道を行くが、一〇〇mほど歩いてちよつと寄り道する。このあたりでは珍しい瓦屋根の二階建ての店「かつおぶしの大和屋」の手前を右に折れる。昨年暮れ、石畳に装いを変えた「むろまち小路」が昭和通りまで続いているが、一〇〇mほど行くと左手に「鮓佐」という佃煮屋がある。日本橋室町一丁目、この店先に七・八年前、きれいな青石の句碑が建った。

発句也松尾桃青宿の春 桃青

寛文十二年（一六七二）芭蕉は二十九歳の時に江戸に下ってきた。魚河岸の前の大舟町の名主で、幕府御用の

魚問屋である小沢卜石の家に世話になった。京都の国学者・俳人の北村季吟門下同士のよしみという。小沢家の公務の日記をつけていたとも、同年京都から来た俳友高野幽山の執筆を勤めていたともいう。その頃のヘアースタイルは撫で付け髪。

延宝五年（一六七七）頃からか、芭蕉は大舟町の隣り、句碑が立つ小田原町の小沢家の借家に住んでいた。深川の生け簀の番小屋を提供したという終生のパトロン杉山杉風も「鯉屋」という御用魚問屋の長男であり、同じ小田原町に住んでいた。このあたり一帯はいわば魚商人の町であり、魚仲買・魚問屋の店が散在していた。

芭蕉は日夜魚市で賑わうこの商店街の喧騒の中で暮らし、延宝六年（一六七八）松尾桃青宗匠として独立した。俳諧点者として生きていくには格好の場所であった。句碑のそばの説明パネルは「その翌年正月、宗匠としての迎春の心意気を高らかに読み上げたのがこの碑の句である」という。蕉門十哲の一人榎本其角は東に歩いて五分の堀江町にいた。同じく服部嵐雪もおそらく近くにいたのではなからうか。

宗匠として独立した年には、俳諧撰集「江戸通り町」「江戸新道」「江戸広小路」を出版し注目を集めた。日本橋界限の讃歌であるという「江戸通り町」の発句は次のとおり。

実や月間口千金の通り町（げにやつき・）桃青

高橋庄次は「芭蕉伝記新考」の中で、『間口千金の通り町』であるから、その通り町を目の前にした小田原町の桃青の家も、ずいぶん高い家賃であったに違いない。」と推測する。

この頃芭蕉は小沢卜石の世話で、延宝五年か

ら八年までの足掛け四年間、神田上水道の仕事にも携わっていた。通説は経済的理由であるが、さらに一步踏み込んだ「妻子を養うため」という高橋庄次説が近頃注目されているという。一方、田中善信は「芭蕉——一つの顔」で、神田上水道の仕事は浚渫工事の請負人で、数百人の人足を動かす必要があり、「人並み以上の処世の才に恵まれていた」芭蕉は、少なくとも延宝年間は「羽振りがよかった」という。



日本橋樹佐前の句碑

延宝八年（一六八〇）の冬、江戸に来てから九年後、芭蕉は本業には絶好の土地を離れ、また副業もやめて、深川村の草庵に移り住んだ。「点取りに狂奔する俳壇大衆とその点料で生活する点者間の生存競争、点を掛けること自体への懷疑」に加え、荘子思想への共鳴があり、「俳諧そのものに徹すべく」隠棲したと、芭蕉伝記研究の第一人者という今榮蔵は言うが、これが通説らしい。真に後の俳聖にふさわしい理由といえる。

しかし、芭蕉の妾であった寿貞と甥の桃印の密通が原因とする田中説や、あるいは妾ではない妻の寿貞の病気が進み、これ以上の夫婦生活には耐え切れないと自らは出家し、尼となった妻と子供を残して移住したという高橋説に接すると、人間芭蕉に触れた思いがして、俗人の私は親しみを覚えるのである。

日光道中に戻る。「大通り」の西側に三越がある。伊勢松坂の商人三井高利は、天和三年（一六八三）から元禄元年（一六八八）頃、近くの木町からここ駿河町に越後屋呉服店を移し、「現銀掛値なし」の正札販売商法が評判を呼んだ。両替店も開いて御為替御用達にもなった。

広重の「する賀てふ」と題する「名所江戸百景」の一つにも、大きな富士山を背景とし、駿河町の通りの両側に展開する越後屋が描かれている。日本橋の南北の町屋はできるだけ御城と富士山が望めるように計画されたが、

特にこの駿河町の通りからは、真正面に富士山が見えるように配慮されたという。駿河町と名づけられたのも故あつてのことらしい。

今でも旧駿河町の両側を占めるのは、北側に両替店が発展した三井住友銀行、南側は呉服店が成長した三越百貨店である。しかし、通りの向こうに見えるのは、またもやあの首都高速道路と背の高いビル群だけである。この「大通り」にしても、三井本館の北隣りに地上三八階、一九二mという日本橋三井タワーが二年前に建ち、その景観も変わった。時代の流れは止めようがない。

東側を二〇〇mほど歩いて、室町二丁目と三丁目の境、二丁目の角は以前はUFJ銀行だったが、この夏歩いたときは更地、三丁目の角のETS室町ビルを右に曲がれば、いよいよ旧日光街道である。でもあと一〇〇m真っ直ぐ進んで「江戸通り」を渡り、江戸最初の「時の鐘」の鐘楼跡に寄ってみることにする。日本橋から五〇〇m、「中央通り」が「江戸通り」にぶつかると、国道四・六・十四号は東に曲がって「江戸通り」を進み、十七号（中山道）だけが真っ直ぐ新潟市を目指す。

## 石町にて

「江戸通り」を横切つてすぐの「みなと銀行」の脇に、明治四年（一八七一）まで江戸で最初の「時の鐘」があつた。家康のころは江戸城内で明け六つと暮れ六つに鐘をついていたが、やかましいので、秀忠のころに太鼓に代えた。ところが今度は遠くまで聞こえない。不便だと言ふ声があがり、家光の代になつて、本石町に鐘撞堂が建てられた。本石町が正しいのだが、一般には省略して単に石町（こくちよう）といった。

江戸時代の時刻の取り方は、現在の定時法と違い不定時法である。日の出と日の入りを境として、昼と夜をそれぞれ六等分した。春分と秋分のときは昼夜同じ長さだから、一刻（いっとき）は今と同じ二時間となる。しかし、それ以外は昼と夜の時間が違うので、夏は昼の一刻は長く、夜は短かった。冬はその逆である。定時法になれた我々には、少々分かりにくいが、自然のリズムには合つていともいえる。分秒に気を使う現代とはかなり違うが、江戸の住民もまた「時の鐘」によって時刻を意識させられていた。

一刻を十二支を用いて表現する場合と数字を用いる場合があるが、「時の鐘」はもちろん後者である。昼の真ん中と夜の真ん中を九つとし、一刻おきに八つ、七つ、六つ、五つ、四つときてまた九つに返る。夜明けは「明け六つ」、日暮れ時は「暮れ六つ」になる。「お江戸日本橋七つ立ち」午前四時ころの出発とは流石に早い。時の鐘

は、捨て鐘を三打して注意を喚起してから、九打から四打までつかれたという。昼夜を問わず一日十二回となる。大阪では捨て鐘は一打であつたらしいが、余分なことはしない実利精神であろうか。

本石町の鐘撞役である辻源七は、はじめは江戸城内で仕事をしていたが、寛永三年（一六二六）この地に土地を拝領して鐘樓を建て、業務を開始したという。一軒につき一ヶ月四文ずつの鐘撞銭を徴収し、その範囲は四〇〇町歩に及んでいた。この仕事は世襲であつたが、およそ一〇〇年後の元文三年（一七三三）の記録では、年間収入は九〇両、必要経費は四十一両だつたと。必要経費とは、鐘撞人五人の給金（十七兩二分）に撞木代、時計磨料、常香それに米、味噌、油と薪と炭代を含んでいる。經常利益なのか純利益に相当するのかよく分からないが、年間四十九兩の儲けとは、結構高収益のようではある。

では「時の鐘」の撞き役はどうやって時刻を知つたのだろうか。それは時計である。「大名時計」「和時計」と称される時計も、西洋から入ってきた時計をこの不定時法に合わせて、改良したものという。上記の経費の中に「時計磨料」とあるのは「石町時の鐘」が専用の時計を所有していたことを示している。また「常香」とは香盤時計に用いられる香のことと思われ、和時計と呼ばれる機械時計と共に、香盤時計を併用して時計の正確さを期していたことがわかる。

上記の記録が残る前年の元文二年（一七三二）、かつて榎本其角や服部嵐雪に学んだ早野巴人（宋阿）が、十年ぶりに京都から江戸に戻つてきて、この鐘樓のふもとに居を定めて「夜半亭」と称した。それは、唐の詩人張継の「楓橋夜泊」にある一節「夜半ノ鐘声、客船ニ至ル」に依つたものという。

与謝蕪村はこの巴人宋阿に出会い、同元文二年この夜半亭にころがりこんで内弟子となつた。宋阿六十一歳、蕪村二十二歳。蕪村が江戸に来たのは通説では二十歳前後。高橋庄次説では十七歳、浄土宗の僧西鳥として恐らくは芝増上寺あたりでいたのではないかと推定している。翌年の「夜半亭歳旦帳」に載る蕪村の句は次の通り。當時は宰町と号していた。



十思公園の時の鐘

君が代や二三度したる年忘れ 幸町

何度も忘年会ができる幸せも、そう長くは続かなかつた。五年後に宋阿が亡くなったからである。蕪村の十年にわたる関東・奥羽の遍歴の旅が始まるのはそれからである。

「中央通り」を引き返し、室町二丁目と三丁目の間を東に折れて日光道中に入る。昼休み時には、サラリーマン相手の弁当屋が目立つビル街を二五〇mほど進むと、「昭和通り」と首都高速一号线にぶつかって真つ直ぐ進めない。道中も昔日の栄光を失い、ただの横道にすぎない。昭和通りに沿って北に二二〇m、「江戸通り」との交差点まで迂回する。江戸通りを進んで来た国道四号（日光街道）はここで左に曲がって昭和通りに合流する。迂回して日光道中に戻ると、一六五三（承応二年）この大伝馬町で創業という紙商「小津和紙」の瀟洒なビルが左角にあり、植込みにはみつまた・がんび・こうぞが植えられている。

二〇〇mほど歩くと、ホテルギンモンド。このホテルの植込みの隅には「旧日光街道本通り」という茶色の石柱が建ち、「將軍御成道として繁華な本街道であり、木綿問屋が軒を連ね殷賑を極めた」と彫られている。御成道とは浅草寺への御成りを意味するのだろうか。筋向いには「江戸屋」という刷毛ブラシ屋、手前角にはドトールコーヒー。さらに二〇〇mで「水天宮通り」（人形町通り）へ出る。道中は真つ直ぐだが、また寄り道して北に歩く。

江戸通りとの交差点を渡った左手に、明治八年（一八七五）開創の大安楽寺とその前にこじんまりとした十思公園がある。昼休みには近所のサラリーマンのささやかな休憩所となっているが、かつての「石町の鐘」（宝永八年（一七一七）に改鋳されたもの）が、コンクリート製鐘楼の二階で長い休みについている。みなと銀行脇の元の鐘楼は、お寺と公園の間の道（昔は「鐘撞新道」、今は「時の鐘通り」）を西に行くこと五〇〇m先。

この交差点の地下は地下鉄日比谷線の小伝馬町駅だが、この駅から五分くらい日本の日本橋富沢町に、入社以来五度目の事務所があった。もう二十年近く前のことだろうか。しかし、二年ほどいた間に、この十思公園に来て「時の鐘」を見た記憶がない。

### 伝馬町にて

江戸時代の初めから、この十思公園の一带は二七〇〇坪の伝馬町牢屋敷があり、周囲を堀と練堀で囲まれていた。明治八年（一八七五）に市ヶ谷監獄ができるまで二百五十年以上存続した。今、お寺の前には朱入れの文字も生々しい「江戸伝馬町処刑場跡」の石柱が立つ。



公園の中の植込みには「吉田松陰先生終焉の地」という石碑があり、別の大石には松蔭が受刑の前に書き残した『留魂録』冒頭の辞世が刻まれている。

身ハたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも留置まし大和魂

安政六年（一八五九）六月下旬、唐丸籠に乗せられた松蔭は萩から江戸の長州藩桜田藩邸に到着。翌月九日評定所に出頭を命じられて、取調べを受けた後、即日この小伝馬牢獄に送られた。五年前に下田から密航を図ったときにも、北町奉行所で取調べの後、ここに六ヶ月間留置されているので二度目である。

これらの藩邸や役所がどこにあったのか、愛用の『復元江戸情報地図』（朝日新聞社）で探してみた。この地図は、安政三年の屋敷台帳をはじめとする幕府の公文書や史料を基本資料とし、切絵図などを参考にして作成されたもので、信頼性は高い。さらに有り難いことに、薄く印刷された平成三年の「市街道路地図帖」（ミリオン社）に重ね合わされていて、現在の場所がよく分かる。縮尺六五〇〇分の一。土佐藩築地屋敷の所在地を知ったのも、この地図を眺めていた時だった。

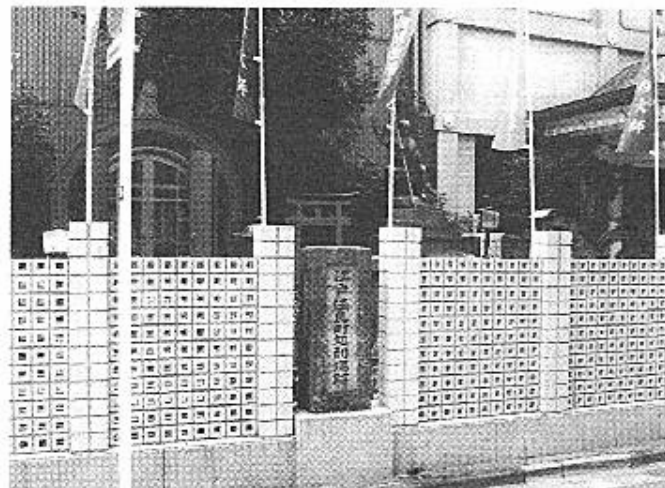
長州藩桜田藩邸は一七、〇〇〇坪の上屋敷。今の日比谷交差点から日比谷濠に沿って桜田門交差点に向かう左手にある日比谷公園の大半を占めていた。ついでに井伊直弼の彦根藩邸は、桜田門交差点から桜田濠に沿って三

宅坂に向かう途中、国会前の憲政記念館と「日本水準原点」を含む一九、八〇〇坪。

評定所は、地下鉄東西線の「大手町」駅を地上に出た永代通りの南側、東京三菱UFJ銀行・信託の一角。丸の内一丁目。昭和三十七年、私が配属された事業部の事務所は、この銀行に隣り合わせた三菱仲二十八号館という古いビルだったが、十数年前か銀行のビルに吸収された。評定所の跡に何年も勤めていたとは、この地図を見るまでついぞ知らなかった。

北町奉行所は、

「外堀通り」を呉服橋交差点から南に入ってすぐの鉄鋼ビルの裏手から新幹線の引込み線のあるあたり。八重洲側でも、ここも丸の内一丁目である。東京駅八重洲北口を出てすぐの国際観光ホテルの横には、北町奉行所の跡を示す石碑があったが、今



大安楽寺前の処刑場跡石柱

は工事中でどうなっているだろうか。

後戻りし過ぎた。小伝馬牢に戻る。松蔭はここで懐かしい人物に再会した。ある福島藩士の家臣で殺人容疑で入牢中の沼崎吉五郎が、なお牢名主として健在で、十月二十七日に死罪となるまで五ヶ月近く、また世話になった。そして死後も世話になったというべきか。

判決が出る前日、死を察した軍学者松蔭は、遺書『留魂録』を二部作成した。一部は遺体引取りのさいに、沼崎の協力で無事獄外に出て、江戸にいた飯田正伯によって萩に送られた。門下生たちは写本を取るなどして、それをむさぼり読んだ。萩市の松蔭神社に現存している神社の宝物、松蔭自筆の『留魂録』原本は、しかし、その時のものではないという。沼崎吉五郎がもう一部の原本を託されていた。出獄したら長州人に渡してくれとの松蔭の依頼を忘れず、松蔭処刑の翌月三宅島に流された後も肌身離さず隠し持ち、十七年後の明治九年（一八七六）、許されて本土に帰って二年後、時の神奈川県権令の野村靖に渡した原本がそれであると。そのとき、もう一通の遺書『諸友に告ぐる書』も渡されている。

野村靖、『留魂録』の最終章で名前もあげられている松蔭の門弟。当時十六歳。維新後、岩倉具視らに随行して渡欧。帰国後、神奈川県権令、駐仏公使、伊藤内閣内相、松方内閣通相、枢密顧問官を歴任。晩年『留魂録』をは

じめとする松蔭の著作の出版に力を入れ、明治四十二年（一九〇九）六十八歳で没。死後は遺言通り、東京は世田谷区役所の近くにある松蔭神社に埋葬され、師の墓前を守る位置に「子爵野村靖之墓」がある。

では沼崎はどうなったのか。野村の表現による「老鄙夫」は『留魂録』を渡し、何も求めることなく立ち去った。その後の消息は一切不明である。獄中での師との約束を守り通した沼崎に、当時三三歳、カエサル鬚の野村靖はどういう対応をしたのだろうか。

古川薫は言う。「野村に『留魂録』を渡したあと、彼は飄然と姿を消すのである。野村が吉五郎を引き止めて、何らかの職を与えるくらいはわけもないことだったろう。『沼崎吉五郎と云う人、至って篤志の人物にて之れあり』といった飯田正伯は、すでにこの世の人ではなかった。生き残り、政府の高官にのしあがっていく長州人の、弱者に対する惻隠の情の薄さを嘆くばかりである。地下の松蔭とすれば、明治九年のこのとき、『留魂録』を萩に送るより、沼崎吉五郎の労をねぎらうことのほうを喜んだのではあるまいか。」

地元のサラリーマン作家永富明郎は、沼崎のこの姿勢を「もちろん沼崎自身の崇高な精神から来たものであるが、その一端には、獄中で接した吉田松蔭から感化を受けた「至誠」の二文字がそうさせたのかも知れない。

とすれば、沼崎もまた、松蔭の門下生ということになる。沼崎吉五郎はそのまま歴史の舞台から消え去り、その後の足取りも、没年も、そして年齢さえも記録に残っていない。私は長州人の一人として、このことが残念でならない。」と。私はただうなずくほかはない。

#### 参考図書

- 1 「東京都の歴史散歩(上)」 東京歴史教育研究会  
山川出版社 一九八八年
- 2 「東京江戸紀行」(ブルーガイド旅読本) 原田興一郎  
実業の日本社 二〇〇二年
- 3 「中央区史跡散歩」(史跡ガイド)  
金山政好・金山るみ 学生社 一九九三年
- 4 「江戸古地図散歩」池波正太郎  
平凡社コロナブックス 一九九四年
- 5 「東京の中の江戸名所図会」杉本苑子 旺文社文庫  
(現文春文庫) 一九八五年
- 6 「江戸の川あるき」栗田彰 青蛙房 一九九九年
- 7 「詳説江戸名所記」今井金吾 社会思想社  
一九六九年
- 8 「切絵図・現代図であるく 江戸東京散歩」人文社  
二〇〇二年
- 9 「江戸切絵図で歩く 広重の大江戸名所百景散歩」  
人文社 一九九六年

- 10 「江戸の川・東京の川」鈴木理生 井上書院  
一九八九年
- 11 「中央区史」中央区 一九五八年
- 12 「木下杢太郎全集第一巻」岩波書店 一九八一年
- 13 「復元 江戸情報地図」朝日新聞社 一九九四年
- 14 「江戸切絵図集成」(全六巻) 齊藤直哉編 中央公論社  
一九八一年
- 15 「坂本龍馬日記(上)」菊池明・山村竜也編  
新人物往来社 一九九六年
- 16 「坂本龍馬・男の生き方」新人物往来社編  
一九九二年
- 17 「龍馬の手紙」宮地佐一郎 P H P 文庫 一九九五年
- 18 「武芸流派大事典」綿谷雪・山田忠志編  
東京コピイ出版部 一九七八年
- 19 「俳句極意は? 回文俳句いろは歌留多」  
長谷部さかな 北辰メディア 二〇〇三年
- 20 「芭蕉伝記新考」高橋庄次 春秋社 二〇〇二年
- 21 「芭蕉 二つの顔」田中善信 講談社メチエ  
一九九八年
- 22 「神田上水工事と松尾芭蕉」大松麒一  
神田川芭蕉の会 二〇〇三年
- 23 「奥の細道 なぞふしぎ旅 上巻」山本鉦太郎  
新人物往来社 一九九六年
- 24 「芭蕉年譜大成」今榮蔵 角川書店 一九九四年
- 25 「新修 五街道細見」岸井良衛 青蛙房 一九七五年
- 26 「与謝蕪村」(俳句シリーズ・人と作品) 大磯義男

桜楓社 一九七二年

27 「蕪村伝記新考」高橋庄次 春秋社 二〇〇〇年

28 「与謝蕪村」田中善信 吉川弘文館 一九九六年

29 「江戸学事典」(縮刷版) 弘文堂 一九九四年

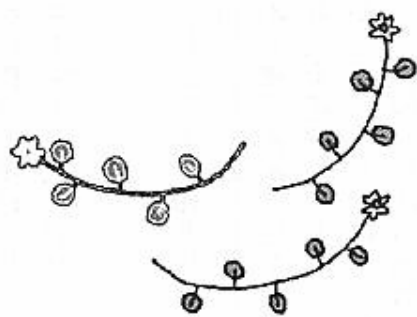
30 「台東区史 通史編Ⅱ(上巻)」台東区 二〇〇二年

31 「吉田松陰 留魂録」古川薫 講談社学術文庫  
二〇〇二年

32 「武蔵野留魂記—吉田松陰を紀行する」永富明朝  
宇部時報社 二〇〇一年

33 「千代田区史跡散歩」岡部喜丸 学生社 一九九二年

34 「日本橋川に空を取り戻す会」HP 二〇〇七年



## 中世初期よりの開発

### 新方庄と新方氏について(考察)

岩井 茂



新方庄・領の初見は、金沢称名寺文書の嘉元三年(一三〇五)が最初である。埼玉郡太田庄南方国名府(宮代町国納)の地下人、国名府頼員は、寛治元年(一〇八七)九月の奥州征討に参戦していた。八幡太郎義家は嘉承元年(一一〇六)七月に、六十八歳で没しているので、一〇〇年代にかけて活躍した源氏の統領であったと想定される。

奥州への途次にあつた国納頼員は、彼の呼び掛けに応じて従軍したものと推定される。当時、下総国下河辺庄下方より発展した新方に入植開発に従事したのは、義家より勲功の賞として開発安堵されたものか。旧新方領は、旧利根川の本流であつた古隅田川の南側、旧下総国下河辺庄春日部郷に所属していた。春日部市浜川戸・新方袋・南中曾根・増富・増戸・岩槻区の長宮・増長・大口・大谷・新方須賀と旧荒川(元荒川)以東の地域で、ここを最初に領有したのが国名府頼員である。入部以後は新方氏を名乗り、新方太領頼員と称した。その十六代後の後

胤の玄蕃亟頼基まで、新方庄で善政を行った。

土民より、新方様と慕われた頼基を頼員より十六代の末とすると、仮に一代二十年としても約三百年、十四世紀初頭の人物であろう。

私の菩提寺、清浄院由緒記によると、頼基の五代後の頼希は、一五〇四年の文亀四年正月に野与党の八条兵衛尉平維茂が一族の枝葉、柿木大膳、青柳外記左衛門、小作田隼人などを率いて小林郷（東越谷）に布陣、一、三三〇余人で新方に乱入、押領しようとしていた。頼希は新方譜代の武士、百姓を集め、岩槻・渋江の助勢を加えて一千有余で、大吉の香取神社の千間堀を前に、八条方の寄せ来るのを待った。

しかし、血気に早る新方勢は、七手に分けて夜襲をかけ、深追いしたので、新方次郎頼希はじめ従う者が大勢戦死した。この頃の清浄院住職は頼希の兄高賢上人で、正月三十日、小林郷に滞陣していた。別府三郎に寺をはじめ新方領域は急に攻められ、高賢上人は平方の林西寺に逃れたが、住職不在のため止むなく田舟を借りて谷原沼を渡り、渋江の浄安寺の欣誉上人のもとに落ち着いた。この時、大場の谷原沼に逃れる途中に沈没した舟もあった。

この戦に従事した清浄院を開基した人の一人、七十二

世・岩井足立介兵部少輔の十代の孫、岩井掃部介家恵の嫡男某は討死している。討死した岩井某は、春日部岩井家の八十一世家恵の子で、私より数えて十九代前の祖先にあたる人物であり、現今もこの日を供養の日としている。

終わりに

一、新方次郎頼希の墓碑は、向畑陣屋の跡、古利根川堤防に建つ板碑で、通称、新方様・藤原様と称して、戦後は桃の花咲く頃、新方様（シンポウサマ）にお参りする人が多く、屋台店が多く出て大変なにぎわいであったことを知る人は少なくなった。

二、清浄院と岩井家の交友は家伝によると、開山以来の交際で、舟渡村より江戸初期、谷原村開村に従事した神田家と共に、現在も大松清浄院の檀徒として今日に至っている。

三、新方氏は永正十七年（一五二〇）十月に新方領を回復したが、現在、子孫は舟渡の新方博氏であろう。





## 増林のねんね河岸の河童 山本 泰秀

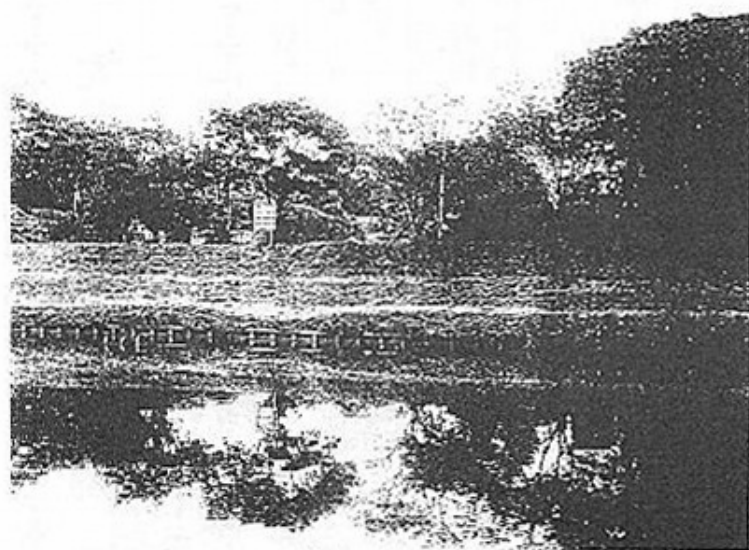
「ねんね河岸の河童」、これは増林の山中（勝林寺の南東側の地域）という地に残る遠く古い頃から伝えられてきた話である。

今日、河原や川で遊ぶ子供達の姿を見ることがなくなつて久しい。子供達の遊び方、遊び場所が随分と変わつてしまつた。川遊びの激変、それは人口の増加にともなつて生活排水などによる川の水質悪化。また、昭和四十年代になりほとんどの学校にプールが設置されたことなどがその主たる要因と考えられる。

それ以前の子供達、少なくとも昭和二十年代迄の私達などは夏になると水遊びや蜆（しじみ）採り、ビンド（瓶胴）びんどろ、ガラスの筒製の漁具で小魚採りと川での遊びに興じていた。この頃の古利根川の水質はとても清く、川辺の人家では炊事洗濯はもとより飲料水としても川の水を利用していた。これほどまでも川に親しんでいたものの、夏のお盆の期間だけはこの川に入つてはいけないという禁忌が長い間代々と受け継がれてきた。この期間に川に入ると河童が現れ、悪さをして深みに引き込み溺死させられるというのである。河童には、悪行・善行・好物・嫌物の四つに大別されるといふが、ここの河童は

悪行の河童の部類に入る。

古利根川の流れるは、増林の林泉寺の裏手から勝林寺の裏手にかけて松伏町赤岩側に大きく蛇行している。川の水はそれゆえに赤岩側左岸にぶつかり、増林側右岸に向けて跳ね返つてくるのである。ぶつかった左岸、跳ね返つてきた右岸の川底は、削られて深みができあがつている。増林側の右岸は、深い所では川底まで二メートル位ある。子供にとつては当然足がつかずに溺れやすく、小



増林のねんね河岸

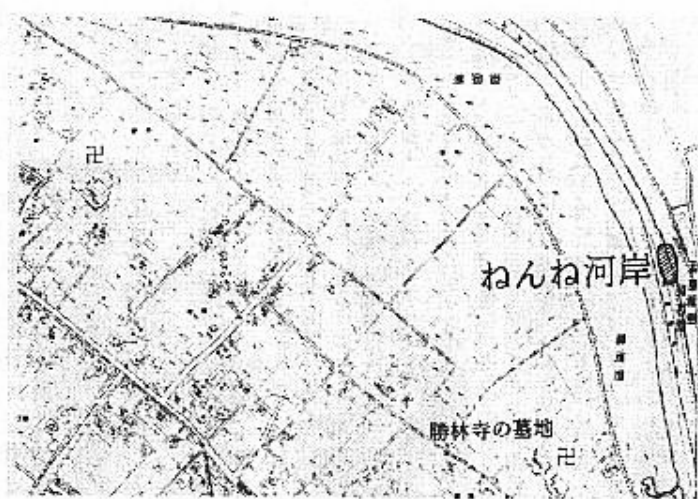
学校高学年で上手に泳げるようになってからでないとならば、近づけなかつた。赤岩側の左岸は、より一層深かつたと思われ、通称「ねんね河岸」と呼んでいた。「ねんね河岸」の場所は、勝林寺の裏手の墓地の対岸あたりである。「ねんね河

岸」の伝説は次のとおりである。

母親が子供を背負ってお盆の日に里へ帰ろうとして、松伏側の左岸から増林側の右岸に渡るうとした時に突然河童が現れ、この親子が深みに引き込まれて溺れ死んだ。

「ねんね河岸」の語源は、子供を背負って寝ねさせて渡ったことからと思われる。この言い伝えは、明治・大正・昭和の生まれの人々の間に語り継がれてきた。

現在の古利根川は昭和三十七・八年頃に河川改修が行われ、川幅も広くなり、河川敷きは掘られてかなり低くなり、大水がきても流れが良いように大きく変貌した。今日の子供達は、川遊びなどはしないので、今後、この不思議な伝説も聞かされることなく消え去ってしまうのであろう。古利根川、中川流域の河童伝説としては珍しく、残しておきたいものである。



増林のねんね河岸

## 大沢の七ツ池

高崎 力

昭和四十年代まで大沢には、内池・外池・浅間池・八郎兵衛池・観音坊池・嘉右衛門池・しじみ池などがあり、通称「大沢の七ツ池」と呼んでいた。

現在地に移転する前の大沢小学校は、現在の市立第一体育館あたりにあり、校庭東の崖下には、七ツ池最大の内池があった。そして常時、その池では川魚が捕られていた。今では珍しい菱の実もあった。

江戸時代には、内池は大沢きつての土豪・江沢家の宅地の一部で、その家屋は南岸の砂丘上にあった。現在、内池は埋め立てられ、第二体育館と大沢公民館になったが、公民館裏の曲道が内池の北岸であり、そこには川魚屋があった。

外池は、現在の大沢小学校の北裏の水田の位置にあった。浅間池・八郎兵衛池は、葛西用水路(逆川)対岸沿いであって、かつては今なき越谷紡績工場の従業員が昼休みになると魚釣りをしていた。現在では埋め立てられマンション等の住宅地になった。さらに葛西用水路に沿って観音坊池・嘉右衛門池・しじみ池と続いていた。現在では、これら七ツ池はすべて姿を消した。

内池 深さ一丈(三m)、東西三十間(五十五m)、南北

十八間(三十三m)、周囲二町二十間(二五四m)

外池 深さ五尺(一・六m)、東西二十三間(四十二m)、南北三十間(五十五m)、周囲一町三十間(一六四m)

八郎兵衛池 深さ八尺(二・四m)、東西二十一間(三十八m)、南北五十二間(九十五m)、周囲二町十間(二三六m)

これらの七ツ池は、荒川の旧河道跡に沿ってあり、かつての荒川の名残といえる。この旧荒川は、大房・大沢の両地域のほぼ中央部を曲流し、北越谷駅の南側を通過して七ツ池に続き、さらに葛西用水路沿いに流れ、花田で迂回し、花田の周りを天狗の鼻のように巡る荒川河跡に続いていいたと思われる。

旧荒川の左岸は、北越谷駅ホームの南端で、光明院は左岸の方にあり、右岸には、自然堤防上に立つ照光院がある。少し離れた西方(東武線の西側)には今はなき大沢浅間社(現在の北越谷二丁目のドルチェ北越谷の地点)があった。川幅は約十m程であった。この川の濡(みお)と呼ばれた最も深い所が現在下水として使用されている。旧日光道で見ると、大沢三―二五の水角屋の南横の下水が濡跡で、大沢二丁目と三丁目の境界にもなっている。かつてこの部分の旧日光道には「天神前橋」があった。当時の川幅は九尺(三三弱)、橋の長さは一丈三尺(四m)で、多くの旅人や駅馬が渡っていたことであろう。

大沢浅間社の西側には大きな池(現在のマルサン駐車場を含む地域)があった。浅間社のある場所は日荒川の切れ処だといわれている。洪水時に土手が崩れ、深い窪み

ができて、これが池の元になり、えぐられた土砂が堆積して浅間社を祀る丘の元になったといわれている。



明治 13 年(1890)11 月 迅速測図に見る大沢の七ツ池(楕円の形)





# 昭和十年 越谷の電話番号簿

谷岡 隆夫



明治四十一年に越ヶ谷局で電信通話が始まりました。大正五年、越ヶ谷で電話加入者は四十七名であったが、昭和十年の越ヶ谷の電話番号簿によると、一六〇名に増加している。この番号簿をみると、旧日光街道筋の旧家や名士が名をつらね、当時の様子をうかがい知ることができる。

- |             |            |
|-------------|------------|
| 一番 越ヶ谷郵便局   | 一二番 埼玉鴨場   |
| 二番 川崎第百銀行支店 | 一三番 越ヶ谷警察署 |
| 三番 中村晴彦     | 一九番 武州大沢駅  |
| 四番 山崎長右衛門   | 二九番 東武電燈   |
| 五番 小泉市右衛門   | 四二番 越ヶ谷町役場 |
- 他は省略

◇越ヶ谷の加入者一六〇名に対し、草加も同じ一六〇名、粕壁は二二六名。  
◇通話料金は、大宮・岩槻・赤羽へは一〇銭。名古屋一

〇〇銭、大阪一五〇銭であった。

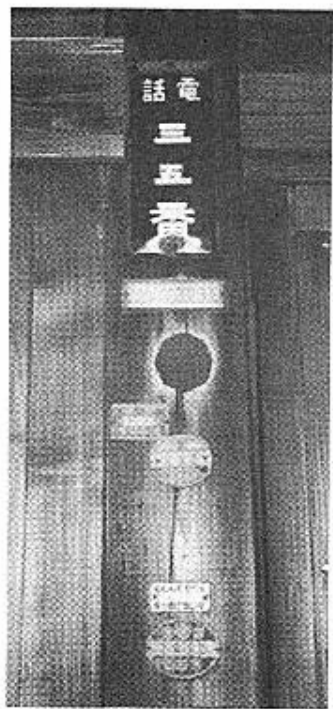
大正一四年に電話番号簿は縦書から横書に変更された。当時の縦書の和文様式が、横書に変更されるのは随分議論をよんだ。

電話加入者宅の電話番号札まで、写真のように横書に変更されてしまった。

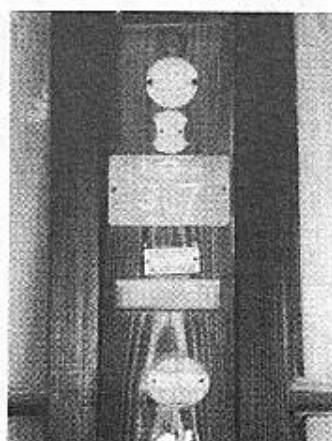
現在、越谷市内の軒先で見られる電話番号札は数少なく、貴重なものとなった。



昭和10年 埼玉県電話番号簿



電話番号札 36番



電話番号札 37番

## 大沢小学校の『青い目の人形』

水上 清

大沢小学校の校長室に三体の人形がある。二体は青い目の人形で、名はワテラ・ヘズ（正しくはマーサ・ヒース）と妹のサラ、もう一体は日本人形の大沢愛子である。

昭和の初め、米国で日本人移民の排斥運動が激しくなり、この事態を心配した親日家の宣教師シドニー・ギューリック博士は、人形による日米親善を呼びかけた。この反響は大きく全米からの寄金で一万二七三九体の人形が購入され、一九二七年（昭和二年）、日本へ送り出された。

これらの人形のうち一七八体は埼玉県に、そのうち六体が越谷に配分された。大沢小学校に迎えられたのがニューハンブシャー州生まれのワテラ・ヘズで、友だちとして大沢愛子が選ばれた。

一方、日本からも「答礼人形」として、豪華な振袖姿の日本人形五十八体が米国各州に贈られた。一九四一年、日米両国は太平洋戦争に突入した。多くの「青い目の人



左から ワテラ・ヘズ 大沢愛子 妹のサラ

文教視察団が大沢小学校を訪れたのが奇縁で、ギューリック博士と同姓同名の教え子が博士の曾孫（四世）であることが判明し、「青い目の人形」の存在が伝えられた。早速、その家族（三世）から大沢小学校の皆様に感謝の手紙（次ページ下段に訳文）とともに、妹サラが贈られてきた。

形」が「敵状人形」として壊されたり、焼かれたりした。現存する人形は全国では二七〇体あまり、埼玉県で十二体、越谷ではヘズのみである。米国への「答礼人形」は約半数の現存が確認されている。一九九五年（平成七年）初め、アメリカ州のイランド州の

大沢小学校では毎年七月に「青い目の人形集会」を開き、児童による人形との英語インタビュアーなど英語教育を兼ね、「親善」の意義を教えている。

PERSONAL DESCRIPTION

Name *Martha Heise*

Eyes (color) *Blue*

Hair (color) *Dark Brown*

Nose \_\_\_\_\_

Mouth \_\_\_\_\_

Place of Birth *Waukesha, W. T.*

"SAY IT WITH DOLLS"



DOLL TRAVEL BUREAU  
 Good for one fare by rail and steamer to Tokyo, Japan. U.S.A.  
 Name \_\_\_\_\_  
 99 cents Special Rate. Sister L. Gulick, Gen. Passenger Agt.

No. 4869

To Boys and Girls in Japan

This passport introduces to you *Martha Heise*—a loyal and law-abiding citizen of the U. S. A., who goes to visit Japan as a Messenger of Friendship and to see the Hina Matsuri, March 3, 1927.

This Messenger represents the Boys and Girls of America and carries their greetings and a Message of Goodwill.

Please take care of *Martha Heise* while in Japan and give her any help and protection that may be needed. She will obey all the laws and customs of your country.

With all good wishes,

"UNCLE SAM"

1927.

ワータラ・ヘズのパスポート（正しくはマーサ・ヘースと読む）

注 パスポートのサインの誤読から「ワータラ・ヘズ」で登録されていたが、戦後になって「マーサ・ヘース」と読むことが正しいと判明した。

日本人形の沢愛子



越谷の歓迎会での記念写真

ニューハンブシャー州生まれのワータラ・ヘズ

一九九五年（平成七年）六月十三日

大沢小学校の皆様

今から約六十年前に私の祖父であるシドニー・ギューリックは、一、二、〇〇〇体の友情の人形をアメリカの子どもたちから日本における人形大使派遣事業を開始しました。そのお返しとして日本からもみごとに日本人形大使がおくられました。この人形大使は、アメリカと日本

の子どもたちがお互いにより理解し、認め合い、友情を深めることを願っておくられたものであります。大沢小学校では、当時送られたニューハンプシャー生まれのマーサ・ヒースを長い年月がたつた今でも大切に保管していただいているとお聞きしました。彼女が多くの方々を守られ、愛されてこれまでの長い時代を元気で生きてこられたことを思うと感激せずにはおられません。

私の家族は、そのマーサ・ヒースの妹である新友情の人形を贈ることを決めました。この人形に託す私たちの願いは、六十年前に太平洋を渡った願い、つまりアメリカ合衆国の子どもたちとの親善を願う気持ちは、変わっておりません。

その人形の名前はサラで、アメリカでは多く使われている名前です。私の妻はサラのために彼女の着替え、寝巻き、旅行用バッグなど特別に作ってやりました。そして、パスポートも持たせてやっております。どうかこれからもマーサと同様に末永くかわいがってやってください。

お元気で。サラをよろしく。

さようなら。

シドニー・ギューリック三世

## 越ヶ谷宿・三鷹屋嘉兵衛奉納の石燈籠

木原 徹也

江戸時代の越ヶ谷宿で質・古着商を営む内藤家は、屋号を「三鷹屋」と称した。この三鷹屋第八代当主の嘉兵衛は、天保二年（一八三一）、当時三十三歳で、家族構成は本人、母、妻の三人に、下男、下女の合わせて五人と馬一頭であり、持高は十五石八斗六升五合で、宿場内の主立ち商人であった。



三鷹屋嘉兵衛奉納の石燈籠

嘉兵衛は、文政七年（一八二四）九月、眼病を患い、これが思わぬ大病となり、何人もの眼科医の治療を十二月まで受けることとなってしまった。この折、嘉兵衛は駒木村（現・千葉県流山市）の諏訪神社に眼病平癒を祈り、十か年の内に石燈籠を寄進する旨の心願を掛けた。

駒木村の諏訪神社とは、現在でも「駒木のお諏訪様」として親しまれ、例年八月二十二日、二十三日の例大祭には、大勢の参詣人が訪れる。

社伝によると、藤原氏との政争に敗れた高市皇子の後裔の者達が東国に流れ、大同二年（八〇七）、信濃国の諏訪神社の御分祠を現在地に鎮座したのが創建であると伝えられている。

その後、後三年の役（永保三年、一〇八三）には、奥州に向かう八幡太郎義家が戦勝を祈願し、帰洛の途には、乗馬と馬具を奉獻したとの伝説が残っている。江戸時代になると、多くの江戸町民が成田山詣での途中、諏訪神社に立ち寄るなど、近郷近在の庶民の信仰を集めた有名な神社である。

この諏訪神社に、眼病平癒を祈願した三鷹屋嘉兵衛は、七年後の天保二年（一八三一）に心願通りに石燈籠一对を寄進した。

石燈籠は、高さ九尺一寸（約二・八尺）の小松上石造りで、代金は、十七両二朱（今の約二七〇万円相当）だった。

奉納供養には、別当成願寺への奉納金二両（約三十二万円）をはじめ、関係する社僧への奉納や、石工・鳶・茶屋など多数の関係人への祝儀など、石燈籠代金と合わせ総

額二十四両三分と八十三文（約四〇〇万円）もの費用を掛けていた。

この三鷹屋嘉兵衛が寄進した石燈籠については、かつて本間清利氏が『越谷の歴史物語 第一集』で紹介しているが、なんとか現物を見たいもの、平成十八年八月に諏訪神社を訪れた。藪蒼と樹木が生い茂り、長い歴史を思わせる参道を通り、正面社殿の外拝殿左右に建つ一对の大きな石燈籠が三鷹屋嘉兵衛の寄進した石燈籠だった。社殿に最も近い所に建てられ、大切に扱われている様子が見られた。左右の石燈籠の基部には、「願主越谷宿三鷹屋嘉兵衛」との文字が大きく刻まれ、社殿向かって右側の石燈籠には「天保二辛卯年 二月吉日」と「戸ヶ崎 石工幸右エ門」と刻まれている。しかし、意外だったのは、左側の石燈籠の裏面に「大正三年五月廿三日 米村定八 再建」と刻まれている。良く観察すると、石の質や石の新旧が異なる所があるようにも見える。大正年間に全く新しく造りなおしたとは思えないが、後から何か手が入った様子は感じられた。それにしても、「米村定八」とは、どのような人であったのか、三鷹屋（内藤）嘉兵衛の親類の者なのだろうか。

社務所を尋ね、宮司さんに、この石燈籠について何か記録や言い伝えがあるかを伺ったが、残念ながら何も残っていないとのこと、これ以上の成果は得られなかった。

千葉県流山市内の著名な神社に残る一对の石燈籠から、江戸時代の越ヶ谷人の信仰と活躍をしのぶことができた。

## 戦後六十年の幻の荻島飛行場

磯谷 知子

今年、昭和二十年に日本が連合国のポツダム宣言を受け入れ、不戦の誓いの下、平和国家の道を歩んでから六十年の時が流れた。還暦を迎えたのである。

かつて、越谷から岩槻にかけて陸軍の飛行場があった事実が忘れられようとしている。しかし、今もなお兵舎や蓋をした暗渠、飛行場の一部の施設の跡が残り、当時の滑走路や誘導路が道路として利用されている。越谷の荻島村から岩槻の新和（にいわ）村にまたがる飛行場であった。地元では通称「荻島飛行場」「新和（にいわ）飛行場」などと呼ばれた。また飛行場敷地の大部分が新和村の論田地区にあつたので「論田（ろんでん）飛行場」とも呼ばれた。

終戦の前年、昭和十九年七月に地元の農家十三軒が陸軍から呼び出されて強制的に立ち退かされて飛行場の建設が始まった。当初は飛行場設定隊の七百名によって開始された。その後、近隣の住民の勤労奉仕や動員された朝鮮の人によって炎天の日も雨天の日も人海戦術で突貫

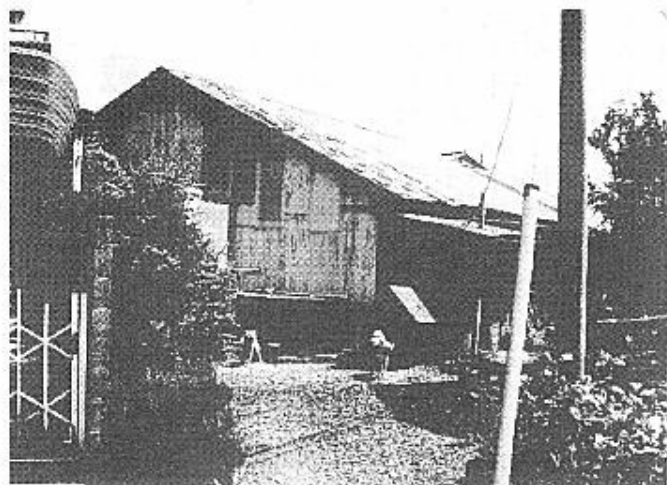
工事が行われ、終戦の年の八月上旬に完成した。しかし止まりきれず滑走路北端あたりに不時着した一機（操縦士は岩槻藩主の後裔大岡忠意氏）以外は一度も利用されず、玉音放送があつた十五日の終戦日を迎えたのである。正式名は「越谷陸軍飛行場」という。

滑走路の名残が現在も道路として使用されている。「しらこぼと水上公園」から南に一直線に伸びている道路である。この滑走路の幅は現在の道路よりも広く、三十三間（六十<sup>1</sup>/<sub>2</sub>）で、長さは一五〇<sup>1</sup>/<sub>2</sub>である。滑走路の北端は、「しらこぼと水上公園」の北隣、越谷西高校の校庭南端あたり、滑走路の南端は、越谷市小曾川の北隣、さいたま市岩槻区末田一七・一（大石重機興業）あたりである。

さいたま市岩槻区末田一四七の田島喜一氏（明治四十五年一月一日生）によると、当時の南北に走る「滑走路の東端の側溝の名残が田島家の庭の入口にあつて、また



「幻の飛行場」飛行場の施設の跡と磯谷知子氏、谷岡陸夫氏



「幻の飛行場」兵舎跡 (平成 17 年 10 月 7 日)

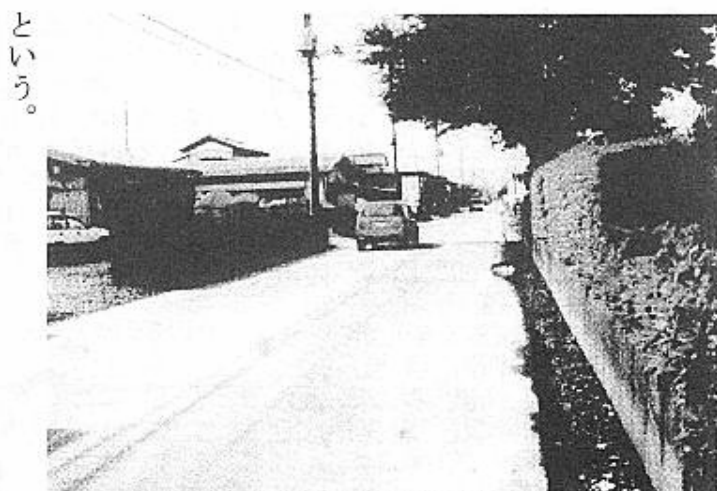
滑走路自体の名残が田島家の母屋の西の木造平屋の柔道場の南側に広がるコンクリートである」という。そして「この飛行場は、練習機や戦闘機のような小型飛行機用として建設されたと聞いている」とのことである。「終戦後、滑走路のコンクリートは、東京の業者によって東京の復興のために砕かれてただで運ばれた」という。そのため地元では、田島氏のアドバイスを受けて「その業者から二百円の通行税をとるようにした」という。

兵舎は、滑走路南端の東方の南荻島にある「越谷ホーム」周辺にもあって、その近く

に今でも一方所残っている。

戦車が通っても壊れない頑丈な蓋がされた暗渠は、滑走路の東西に平行してあり、現在の道路から東西約二〇〇メートル離れている。特に西側の方ははつきりと残っている。

飛行場の施設の一部(田島氏によると未完成の施設と推定)



「幻の飛行場」道路として使用されている飛行場の滑走路跡

という。

飛行機を導く誘導路は、滑走路の北端と南端を東側に突出したカマボコ型で結ばれていて、現在でもその大部分が道路として使用されている。道路以外の使用としては「しらこぼと運動公園」や「しらこぼと水上公園一般駐車場」の一部となっている。

高曽根の田圃の中にある「しらこぼとメモリアルパーク」の南方一七〇メートル先にある。高さが一五〇センチ、幅が一三八〇センチのコンクリート製の何かの台が二個残っている。また、そのすぐ東方にある南北に細長く広がる草むら地は格納庫跡である

☆平成十七年八月一日の発行の埼玉新聞の記事「岩槻に『幻の飛行場』(菊地正志氏)」、「岩槻城と町まの歴史(聚海書林)を参照し、田島喜一氏の協力も得ました。

# 大沢の天神前土橋

谷岡 隆夫

日光道中間延絵図(文化三年)の道中(街道)筋に、天神前土橋が掲載されている。現在の旧日光街道筋の越谷市大沢三丁目の水角屋の店脇(南側)である。今はその場所に橋はないが、排水溝が残っていて、排水溝の南側に「天神前橋」と書かれた石の欄干が一つ横たわって現存している。

縦五十二センチ、幅三十センチ、奥行き二十七センチ角である。

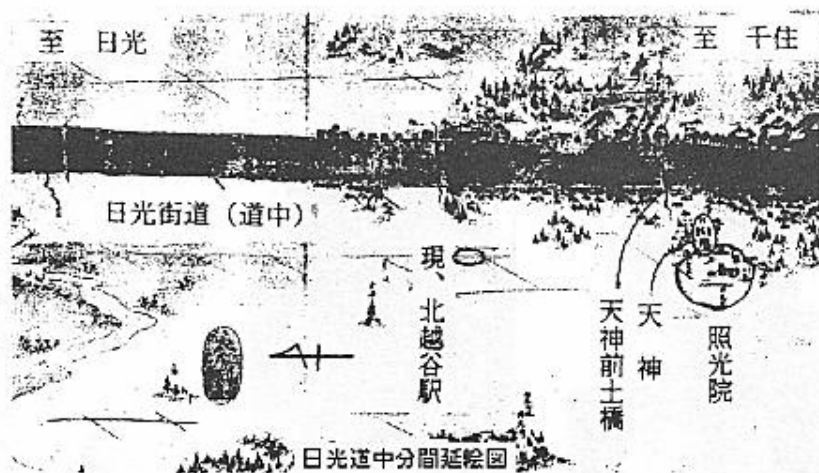
昔は橋の両側にあり、昭和四十年代の日光街道筋のU字溝整備の時に邪魔になったが、幸運にも業者が残してくれたとの古老の話である。江戸時代の地誌「大沢町古馬宮」によると、天神前土橋を境に北の日光方面を上町と称したとある。



現在の天神前橋跡



天神前橋の欄干



この土橋から照光院方向に、この土橋の名前の由来となった天神様の神社(照光院参道北側)があった。現在はこの地になく、大沢の香取神社に合祀されている。

天神土橋の下を流れていた小川の流路に沿ったあたりは大沢町では一段と低い土地で、かつては荒川(現在の元荒川)が流れていた所という。宮内庁埼玉鴨場の南方、元荒川が曲流するあたり(北越谷第五公園グラウンド)から曲流せずに直流して南進し、北越谷駅南方を通過して東進し、天神土橋のあたりで旧街道を横切り、川が流れていた名残と思われる。逆川(鷺後用水)周辺にある「七つ池」に沿って流れていたと推定されている。(高崎力氏)

七つ池は、第二体育館(内池)、大沢小学校の北側(外池)、外池の逆川の対岸、逆川の対岸にある元・紡績工場の裏手(3カ所)、北越谷東口前通りの北側にあった。





# 砂利道供養塔(蒲生一丁目)

高橋 正澄



日光道中蒲生茶屋通り、旧・大熊仁兵衛屋敷の一角に、鳥または河童のような石仏を戴いた「砂利道供養塔」が立っている。

地元では、この得たいの知れぬ石仏を「ぎょうだい様」「おかま様」、或いは「行者様」と称している。その正体は、今もって不明である。

この供養塔は、宝暦七年丁丑六月(一七五七)に日光道の普請完了を記念して造立されたものである。塔の右面には、造塔者として、常州大泉村・袖谷藤左衛門、野州田野村・添谷源左衛門、総州古河・高橋喜兵次、江戸芝片門前・南部屋八十次、江戸八丁堀・新井七兵衛、瓦曾根・中村彦左衛門、登戸・浜野徳左衛門、四条・飯島久兵衛、蒲生・中野弥三郎、願主・大熊仁兵衛の銘が刻まれている。

左面から裏面にかけて、普請に参加した八条領をはじめ

とする周辺各領の村々、食料を支援した町村の銘が記されている。

石工は、金右衛門新田の竹田平八である。

このことから、この普請が、いかに大規模であったかわかると同時に、大事を成した先人の安堵や日光道、旅人への思いが伝わってくるような気がする。

現在、「ぎょうだい様」は、足腰の病いに利益があると  
いうことから、地元信者によって、草履・草鞋などが供えられ、供養されている。



砂利道供養塔・ぎょうだいさま

## 日光旧街道沿いの旧越ヶ谷郵便局

原田 民自

旧街道のちょうど真ん中あたりに位置する場所に、横田診療所の西洋風の木造2階建ての建物がある。地番は新石三丁目で、やさしい薄いピンク色の板を横に並べた外壁と白い枠。半切り妻屋根を載せて、窓はほとんど左右にスライドする「引き違い窓」。窓の鍵は、おそらく懐かしい真鍮の「ねじりん棒タイプ」と想像できる。どこから見ても田舎の分校のような郷愁を思わせる秀囲気の建物である。

この建物は、昭和十年（一九三五）六月、越ヶ谷郵便局舎として建設されたもので、建設された当時は、周囲の蔵造りの家並みと違い、越谷きつての洗練された建物として、周辺の住民は鼻が高かったそうだ。横田診療所の院長の祖父・父親ともに越ヶ谷郵便局の局長だった。

明治三十五年（一九〇二）年に作成された「埼玉縣營業便覧」によると、現在の横田診療所の場所には、新石町三丁目「下越ヶ谷郵便電信局」と表記されている。

おそらく明治時代に使われていた郵便局の建物が古くなったので、昭和十年に新築されたものが現在、診療所として使われているのだろう。

越谷郵便局の歴史を振り返ると、越ヶ谷町では明治五年（一八七二）七月に郵便取扱所が設置され、同八年（一八七五）一月に越ヶ谷郵便局と改称された。

中央の郵便役所を一等とし「武蔵越ヶ谷」は四等郵便取扱所となり、取扱役の松本利兵衛は等外三等の官吏の格式に準ぜられ、二人扶持と毎月五十銭の筆墨紙代が支給されることになっていく。

明治十八年（一八八

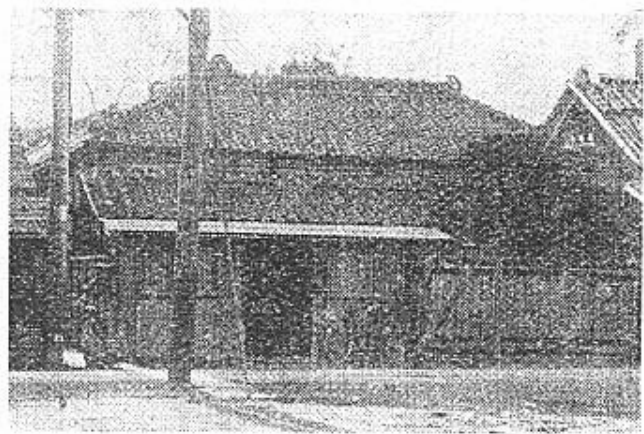


昭和30年ごろの越ヶ谷郵便局「越谷市25年の歩み」より



旧街道の中ほどにある旧越ヶ谷郵便局の横田診療所

五)六月、普通郵便業務の他に貯金事務を開始した。当時の越ヶ谷郵便局の郵便集配区域は、越ヶ谷・大沢の両町および大相模・蒲生・出羽・荻島・大袋・増林・桜井の七か村で、郵便物の集配は、町内では一日四回、町外は一回ないし二回だった。また



明治時代の越ヶ谷郵便局 【越ヶ谷案内】大正5年より

電信事務の受持区域は二町七か村以外に新方・松伏領・吉川・新田・川柳・戸塚・大門の七つの村および新和村の一部を占めており局務は非常に多忙だったようである。

また、明治十九年(一八八六)十一月には国内為替を開始した。

越ヶ谷郵便局は、明治二十六年(一九〇三)七月には小包郵便の受付をはじめた。二十八年(一九〇五)、外国為替および和文電信事務を開始し、越ヶ谷電信局と改称された。

明治三十二年(一九〇九)、初代の松本利兵衛に代わ

って会田本太郎が二代の電信局長に就任した。明治三十六年(一九〇三)四月、各地とも一般に郵便局と改称された。

会田本太郎は、明治三十九年(一九〇六)に局長を退職して、同年十月三十日に越ヶ谷郵便局の局長は横田斧三郎が就任した。その後、局舎は新石三丁目に移転した。この場所が現在の横田診療所にあたる。

明治四十一年(一九〇八)七月一日、電話通話事務を、明治四十二年(一九〇九)十一月二十一日には電話交換事務を開始し、町には特設電話の架設がされることになった。当時は電話の管轄も越ヶ谷郵便局が行っていたことが分かる。越ヶ谷での電話開設から七年後の大正五年(一九一六)の電話番号簿を見ると、一番から四十一番までの番号が登録されている。

(参考)越谷市史 二 通史下)

「武蔵越ヶ谷 明治30年(一八九七)4月21日付8便」の消印のある郵便物がある。(次ページ)越ヶ谷区裁判所から葛飾郡松伏領村松伏の個人宛に出された郵便物で、明治十六年(一八八三)に一月に発行されたU小判の菊の紋が付いた二銭の切手が貼り付けられている。この郵便物は、越ヶ谷郵便電信局から発送されたもの。越ヶ谷区裁判所は明治三十五年の「埼玉縣營業便覧」によると、新石二丁目にあり、現在の横田診療所の斜め向かいにあった。

大正十五年(一九二六)一月に「郵便局裏 横田医院

横田正男」という三行広告が読売新聞に掲載されている。この広告を見ると横田診療所は大正時代には郵便局の裏側で町の病院として開業していたことになる。

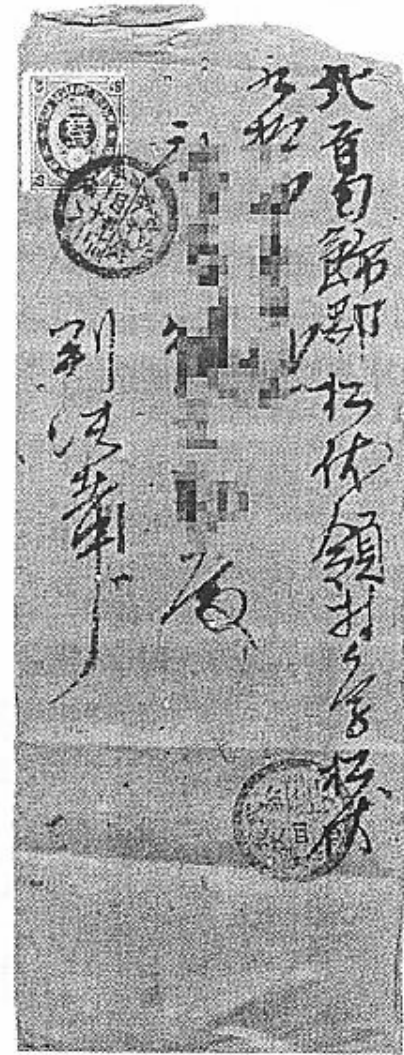
そして、昭和四十二年（一九六七）に、越谷郵便局が現在の大沢交差点付近に移転したあと、診療所となり現在に至っているのだろう。しやれたこの建物は旧街道通りで三十年余にわたり郵便局として利用され、その後、診療所として使用されている。建築後すでに七十年以上を経過しているが、外形から見るとまだまだ現役として活躍できそうだ。

大沢小学校は戦前には大沢尋常高等小学校という名称で呼ばれ、戦後のさなかの昭和十六年（一九四一）からは大沢国民学校となった。

「埼玉縣南埼玉郡 大澤国民学校」の名前の入った茶封筒で、学校の長野重蔵氏から北埼玉郡の個人宛へ出された郵便物がある。大日本帝国郵便と印刷された三種類で合計十七銭の切手が貼ってある、昭和十七年（一九四二）十月十二日の消印の

書留郵便は、旧越ヶ谷郵便局を経由して配達されたもの。

戦争の足音が、都会を離れたこの越谷にも、序々に迫りつつある時期の郵便物である。



「武蔵越ヶ谷」明治30年4月30日付の郵便物



「埼玉越ヶ谷」昭和17年10月12日付の郵便物

## 増林河岸の跡

鈴木 進志

野田街道と古利根川が交差する寿橋から越谷寄りにおよそ五十メートル程の街道の北側に老木が二本立っている。ここはかつては大吉の香取神宮の参道入口だった所である。

昔はこの大木前の道路を挟んで反対側に水路が見えていた。寿橋の下流およそ五十メートル左岸にあった入江から水路が街道家並みの裏側を迂回して道路際まで入り込んでいたのである。この水路はかつての古利根川水運の増林河岸（源左衛門河岸）の船着場の跡だったという。

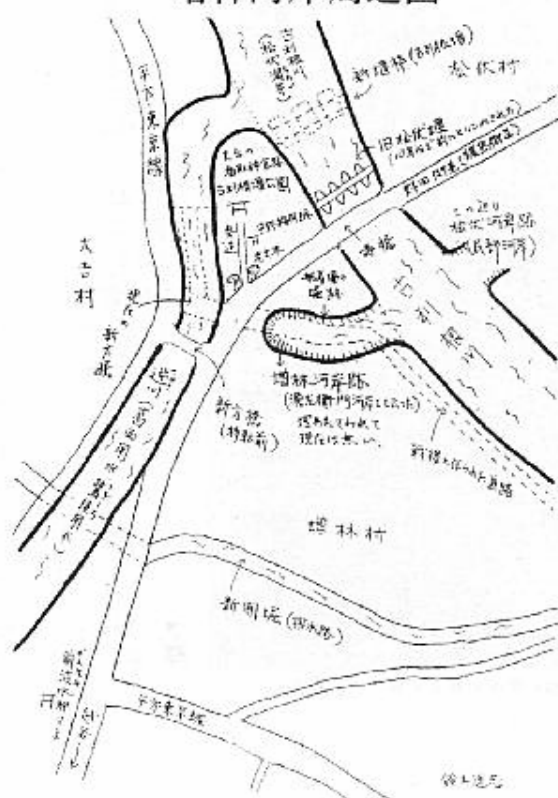
戦前頃の記憶であるが、当時の水路は既に裏から傾斜して埋め立てられ、昔あったであろう荷揚げの階段等、河岸場らしき跡は無くなっていった。イチジクの木が二、三本あり、ゴミも捨てられていた状況だった。その先の古利根川よりの水路は、真菰や芦が生えて沼地になっていて、所々に往時の護岸用か何かの杭が朽果てて僅かに頭を出していた。水路の北岸は台地で、樫の木が何本か立ち、水路に面した岸辺は台地が崩れて太い木の根が幾重にも露出していた。水路の南東側方面は畑や田んぼで、遠く増林の屋敷森まで見透かした。近くの松伏堰の水門が時々開いて放水されると、堰の下流が増水してこの水路まで入り込んだ。このときは水流でこの沼地は活気づき、漁師の川舟も入って繫留されていたが、普段は

全く寂れた所になっていた。

『越谷市史』には、明治中頃の調査によると、古利根川の川底が既に浅くなっていたことや、粕壁からの高瀬船（途中に立ち寄る河岸場、河岸場で物資が積み込まれてきたので、地元では合船と呼ばれた）でのこの河岸場への出入りが年間三十五回、米麦三千八百二十俵、大小豆百四十八俵、などとその当時の活動状況が記されている。

その後、古利根川の水運は鉄道や道路交通の発達により急速に衰退し、増林河岸も時代の変遷とともに姿を変え、現在は埋め立てられて道路や住宅地と化し、河岸場の面影は見られない。

増林河岸周辺図



## 越巻村(現・新川町)出身の力士

### 「荒井山大蔵」

高橋 清

幕末から明治の初めに、越巻村から相撲取りがでた古老の口伝がある。

### 荒井山大蔵

越谷市越巻出身。本名は不明。最高位幕下三十一枚目。楯山藤蔵弟子。嘉永二年(一八四九)十一月場所、大角大蔵という四股(しこ)名で西序の口二十九枚目に出てくる。



荒井山大蔵

同六年二月、三段目に上がった。安政四年(一八五七)一月、幕下へ進み、翌場所(十一月場所か)に荒井山大蔵と改めた。その後はパツとせず、明治元年(一八六八)十一

月場所まで幕下にみえるが、その後は名が消えている(當時、幕下は相当高い地位だったようである)。

### 世直し相撲興行の功罪

明治二年、越巻村旦那衆が勧進元となり、荒井山大蔵が所属する部屋を招き興行した。功としては、相撲の流行と相まって心身の鍛練・体力増強からすればいいことであつた。罪としては、

(一)興行一日目から雨が続き、五日間も中止となり、力士一行の食資が莫大であつた。

(二)地元の青年たちが、力士の宿に出入りし、博打に引きこまれ、大損をした。

(三)青年たちは、力士の相撲半纏(どてら)のような半纏(を着て、肩で風を切つて意気がつた。

木戸銭収入よりも諸経費がかさみ、赤字になつた。後始末は勧進元の負担となつたうえ、悪習を置き土産にして大失敗であつた。荒井山大蔵のその後は不明である。



「相撲半纏絵図」(部分)

相撲場で稽古をしている力士の様子とそれを見ている相撲半纏を着た力士の様子が描かれている

古写真と絵葉書でつづる

## 大正時代の越ヶ谷

### 関東大震災で被災した迎攝院の山門



関東大震災で被災した迎攝院山門 奥に倒壊した本堂が見える

官本町二丁目の迎攝院（こうしょういん）は、天文四年（一五三五）以前に開かれたと伝えられ、周辺地域で威容を誇っていたが、関東大震災で本堂の大伽藍や鐘楼堂等が倒壊した。写真では山門が崩れかかり丸太で支えられ、奥には倒壊した本堂が見える。現在、鐘楼堂の石垣が当時のまま残されているが、鐘楼は戦時中の金属供出で失われた。下の写真は、修復された迎攝院の山門。越ヶ谷に残る関東大震災を記録した唯一の写真である。



修復された山門と奥には再建された本堂が見える

越ヶ谷久伊豆神社の参道の長さは、およそ500メートルある。鳥居右側の側道は現在では車がすれ違えるほどの広さにな

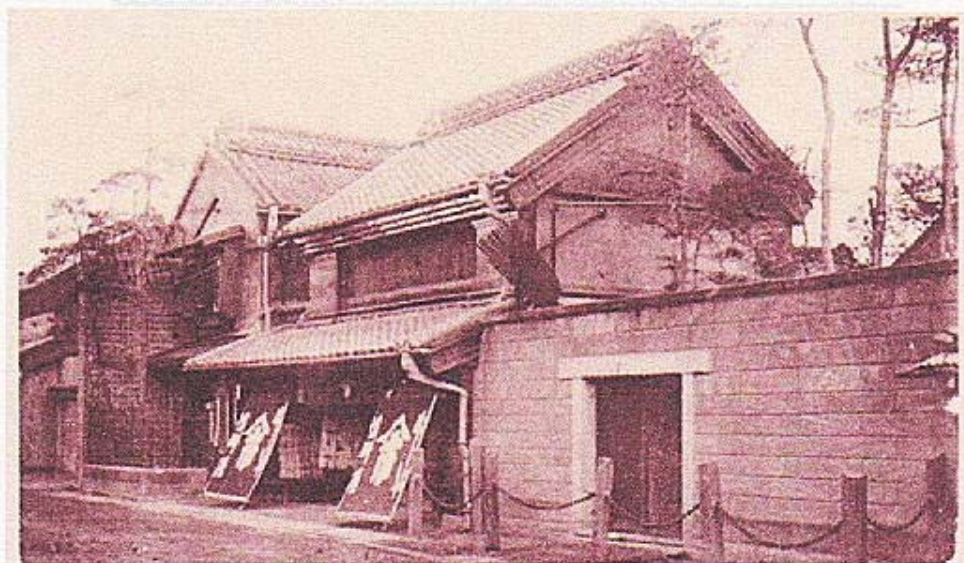
## 越ヶ谷久伊豆神社の景



越ヶ谷久伊豆神社の景

っている。おぶいひもで赤ん坊を背負っている子供達がお  
り、神社周辺がこの子達の散歩道になっていたと想像でき  
る。参道の石畳は見られず、烏居をくぐってしげばらく  
進むと、かやぶき屋根の本殿（拝殿）があった。

## 越ヶ谷町 塗師市呉服店



越ヶ谷町 塗師市呉服店

電話五番 越ヶ谷町 塗師市呉服店 二〇三二番

江戸時代から塗師屋の屋号をもつ有力な呉服商だ  
った当主小泉市右衛門の土蔵造りの店先の絵葉書  
である。中町の屋敷内には今でも土蔵が二、三棟  
残されている。現在（下の写真）では、宿場町の  
名残をとどめた家並みは越ヶ谷・大沢でも数少なく  
なっている。

古写真は、  
迎攝院住職  
からいただ  
き、掲載許  
可を得たもの。  
絵葉書は、会  
員が所持し  
ているもの  
で、初見のも  
のである。

平成十九年六月





## 講演会報告

### 見田方遺跡 発掘四十周年記念講演会

日時 平成十八年八月二十六日(土)  
場所 越谷市中央市民会館 劇場  
講師 常任理事 高崎 力  
主催 NPO法人 越谷市郷土研究会  
後援 越谷市教育委員会・越谷市文化連盟  
入場者 二六〇名



熱の入った講演をされる高崎常任理事

「越谷地域には古代の遺跡はなく、その存在はありえない」というのが古墳学者や歴史学者の定説だった。それをくつがえすように、昭和三十四年に遺跡が発見され、その初期の段階から関わって来られたのが高崎先生です。その後、二度にわたる大掛かりな発掘調査でも陣頭指揮をとられて貴重な多くの遺物を発掘された。

#### 見田方遺跡の発見から発掘調査までの経過

昭和三十四年四月 大相模耕地のほぼ中央に位置する通称一本杉を古墳と想定して調査する

昭和三十五年二月 通称四条落として素焼きのカメを発掘

昭和三十六年一月 農道下より多数の土器を発見、復元する

昭和三十七年二月 土鍬一個、高杯一個を発掘。排水堀の断面に住居址を発見

昭和四十一年六月 大相模地区の古代住居址として研究発表

昭和四十一年十月 発掘許可申請書を文部省・埼玉県に提出

昭和四十一年十二月 乾田期を利用して第一次発掘

昭和四十二年三月 第二次発掘

発掘調査の成果 住居址2 遺構5 土器(土師器 須恵器) 漁具(土玉 土鏝 軽石) 祭具(滑石製双孔円盤 など) 木器 用材(住居用柱 板) 木の実(桃の実) その他

土器の復元作業は昭和四十四年に大沢小学校で行った

昭和四十六年三月に「見田方遺跡発掘調査報告書」を発行

土器破片の発見から県や市を動かし発掘調査にいたる経緯は当事者でなくては語ることの出来ないもの。見田方遺跡に四十年以上関わってきた高崎先生の集大成ともいえる二時間のお話だった。発掘当時の映像フィルムの映写も、正に臨場感たっぷりな講演会だった。講演会で配布の資料と当日の模様を撮影したDVDを夢空感に置きますのでご利用下さい。

## 講演会報告

さいとうとよさく

### 画家・斎藤豊作 越谷からパリへ

日時 平成十九年一月二十八日(日)  
場所 越谷産業会館  
講師 常任理事 高崎 力  
主催 NPO法人 越谷市郷土研究会  
後援 越谷市教育委員会 越谷市文化連盟  
入場者 七十五名



資料を掲げて講演される高崎常任理事

当日の講演会の記録を撮影したDVDビデオを『夢空感』に置いてありますので、どうぞご覧ください。

### 斎藤豊作のプロフィール

- 一八八〇年(明治十三) 埼玉県埼玉郡大相模村(現 越谷市大相模町)で味噌醸造業を営む斎藤家の次男として誕生
- 一九〇五年(明治三八) 東京美術学校洋画科卒業
- 一九〇六年(明治三九) 渡仏、パリのアカデミーで絵の勉強を続ける
- 一九一二年(明治四五) 帰国、東京小石川区に住む
- 一九一四年(大正三) 来日したフランス人画家と結婚
- 一九一五年(大正四) 長男(タモツ)誕生
- 一九二〇年(大正九) 渡仏、セーヌのマルシユ通りに新居をかまえる
- 一九二九年(昭和四) 長女(ミツ)誕生
- 一九四〇年(昭和十四) ドイツ軍の侵攻によりパリ陥落
- 一九四四年(昭和十九) タモツ斎藤は、ドイツ人女性と結婚。ドイツの戦局悪化からフィンランドに避難したが、ソ連軍の要請で日本に送還され、現さいたま市の親戚に身を寄せた
- 一九四五年(昭和二十) 斎藤豊作は息子夫妻がフランスを去った後もフランスにいたため、他の日本人と一緒に逮捕され、拘禁された
- 一九五一年(昭和二六) 豊作 フランスで死去 享年七十一歳

『総括』越谷の裕福な家に生まれ、画家となり当時まれな国際結婚をフランスに渡り、画家として活動を続けた。梅原龍三郎らと二科会を設立し監査委員となる。斎藤豊作の描いた作品「風景」は市の文化財となっている。高崎先生は斎藤豊作の調査に四十年以上関わってきた。その集大成ともいえる貴重な講演会だった。

## 三ノ宮卯之助 生誕2000年記念講演

日時 平成十九年八月二十五日(土)

場所 越谷市中央市民会館 劇場

講師 常任顧問 高崎 力

主催 NPO法人 越谷市郷土研究会

越谷市教育委員会

後援 越谷市文化連盟

入場者 二一〇名

越谷出身で日本一といわれる人物は、力持ちの三ノ宮卯之助ただ一人である。卯之助は江戸時代に活躍した人で、越谷市大袋地区の三野宮で生まれ、今年(平成十九年)が、ちょうど生誕二〇〇年にあたる。

卯之助は力持見世物一座を結成し、江戸や埼玉・神奈川のほか、大阪・姫路まで興行



「日本一の卯之助」を垂れ幕を使って説明される高崎先生

して歩いた。持ち上げたという力石は全国に三十七個が現存し、越谷市北川崎の川崎神社では十七個もの力石がある。高崎先生が卯之助に関わるきっかけとなったお話しや、裏話など卯之助の調査に半世紀以上の年月をかけて一つ一つ明らかにして来られた成果の集大成といえる講演会だった。

三ノ宮卯之助を日本一として垂れ幕を使って説明された。

①江戸時代には全国に力自慢が多くいたが、三ノ宮卯之助と刻まれた力石は日本一多い。

②徳川將軍御上覧の栄を得たのは卯之助ただ一人。

③桶川・稲荷神社にある卯之助と刻印の大磐石力石の重さ(実測値)は六一〇kg。

④江戸力持番付で東の大関(当時の最高位)になる。

天保四年(一八三三)六月と嘉永元年(一八四八)六月。

⑤力持巡業往復距離 天保年間、卯之助は関東周辺をはじめ、江戸から大阪・姫路までの遠距離を興行して歩いた。

⑥祈願成就の力石

甲府・稲積神社にある『文殊の石』と呼ばれる力石は、受験や恋愛成就の石として祈願の対象となっている。このような力石は卯之助の力石にしか見られない。

⑦石像になった力持 卯之助

高崎先生が、姫路市魚吹八幡神社を調査で訪れた時に官司に卯之助の話をするとうたいへん感激され、それをきっかけに立派な石像を造ってしまった。高崎先生も「まさか石像まで造るとは」と驚いたそうです。石像になった力持は卯之助ただ一人。

高崎先生の熱の入った講演に、多くの聴衆は満足していた。

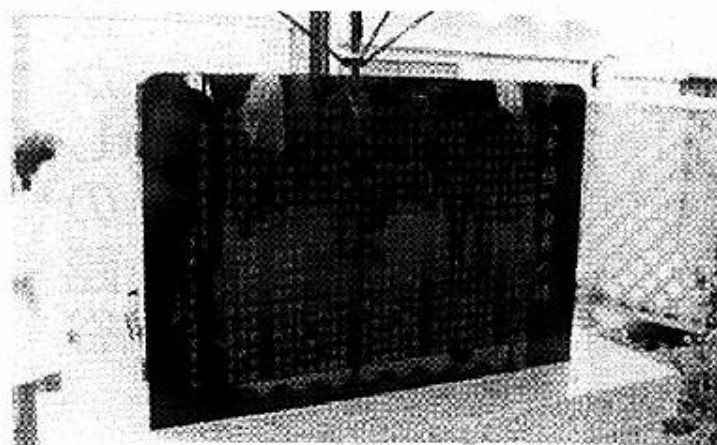
# 天嶽寺前「寺橋」由来の碑

— 平成十八年(二〇〇六)九月十七日 —

## ☆ 高崎常任理事が記念講演 ☆

天嶽寺と久伊豆神社の前を流れる元荒川に宮前橋があります。この橋の旧名は寺橋といい、昭和三十四年以前は木橋で、記録によると、文明十年(二四七八)に開基とされる天嶽寺が、河川改修で閉ざされていた町との通行をスムーズにするため、住職の発願により架けられた、とあります。

付近の方々には、子供のころからこの橋を渡って学校へ通い、買い物に墓参りにと生活に欠かせない橋です。



宮前橋の川岸に建つ「寺橋」由来の碑

越谷音頭に「綾瀬、古利根、元荒川に渡る寺橋、平和橋」とあるように、多くの越谷住民に親しまれている橋でもありません。寺橋が宮前橋と名称が変わりましたが、寺橋の由来を後世に残す一環として「寺橋由来の碑」が建立されました。

式典の当日は、越谷市郷土研究会の高崎常任理事が、越谷市郷土史家として出席された。大勢の参加者の見守る中、式次第にのっとり、越谷木造保存会の方々のお祝いの木造で盛り上がる中、天嶽寺の住職の榎本融成氏を含めた来賓代表として高崎常任理事は「寺橋由来の碑」の除幕を行いました。

高崎常任理事は寺橋にまつわる記念講演を、大勢の参加者の前で行いました。講演された内容は今では忘れさられた貴重な話があり、参加者のみなさんは感心して耳を傾けていました。越谷市郷土研究会では、講演会の模様をDVDで撮影・記録しました。夢空感に置いてありますのでどうぞ、ご利用ください。



「寺橋由来の碑」の除幕をされる来賓代表者

# 映像で見る懐かしの越谷

日時 平成十九年六月二十四日(日)  
場所 越谷市産業会館(商工会)  
解説 越谷市郷土研究会 常任顧問 高崎 力  
参加者 一三〇名

越谷市では「激しく移り変わる越谷の姿を後世に残したい」と、昭和四十六年(一九七二)、毎日映画社に委託して十六ミリ記録映画を製作した。第一作の「こしがや」は約二十七分のカラー映像。当時の上映は公民館や学校で実施し、多くの市民に好評で三万五千人以上の市民が鑑賞したとの記録がある。

続いて昭和四十八年(一九七三)に、第二作「豊かな明日をめざして」を約二十六分カラーで製作。主題は都市化に追いつけぬ市の行政を市民サイドで見た形で撮影したものなど。

完成後三十年以上経過した昨年暮れ、市立図書館の膨大な資料の中から十六ミリフィルムの存



昭和 46 年製作「こしがや」の表題



昭和 48 年製作「豊かな明日をめざして」の表題



昭和 46 年当時の越谷駅

在を知った当会会員が市役所を尋ね、当時のフィルムを探し出していただいた。その後、市から上映許可を得て今回の上映会の開催にこぎつけた。

上映当日の午前は当会の総会を開催。午後から「映像で見る懐かしの越谷」の上映会を開いた。会場の越谷産業会館(商工会)の一階集会所は一般の方も含め一三〇人以上の参加者で満員の盛況だった。

フィルムは劣化が進んでいたためカラーでの映写を断念し、モノクロに変換して行った。七十三項目の多岐にわたる映像は「古い映像でもあり、若い方にはわかりにくい個所もあるかも知れない」と、常任顧問の高崎先生が作られた明快な資料との確なお話で進められ、映し出される懐かしい映像に大勢の方が釘付けになっていた。有意義な映写会だった。

## 小学校の授業(社会科)協力について

小学校の授業は、国語・算数といった昔からの授業の外に地域社会の移り変わり等を学ぶ授業(社会科)も設けられています。

この社会科授業の一コマとして、(一)河川のはたした役割 (二)戦争中のくらし といったテーマで授業を計画し、更にこの授業をより実りのあるものにするため、私も越谷市郷土研究会に協力要請がありました。越谷市郷土研究会は、地域社会のみなさん方と共に歴史認識を深めていこうとする活動を続けており、小学校の要請と一致するためお引き受けすることにしました。

### 〔実施内容〕

- 一、対象小学校 越谷市立西方小学校
- 二、実施日 平成十七年十月十二日
- 三、授業内容と研究会の協力内容



クラス全員で青山理事の熱心な指導に聞き入る

(一)授業内容 対象四年生 「河川のはたし割りわり」というテーマとし、河川探検隊というチームを編成し、河川に沿って検証して回るという課外授業

(二)協力内容 当会の役員六名が参加。探検チームの出発地点(瓦曽根溜井)及び探検コースの要所〜に待機。まず、出発地点で次はそれぞれの場所にチームのメンバーが到着した時に、その周辺の状況(川の流れやその場所に何が合ったかなど)を説

明する。

### 〔実施内容〕

一、対象小学校 越谷市立鷺後小学校

二、実施日 平成十六年十一月十二日

三、授業内容 対象 六年生

「戦争中の暮らし」というテーマで、当会の役員が実際に経験した内容を整理して話すという教室内の授業

四、具体的な内容のあらまし

(1)事前の準備 六年生は四組あるため、当会からの派遣講師は四名。講師四名の話す内容が大きく異なるようでは、授業としてまずいので、講師四名と会長の計五名で授業内容の打ち合わせを行った。

(2)授業の内容(要約) 時期としては、昭和十六年十二月から同二十年八月までに起こった変化を、学校生活、家庭生活等について話をした。

学校生活―戦争開始当初は、ほとんど変化はなかった。空襲が激しくなり、東京都内の小学校は授業を続けられなくなった。そのため生徒は ①学童疎開 ②縁故疎開 ③家族と共にいる(学校には行かない)のいずれかの選択をせまられた。地方の小学校は今まで通りの授業をしていた。

家庭生活―物資の不足、とりわけ食料の不足が激し

## 社会科「戦争中の暮らし」



越谷市郷土研究会の皆様 ありがとうございます

越谷市立鷺後小学校 H17. 11. 30 (水)

教室での役員の授業風景を写した

プレートが鷺後小から届けられた

くなくなった。主食の米は配給制であり、配給量もだんだん少なくなっていくた。  
環境の変化―このような状況下で時が流れ、日本は戦争を続けていく力がなくなり、終戦を迎えた。  
戦争は多くの人を苦しめ、また大勢の死傷者を出した。二度とやるべきではない。

# 文化財パトロール

## 平成十九年度 出羽地区の石仏と石塔を調査

越谷市郷土研究会では、毎年、市内に散在する文化財を地区ごとに巡回してまわり、その現状を克明に観察・記録・保存する活動を行っています。

今年の文化財パトロールは、出羽地区の旧村名で四丁野村・大間野村・越巻村・七左衛門村・谷中村・神明下村の石仏・石塔を中心に調査しました。調査の元となる資料は、加藤副会長が描いた石仏・石塔の詳細なスケッチです。

調査内容は、「文化財記録カード」に記載されている点検項目に沿って行い、記録していくものです。

- ①パトロール実施年月日
- ②調査員名
- ③所在地・名称
- ④当該場所に現存しているか、変更はないか
- ⑤対象物に破損はないか
- ⑥周辺の環境に問題はないか（ごみの投棄など）
- ⑦今後、破損や移動させられる恐れはないか
- ⑧特記事項

この越谷市郷土研究会の文化財パトロール調査活動を、平成十九年（二〇〇七）三月、テブコケーブルテレビが取材して、その模様を関東地方全域で放映されました。ケーブルテレビで放映されたビデオテープとDVDは、夢空感に保管してありますので、どうぞご覧下さい。

## 出羽地区 調査報告

二月十三日から三月十四日にかけて実施した調査は、一〇七基の石仏・石塔を六グループにわけて十六人で実施した。石塔の中には祠内にあつて神酒・献花・線香が置かれて大切にされているものがある反面、雨天にさらされる青苔状のものが広がったものや、かなり風化の進んでいるものも見られた。道路際にあるため今後、道路工事による移動の懸念があるものも数点あった。

今回の調査では一部破損が三點、移動されたものが一点あったが、紛失しているものはなかった。



石仏にある傷のフーフを丹念に調査



— 越谷市郷土研究会 恒例イベント —

親子で作ろう かわいいおひなさま!

平成十九年(二〇〇七)二月十七日実施

越谷市郷土研究会では、毎年の恒例行事として大人を含めた子供たちにも楽しめることを念頭にさまざまなイベントを実施しています。開催場所は越谷市保存民家・旧中村家住宅内です。平成十八年度は次の五つのテーマで実施しました。

- ① 十八年五月二十四日 みんなでつくりましたよー!江戸あねさま人形(講師 宮内和代さん)
- ② 十八年七月二十九日 親子のツールペインティング教室(講師 黒澤利恵子さん)
- ③ 十八年十月九日 とおかんやのわら鉄砲 復活イベント(企画 金岡由紀子さん)
- ④ 十八年十一月十四日 中村家2周年記念イベント 昔の遊びで遊んでみよう(越谷教委と共催)
- ⑤ 十九年二月十七日 親子で作ろう かわいいおひなさま!(講師 岩瀬静江さん)

岩瀬静江さんの講師で行われた「親子で作ろう かわ

いいおひなさま!」。これは、昔遊びの風呂敷人形を大人と子どもが共同で作るものです。材料は正絹をつかったこともあり、短い時間で仕上げるのが難しくなったため、急ぎよ、お手玉人形のお雛様を作ることになりました。お母さんと一緒に、子供たちも上手に仕上げていて、家に持ち帰って飾っていたらとの願いを込めて、岩瀬さんが熱の入った指導をされていました。

当日は広々とした敷地と冬枯れの芝生の中に、時間がゆったりと流れていくようでした。

このような催しを通じ、子供たちにとっても「ふるさと」となる越谷に、少しでも興味をいだいてもらえたらと考えています。



岩瀬さんの指導の下 大人も子供たちも一生懸命

# 越谷市郷土研究会 史跡めぐりの記録

【第343回】平成17年(2005)7月22日～【第370回】平成19年(2007)7月24日

回	月日・曜日	行き先	案内者	参加者
343	平成17年7月22日(火)	武蔵国府・古戦場・宿場の町・府中を訪ねる	水上 清	81
344	9月6日(火)	「遣唐使と唐の美術」見学と岩崎邸	藪 高道	49
346	10月23日(日)	つくばエクスプレスで宇宙へ行こう	増岡武司	98
347	11月11日(金)	渡良瀬に沿って(バス)	水上 清	89
348	12月17日(土)	師走～品川史跡めぐり	菅波昌夫	60
349	平成18年1月3日(火)	亀戸七福神と亀戸天神初詣	西村 功	85
350	2月11日(土)	日本橋周辺散策	藤川吉洋	100
351	3月5日(日)	秩父路に長瀬をめぐる	古澤 孝	103
352	3月18日(土)	越谷六阿弥陀めぐり	加藤幸一 菅波昌夫	49
353	4月24日(火)	越谷・埼玉鴨場	増岡武司	40
354	4月26日(水)	千葉・加曾利貝塚・御殿跡(バス)	宮川 進	74
355	5月9日(火)	歴史のまち・太田を訪ねる(バス)	水上 清	67
356	6月14日(水)	本土寺と小金宿界限	中村幸夫	83
357	7月22日(土)	中川船番所と荒川ロックゲート	加藤幸一	61
358	9月30日(土)	鹿沼彫刻屋台と川上澄生美術館	菅波昌夫	74
359	10月28日(土)	日本が二つ、写楽も田園風景も	古澤 孝	55
360	11月5日(日)	さいたま芸術劇場「埼玉お神楽」公演		63
361	11月28日(火)	伊勢原と大山参り(バス)	水上 清	87
362	12月11日(月)	北鎌倉・建長寺で座禅体験	宮川 進	48
363	平成19年1月3日(日)	日本橋七福神めぐり	加藤幸一	75
364	2月10日(土)	春を待つ市内神明・西新井	山口美津江	71
365	3月30日(金)	赤城山麓ゆめ紀行(バス)	水上 清	90
366	4月24日(火)	埼玉鴨場見学	藪 高道	30
367	4月27日(金)	醤油が作った野田の文化と歴史	木原徹也	93
368	5月19日(土)	蒲生～市役所 歴史散歩	藤川吉洋	55
369	6月9日(土)	佃島と築地を訪ねる	古澤 孝	125
370	7月24日(火)	川口SKIPシティ 懐かしの越谷の映像を見る	水上 清	50

## 第343回 史跡めぐり

### 武蔵国府・古戦場・宿場の町 府中を訪ねる

日時 平成17年7月22日(火)  
天気 曇り一時晴れ  
参加者 81人  
案内者 水上 清  
記録 柿沼 孝行

南越谷駅から武蔵野線に乗り、終点の府中本町で降りる。武蔵国総社である大國魂神社に詣でる。神域にはケヤキ・イチヨウ・モミなどの老樹が散在し、正面に拝殿、背後に本殿が建つ。その威厳と神々しさに胸が打たれる。有名な

や高札場跡から昔日の府中宿の賑わいを想起する。

高台にある高安寺は、平将門を討った藤原秀郷の居館跡だそうで、秀郷稲荷があり、その脇に「弁慶の井」と呼ぶ古井戸、近くに弁慶坂や弁慶橋がある。鎌倉から京へ向かい途中のこの府中に悲観にくれる義経・弁慶主従の伝説があるのもうなずける。

くらやみ祭りは関東三大奇祭の一つ。二の鳥居から表参道西側約200mにわたってケヤキ並木が続く。これは馬場大門ケヤキ並木と称する国の天然記念物であり、また源頼義・義家父子、源頼朝、徳川家康はこの神社を厚く尊崇し多くの寄進をしたと聞く。

旧甲州街道が鳥居と並木の間を横切っており、この街道に沿った現在の町並み

分倍河原駅前には馬上で太刀を振りかざす新田義貞公の勇壮な像があった。バスで「府中市郷土の森博物館」へ向かう。ここには博物館本館をはじめ移設復元された古民家や武蔵野の雑木林・池・梅園などがあり、まさに「森の博物館」である。無料休憩所で昼食をとり、午後は本館見学。学芸員の説明は親切で分かり易かった。歩いて学んだ武蔵国府・古戦場・宿場の町である府中を改めて復習した感じである。

最後はサントリー武蔵野ビール工場で、見学の



武蔵国総社「大國魂神社」の拝殿



大國魂神社の大きな案内石柱

後ビールを試飲する。丹沢水系の天然水から生まれた出来立ての生ビールの旨いこと。あゝ甘露。そして府中本町より始発に乗ってユッタリとほろ酔い気分帰途に着いた。暑さを吹き飛ばす楽しい一日であった。

### 第344回 史跡めぐり

#### 「遣唐使と唐の美術」見学と岩崎邸

日時 平成17年9月6日 (火)

天気 雨

参加者 49人

案内者 藪 高道

記録 藪 高道

前夜から台風が関東地方に上陸するかもしれないとの天気予報であった。果たして開催できるかたいへん心配でした。開催については当日の朝の天気予報で判断することになっていたので、参加者がどれだけ参加していただけるかも心配でした。朝の天気予報でようやく台風は関東地方には上陸しないとの予報であったので開催を決定した。

越谷駅より日比谷線にて上野駅で下車し、東京国立博物館で開催している「井真成展」を鑑賞する。「井真成」は八世紀前半に中国へ渡り、当時の都「長安」で仕え、将来を嘱望された人物で、日本に帰ることなく現地で死亡した。「井真成」は遣唐留学生で名前も史書にはなく、一体誰を指しているのか謎の部分が多かった人物であった。しかし、最近になって「井真成」の墓誌が発見され、謎の部分の部分が解明された。展示室にはその時代の「金」「銀」の器・陶芸品などと「唐」の時代の文物、遣唐使ゆかりの資料等八十点ばかりを鑑賞

する。また、同時に「岡倉天心」と「横山大観」が模写したという、雪舟の「四秀山水図」の模写作品をも鑑賞する。

次に、上野東照宮に立ち寄る。祭神は「徳川家康」で、寛永四年に「藤堂高虎」が営造したもので、明神大鳥居と参道脇にある石灯笼・唐門等が有名である。

また、大きな石灯笼があり、余り大きいのでお化け灯笼という名がついたともいわれている。そして不忍池を通り抜けて岩崎邸に向かう。その道すがら不忍池のはすの花がとてもきれいに咲き誇っていたのが特に印象的であった。このはすを戦後の食糧難の時代に食べたともいわれている。

岩崎邸は岩崎弥太郎の長男である久弥が明治二十九年に竣工したもので、和洋館並型住宅で、創建時は洋館が百六十坪、和館が五百坪の大規模なもので、現在は和館の大部分がなくなり、大広間の座敷が現存している。建物の内部についての説明はボランティアの方の説明を受ける。各室には大きな鏡と暖炉があり、また壁・床・建具に至るまで、手の込んだものを使用しており、豪華で風格があり、当時の財閥の生活が偲ばれた。見学後、外に出ると心配していた台風も通過した後で、雨風もやみ、ほっと胸をなでおろした瞬間でした。



異国情緒たっぷりな旧岩崎邸の洋館だった

秋晴れのなか、全員南越谷駅を元気に出発。南流山駅にて乗り換え、待望のつくばエクスプレスに乗車。車中、皆それぞれが遠足気分です。車窓に広がる沿線風景を楽しむ。なかには他の団体の人たちと仲良く話をはずませ和気あいあいのうちに、所要時間二十四分と快適なスピードでつくば駅に到着。駅前バスセンターより現地チャーターの貸切バス二台に分乗、第一見学先の筑波宇宙センターに向かう。

### 第346回 史跡めぐり

## つくばエクスプレスで 宇宙へ行こう

平成17年10月23日(日)  
天気 快晴  
参加者 98人  
案内者 増岡 武司  
記録 増岡 武司

れ、野口宇宙飛行士の帰国報告会が特別仮設野外ステーションで開催されるなど、いろいろな催しが行われ、延べ千人の来場者とかで、さすがに広い構内も人があふれ、大盛況のありさまであった。入館手続き後、我々一行は特別許可で貸切りバスのまま構内各見学施設を回ること

のでつくば駅に到着。駅前バスセンターより現地チャーターの貸切バス二台に分乗、第一見学先の筑波宇宙センターに向かう。

○筑波宇宙センター(JAXA)

この日は、「宇宙の日」として宇宙センターが特別に無料公開さ

ができ、専属ガイド及び大河内課長の案内説明で大満足。各施設は我が国の宇宙開発・最先端技術を結集した設備で、それぞれが初めて眼にするものばかりで、興味津々驚きの連続で、とりわけ宇宙服の精度の高い作りとその超高額な金額に歓声をあげる人も多く、宇宙開発に対する関心が一段と深まった。

○つくばエキスポセンター(財)筑波科学万博記念財団。入館手続き、入館料、一人二百四十円を済ませ、

あらかじめ予約しておいた大休憩所で全員がそれぞれ持参の昼食を取り、少休憩後館内の見学に入る。このエキスポセンター

は館内の展示構成が見学者各自の自由参加型になっているため、団体行動でなく自由見学とし、各自めいめい小グループで見学した。

見学者それぞれが童心に返り、生き生きとした表情で実に楽しそうであった。

つくばエクスプレス駅発快速エクスプレス号に乗車、帰路に着く。車中一日の見学の様子に思いをはせ、南流山駅にて乗り換え、南越谷駅到着後解散式を行い、つくば見学コースの行事も無事終了した。



NASAの宇宙服を前にくぎ付けになった

大型バス二台に分乗し、東北自動車道から日光宇都宮道路に入り、日足トンネルを経て足尾町に入る。今日のツアーの前半は足尾銅山関連の施設・遺跡めぐりである。

バスは日本最初の間藤水力発電所跡、日本最初の道路用鉄橋である古川橋の前、今日は寂れてみる影もない赤倉部落を通過する。

落を通過する。

### 第347回 史跡めぐり

#### 渡良瀬に沿って

日時 平成17年11月11日 (金)

天気 曇り

参加者 89人

案内者 水上 清

記録 堤竹 宏吉

する。前を流れる松木川の対岸には足尾精錬所の遺構がそびえており、周囲の破壊されつくした自然を併せなんとも荒涼とした景色となっている。

道路の突き当たりは足尾砂防ダムで、四十年近く経った今日、ダムはその使命を終え草原と化しつつある。ダムの

龍藏寺には有害な亜硫酸ガスによる煙害で廃村になった松本村の無縁仏を合祀したピラミッド型の墓石の塔や銅山に一生をささげた工夫の墓が多くあり、胸が痛む。寺の境内には百年前は大木が茂っていたが煙害で枯死、周囲も不毛の地となった由。しかし砂防工事と植林によって緑に包まれるほどに変わった現状を認識



銅山観光



高津戸溪谷



富弘美術館



銅親水公園

下には銅親水公園があり、展望台から雄大な自然の景観を楽しむことが出来た。公園内の足尾環境学習センターでは足尾の歴史や自然・公害・砂防・治水事業などの環境問題をパネルと映像でわかりやすく紹介、説明してくれた。

足尾銅山観光ではトロッキョ電車で構内に入り、明治・大正・昭和とそれぞれの時代の銅山の様子を見学。鑄銭座では江戸時代の足字銭の製造工程を学ぶ。

ツアーは後半に入る。バスは草木ダムに面した富弘美術館に到着。先ずレストランで昼食。今年四月にリニューアルオープンした美術館は内外展示と共に素晴らしい。展示作品を堪能。

最後は高津戸峡。まさに紅葉真っ盛り。切り立った断崖

と奇石、澄んだ水の流れに映える兩岸の紅葉。遊歩道から溪谷美を楽しむ。上流のはねたき橋を渡り一周する。

バスは予定通り南越谷に到着。心配した雨も降らず楽しい一日であった。

晴天に恵まれ一行七十人で、越谷宿より品川宿めざして、定刻に出発する。押上駅で乗り換え、大森海岸より最初の史跡「鈴が森刑場跡」に予定通り到着。案内者の説明で当時の処刑に使用された台石や供養塔が多数あり、丸橋忠弥や八百屋お七など歌舞伎や講談に登場する人物などが偲ばれた。

## 第348回 史跡めぐり 師走～品川史跡めぐり

平成17年12月17日(土)  
天気 晴れ  
参加者 60人  
案内者 菅波 昌夫  
記録 小泉 平八郎

れた。

次に品川歴史館で東海道第一の宿場として栄えた品川宿と明治十年、モース博士の発見した大森貝塚で、原始古代から現代にいたる歴史について説明を受けて、大森貝塚遺跡庭園を見学する。晩秋の柔らかな陽を受けた庭園での弁当は一段とうまかった。

午後は、旧東海道にある海雲寺で干鉢荒神堂の天井絵を拝

観。品川寺は弘法大師作といわれる水月観音。洋行帰りの釣鐘、江戸六地藏など長い歴史を感じた。門前のこの街道が大名行列や旅人が行き交った道と懐かしみながら天妙寺に着く。本堂裏には桃中軒雲右衛門・伊藤一刀斎・芳村伊三郎・お富さんなど有名人の眠る多くの墓があった。

次の清光院は、徳川譜代奥平家の大名墓碑が八十八基、永井家の四十九基と歴代の墓誌群は壯観であった。目黒川を渡ると一帯は元東海寺の寺域で、四万七千坪の寺領を有し、寛永寺、増上寺に次ぐ大寺院だったという。現在は敷地内を道路や鉄道が通り、品川硝子工場が出来て、かつての壮大さは失われたが、沢庵和尚・千利休・渋川春海・賀茂馬淵、鉄道の父井上勝など特異な墓石があり、見ごたえがあった。

最後に品川神社へ急ぐ。龍の彫られた大鳥居をくぐって急勾配の石段を登ると、境内の参道が開け、狛犬や石燈籠が並ぶ正面に朱塗りの拝殿があり、一同参拝を済ませ、宮司さんより御祭神や宝物殿の説明を受ける。境内の東端に

ある富士塚に立ち寄る。山開きの行事は今も毎年行われている。

師走の日没は思いのほか早く、越谷に帰着時には、街の灯が温かく迎えてくれた。



江戸時代の品川御仕置場 鈴が森刑場跡

去年の暮れから続く異常な寒さの中、新しく入会された方たちも入れて八十五名が今回の史跡めぐりに参加され、越谷駅に集合した。東武線で一時間ほど乗車し、曳舟駅で乗り換えて亀戸水神駅で降りた。

## 第349回 史跡めぐり 亀戸七福神と亀戸天神初詣

日時 平成18年1月3日(火)  
天気 くもりのち晴れ  
参加者 85人  
案内者 西村 功  
記録 有元 淳子

御朱印をいただく人たちは幹事の方が先導し、後に続く列は浄光寺の寿老人に参詣した。浄光寺では都内でも珍しい丸彫りの石の庚申塔があつて、首は後から付けたとかで、台座に鶏の彫刻があるので庚申塔と判った。次は、東覚寺の弁財天への途中では、他の七福神めぐりの団体と出会ったので、まぎれ込まないように気をつけてながら自分たちのグループについて歩いた。

しかし、一緒に歩いていく仲間が熱心に説明してくださる案内者や幹事さんの話にうなづきながら聞いているので、だんだん明るい気持ちになつてきた。

普門院の毘沙門天に参詣して次の天祖神社で福祿寿にお参りして気がついたら、今までお参りした寿老人・恵比寿様・大黒様・毘沙門天・福祿寿は御簾が下がっていたり、暗くて全然拝見できなかったが、龍眼寺の布袋様は木彫りのお姿そのまま拝顔できた。何だかお正月の七福神めぐりはお姿をはつきり拝みたいものだ。

最後に亀戸天神にお参りして、ここでお開きとなつた。山門から太鼓橋を渡つて本堂の方まで大混雑で何列もの人の波で横の方からお参りした。学生の方たちは、もうじき受験なので真剣そのものだ。今日の歩きは約五キロ余り、余り疲れを感じなかった。

香取神社は、一社で恵比寿様と大黒様が祭られている。今は真冬なので、どこの神社も仏閣も境内は裸木が寒そうな常緑樹で花はせいぜい山茶花くらい。その上、今年は何年か比べてきびしい寒さなので気持ちまで暗くなつてしまふそうだ。



亀戸天神で案内の西村常任幹事の説明を聞く参加者



## 第350回 史跡めぐり

### 日本橋周辺散策

日時 平成18年2月11日 (土)  
天気 晴れ  
参加者 100人  
案内者 藤川 吉洋  
記録 根岸 久子



今日は恵まれた日差しの中で、総勢百人の方々が日本橋周辺の史跡めぐり半日コースに参加し、スタートした。一度に大勢が電車に乗り降りするのは、いつものことながら役員さんが一番神経を使うところなので大変だと感じた。日本橋に向かう電車の中では、資料を熱心に見ている

人たちが、買い物やおいしいものを食べようなどと様々なコースを決めている人もいた。

日本橋の地下道を出て、すぐに一石橋。親柱に迷子しらせ石標があり、今も昔も町内の皆さんが協力し合う心配りは、いつの世も同じだと感じた。

貨幣博物館では、豊臣秀吉によって铸造された天正大判は想像していたより、すごく大きくて立派なのに驚いた。

日本橋に隣接する、道路元標・高札場・さらし場・魚河岸発祥の地碑などの史跡の現状は、ただ急ぎ足で行き交う現代人の流れに飲み込まれてしまっているように感じた。

都会的に整備された一角、三井越後屋の外観を再現した歴史館に着いたところで、のども渴き休息をとる。

元気を取り戻し、少し行った道路の反対側に十軒店跡があった。案内者の説明では、越谷の会田左右衛門が雛人形作りを学んだところといわれている。

その先の千疋屋総本店では、初代の弁蔵が越谷で産出された果物や野菜類を商う店を、日本橋で構えたのがはじまりと説明を受けた。全国的に有名な千疋屋と越谷のつながりが判り、身近なものと思えてくる。三井記念館入口で入場券をいただ

き、「ごゆっくり鑑賞してください」とのこと、現地解散となった。

日本橋周辺には数多くの史跡があることがわかり、近くても一人ではなかなか行けない場所に参加することが出来たので、とても思



日本橋のかたわらで説明を聞く大勢の参加者

最初に本日の行程の説明と注意が案内者からある。まず、羽生駅で秩父鉄道に乗り換え長瀨駅まで急行秩父路三号を利用し、十時半頃に到着予定。降車後、宝登山周辺を徒歩で史跡をめぐり、駅へ戻り十六時十二分の急行を利用し越谷には十八時二十分ごろの到着・解散を予定しているとのことであった。

田舎の駅のたたずいまいを長年残して来た羽生駅は、東武・秩父両線一体型の二階建てに新築され、三両編成の急行がどこか似合う駅に生まれ変わった。

電車は熊谷と寄居で乗客を増やし、車内は満員となる。正方形の赤い屋根の長瀨駅と駅前広場には形の良い赤松が数本、来訪者を迎えてくれた。長瀨山不

動寺の春を呼ぶ長瀨火祭り等、一部獅子舞奉納が始まっていて、醍醐寺山ゆかりの山伏姿の修験者たちによる、ほら貝の音を先頭に連行（れんこう）も行われる。にぎやかな駅前広場、一時間半ほどの電車の旅、準備運動のあと、越谷市郷土研究会の二色の小旗の出番となった。

#### 長瀨町郷土

資料館と隣接する旧新井家住宅の竹林一体を左手に秩父三大神社の一つ宝登山神社はその先の右手奥の小高い丘の林に溶け込むように鎮座されている。ゆるやかな上り坂、北へ伸びる一本道を進むと、ロープウェイ駅に着いた。

海拔四九七メートルの宝登山の山頂駅へは、五十人乗りのゴンドラが標高差二二六メートルを五分ほどで運んでくれる。先頭グループは十二時少し前に到着し、散策とレストハウスでの具沢山の「おつきり込みうどん」を味わった。柔らかな日差しの下、武甲両神などの眺望を確かめ、咲き誇る蠟梅の香りと輝きを愛でて、下山の行列に並んだ。午後一時眼下で花火が上がり、ドーンという音と白い煙が流れ始めた。春を告げる火渡りの荒行開始の合図だ。



燃えさかる豊火には宝福招来と開運厄除けのご加護がある

## 第351回 史跡めぐり 秩父路に長瀨をめぐる

日時 平成18年3月5日 (日)  
天気 晴れ  
参加者 103人  
案内者 古澤 孝  
記録 小林 光男

今日は彼岸の入り。昨日の春の嵐がうそのように晴れ渡り、おだやかな日差しの中、蒲生駅に会員四十九人が集合した。私も越谷に住んで三十五年余り、家と会社の往復で越谷のことは何もわかりません。今回の越谷・六阿弥陀めぐりを楽しみにしていた。

## 第352回 史跡めぐり

### 越谷六阿弥陀めぐり

日時 平成18年3月19日(土)

天気 快晴

参加者 49人

案内者 加藤 幸一・菅波 昌夫

記録 江守 峯子

まずは歩いて十分程で三番札所・報土院へ到着した。阿弥陀様は奥なので、暗くて見えなかった。二十七体の羅漢像の表情が楽しかった。住職の好意で薬師如来の堂を開けてくださり、拝顔でき合掌し、彼岸参りの方も合掌していた。

公民館でトイレ休憩。新越谷駅より武里駅まで電車移動。林西寺まで風にあたり歩いた。

途中で足にまめが出来て、キズ判を巻いていた人もいた。山門に標識石塔・新六阿弥陀所四番があった。

次の安国寺五番石塔は墓地の隅にひっそりとあった。桜井交流館で昼食。バスで松伏下車。古利根土手を大松清浄

院へ向かう。住職の法話、仏様が指を広げているのがお釈迦様。指を丸めていけば阿弥陀様。納得。

また、バスにて林泉寺到着。本堂にて住職の話聞く。「新六阿弥陀」扁額は六か寺の中でこの寺にしか残っていないという。次に、天嶽寺へ向かう。一番の石塔は所在不明。昔の人は彼岸に一日かけて六か寺六阿弥陀めぐりを行っていた。

私たちは足が弱くなっている、一部バス使用であったが、万歩計で二万歩を越えていた。

天嶽寺で北越谷駅へ向かう人、越谷へ行く人と別れた。北越谷駅付近のさくら広場で解散となる。



新六阿弥陀・扁額の残る林泉寺で、住職の話をお聞き

三回目の抽選で待ちに待った鴨場見学。午前九時三十分、北越谷駅に集合。参加者四十名が足どりも軽く鴨場を目指した。

薄雲が空一杯に広がっているが、いたって明るい春日和。

## 第353回 史跡めぐり

### 越谷・埼玉鴨場

日時 平成18年4月24日 (火)

天気 快晴

参加者 40人

案内者 藪 高道

記録 藪 高道

隅に桜の大き木がそびえ立ち、新緑もえる庭内にピンクの花が満開。

春らん漫の風情を味わい、庭の北側、待合室に案内された。係員の説明で、千葉新浜鴨場のビデオを見学。鴨場の歴史、皇室との関係、鴨の捕獲方法及び捕獲後の措置等に

ついでに学習。

続いて、当地での捕獲、

剥製にされた

鳥類展示品を

見学後、庭の

西側奥の大池

に進んだ。池

の全ては竹林

に囲まれ静寂

なたたずまい。

その隅で数羽

の鴨が遊泳し

ている。池の

東側から餌場

に向かつて数

条の溝がつく

られている。

この時、係員

から「毎年、秋になるとこの池に一万羽の鴨が飛来します。

よく慣らしたあひるをおとりにして、この溝に鴨を引き寄せ、手網で捕まえます」

最後に庭の東側の大きな建物に案内され、鹿の角等の展

示品を見学して、静寂で緑ゆたかな越谷の別天地、宮内庁

鴨場を後にした。

「ほっと越谷」で昼食後、増岡常任理事から「越谷鴨場の解説」等貴重な講話を受講しておひらきとなった。



首段は閉じられている黒欄をくぐりいよいよ場内へと進む

快晴の朝、観光バス二台は七時四十分に南越谷駅を出発し、やや渋滞高速道路を二時間かかって千葉市の加曾利貝塚に到着した。

広大な貝塚台地は新緑に輝き、若葉の芳香に包まれ賛嘆

の音が聞こえた。大勢の小学生たちと貝層断面や住居跡群の観覧施設、貝塚博物館を巡り、五千年続いた縄文時代の「ムラ」人たちの生活様式を勉強した。

## 第354回 史跡めぐり 千葉・加曾利貝塚・御殿跡

日時 平成18年4月26日(水)  
天気 晴れのち曇り  
参加者 74人  
案内者 宮川 進  
記録 安西 利夫

御成街道の坂道を上り千葉御茶屋御殿跡に着く。三千六百坪の四角形の跡地は高さ二・五メートルの土塁に囲まれ、幅五メートルの菓研堀を巡らし、わずかに井戸跡だけが残っていた。この雑木林の

中に「越谷御殿」を想像すると、その壮大さが見えてくる。いつか一部だけでも復元できたらと思う。

千城台の寿司店「武井」で和やかにおいしい昼食をいただく。

千葉中央博物館は本館と広い生態園(野外観察施設)か

らなり、既に来ていた学生たちも約一時間の自由参観となった。満開の八重桜のもと、会員同士が写真を撮りあっていた。

千葉寺では、樹齢千年を越える銀杏の大樹に目を奪われた。千葉神社は金と朱色に塗られたきらびやかな大社で、御利益を願うお守りやお札を買う姿があった。

帰途はバスの車窓から幕張メッセやマリンスタジアムを見て、午後六時に南越谷駅に到着した。案内の宮川氏の説明の良さと、気持ちの良い気候に恵まれたこのツアーに感謝の拍手がわいた。



貝層断面を観察できる野外施設がある 宮川会長の説明を熱心に聞く参加者

会員限定の史跡めぐりバスツアー。昨夜来の雨はあがって、朝早くから元気な顔が揃い、二台のバスに分かれ、七時二十分、南越谷駅前を出発。一路、東北道を館林インターへ。雨にぬれた青葉、若葉の木々の曲がりくねった山道を登り、金山西城展望台に十時に到着。

を登り、金山西城展望台に十時に到着。

## 第355回 史跡めぐり 歴史のまち・太田を訪ねる

日時 平成18年5月9日(火)  
天気 曇り  
参加者 67人  
案内者 水上 清孝  
記録 古澤

太田市教育委員会の方々の案内で、自然の地形を利用した堀、土塁、石垣などによる要塞の金山城へ。城の内側は敵を感わせる複雑な通路になっていて当時の人の知恵や工夫が難攻不落を誇った秘密を感じ、また、発掘調査を元に当時の姿を再現された石山城を興味深く知ることが出来た。

物見台よりの眼下に広がる眺めは雄大で、周囲が見渡せるため、敵の動きを見張れる防御の城として納得。

金山城の歴史を見守ってきた大げやきを右に見て石段を登り、本丸跡の新田義貞を祀る新田神社に詣でる。曹源寺さざえ堂はお堂の外から見る。

昼食は宮中の食文化から郷土料理への流れの説明を受け

ながら、武将の膳「もつそめし」を楽しみながら賞味。その後、義貞が鎌倉幕府討伐に挙兵の場所、生品神社を参拝。中世の平城反町館跡へ。現在、薬師照明寺が移築されている。

高山彦九郎記念館にと進むがバスが道を誤り、十分ほど歩く。尊皇反幕の思想家として全国を旅して多くの人と交流し、幕末の志士たちに多大な影響を与えた人を学んだ。

金山の南麓の「吞龍様」大光寺へ。臥龍のみことな松に迎えられ、堂々たる風格のある開山堂、本堂、鐘楼堂は見事である。その後、新田義貞追善のため建てられた金龍寺へ。本堂には義貞の木像、裏山には金山城主横瀬一族の供養塔がひっそり並んでいた。

帰路は、順調な走りです。南越谷に十九時、無事到着。歴史のまち・太田を訪ねて楽しい一日であった。



鎌倉時代末期に新田義貞が砦として整備したといわれる…。くわしい説明に納得

梅雨空の中、紫陽花の花が一番美しく咲き乱れるこの時期、ウィークデーにもかかわらず、八十三名の参加者が集り南越谷を定刻どおりに出発し、目的地である小金宿へと向かった。

## 第356回 史跡めぐり 本土寺と小金宿界隈

日時 平成18年6月14日 (水)  
天気 曇り  
参加者 83人  
案内者 中村 幸夫  
記録 木村 恵仲



玉屋・芭蕉の句碑・慶林寺・小金城址と興味深く巡った。小さな地区だったが、各寺院・史跡とも清潔で、かつ大事に保存されており、見学者の心を和ませ、満足感を与えた。

最後は今回の史跡めぐりの本命である本土寺散策だったが、あいにく紫陽花は咲き始めであり、満開になったら素

東漸寺は参道も長く、山門の大きき、古式豊かさに驚かされ、そして本堂の荘厳さに参加者の驚きの声が聞こえた。また、境内の見学の中で注目したのは竹内兄弟の碑だった。幕臣であった渋沢栄一が官軍側であった竹内兄弟の碑を建立したこともあり、人間の人間に対する易しさによるものではないかと大変感激をさせられた。

晴らしいと思った。しかし、菖蒲の花は満開で、高所から見た時には、この世の極楽かと思われる程の暖かく華やかで心をわくわくとさせてくれた。

今回の史跡めぐりでは、短時間で多くの史跡をめぐったこともあり、途中で疲れてしまう人が一部、見受けられた。

今回の史跡めぐりも、八十三名という大人数にもかかわらず、初めて見る史跡の素晴らしさと、案内者の説明が十分に行き届いていて非常に勉強になった。そして多くの参加者が満足しているようだった。



どんよりとした梅雨空の中、大勢の方が参加された

雨上がりの暑い一日ではじまる。いつもの元気な顔が揃い出発。東大島駅に順調に着く。この駅は中川の陸橋で、東口は江戸川区、西口は江東区になる。ホームで加藤先生の説明があり、見下ろす風景は、緑で覆われた護岸の中川はエメラルドの水がゆったりと流れて、レガッタやカナ

ー川船が行き交い、建物やビルが水面に映え、川風が心地よくヨロツパを思わせる。

## 第357回 史跡めぐり

### 中川船番所と荒川ロックゲート

日時 平成18年7月22日(水)  
天気 曇りのち晴れ  
参加者 61人  
案内者 加藤 幸一  
記録 小泉 平八郎

駅西口から中川に沿って江東区中川船番所資料館に着く。モダンな建物の二階に中川番所が再現され、出土遺物や番所に関する資料、漁具、江戸和竿等の展示があった。加藤先生が越谷の米や産物もこの番所を通り、小名木川から日本橋へ運ばれたと話された。往時に

ここは国土交通省の管轄である。管理棟の二階で説明された職員さんは、赤羽事務所より荒川をプレジャーボードで信号待ちや渋滞がなく、車より早く便利とのことでした。昼食後、数台のテレビで運行管理の様子を見学する。

館外に出て、濃い赤いレンガ造りのロックゲートは、凱旋門を思わせる巨大な門であった。荒川堤防と旧中川堤防に設けられ、水位の異なる河川を繋ぐ運河であった。折りよくみんなの前で船とカヌーが来合わせ、開門・閉門して、二メートル以上の水位差を調整して、通船が約二十分間繰り広げられ、一同納得の歓声を上げる。ゼロメートル地帯を守る、スーパー堤防を上流に進み、旧小松川開門に立ち寄る。昭和元年建造の開門が現在は埋められ、頭頂部のみ当時の姿を残し西欧の古城を偲ばせ、船運の歴史を伝えている。

旧中川の東堤防を十分ほど歩いて、東大島駅の東口より乗車して帰路に着く。暑さを忘れさせる見学会、関係者の皆様に感謝する。

タイムスリップできた。三階の展望室より現在の川を眺めながら、高崎先生が江戸時代の絵図で説明され、物流の中心が船運であったことが判る。小名木川沿いにある塩なめ地蔵に詣、番所橋を渡って、荒川ロックゲート(開門)に着く。



大島小松川公園にある旧小松川開門の脇を歩く参加者



越谷駅を午前八時十分に出発した時は曇っていたが、新鹿沼駅につくころは快晴となり、少し暑いくらいになった。日光例幣使街道沿いに歩き始め、途中で案内者より街道の名前の由来の説明があり、所々にある古風ある建物を見ながら「雲竜寺」に到着した。

## 第358回 史跡めぐり

### 鹿沼彫刻屋台と川上澄生美術館

日時 平成18年9月30日(水)  
天気 晴れ  
参加者 74人  
案内者 菅波 昌夫  
記録 山本 希八

風格あるお寺で本堂に上がり、住職より仏教の宗派についての講話があり、お経を上げられた。続いて、ほとんどの参加者が焼香を行った。境内には人間国宝である「香取正彦」が作ったと伝わる梵鐘があり、その奥深い音色は身体の心に響き渡った。

次に、すぐ隣にある木のふるさと伝統工芸館に行き、木工工芸品の展示を見た。続いて、

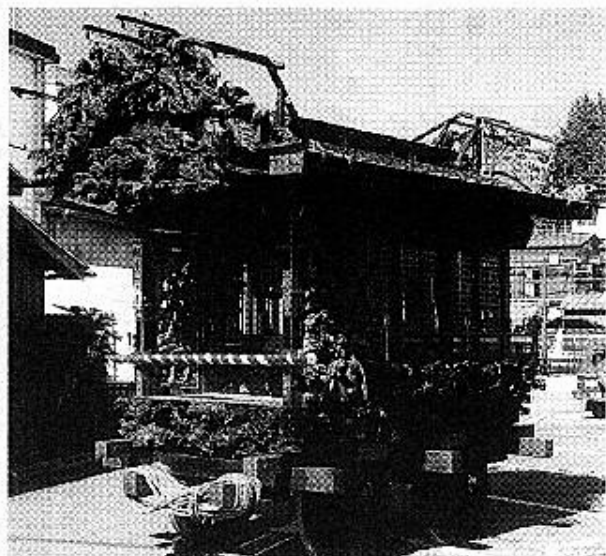
ここで日本庭園の掬翠園の中にある慶雲郷で昼食をする班と屋台展示館で屋台を見学する班とに別れた。「掬翠園」は鹿沼の三名園の一つと言われ、灯笼・庭石・樹木が配置

され、それを見ながら食事をした。

「屋台展示館」では素晴らしい彫刻に金箔や漆塗りされた屋台が展示され、館員から説明があり、「鹿沼は彫刻屋台の街」とも称されているとの話だった。彫刻屋台の素晴らしさに感激した。

引き続き、「今宮神社」に向かう。案内者より神社の説明があった。しかし、本堂の正面が修復中で垂れ幕に覆われ見学が出来なかつたのが残念だった。十五分程歩いて、洋風のたたずまいの「川上澄生美術館」に到着した。作者の川上澄生の個性ある独特な版画を見て、参加者達は感激しているようだった。

ここで、本日の予定は全て終わりとなり、新鹿沼駅へ向けて歩き始めた。約二十分程で駅に到着し、解散となった。天候にも恵まれ、大変良い史跡めぐりだった。



鹿沼彫刻屋台祭の目玉。きらびやかな彫刻屋台

常日頃余り行くことがない場所に案内していただけるの  
を感謝しながら参加している。

本日も定刻よりだいたい早かったが、既に親切な役員たち  
が駅構内で旗を持って案内をしていた。名前はわからない  
が、顔見知りの五、六人と挨拶を交わし、お互いの健康と

## 第359回 史跡めぐり

### 日本が二つ、写楽も田園風景も

日 時 平成18年10月28日 (土)

天 気 晴れ

参加者 55人

案内者 古澤 孝

記 録 沼倉 セツ

の前には「やりそこねたと思わずもう一度やってみよう」という言葉に納得し、自殺者の多い日本を改めて考えさせられた。また、日本一の大鰐口の前にはピカピカに磨かれた葵の紋の献香、上には満願堂の額が飾られてあり、昔の人々が惚ばれた。

今日の参加を喜び合う。  
バス乗車前に副会長の挨拶で「晴天ではないため歩くには最高の一日でしょう」と。次に、案内者の古澤孝さんからの説明があり、定期バス二台に分乗して出発し、野島バス停で合流した。

案内者の説明と丁寧な資料により、訪問地を確認しながら有名な浄山寺に着く。山内の案内板に時節の句として「風に舞う落ち葉にしかと大地あり」、本堂



案内の古澤さんの説明に聞き入る参加者

にも大変なのだろうと思った。

香取神社の周りは原野のようだったが、神社や参道はきれいに掃除されていて、鎮守の宮として地区の人たちがよく管理していることがうかがえた。

埼玉県立大学は三万坪と広く、周りに人家もなく大きな建物が悠々としていて、学舎として本当に良い環境を思わせた。この日は文化祭で人が多くにぎやかであった。

最後に写楽記念碑のある法光寺に参った時は、本堂に案内していただき、住職から写楽がなぜこの寺にあるのかの由来を聞き、お線香のお土産まで頂戴した。

参加された方々は皆それぞれ史跡を見たり写真を撮ったり、熱心に石に刻まれた文字をなぞっている姿も見受けられた。

三野宮橋から中島橋まで十六の橋があるという説明を受け、綾瀬川・新方川の橋を合わせるという橋の多さに驚き、それらの管理

## 第361回 史跡めぐり

### 伊勢原と大山参り

日時 平成18年11月28日 (火)  
天気 小雨  
参加者 87人  
案内者 水上 清・篠原 陸郎  
記録 宮内 和代

小雨の中、南越谷を出発。会員限定の八十七名がバス二台に分乗する。途中渋滞にあり、海老名でトイレ休憩をし、伊勢原市に入る。バスの中で資料の説明を聞く。丁寧な案内に朝が早かったせいか、子守唄になった方も見かけた。窓の景色は柚子や蜜柑が実り、バス停の名も面白い。「盗人

除の札」が玄関の柱に貼ってある家もあった。大山の駐車場からケーブルカーの追分駅までの階段はかなりきつい。いつ登り終わるのか判らない程長く、お土産屋の呼び込みも耳を通し、ひたすら登った。ケーブルカーの一駅で紅葉の美しさが増す。雨降山の名の通り、対峙する山々にも霧がかかり寒い。大山寺に上がり、暗い本堂を順路に従って進む。本尊の不動明王の目に

感心したりする。再びケーブルカーで阿夫利神社・下社に向かう。ここまで来ると楓・紅葉が多く一段と美しい。神水を並んでいた。しばし境内から景色を楽しむ。ケーブルカーで追分駅に戻り階段を下り、茶湯寺に寄る。本堂の寝釈迦をガラ

スに顔をつけて見てから、豆腐坂を下る。このころは皆さんバラバラになって見ている。そして「たけだ旅館」に入る。全員が揃い食事が一時三十分になった。豆腐料理はやさしい味付けなので満足をし、旅館のご主人に大山の歴史と先導師のお話をうかがう。お腹を満たしたところで日向薬師に向かう。

この登りも長く、自信のない方はマイクロバスを使う。悪天候のため、宝殿には上がれなかったが、鐘楼も含め立派な茅葺のひっそりとしたたずまいの寺だった。

終わりに太田道灌の胴塚と首塚を訪ねる。小学校の教科書での太田道灌はうる覚えでしかないが、文武両道に勝れたために滅びたという。胸の詰まるような話である。終始小雨の中だったが、概ね予定の時間に南越谷駅に到着した。



小雨が降る中でも大勢の参加者でにぎわった

## 第362回 史跡めぐり 北鎌倉・建長寺で座禅体験

日時 平成18年12月11日(月)  
天気 快晴  
参加者 48人  
案内者 宮川 進  
記録 篠原 陸郎

天気晴朗にして気分爽快。四十八名の一団は越谷駅をあとに、通勤ラッシュに逆らいつつ、東京駅始発専用車両にゆったりと、一路鎌倉へ向かう。

ホームに下りると、もうそこには円覚寺の境内だ。山門をくぐり山内のあまりの広さに唖然。この寺の開祖、同じ

「元」に襲来された南宋の高僧とは。

時宗公に頭を下げ、線路に沿っておよそ二十分。一転して狭長な道路は建長寺へと導く。

本日のメインイベント「座禅体験」。遅刻して入山したせい、か、教僧いささかツムジを曲げ一団を座らせる。座法を説き、教を読ませ、しばし静寂。一瞬警策の一撃にハット背を正す。十分二回の座が済み、ホッと一息入

れると、隣の間で一汁一菜。ここでも食法の説教。食器音を一切たてない作法の何と難しいことか。あまりの「けんちん汁」のうまさに戒律を忘れ、椀を片手にたくわんに手をつける。途端、僧の一喝。一瞬ビクリ。何となく修行を終えた気分。時頼公と別れる。

再び来た道を戻り、春夏秋冬花の楽園「明月院」に、秋篠宮・悠仁親王ゆかりのコウヤマキがそびえる「浄智寺」に一同心を癒し、本日最後の女人救済「東慶寺」に駆け込む。

門をくぐると正面に十数段の階段が眼に入る。案内者の説明にじっと石段を見つめ、三下り半の男優位に、女のはかない、切ない抛り所が胸を痛める。明治となつて

「縁切寺法」は廃止されたというが、今、「いじめ」で死を選ぶ若者の駆け込み寺はないものか。

覚山尼さんに手を合わせ、隣駅鎌倉の小町通りで一同しばしの買い物。

ほぼ予定通り皆無事大手町に帰還。笑みの中、みやげ片手に解散。十二月にしては暖かく、有意義な一日でした。



宮川会長の丁寧な説明を開き、全員が納得顔

日本橋七福神詣が、正月三日に実施された。前日まで気をもむような天気だったにもかかわらず、今朝は良い按配の天候となり、参加された七十数名の方々が口々に「風もなくてねー」と、喜びの言葉を交わしていた。

やがて案内者から説明の後に越谷駅を出発し、目的地の



## 第363回 史跡めぐり 日本橋七福神めぐり

日時 平成19年1月3日 (月)  
天気 曇り  
参加者 75人  
案内者 加藤 幸一  
記録 野口 祐許



が祀られており、昔はこのあたりに吉原遊郭があったが、明暦の大火で焼けてしまった等の説明を聞いた後、松島神社へと歩を進めた。普通、一般的な神社仏閣は、塀や木々に囲まれ建てられていると思いきや、コンクリートによる高層建築の階下の隅に押し込められたような形で祀られて

人形町で下車した。すぐに広い道路に面した歩道上に集合した。

当時、江戸で一番にぎわったと言われる日本橋である。早速この駅の近くにもあったといわれている玄治店の話から、歌にも出てくる「切られ与三郎」や「お富さん」それから黒塀があるあたりにあった等の話を聞き、次の末広神社へと向かった。

「ここには毘沙門天

おり、松島神社もさぞかし頭の重いことであろうと苦笑しつつ水天宮神社へと進んだ。

さすがにここは神社らしく一区画を領した堂々たる構えである。その一隅に弁才天が祀られてあったが、不思議に思えたのが錨の飾り物。説明によると、かつて旦那さまが一時でも長くいて欲しいとの花柳界に住む女性等の願いから発したとのこと。昔も今も変わらぬ当世か。それにしても水天宮様の賑わいと鈴の音の多さにびっくりしたものである。

最後は十思公園での話で終わったが、殉職された警察官のことを思うと厳しさが心に残った。しかし、参加された皆様の顔が満足そうに見えたのも、案内者の研究の成果だと感じつつ帰途に着いた。



「ここが日本橋七福神の一つ、松嶋神社です」加藤副会長の説明

前夜に降っていた雨で、朝、雨戸を開けるまで天気心配だった。北越谷駅西口に集合するころより少しずつ太陽が顔を見せた。今日の史跡めぐりの案内役の晴れ女こと山口さんのお陰かも知れない。参加者の心がけの良さからか、風もなく暖かなウォーキング日和となった。

## 第364回 史跡めぐり 春を待つ市内・神明・西新井

日 時 平成19年2月10日 (土)  
天 気 晴れ  
参加者 71人  
案内者 山口美津江  
記 録 岩瀬 静江

に対して副会長が、「葉つぼを持ってるのが、薬師如来です」と教えてくれた。また、不動明王三尊像の向かって右側が「こんがら童子」、左側が「せいたか童子」、そして右目右の歯が上を向き、左目の左の歯が下を向いている「不動明王」もあるとの説明があった。他の仏様の脇侍のこと

そして、交通安全の注意の後に出発した。村名由来の神明社は、元々は橋の近くにあったようだが、橋の上より土手の石仏を眺めるだけで次の史跡へ向かう。道路の拡張工事等で、別の場所へ移される社や石仏が増えており、なくなるものもあるそうだ。

いくというお話をうかがった。足が少し痛くなったが、心は清々しく、わが家に歩いて帰ることができた。



西教院前に集る参加者

も知りたいと思った。近いのに行く機会がなかった西新井方面では、仏像付き庚申塔が多数あることを今回、知ることができた。

斉藤家ゆかりの榕割塚。土地の持ち主が変わっても、去年新しいお堂や由来碑、それにお天正十三年より四百十六年忌の法要をして守っている田村家の方に感銘を受けた。

西教院の斉藤家のお墓には、これからもご子孫の方が守り続けて



つぼき割り塚石碑

天気予報では今日は午前中は雨、午後は晴れとなり心配したが、朝の集合時間頃は雨の中休みで、傘の必要はなく、予定通りバス二台で出発した。車中では案内者が江戸時代末頃の上州の博徒打ちについて、いろいろエピソードを含め面白い話をして下され、退屈を覚えることはなかった。

## 第365回 史跡めぐり 赤城山麓ゆめ紀行(バス)

日時 平成19年3月30日(金)  
天気 雨のち晴れ  
参加者 90人  
案内者 水上 清  
記録 藤川 吉洋

かった。

岩宿博物館では係の人から説明を聞いた後、隣接している「カタクリ群生地」へ行った。ちようど「はなまつり」の最中で満開のカタクリの花の写真撮影を楽しんだ後、岩宿博物館前の公園で弁当を広げた。

午後、相澤忠洋記念館へ行く。満員の部屋の中で、相澤さんから苦労話を聞く。相澤氏が昭和二十四年、岩宿遺跡を発見し、日本に

旧石器文化があったことを初めて実証したにもかかわらず、学歴がないとの理由でその手柄を大学助教授が横取りした話は驚くと同時に強い憤りを覚えた。

国定忠治の墓・遺品のある養寿寺は短時間の見学にとどめ、「木枯らし紋次郎のふる里・三日月村」へ急ぐ。「怪異

現洞」・「絡繰屋敷」・「不可思議蔵」等おどろおどろしい名前のついたアトラクション用建物があったが、内容はそれほどでもなく、これではリピーターを呼び続けるのが難しく思われ、経営は大変だろうなどと心配になった。

帰路、風や強の天候のためか、国道五十号線・東北自動車道共に車窓から、赤城山・男体山・筑波山がはっきりと見え、更に富士山が夕焼けの中にうつつすらと見えた。越谷に入ると元荒川堤の桜並木が夕暮れの薄明かりの中で満開となっており、明日、明後日の週末は大いに賑わうことだろう。今日の史跡めぐりは全てが大満足のツアーであった。全員無事故で、予定通り南越谷駅前に到着し、挨拶の後、それぞれ家路についた。



岩宿で初めて発掘が行われた場所



国定忠治のお墓の前で合掌

## 第366回 史跡めぐり

### 埼玉・鴨場見学

日時 平成19年4月24日 (水)  
天気 曇り  
参加者 30人  
案内者 藪 高道  
記録 藪 高道

あいにく天候が悪く、午後から雨という天気予報。見学の予定時間は午前中で終るので、なんとか天気がもってくればよいと思いながら参加者一同北越谷駅より鴨場へと向かう。鴨場に到着し入場する前に市役所の担当の方から場内においての注意事項を聞き入場する。はじめに宮内庁の職員



ある。その後、鴨場の施設全体についてのビデオ鑑賞をして、鴨の習性などを利用して鴨を取る方法についての説明があり、施設の展示室にある鴨の種類など「鶯」「鷹」「鶯」の剥製をみる。鴨の種類が意外とあることを勉強させられた。その後、現場に行き実際に宮内庁の職員の方に鴨猟の

の方より鴨場の歴史や施設と、何故越谷に鴨場が明治四十一年設置されたことについての説明がある。また越谷に鴨場ができた理由は、当時鴨猟をしていた東京の浜離宮が都市化が進み、そのため鴨が集まらなくなり、新たな移転先を探していたところ交通の便と国道と川が近くにあることなどから条件を満たしており設置にいたったとのことである。



宮内庁埼玉鴨場 場内は写真撮影禁止となっている

こと。その次に食堂を案内していただく。食堂の「なげし」に鹿の角が数多く飾ってあり、一種独特な雰囲気をかもし出していた。鴨場見学後、また北越谷駅まで戻り、昼食後駅前の「ほっと越谷」において鴨場についての「越谷と鴨場」のテーマで官川会長が講演し、その後「ほっと越谷」の高橋所長より「越谷における男女共生」のテーマについての講演があり、終了後解散となる。今回の鴨場見学で参加者は貴重な体験をしたと思われた。

方法についての丁寧な説明があり、江戸時代から伝統的な方法で捕獲されており、今も受け継がれていること、この独特な伝統的な捕獲技法を保存するためにも貴重な越谷の施設であり、財産にもなっていること。現在、自然保護の目的から捕まえた鴨はすぐにリリースしているとの



## 第367回 史跡めぐり

### 醤油がつくった野田の文化と歴史

平成19年4月27日(金)  
天気 快晴  
参加者 93人  
案内者 木原 徹也  
記録 符金 俊治

北越谷駅東口に、お馴染みの郷土研究会の旗のもと、八時三〇分に九十三名が集合し、笑顔の会長の朝の挨拶に元気をもらい、バス二台に分乗して予定通りの出発である。愛宕神社前で下車すると、境内にはすでに本日の案内をしていただく木原さんの姿が。野田で生まれ育った人にしか語

れない懐かしい昔の話で現在との違いが良くわかる。建造物の盗難被害に遭ったそうだが無傷で取り戻せて良かったとのお話も。

興風会館へ到着、資料を開き担当の職員さんからの説明を聞く。「興風会」という名称は、「野田の街に、人々に、新しい風を興そう」という意図に基づく「民風作興」と言う言葉から来ているようで、皆さん感心しながら、次の目的地へ。

茂木総本家邸を道路から眺め、軽便鉄道野田町駅跡の説明を聞きながら、茂木佐公園を歩き、「お屋敷博物館」に着く。職員の方のユーモアをまじえての案内に満足して、隣接の野田市民の憩いの場である市民会館での昼食の時間となる。旧茂木佐平治家の廊下から庭園を望みながらの昼食に全員笑顔

で大満足。次は「キッコーマン」もの知り醤油館だ。近代の醤油が出来る迄の工程を映像と実際のラインを見学して、お土産までいただく。二十五分くらい歩くと豪華な屋敷林が見えた。「上花輪歴史館」である。職員の方の「西に森、北に山」の名調子の説明に皆さん納得。今回見学が出来てよかった。六月より二年位休館になるそうである。景色に高層ビルが入らないのがいいね、との話声。

さあ、いよいよ今日の最終コースだ。土手の上に登ると風が気持ち良い。土手の上から下河岸廻船問屋跡と、真っ白お城のようにも見える御用蔵を望む。ここで案内者のこの日最後の説明を聞き、皆で感謝の拍手。各見学地で子供の頃のお話が入り、歴史の移りかわりがよくわかった。上岸バス停で会長より挨拶があり、北越谷駅で流れ解散になる。バス二台に分乗して予定より早く十六時四十分には北越谷駅東口に全員無事に到着した。

木原さん並びに今回の企画をしていただいた方々に感謝する。ありがとうございます。



キッコーマン醤油工場の見学に向かう参加者達

## 第368回 史跡めぐり

### 蒲生～市役所 歴史散歩

日時 平成19年5月19日(土)

天気 雨のち曇り

参加者 55人

案内者 藤川 吉洋

記録 須賀 弘

懸念された雨が出発間際に降り出したが、参加者の皆さんそれぞれの雨具で用意万端。蒲生駅を九時過ぎに出発する。先ず、清蔵院に着く。このお寺は境内に入らず、山門前での説明・参拝になる。蒲生茶屋通りに出て砂利供養塔の「ぎょうだい様」を拝む。その面容に興味を抱く方多く

諸説ある由を聞く。

続いて、斜め先の大相模不動への道標を見ながら茶屋通りの昔日の繁盛を聞く。

このあたりで雨がやみ、心置きなく説明を聞けるようになった。中尾医院から綾瀬川災害対策事業碑を経て、堤防沿いに蒲生一里塚に向かう。埼玉県に唯一残る

「日光道の史跡」、ムク履の古木、ケヤキの大木等あり、江戸時代の旅人がホット

する姿をしのばせるオアシスの感じのところである。また、一里塚の近所の方々と思われるが、清掃された後、草木等の手入れをされている様子がかがえて、感謝しながら目の前の藤助河岸に移動。藤助河岸で交通事情・発展による時代の流れを感じたあと谷古田河畔緑道に入る。南部公園

でしばし休憩。用水と

並木が連なり

自動車の手配もほと

んどない緑

道。歩くこ

との好きな

会員の方々、

思い思いの

散策を楽し

んでいる様

子。幾人か

の方とお話

しすると、

「ここは初

めてだが、

歩きよい」

とおおむね好評。葛西用水方面に進む。この時期、用水は水量豊富。釣り人多数。真夏でも涼しさを思わせ緑道沿い流通団地方面に歩く。途中、旧・流橋(ながれぼし)、今は渡れなく不動道の名残を眺め、今日最後の史跡、平和橋で十二時半ごろ解散した。

本日の案内説明は幹事の藤川さんでしたが、蒲生在住の渋谷さんが地元ならではの伝説を随所で聞かせてくださり、趣がありました。お二人様、ご苦労さまでした。



個人の問題にも的確に答える案内者の藤川さん

## 第369回 史跡めぐり

### 佃島と築地を訪ねる

日 時 平成19年6月9日 (土)  
天 気 曇り  
参加者 125人  
案内者 古澤 孝  
記 録 原田 民自



梅雨に入るのも間もないと思われる怪しい曇り空の中、越谷駅には一二五名の大勢の参加者が集合した。ていねいに作られた資料とともに、色分けしたリボンが各人に配られた。これは「勝どき橋資料館」等に大勢の人が一度に入れないために考えられた役員の秘策だった。今回の佃島と築地は越谷

からは比較的近距离であるが、多くの方が初めて訪れる場所らしく期待に胸をふくらませて越谷駅をあとにした。築地駅に到着して最初に訪れた波除神社では大きな獅子頭がお出迎え。参加者の中にはおどけて獅子頭に頭を突き出す人もいて大笑い。古澤さんのていねいな説明にうなずきながら次の勝どき橋へ向かった。

乱することなくスムーズに館内に入ることができた。そして橋を跳躍させるための装置を見ながら、勝どき橋のスケールの大きさに気持ちちがときめいた。記念にいただいた絵葉書もうれしかった。

次に向かったのが昼食の場所の月島。もんじゃ焼きという

勝どき橋資料館には、色分けしたリボンで混



大勢の方を案内された古澤さん(右)と山本さん

いきらびやかなみこしを特別拝観でき、宮司からも佃島の歴史から行事など、くわしい説明を聞くことができ十分理解できた。あれもこれもこれも団体として参加することのメリットを感じた。

復元された石川島灯台と佃島渡船碑を見ながら歩みを進めると、そこには佃煮を売っている老舗のお店が何軒かあった。本場で本物の佃煮を求める参加者の姿が十数人見られたが、その横を素通りするわけにもいかず、いつのまにか自分も並んでいた。佃煮とはいえない値段だったが、家で待つ家族のおみやげを手に入れた。

長い佃大橋を長蛇の列で渡り、聖路加タワーの展望室から都心の眺望を楽しみ、路地に散在する多くの石碑を訪ねた。見所も豊富で役員の手際もよく、まさに充実の一日だった。

曇りや小雨の日が続きましたが、当日は青空の天候に恵まれた。南越谷駅に集合した参加者は、水上案内者から一日の行動予定の説明を受け、JR武蔵野線に八時三十八分に乗り込み南浦和駅で乗り換え、西川口駅に降りた。すぐに我々が乗るバスが着て十五分ほどの乗車で川口市上青木にある「スキップ・シティ」に着いた。NHKラジオ放送アンテナ鉄塔があった跡地に埼玉県とNHKが共同設立した施設である。

## 第370回 史跡めぐり

### 川口・SKIPシティ 懐かしの越谷の映像を見る

日 時 平成19年7月24日 (火)  
天 気 晴れ  
参加者 50名  
案内者 水上 清  
記 録 田端 功政

◎午前中（十時から十二時）：映像の製作を体験。参加者は二班に分れ、係員の説明を受けた。

①映像学習とスタジオ

参加者が興味と感心があったのがアナウンサーになって天気予報の体験、魔法の絨緞に乗って世界旅行する画面合成ビデオ作りを体験した。

②映像ミュージアム

エジソンが発明した「動く画面」の説明に関心が集まった。

◎午後は一時から「古き越谷を見る」映画鑑賞

①江戸文化をたずねる

越谷雛人形について説明があった。

②郷土めぐり越谷

昭和四十年代の人口急増と住宅建設風景。

③水郷を訪ねて

越谷の風景を描く山崎清氏の絵が印象に残った。

④出番も間近”だるまさん”

下間久里のだるまを作る坂巻さんご夫妻の姿が放映された。

お昼の天気予報を初体験



参加者を代表して恐竜に襲われる3人



# アンケートにご協力 ありがとうございました

今回のアンケートの内容は以下の通りでした。

- ①あなたは越谷市郷土研究会に入会して何年ですか。
- ②史跡めぐりで良かったコースをあげてください。
- ③越谷に何年お住まいですか。
- ④越谷のどういうところが好きですか。
- ⑤他市の方に越谷のどういうところが自慢できますか。
- ⑥あなたの「座右の銘」または「心に残ることば」を教えてください。

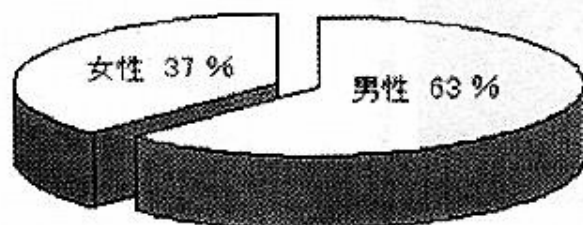
以上につきまして、集計グラフ・一覧表と皆様からいただいたアンケートを掲載させていただきました。

## ◎ 越谷市在住 ベスト10 ◎

敬称省略		
第1位	99年	会田 俊
第2位	82年	内藤 緑次
第3位	80年	高崎 力
"	80年	鈴木秀俊
第5位	78年	箕輪隼三郎
第6位	77年	鈴木 進志
第7位	77年	亀田 すみ子
第8位	75年	池田 仁
第9位	71年	岩瀬 静江
第10位	65年	山本 泰秀
"	65年	田中 かよ子

## ◎ 越谷市郷土研究会在籍 ベスト10 ◎

敬称省略		
第1位	42年	会田 俊
		高崎 力
		谷岡 隆夫
第4位	32年	堤竹 宏吉
第5位	約30年	泉 雅彦
第6位	27年	加藤 幸一
第7位	25年	鈴木 秀俊
第8位	23年	宮川 進
第9位	20年	林 佳子
"	20年	平田 博子
"	約20年	沼倉 せつ
"	約20年	酒井 達男



越谷市郷土研究会 男女比率  
(全会員を対象)

# アンケート集計結果

敬称省略  
返事に階順に掲載

	①	②	③	④	⑤	⑥
名前を教えてください	入会して何年ですか	史跡めぐりでよかったですコースはどこでしたか	越谷に何年お住まいですか	越谷のどういう所が好きですか	他市の方に越谷のどういう所が自慢できますか	「座右の銘」または「心に残ることば」を教えてください
古屋賢一	6か月	鴨場見学 2007年4月24日	38年	“水郷の町”と言われる通り自然散策が楽しめる	福祉施設・公園が充実している	“自ら計らわぬ。 広田弘毅
増田好子	5か月	鴨場見学	35年	東京に近く、私の郷里古河市の中間なので参りました。文化が勝れているのでは…	花田苑あり、市民会館に保健所に建築美がある	感謝 入会して間もない私に息子の写真展では大変お世話になり、また見に来て頂きありがとうございました。
平田博子	20年		40年	台風の時、山くずれ洪水の危険が少なく安心していられます。		先祖は過去の人ならず 思う者の心に生きる
加藤幸一	20年	市内 川柳地区	10年	水郷越谷	水郷越谷	戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない (ユネスコ憲章)
斉藤博道	7年	鎌倉			若々しいエネルギーが感じられる	学問に王道なし
箕輪桑三郎	4年	せんげん台駅から安国寺を廻るコース	市制前より78年	昔の商店街の並んでいたレトロの町並みが好きだった…が	郷土研究会の皆様活躍	あわてず、くじけない。
木村恵仲	3.5年	大聖寺・日枝神社・久伊豆神社コース	36年	川が沢山あり、散策するのに大変楽しめる	川が沢山流れている事。宿場町であるが、それを残す事なく柔軟性があり、郷土愛が無い所。	正義
金子三郎	1年	第6コース	25年	川のある町。20年位前は水がきれいでした。		日に新たなり
中嶋栄子	8?年	他市巡り	10年	歴史、仏像等ですか 参加数が少なく…年間1~2度位	越谷の事はよく判りません 郷土研究会に入会できたこと	和
符金俊治	2年	野田市の文化と歴史	41年	私達の家族のスタート地 (郷土)	物価が安い 交通が便利	まごころ
江森峯子	4年	ちちぶの火祭、足尾銅山	40年	60才以上のスポーツがさかん		一期一会
田端功政	平成14年頃?	行った所どこも満足です	37年	特になし 最近緑が多いところが好きです	特になし まだ勉強不足です 能楽堂があること 最近「能」を鑑賞するようになりました	心は青春

水上 清	11年	野田 (19年春)	37年	「川の町」の景観	人物：三野宮卯之助・越谷吾山 施設①中央市民会館②越谷能楽堂・花田苑 ③老人福祉センター：くすのき荘・ゆりのき荘④児童館コスモス・ヒマワリ・ミラクル	精神一到
寺田勝彦	1.0年	蒲生～市役所・勝どき橋周辺	40年	交通の便が良い 平たんな地形が老人向き	宿場の歴史が残っている	
鈴木秀俊	25年		80年	私のふるさと	川のある町	
山本希八	3年	伊勢原と大山参り	26年	歴史があり、神社 仏閣が多いところ	自然が豊かです	やってみせ 言って聞かせて させてみせ ほめてやらねば 人は 動かじ 山本五十六
尾崎孝一	4年	みんなそれぞれよ かった	50年	田園風景の残るところ	他市に比べると公共 施設がととのっている 様だ	あるものがあるが儘に
田村芳枝	3か月	築地市場・本願寺・勝どき橋めぐり とてもよいコースでした	35年	駅も役所も近くて 住み良いです		元気で生きる
岡野助夫	4年	①鎌倉・江ノ島 ②市内平方地域	7年	1. 川が多く、水が豊かにあるところ 2. 都心に比較的近く、交通も便利なおところ	川・田畑・森など、自然がまだまだ多く残っていること	まじめに働く人が、ほどほどに報われる世の中を。
安西利夫	4年	千葉市内と御茶屋御殿、鎌倉建長寺	38年	水郷風景、神社・ 仏閣のながめ	日光街道・宿場町の歴史	継続は力なり
新井敏浩	4年	北鎌倉 (建長寺座禅体験)	42年	水郷 (川が多く散策が楽しみ)	水郷 (川が多く散策が楽しみ)	法然 (ほうぜん) の気
高田哲夫	3年	太田市金山城跡	37年	今は周囲に友達が たくさんいるから	自宅の近くに春になると桜並木がある	人生意気に感ず 功名 誰か亦論ぜん
北川義男	3年	足尾銅山	21年	川と接することが 出来る場所	水郷の町 (川のある町)	奢侈の漸
柿沼孝行	5年	秩父札所めぐり				継続は力なり
清水初江	6年	年1回5年行きましたが、すべて良かったです	40年	美しい橋が多いこと	交通が便利なこと	友情
小島久枝	4～5年	石仏の見方 卯之助の力石 建長寺座禅体験	25年	新越谷と蒲生で駅に近かったの で。通勤に便利。	花田苑 他	一期一会
生出弘三	2年	北鎌倉	30年	都心に近く、比較的風土に恵まれている。		努力
菅原貞良	4年		春日部 36年			人生は一度、過去はふりむかず前を見て生きる
山本素秀	7～8年		65年	自然豊か 自分のふるさとである	自然の豊かさ	行雲流水

石井敏夫	4年	知らなかった？市内めぐり全般	37年	住めば都か…何となく好きで特にあげるところはありません		
イシワタリミチ	7年	単独では行けない。この会に毎回良きコースです	43年	住みよい環境作りです	元荒川堤の桜並木があり、鴨場見学ができる	神・仏
三原紀子	6年	No.299鎌倉史跡めぐり No.303材木座 No.366野田市 No.362建長寺の座禅	32年	天変地異が比較的少ない 川が多い	都心を含め、どこへ行くのも交通の便が良い 天変地異が非常に少ない (重複) 郷土研究会に入り、社会勉強になっています	元気でいれば何とかなる!!
増岡武司	11年	①秩父 ②横須賀・久里浜 ③下谷七福神めぐり	25年	①緑の自然と川のきれいなど特に平和橋からしらこぼと橋にかけての景色②中央市民会館他公共施設が整っていること	アンケート項目②と同じ	協力 協調
松原茂樹	3年		41年	1.交通の便 2.空気がよい 3.住みやすい (近隣との関係) ほとんど地方出身者で気が楽	東京に近く物価が安い	努力 (誰も助けてはくれない)
橋田早苗	3年	府中大国魂神社		元宿場町であった事		散りぬべき時知りてこそ世の中の花は花なれ人も人なれ
宮内和代	10年位	宝登山の頼梅 鹿沼彫刻尾台・川上澄生美術館 伊勢原と大山参り 埼玉御神楽芸術劇場等	36年	強いていえば空間のあるところ (田圃、畑) 川が多い	特にありません	子供の頃ラジオから流れていた「天は人の上の人をつくらず…」
仲井美知子	2年	3/30赤城山麓ゆめ紀行 (岩宿カタクリ)	20年	水と緑が豊かでゆったりとしているところ	三ノ宮卯之助の出身地 鴨場 花田苑能楽堂 久伊豆神社の藤	
篠塚義雄	6か月		25年	東京近い		
熊谷正博	4年	春日部めぐり	41年	住みやすく、人々は親切です。	水郷越谷のイメージがピッタリ	誠実
関 幸保	4年		42年 (勤務)	仕事として	地方 (栃木) と比較して封建性がない	生涯現役
川原文子	4.5年		29年			人のために、人は生まれず
根岸松日出	10年位	城巡り 金山城跡ほか多数	40年	水と河川 江戸の名残り 一里塚 庚申塔 円空仏 市民の人情など	民生市政の継続 交通手段の発達など	創造 人間の自由
谷岡陸夫	42年	第170回より数回実施の鎌倉シリーズ	45年	旧日光街道のたたずまい	三ノ宮卯之助	感謝の気持ちを忘れずに
外山澄子	2年	野田醤油めぐり	0年	市民でないので回答できない		中庸



北澤萬司	1年	“建長寺座禅コース”	30年	段々減ってきてはいるが「田園風景」と「川と橋のある町」「寺のある町」文化財の少ない町？	「花田苑」「屋外能舞台」「高価な建物…」	七転八起
小川正雄	3年	H19.2.10(土)春を待つ神明・西新井	21年	○東京へ割合と近いこと ○青果物が割合と安いこと	○一級河川がたくさん流れていること(元荒川、古利根川、新方川、綾瀬川) ○江戸時代宿場町だったこと ○宮内庁埼玉鷹場があること	巧選は拙速に如かず
石川辰三郎	9年	多摩地区 新撰組	48年	都心へ交通が便利 田舎へも便利	人情味 自然が良	一期一会
藤川吉洋	5年	鎌倉	22年	川が多い	東京へのアクセスが良い	誠実
吉田忠雄	5年	梅の宝登山、長瀬火祭り	49年	どこが好きかと思っても人生の2/3以上生活した越谷ですから、住めば都と云うことでしょうか	天嶽寺をはじめとした寺院 埼玉鴨場	願
酒井 正	4年	足腰不調のため参加できず	年1、2度訪問のみ	古街道宿場とその周辺の趣きが残り小生住所浦和と類似があるところ。	越谷市が好きの人達が沢山集っていて色々活動しているところが凄いい。羨ましい。	「天地和順、日月清明」一石仏造文に際しての祈願主旨ー江戸農民の心ー
池田 仁	約15年		75年	河川が多く自然に恵まれていること	見田方遺跡・名刹・古刹 大聖寺があり市内でも古代から開けている所	根性
伊佐馬悦子	1年	秩父 宝登山	27年	都心に近い	温暖な気候	一期一会
大澤 茂	3年	なかなか行く時がありませんでした。	12年	高崎先生に新方地区の歴史的地域であることをご指導いただいた時。	どの地域でもあるが、やはり河川での色々のくらしの変遷です。	
沼倉 セツ	約20年	361回伊勢原と大山参りと359回の市内野島三野宮	22年	川と田園風景が好きです。		「歳月人を待たず」と云う語が好きです。
堤竹宏吉	32年	何回も参加させて頂いているが、いづれも良く、区別は仲々つけがたし。	38年	文化活動を通じての仲間の皆さんとの付き合いですねー。	活発な文化活動ですね。市内の自治会館、文化会館でいつも活躍していますね。非常に勉強になります。	皆様と「相互融和」を基本に人生を楽しむことですねー。
西川峰雄	5年	秩父札所巡り	40年	公害もなく緑が多く静かな所	歴史の多い趣きのある市	努力
篠原陸郎	6年	大山めぐり	31年	都市と田舎との中間的な生活環境	水郷の町	生涯探求

岡本金夫	2年	越谷市内の史跡めぐり(神明・西新井等)、日本橋七福神めぐり	14年	四季を通しての「花と水郷のまち」	老人福祉センター(けやき荘、くすのき荘、ゆりのき荘)の充実 ②に同じ	好きな言葉「温故知新」
小野田吉秀	約3年	①金山城跡 ②かも猟場 ③お寺めぐり	41年	好きと云うより、ベッドタウンとしても知らず、研究会に入って知った次第です。出来るだけ参加したいのですが、日程が重なり不参加が多く申し訳ございません。特に好きな所は不明です。	自慢と云うより北千住に駅より3つ目と云う近さと16分で行ける。又ゴルフは東北道利用で1時間で行ける。つまり交通の便の良き所ぐらいです。	特にありませんが「誠実」を実行しているつもりです。
菅波昌夫	11年	第361回 伊勢原 第315回 八王子	42年	①寺院が多く、特に川辺が奇麗。②交通の便が良く、東京に近い。	①日本一の卯之助の力持ち。②越谷の「ダルマ」と「クワイ」	巢林一枝(ソー・リン・イツ・シ)
三宅宗義	1年	まだ1回しか参加していません	10年	川があるところ。もともと、その川はやや情緒に乏しい	できないから悩んでいる。何でその所に移り、住んでるのかと聞かれる。	「初心を忘れるな」など。
伊丹常和	3年	まだ仕事をしていますので、参加していません。	35年			一所懸命
佐藤千代男	1年未満		32年	川と田園風景、やすらぎの場所。		眞実一路 思いやり
佐々木一麿	満10年	唐沢山神社	13年	1.田園都市としての佇まいとともに「景観都市としての風格を備えている 2.中規模都市として未来発展型が期待できる	左記②と閑静で素朴な面、換言すれば、「川が多く水が豊富で旨い」こと。	座右の銘は「初心忘るべからず」
小野博康	3年	伊勢原と大山参り	40年	特になし	阿波踊り 東京に近く、生活がしやすい	朝が来ない夜はない
松浦節也	5年	野田の茂木家、高梨家めぐり(ガイドが良かった)	35年	越谷の原風景 満々と水をたたえた古利根川、元荒川の水郷風景。水田に点在する屋敷林の風景。	人口30万の大都市であること。	己の欲せざる所 人に施すこと勿れ
樋口武介	4年	府中市	27年	水(川)の多いところ	廻りの人々にすぐ話をする(話し易いところ)	常に大局を見る
和泉 守	5~6年	越谷宿	28年	川が身近に多いこと	川と桜	特になし
蓮田敏品	3年	越谷鴨場見学				初心
岩根富子	8年	日光、鎌倉、足利、金山城跡、小田原城	0年	考えた事がない	草加在住の私から見ると草加より文化が高いと思う	真心

古澤 孝	8年	日光道中(蒲生茶屋通り、越ヶ谷宿、大沢宿、大袋、間久里)	42年	スポーツ、学習、趣味、ボランティア等活動、参加のしやすい街	市の中央を元荒川が流れ、水の美しさ、屋敷林、桜並木、梅園の花々、野菜・花の産地であり、魚鳥虫等が身近に感じられる自然に恵まれた街	高校の先生の言葉 "らしく"
亀田すみ子	11年	太田金山城跡 伊勢原と大山参り	77年			前むきに
佐藤弘二	3年	・卯之助の力石、各地探訪する・足利を訪ねる	32年		緑と川のある街	誠心誠意
松本瑠美	1年	大山阿夫利神社 相沢忠洋記念館→岩宿遺跡	37年	○自然が少し残っていること ○東京に近く、交通の便利なこと	○東武清掃組合の焼却炉 プラス、チックも燃やせてダイオキシンが殆ど出ないそうです	ナシ
杉浦健之	5年	石仏をめぐるコース 六阿弥陀めぐり	35年	水郷風景と自然環境が豊かであること	元荒川の桜、宮内庁の鴨場 河川土手の散歩道 日光街道旧道など文化・自然・スポーツ環境が豊か	和顔愛語 たゆまず努力する
高崎 力	創立以来42年	殆ど参加していない	80年	いたってのんびりしている	川の風景	なんでも見よう なんでもやろう
菅 清子	6年	平成14年の秩父札所めぐり	52年		老人福祉センター(けやき荘、くすのき荘、ゆりのき荘)おがの山荘、あだたら高原少年の家が有ること	いつまでもあると思うな親と金 ないと思うな運と災難
峰 孝久	5年	埼玉原だけでなく関東一円を見学出来て良かった	38年	自然があり、川がある。	昔宿場町で栄えた町	不言実行
小林かつよ	1年	谷古田河畔緑道～瓦曾根溜井	2年弱	川沿いの自然 歴史的な建築物 歴史的な巨木など保護しなければ消えてしまうのでは?	近隣の農家から産直の新鮮な作物が売られている事。食の安全がある。	吾唯足知
中村幸夫	4年	バラエティーに富み、特定のコースを上げるのはむづかしい	25年	都心に近く交通の便が良い		
高野 仁	4年		62年	東京に近い	水郷越谷	人に迷惑掛けるな
小野了子	3ヶ月	江戸情緒の佃島と文明開化の築地	43年			いつも笑顔で
中尾浩久	2年	とうかんやのわらでっぼう(旧中村家)	14年	いなかであること古いものが残っている	村が残っている	
殿山悦三	5年位	江ノ島コース	34年	災害がない		
小沼登茂子	2年	大聖寺訪問	42年	緑と水が美しい所	やはり一番は花火大会です	努力

酒井達男	約20年	沢山あるので～元荒川堤を歩いたこと等	東京から草加に来て42年	自然を味わえる場所が多い 人間的にも深味がある	研究会に多くの方が参加されていることに感心しています。草加よりレベルが高いと思う(すべて)	努力と忍耐
新野トモ子	15年	鎌倉	30年	災害のない所	天災のない事	正直
田中利昌		鴨場	26年		日光街道宿場 鴨場 徳川御殿跡	縁起よければ運開く
コバヤシシズオ	4年位	入会初め頃、春日部・大相模方面が印象的です。	30年	都会に近いが周囲は田舎のようなところ	南越谷地区に住んでいますが②の条件の他、交通の便が良い…?	石の上にも三年
角井 久	2年	第355回 第357回 第359回等	13年	家の近くに自然(河川等)があり、生活するうえで落ち着ける。	多忙のため、まだ市内全域を散策していないので、わかりません。	努力、継続は力なり等
佐藤光夫	13年	各コース	45年	?	花田苑	初心を忘れず
鈴木裕司	半年	第366回 醤油がつくった野田の文化と歴史	30年	緑と水が豊かなところ	田園風景、川、桜、花田苑	理論なき公道は盲目 行動なき理論は空疎
阿辻正義	3年	第361回 伊勢原と大山参り	昭和40年より5年	自然環境(川や緑)		不言実行
村山初枝	5年			きれいで広く、色々なものがある事です。	道路の広いこと。	
吉田和子	2ヶ月		40年	特にありません	元荒川の桜並木	誠意
田沼隆司	2年	赤城山麓ゆめ紀行	39年	都市化が進んでいるが、未だ自然が残っている。		一期一会
泉 雅彦	約30年	市内寺社及び石仏めぐり	33年		シラコバト(天然記念物) キタミソウ(絶滅危惧種)	
小林光男	6～7年	平林寺宝物展。春の訪れ秩父宝登山。	21年	都心に近くて交通の便も良く、住みやすい。	②+地域がまあまあ静かです。	日々是好日
島根岱助	4年	日野(土方歳三)、越谷蒲生地区散歩	52年	水郷(水と緑)	大都市東京に近く、平地で川のある町。緑も多く住むには最高の街。	生涯現役 人に対して誠を尽くす
田口典子	1年		30年	自然と地域の人の和	越谷の歴史	和
谷塚由紀子	5年	足利の歴史 秩父方面	40年	都心に近くて、東京と変わらない感。	花田苑、市民館、研究の広巾 市民会館の辺りの景観	信念
笠原良全	1年	鴨場見学				天地同根、万物一体

y. l	半年	野田	20年	川沿いのきれいな町並み、寺社、自然、緑が多い。	川を中心に散歩コースが多い。東京に近い割には環境（自然・治安）が良い。	
藤井佐登子	3年	どのコースもそれぞれに良かった。	48年	この地より他の記憶がなく、代々住んでいるので、他に移り住む木はありません。	特にありません。災害も少なく安心してすんでいられます。	P. P. K ビンビンコロリまじめにそう思います。
木原もと代	2年		31年			
小平長信	半年	病のため参加不能でした。	半年	かつて越谷市ない事務所で管理者として過ごしました。そのとき県の他をリードする中核都市として未来に発表する自然と産業の発展を感じました。	「自然」と「環境」を維持しながら企業の流通都市であること。加えて人の「あたたかさ」にじまんできます。	「脚下照顧」「君子為八」加老を経験として市民のため尽くしたいを心に誓います。
林 佳子	20年	鎌倉方面（仏像・仏閣・法話・座禅・等）	49年	川に囲まれている。場所によっては自然・緑も多い		
永井勇雄	4年		31年	緑のある散歩コースが多い		
青山栄吉	18年	赤城山	40年	近所の人達と気さくにつきあえること		
ないとうせつお	三原氏の頃から途中休みあり		50年	先日、今年市議長（中村氏）とも話しましたが、アツピール出来る様なものが現在は無い。		智仁勇
森田三男	1年	野島・三野宮（2006年10月）	51年	○田、畑、川、花、鳥 自然が残っている ○派手な名所・名物が無いということ 人々の普通の生活の中にその土地の良さがある	○市民運動会、子供のために餅つきなど近所のふれあいがある ○自然が破壊されていない	ある女医さんがTVで語った言葉。私もその様な心構えで「専門的は事柄ほど、簡単な言葉で説明できなければ意味が無い」（最新の医療技術を持っていても患者が家族に分かり易く説明し患者自身に、治療方法選択の判断材料にしてもらえなければダメということ）
小泉平八郎	4年	大山の紅葉	36年	都心に近く緑が多いこと。		一期一会
小原 祐美	3年	江戸情緒の佃島と文明開化の築地を訪ねる	39年	自然が残っている。交通の便がよい。	季節毎に花が楽しめる。	一日一善
S. T	4年	特になし	30年	交通の便がよい	田園風景が多く残っている	家康訓 人の一生は重き荷を背負いて遠き道を行くがごとし 急ぐべからず
山本 昭	5年	松戸（徳川慶喜別邸他）	27年	田舎度	特になし	
大西チエ	6年5ヶ月	入会したころの越谷のいろんな所をめぐった事。	8年		生鮮野菜が高価でない。安い良い。	辛抱

内藤録次	7年		生まれ育った 82年	近年、首都近郊都市として発展しているが、江戸の昔から、穀倉地帯としての幕府直轄領として、水郷の地であった。	博多から浅草・越谷の風景を目にした思いは今でも忘れられない。戦後60数年経ても緑と水の豊かな田舎町の越谷は心に残る思いです。	「鶏首となりて 牛尾となるな」 大塚伴鹿
荒金照登	3年		37年	山が無く平ら 道が狭くない	人口が32万人に成った	やらなければ出来ない(千里の道も一歩から)
斎藤幸裕	平成16年頃	上野方面	約20年	交通の便が良い川が多い	特になし 名所旧跡、名物、食べ物を含め特出できるものがない	易学而難行
山内繁男		佃島	40年	緑が多い	緑です	努力
岩瀬静江	13年	日光 諏訪	71年	生まれも育ちもこの町で、気持ちよく暮らせること。	海も山も無し、特別な物産・名産もいまいち。でも今に見ている必ず…	自分のために泣くな、怒るな。「今が幸せ」と思い生きています。
須賀慶子	9年	越谷出羽の石仏 卯之助の力石	15年	川あり、桜あり、梅林あり、おかり場あり、大相模不動尊。	道路がバイパスに通っていること	
荒木恭子	2年	362回 初冬の北鎌倉	38年	月並みですが、川と緑。静穏で空気もキレイ。		
大崎葉子	3年	・足利市 ・足尾銅山 ・府中を訪ねる	3年	・道路が整備されて並木が美しい ・川や緑が多く、自然が守られている ・史跡がたくさんある	・桜の名所 ・文化活動が発達している	こだわらない柔軟な心
長瀬由木夫	10年以上	千葉方面 鹿島水郷	43年	鴨場方面-梅-桜	レイクタウン水郷が出来た時or鴨場	一期一会
柳田明雄	5年	太田、鎌倉、水戸、府中など	38年	水郷・舟運の街を散策 文人・学者などの往来に想いを馳せる	縄文時代、海底から出現して以来の歴史の街	<日暮れて道遠し>年をとってもやりたい事は沢山残っている。今年も一歩でも二歩でも前進したいもの。
川端孝夫	3年	最近では野田市 キッコーマンコース	33年	河川が有り、又田畑が有り、自然が残っていること	まだ未完都市で、特に思い当たらないが、江戸からの色々な面で古いものがある事	特にありませんが、誠実である事。
森田博	5ヵ月	醤油がつくった野田の文化と歴史	42年	水郷と田園都市としての調和	②とレイクタウンほか未来への発展性。	温故知新
市川巳隆	10年	足尾銅山	44年	川のある町、一歩先には田園風景が見られるから。	徳川家康に関係のある日光街道に町並が点在している事が自慢できる。	生涯現役
神保邦士郎	1年	369回 江戸情緒を残す佃島周辺と文明開花の源流築地を訪ねる	32年		水郷こしがやと呼ばれ、多くの川が流れ、自然環境に恵まれた町	継続は力なり

大野 浩	0年	入会直後の事、故に参加していません。	越谷生まれです 61年	天候穏やかなる事	越ヶ谷秋まつり (10月)	則天去私
荻野功夫	2年	①伊勢原と大山参り ②本土寺と小金宿	60年	私は北越谷の住民ですが、近くに元荒川が流れ、宮内庁鴨場があり、隣には梅林公園と1年中緑があり、越谷のこう云う所が好きです。	平成8年都市計画され、平成11年に越谷レイクタウン事業として進められ20年春に街びらきをする予定だ。広大な調節地と都市を合わせ、全国で初のレイクタウンで自慢できることになると思う。	和而不同 わしてどうぞ
長谷川久一	8年	362回 六阿弥陀めぐり	38年	当時越谷の地価が他と比べて高かった	東京周辺では比較的歴史が古い(有ること)	相手のいやがる事はしない(を目指す)
原田秀一	1年		19年	田舎の良さと都会の良さが混在している。数多くの文化・スポーツ団体が友好的に活動している所が好きです。	災害が少なく、生活の利便性が高い。地域のコミュニケーションが良いと思うこと。	明朗・愛和・喜働
鈴木進志	10年	市内石仏めぐり。各所史跡も。	77年	古利根川・元荒川に残る自然風景		
出口正夫	4年	野火止用水・平林寺	11年	交通の便が良い北越谷の桜並木	水辺の散歩コースが多数ある。(元荒川・新方川・逆川沿い)	邂逅(カイコウ)
田中かよ子	2年	369回 江戸情緒を残す佃島周辺と文明開花の築地	65年	東京近郊なので交通便利な点。それでいて住みやすい。	花田苑の能楽堂	
篠田敏夫	3~4年	江戸川沿いコース	40年	名所旧跡が多い自祭がある	同左	努力
藤田浩行	4年		22年			日日の善行
鈴木タカネ	12年	足立・奥州街道400年記念史跡めぐり	20年	ゆったりした処。とてもしんせつで、思いやりがある方が多い。子供さんの「今日は」の声。	梅園、川の流れて沿って長く続く。桜並木、その下を歩く雑草も懐かしい。	人の振り見て我が振り直せ 我が身をつねって 人の痛さを知れ
武藤淳次	1年		34年	水辺のあるところ。交通のアクセスが良い。	水辺が多いところ。	
小松崎登美子			42年	緑と川が多く美しい。		
原田民自	11年	醤油が作った野田の文化と歴史	31年	都会のようでいて、少し歩くと田んぼがあり河川敷散歩コースがたくさんある。	水郷越谷・旧宿場町・災害がほとんどない・東京に近い・住めば都	明日ありと 思う心の仇桜 夜半に嵐の吹かぬものは(あすのことは分からない、今を精いっぱい生きよ)

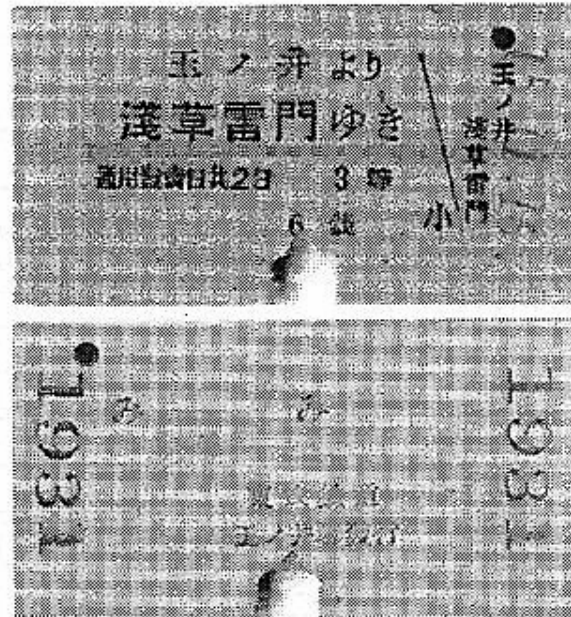
会田 俊	42年		99年	昔の古い町なみ	人情にあつい	ありがとうというように老いては子にしたがい
長谷川敦子	3年		10年	この10年好きになるように努力しています。	郊外が広くて空気がおいしい。	第一健康 第二勉強 健康は戸外から
橋本ミツエ	4年	野田の文化と歴史	19年	人情味の有る人が多い	都市と地方の良い所を備えている所	
山崎ミツ	1年	赤城山コース (バス)	33年			
宮川 進	23年		23年	郷土研究会があるから	郷土研究会があること	心に残ることば 人は創めることを忘れない限り いつまでも老いない マルチン・ブーバーの言葉
渡辺和照	5年	千葉県城めぐり	25年	中央市民会館裏側を流れる元荒川と葛西用水の風景		初心忘るべからず
飯塚多摩子	2年	府中 千葉 長滯	30年	都心に行きやすいし、私の辺りは静かで住み心地が良い。	能楽堂があること	特にありませんが、心掛けていること。相手をきずつけない 他人の悪口を言わない
飯 高道	5年	鎌倉周辺	42年	特になし	これから更に発展する「レイクタウン」建設等	和
浜島はじめ	4年	東京向島めぐり (築地駅～聖路加病院近く散策コース)	38年	自然が豊か (水郷)	同左	世は柳で暮らせ

以上152名

懐かしい切符「浅草雷門」  
昭和十五年十一月十六日 硬券切符

東武鉄道が明治三十二年(一八九九)八月に開業した時の始発駅は、現在の業平橋駅の場所で、開業時点での名称は「浅草駅」。

その後、昭和六年(一九三一)に現在の浅草駅



が始発駅となった。その時の名称が「浅草雷門駅」。同し年の十一月一日に浅草雷門駅ビルが完成して浅草松屋がオープンした。現在の業平橋駅は旧浅草駅。

玉ノ井駅は昭和六十二年(一九八七)十二月に東向島と駅名が変更になった。



## 展 示 作 品 一 覧

越谷市郷土研究会では越谷市で実施する文化行事に参加して、会員の研究・調査した資料の展示を行い好評を得ております。平成17年から平成19年の展示物を一覧にまとめました。

### 越 谷 市 民 文 化 祭

第37回 平成17年11月	1) 大袋駅・その周辺の今昔	青山 栄吉
	2) 戦後60年の幻の萩島飛行場	磯谷 知子
	3) 旧南百・四条・別府・千疋村の石仏	加藤 幸一
	4) 越ヶ谷宿の大沢に泊った伊能忠敬	金岡由紀子
	5) 越ヶ谷音頭	高崎 力
	6) 大沢の天神前の土橋	谷岡 隆夫
	7) 〆切橋の名前の由来	増岡 武司
	8) 大昔の越谷は海だったか	宮川 進
第38回 平成18年11月	1) 旧瓦曾根・登戸・蒲生村の石仏	加藤 幸一
	2) 越ヶ谷・三鷹屋嘉兵衛奉納の石燈籠	木原 徹也
	3) 謎の絵師「写楽」と三野宮の法光寺	菅波 昌夫
	4) 大沢の七ツ池	高崎 力
	5) 市内、西新井の「椿割り塚」の由来	田村のぶ子
	6) 越谷吾山と越谷の方言	増岡 武司
	7) 日光街道に鉄道馬車が走った	三浦 栄市
	8) 増林の横井堀・堀削残土採集記 —飛鳥・平安から中世・近世に至る遺物—	山本 泰秀
第39回 平成19年11月	1) 越ヶ谷・大沢の娯楽殿堂「東武劇場」	原田 民自
	2) 「東武劇場」再現図	三浦 栄市
	3) 見田方の土手道決壊と人柱伝説	池田 仁
	4) 川柳地区の石仏	加藤 幸一
	5) 東武鉄道と北越谷	高崎 力
	6) 越ヶ谷久伊豆神社の例大祭	田熊 吉広
	7) 昔ながらの味・越谷の郷土料理	増岡 武司
	8) 増森特産の固定種「増森ミツバ」	山本 泰秀

### 越 谷 市 民 ま つ り

第31回 平成17年9月	越谷・六阿弥陀めぐり	加藤 幸一 菅波 昌夫
第32回 平成18年10月	1) 東武鉄道 越ヶ谷駅のはなし	原田 民自

第32回 平成18年10月	2) 寺橋の由来	加藤 幸一
---------------	----------	-------

第33回 平成19年10月	1) 新川と岩槻古道《新川は古綾瀬川だった》	加藤 幸一
	2) 大正時代・越谷久伊豆神社の絵葉書	原田 民自

## こしがや文化芸術祭

平成18年2月	1) 元荒川の桜の変遷	高崎 力
	2) 西新井・西組の観音堂	斉木 一征
	3) 桃が咲き乱れた往時の越谷	原田 民自

平成19年2月	1) 大里の人も加わった「下間久里の獅子舞」	加藤 幸一
	2) 越谷出身の画家 斉藤豊作	高崎 力
	3) 増林での草競馬	山本 泰秀

## 越谷市立図書館展

平成18年(2006)2月

テーマ 明治・大正の越谷	明治の越谷	
	1) 越谷八景	加藤 幸一
	2) 熊谷築堤記念碑と越谷	谷岡 隆夫
	3) 増林の茶の栽培	山本 泰秀
	4) 明治天皇田植御覧処	鈴木 秀俊
	5) 迅速図に見る明治初期の越谷	木原 徹也
	6) 越谷でキリスト教を広めた吉田兼三郎翁	高橋 清
	7) 明治23年の大洪水と越巻村	高橋 清
	8) 石神井神社の火消しポンプ「竜吐水」	谷岡 隆夫
	大正の越谷	
	9) 越谷に落ちた隕石	小島 誠
	10) 越谷周辺の近代交通のあけぼの	山本 泰秀
	11) 越谷の歌人の歌会始め	高山 はつ
	12) 関東大震災と越谷	原田 民自
13) 関東大震災と平方	小島 誠	
14) 蒲生小学校の幻の応援歌	高橋 正澄	

平成18年(2006)3月

テーマ 戦前の越谷	1) 越谷の桜の変遷	高崎 力
	2) 大沢小学校の「青い目の人形」	水上 清
	3) 七左の下組稲荷神社の落成記念俳句	鈴木 秀俊
	4) 越ヶ谷音頭の変遷	高崎 力
	5) 大宮氷川神社に奉納された越谷ゆかりの額	鈴木 秀俊
	6) 越谷の養鶏と鶏魂碑(我が国最初のバッテリー方式)	森屋 英龍

テーマ 戦前の越谷	7) 国民健康保険発祥の地	木村 信次
	8) 昭和10年の越ヶ谷電話番号簿	谷岡 隆夫
	9) 国防献金の感謝状と動員兵士の写真	高橋 清
	10) 増林河岸の跡	鈴木 進志

### 平成19年(2007)3月

テーマ 戦後の越谷	1) 越谷上空で散華した飛行兵	高橋 清
	2) 戦後60年の幻の荻島飛行場	磯谷 知子
	3) 増林のねんね河岸の河童	山本 泰秀
	4) 戦後も走った代燃自動車	〃
	5) 増森本田の肥船	加藤 幸一
	6) 長寿と健康の光頭会	高崎 力
	7) 戦後の中学生の田植実習	〃
	8) 蒲生の忠魂碑	菅波 昌夫
	9) 昭和30年代の農事風景	高橋 清
	10) 昔の大竹地域の田園風景	谷岡 隆夫
	11) 越谷と御猟場の印象	平井 五六
	12) 大袋駅・その周辺の今昔	青山 栄吉
	13) 天嶽寺の稚児行列	平井 五六

### 平成19年(2007)7月

テーマ 越谷出身 日本一の力持ち 三ノ宮卯之助 生誕200年	・姫路市魚吹(うすき)八幡神社の三ノ宮卯之助の銅像の写真	
	・力石とは	水上 清
	・三ノ宮卯之助の生涯	高崎 力
	・日本一の力持ち「三ノ宮卯之助」年譜	〃
	・三ノ宮卯之助の力持ち興行の引き札	〃
	・三ノ宮卯之助の力持ち番付	山梨県立図書館
	1) 甲府で発見・卯之助の力石「文殊の石」	高崎 力
	2) 三ノ宮卯之助の力石(横浜市都筑区)	谷岡 隆夫
	3) 久伊豆神社の卯之助の力石	山口美津江
	4) 三野宮神社の卯之助の力石	磯谷 知子
	5) 桶川の卯之助の力石	須賀 弘 小泉平八郎
	6) 木更津の卯之助の力石	西村 功
	7) 網島の卯之助の力石	林 和江
	8) 川崎の卯之助の力石	古澤 孝
	9) 江ノ島奥津の宮の力石	水上 清
10) 諏訪大社の卯之助の力石	小林 重蔵	
11) 姫路市の魚吹(うすき)八幡神社卯之助の力石	高崎 力	

**会報バックナンバー**  
**第1号～第13号**

越谷市郷土研究会 会報 第1号の発行は昭和47年で、平成17年の発行で13号を数えています。各号とも多くの先輩たちの貴重な研究の成果が掲載されており、改めて振り返ることはとても意義のあることだと思います。これらのバックナンバーは夢空感や市立図書館でいつでも閲覧することが出来ます。

**会報 第1号 昭和47年3月発行**

年中行事	野口 仁礼
同習俗他	"
地藏菩薩について	佐々木資郎
地名考 百間の話	"
埼玉古墳と前玉神社	日置 宗一
大岡忠光と山県大武	大村 進
研究余滴 (県指定文化財としての獅子舞)	三原善太郎

**会報 第2号 昭和53年5月発行**

古志賀谷氏について	山崎 善司
新方庄・古隅田川	本間 清利
埼玉県東部付近の民間信仰板碑 越谷市を中心にして	星野 昌治
山号と寺号	天野征之輔
良井の伝説	日置 宗一
日光御成道大門宿と会田本陣	大村 進

**会報 第3号 昭和55年5月発行**

越谷御殿地始末記	石塚 吉男
地図と郷土史	木原 徹也
二郷半領十二ヶ村駕籠訴日記について	中村 忠夫
行田市古墳見聞記	日置 宗一
山王二十一仏板碑と庚申信仰	星野 昌治
関東郡代	本間 清利
埋もれる史跡 屋陰のハツ塚	山崎 善司

**会報 第4号 昭和58年3月発行**

忍藩私領八カ村の村事件に見る領主交替と村民	佐藤 久夫
粕壁宿等に見る天保の貨幣改鑄	木原 徹也

武蔵田園簿と江戸初期の代官	本間 清利
暦について	丸田 富夫
岩槻人形の起源について	石塚 吉男

会報 第5号 昭和61年5月発行

古代の中川低地	宮川 進
庚申塔三猿と法華経の関係	高橋 清
二郷半領代助郷免除願訴状について	中村 忠夫 丸田 富夫
庄和町で見つかった將軍の祝儀銭	木原 徹也
日光街道沿いの一里塚・藤助河岸	木原 徹也
越谷御殿について 小杉藤左衛門の墓	石塚 吉男
羽生城について	本間 清利

会報 第6号 昭和63年8月発行

奈良・平安時代の越谷	宮川 進
古志賀谷氏終焉についての考察	山崎 善司
結城使行と春日部備後	木原 徹也
大聖寺の天保十年の庚申塔	加藤 幸一
百観音の歴史と由来	名倉 さわ
越巻村伝承の念仏講について	高橋 清
維新の焼打騒動	本間 清利
伊勢地方漫遊旅行・新井秀三郎	鈴木 秀俊
航空写真で見る越谷の今昔	木原 徹也

会報 第7号 平成4年6月発行

大聖寺惣門と武州大相模不動明王瑞像記について	加藤 幸一
明治初期の卒業証書と寺子屋時代の教科書	小島 誠
古文書に見る伊勢参宮旅行について	鈴木 秀俊
関東大地震の話	高橋 清
修験道場 武蔵家の歴史	名倉 さわ
海はどこまでできていたか 縄文海進時の最高海水水準について	宮川 進
埼玉県東部低地における遺跡調査報告	宮川 進
関東大震災	村田 留吉
四丁野会田太郎兵衛家の先祖について	山崎 善司

会報 第8号 平成7年6月発行

逆川堤防切割騒動の済口証文	鈴木 秀俊
桜井地区の石仏めぐり	加藤 幸一
大河土御厨について	宮川 進
山王二十一仏板碑究明史	星野 昌治

足立百不動尊	高島 英一
越巻学校開設の時代	高橋 清
手葉爾端忘録	古田 美雄
薬師仏のお開帳	名倉 さわ

会報 第9号 平成9年6月発行

明治期・粕壁中の寄宿舍規則	小島 誠
「赤沼紀行」について	鈴木 秀俊
文書に見る寺家の食生活	一色 英子
天下の大姓	高橋 正輝
国学者 平田篤胤の江戸退去	平川 陽三
越谷市内の火の見やぐら	火の見やぐら 調査グループ
新方地区に散在する石仏類について	加藤 幸一
二十三夜供養塔	高島 英一
消火ポンプ 竜吐水	谷岡 隆夫
武蔵地名考	酒井 達男
明治の人・無学の悔しさ「連帯保証人」	T・K生
生死を分けた運命	山梨 隆司
越谷の水対策	水上 清
子供たちを育てた八条用水	池田 仁
越谷で出会い、影響を受けた人	青山 栄吉
谷中町聞き書き	郷土研究会

会報 第10号 平成11年6月発行

会報「古志賀谷」創刊のころ	谷岡 隆夫
大沢聞き書き	郷土研究会
蒲生聞き書き	〃
越谷市の狛犬	調査グループ 野村 勝八
大袋地区に散在する石仏・石塔について	加藤 幸一
越谷でキリスト教をひろめた吉田兼三郎翁	高橋 清
越谷寺院思考(一)	高橋 正輝
安国寺の古文書	鈴木 秀俊
明治二年(1869)蒲生村・学校規則	西田 茂
「大山道中記」のこと	高橋 正澄
藤原庚申	高島 英一
文書に見る寺家の食生活「精進料理献立」考	一色 英子
越谷養鷄のあゆみ	森屋 英龍

一山一草書の板碑	山本 鉄也
生涯学習との出会い	高橋 はつ

会報 第11号 平成13年6月発行

旧日光街道聞き書き	郷土研究会
越谷の天下サマ「しほや吉兵衛」	高橋 正輝
わが人生の輝ける日	平野 きよ
越谷のお正月と「とうかんやのわらでっぼう」	金岡 由紀子
増林地区の石仏	加藤 幸一
「薫細工・祝い亀」のこと	宇田川 正治 一色 英子
二十世紀余聞	高橋 清
増林地区の江戸時代の寺社	山本 泰秀
旧「越巻」地名考	酒井 達男
「古志賀谷」10号狛犬・追加と訂正	泉 雅彦
謎の石碑	〃
博物館のない越谷	菅波 昌夫
越谷市・資料館都市構想	宮川 進

会報 第12号 平成15年8月発行

荻島地区聞き書き	郷土研究会
越谷の寺院の梵鐘と銘文	菅波 昌夫
武蔵国増林村の変遷	山本 泰秀
荻島地区の石仏	加藤 幸一
ちっとんべ	中島 満 三ツ木宗一 長谷川 和子
間久里	酒井 達男
とうかんやの「わらでっぼう」	金岡 由紀子

会報 第13号 平成17年9月発行

越谷市郷土研究会創立40周年聞き書き	郷土研究会
法然と浄土宗寺院	菅波 昌夫
富士の浅間か、浅間の富士か	金岡 由紀子
天明三年(1783)の浅間山噴火と越谷	〃
川柳地区の石仏をたづねて	増岡 武司
古文書に見る新川の歴史	加藤 幸一
徳川家康公狩り装束の銅像	青山 栄吉
こしがやふるさと話 大間野町・旧中村家について	増岡 武司
越ヶ谷久伊豆神社の収支決算書	木原 徹也

# 研究・発表・報告 リスト

越谷を知りたいという欲求で集った人たちでつくられた越谷市郷土研究会も創立以来42年目を迎えました。その長い年月に多くの諸先輩たちが広く史実をさぐり、その成果を研究会で報告されています。その貴重な資料を一覧にまとめました。

書名	著作者	和暦\西暦	所在
会田家備忘録(越ヶ谷風上記 第一章)	本間 清利	昭和42年 1967	夢空感
近世宿駅の構造 日光道中、越ヶ谷宿の場合	〃	不明	〃
史料紹介 関東郡代伊奈の改易と家臣の動向	〃	〃	〃
五人組帳	〃	〃	〃
下間久里の獅子舞 周辺の研究 由来其の他	三原善太郎	42 〃	〃
越ヶ谷周辺の方言と由来考	〃	〃 〃	〃
伊吹舎学と草莽門人 山崎篤利を中心に見たる	佐藤 久夫	〃 〃	〃
越谷風土記第三章 産社祭礼帳(第二部 近代編)	本間 清利	43 1968	〃
越巻村中新田 産社祭礼帳	〃	〃 〃	〃
下間久里(雨下無双角兵衛)獅子舞考	三原善太郎	〃 〃	〃
金沢称名寺文書を主体とする 越ヶ谷周辺の歴史	岩井 茂	〃 〃	〃
仏像入門	越谷市郷土研究会	〃 〃	〃
神田明神及び将門の首塚	大野伊右衛門	44 1969	〃
地蔵菩薩について	佐々木資郎	45 1970	〃
越谷の古代を探る 見田方遺跡発掘調査から	越谷市郷土研究会	46 1971	〃
近世越谷地方における村方騒動	本間 清利	〃 〃	〃
果島「シラコバト」について	木村 信次	〃 〃	〃
高橋要蔵の算額について 武州下間久里邑	越谷市郷土研究会	47 1972	〃
御書付・御達書覚留帳 上原家文書	三原善太郎	〃 〃	〃
越ヶ谷御殿はどこにあったか	山崎 善司	〃 〃	〃
岩槻太田氏について 信濃守資時と左京亮全鑑	岩井 茂	〃 〃	〃
地名考 宮代町百間の話	佐々木資郎	〃 〃	〃
越谷会田氏と越谷御殿の研究	山崎 善司	48 1973	市立図書館
田園郷江戸初期の代官	本間 清利	〃 〃	夢空感
越ヶ谷 会田出羽家と神明下 会田七左衛門家	〃	〃 〃	〃
埼玉の武士団 野与党と私市党とは	岩井 茂	〃 〃	〃
記録映画 下間久里の獅子舞 久伊豆神社例大祭	越谷市郷土研究会	〃 〃	〃
下総国(武蔵)新方庄の成立と発展	岩井 茂	49 1974	〃
岩槻藩主 大岡忠正について	大村 進	〃 〃	〃
日光道中の通行者	本間 清利	50 1975	〃
武蔵七党の一 野与党の研究への手がかり	岩井 茂	〃 〃	〃
郷土史を訪ねて 会田氏と越谷御殿	石塚 吉男	〃 〃	〃
会田氏の研究	〃	52 1977	〃



越谷・くらしのうつりかわり 大正から平成まで	小島 誠	昭和52年	1977	県立図書館
岩槻城主 太田氏資の支配について	大村 進	"	"	夢空感
関東郡代 伊奈氏	本間 清利	"	"	"
関東郡代伊奈の改易と家臣の動向 「会田家について」	"	"	"	"
埼玉県東部付近の民間信仰板碑	山崎 善司	"	"	"
新方庄及び向畑の伝説	星野 昌治	53	1988	"
日光街道脇往還について	石塚 吉男	"	"	"
地方自治の変遷と越谷	木原 徹也	54	1979	"
那須小川町を訪ねて	本間 清利	"	"	"
山王二十一社板碑について	山崎 善司	"	"	"
越谷御殿地始末記	星野 昌治	55	1980	"
宿場町よりみた天保の貨幣改鋳	石塚 吉男	"	"	"
北越谷の歴史 古代 中世	木原 徹也	56	1981	"
境の神から道祖神	山崎 善司	57	1982	"
徳川家康と越谷	山田 政信	58	1983	"
日光街道沿いの一里塚・藤助河岸	"	59	1984	"
越谷会田氏のルーツを探る	木原 徹也	"	"	"
消えた越ヶ谷城と私の歩み	山崎 善司	60	1985	市立図書館
関東(武蔵)における農耕社会の民族行事	渡辺 与市	61	1986	夢空感
水野家と春日部市備後	矢島 實	"	"	"
越ヶ谷言葉 方言と訛集	木原 徹也	"	"	"
草創期の鉄道あれこれ	山崎 善司	62	1987	市立図書館
太田氏と岩槻城について	小島 誠	"	"	夢空感
越谷で見られる野鳥について	飯山 実	"	"	"
越谷における中世の城館跡	山部 直喜	"	"	"
古志賀谷氏館跡思考	高崎 力	63	1988	市立図書館
越谷における中世の城館跡	山崎 善司	"	"	"
御殿番 小杉藤左衛門尉景の墓	高崎 力	"	"	夢空感
古志賀谷氏館跡	"	平成元年	1989	市立図書館
中世の越谷	"	"	"	夢空感
小絵馬百選	"	2	1990	夢空感
大聖寺の天保10年の庚申塔	越谷市郷土研究会	"	"	"
赤山街道と陸羽街道の道しるべ	加藤 幸一	3	1991	市立図書館
烏文斎細栄之の『瓦曾根溜井図』	山崎 善司	"	"	夢空感
野与党諸氏拠点の考察	加藤 幸一	"	"	"
越ヶ谷言葉 方言と訛集 改補版	山崎 善司	"	"	"
武蔵七党の一つ 野與党諸氏拠点の考察	"	平成4年	1992	"
旧西方村に散在する庚申塔めぐり	"	"	"	"
	加藤 幸一	"	"	"

市神神社 越ヶ谷本町	加藤 幸一	平成5年	1993	夢空感
桜井地区に散在する石仏調査	"	"	"	"
史資料構成による新方領と新方領耕地整理	高崎 力	"	"	"
越谷特産米「太郎兵衛橋」	"	"	"	"
石仏講座 石仏の見方 基礎講座	山田 政信	6	1994	"
足立百不動尊	高島 英一	"	"	"
社会の裏側 あれこれ ～明治・大正・昭和～	小島 誠	7	1995	"
市内桜井地区の石仏紹介	加藤 幸一	"	"	"
平方地区石仏めぐり(解説・資料編)	"	"	"	"
" (図版編)	"	"	"	"
見田方遺跡の発掘 発掘30周年記念講演会	高崎 力	8	1996	"
新方地区の石仏調査(解説・図版・資料編)	加藤 幸一	9	1997	"
越谷・くらしの移り変わり 大正から平成まで	小島 誠	"	"	"
中世からのメッセージ 越谷・建長板碑から750年	諸岡 勝	"	"	"
旧恩間・袋山・大林・大房村の石仏調査(解説・資料・図版編)	加藤 幸一	"	"	"
鉢の木・板碑・鎌倉大仏 越谷・建長板碑とその時代	馬淵 和雄	"	"	"
越谷出身の江戸力持 三ノ宮卯之助	高崎 力	"	"	"
旧船渡・大松・大杉・川崎村の石仏調査(解説・図版・資料編)	加藤 幸一	"	"	"
武蔵武士の活躍と馬	大村 進	"	"	"
大袋地区の石仏調査(解説・図版・資料篇)	加藤 幸一	10	1998	"
旧増林村の石仏(解説・図版・資料編)	"	11	1999	"
江戸中期「俳諧師 師竹庵・越谷吾山」の話	杉本つとむ	"	"	"
瓦曾根溜井と大相模不動尊を訪ねて	越谷市郷土研究会	"	"	"
わが町 蒲生の歴史こぼれ話	高橋 正澄	"	"	"
甕った250年前の大相模不動尊の景観	高崎 力	"	"	"
蒲生茶屋通りとその周辺	高橋 正澄	12	2000	"
越谷生まれの江戸町人の活躍				
千住名倉(創業230年) 日本橋千正屋(創業166年)	高崎 力	"	"	"
駒形どぜう(創業200年) 藤浪小道具(創業128年)				
古墳時代を見直す	高橋 一夫	13	2001	"
増林の円空仏	加藤 幸一	"	"	"
奥州道中の成立	本間 清利	"	"	"
旧大枝村の石仏調査(解説・図版・資料編)	加藤 幸一	"	"	"
大沢・越ヶ谷の石仏案内(解説・図版・資料編)	"	"	"	"
福神と厄神	山田 政信	"	"	"
奥州道中成立400年 宿場町 大澤	鈴木 徳治	"	"	"
" 北越谷(大沢)からせんげん台	高崎 力	"	"	"

奥州街道成立400年 日光道中 藩生大橋～登戸三軒	高橋 正澄	平成13年	2001	夢空感
大道遺跡の発掘	越谷市郷土研究会	"	"	"
平田篤胤国学と越谷 長右衛門とおりせ	佐藤 久夫	14	2002	"
大泊安国寺の円空仏と観音堂の額絵馬	高崎 力	"	"	"
荻島地区の石仏調査(解説・図版・資料編)	加藤 幸一	"	"	"
県東部を中心とした埼玉の仏像	林 宏一	"	"	"
越谷の力士と行司	高崎 力	"	"	"
追想・武州大澤町 宿場の残像	鈴木 徳治	15	2003	"
出羽地区の石仏調査(解説・図版・資料編)	加藤 幸一	"	"	"
越谷周辺の諸巡礼	高崎 力	"	"	"
元荒川沿いの石仏と梅林公園	"	16	2004	"
越谷が生んだ をりせ と たせこ	佐藤 久夫	"	"	"
旧西方・東方・見田方村の石仏調査	加藤 幸一	"	"	"
下間久里の獅子舞	松崎 庄蔵	"	"	"
石仏の見方・楽しみ方	加藤 幸一	"	"	"
越谷宿と大沢宿	高崎 力	17	2005	"
東武地区でもっとも栄えた宿	加藤 幸一	"	"	"
庚申信仰と庚申塔	田熊 吉広	18	2006	"
久伊豆神社例大祭について	増岡 武司	"	"	"
越谷と鴨場 宮内庁埼玉鴨場	加藤 幸一	"	"	"
藩生地区の石仏調査(解説・図版・資料編)	高崎 力	"	"	"
越谷名物 太郎兵衛もちについて	内野 勝裕	"	"	"
越谷周辺の俳諧師たち	高崎 力	"	"	"
見田方遺跡の発掘 40周年記念講演会	"	19	2007	"
画家・斎藤豊作 越谷からパリへ	"	"	"	"
映像で見る「懐かしの越谷」	"	"	"	"
日本一の力持 越谷出身 三ノ宮卯之助	"	"	"	"
古志賀谷 第1号	越谷市郷土研究会	昭和47年	1972	"
" 第2号	"	53	1978	"
" 第3号	"	55	1980	"
" 第4号	"	58	1983	"
" 第5号	"	61	1986	"
" 第6号	"	63	1988	"
" 第7号	"	平成4年	1992	"
" 第8号	"	7	1995	"
" 第9号	"	9	1997	"
" 第10号	"	11	1999	"
" 第11号	"	13	2001	"
" 第12号	"	15	2003	"
" 第13号	"	17	2005	"

# 越谷市郷土研究会 会員名簿

敬称略・五十音順

2007年10月3日現在 313名

1	会田 清	38	今野 光子	75	片桐 薫	112	小平 長信
2	会田 俊	39	岩沢 明	76	加藤 幸一	113	小沼 登茂子
3	会田 克之	40	岩瀬 静江	77	加藤 富士代	114	小林 かつよ
4	青山 栄吉	41	岩根 富子	78	加藤 雅子	115	小林 清子
5	浅川 恵子	42	植田 芳子	79	香取 世志男	116	小林 孝義
6	阿辻 正義	43	上野 勉	80	金子 寛	117	小林 静夫
7	阿部 緑	44	上野 英子	81	金子 慶子	118	小林 登
8	阿部 光江	45	上原 保夫	82	金子 二郎	119	小林 光男
9	天井 実	46	宇田川 正治	83	金田 宏	120	小松崎登美子
10	天野 武	47	榎本 紀美子	84	亀田 すみ子	121	小山 淳子
11	荒井 邦夫	48	江森 峰子	85	川上 喜代蔵	122	近藤 ユキ子
12	新井 敏浩	49	遠藤 洋	86	川上 金蔵	123	後藤 千代子
13	新井 美千代	50	大石 ふく	87	川島 喜代	124	斎藤 博道
14	荒金 照登	51	大川 博	88	川添 ハルミ	125	斎藤 幸裕
15	荒木 恭子	52	大川 昌三	89	川原 文子	126	酒井 正
16	有元 淳子	53	大崎 葉子	90	川端 孝夫	127	酒井 達男
17	安西 利夫	54	大沢 茂	91	菅野 かよ子	128	坂巻 絹江
18	飯泉 信夫	55	大関 たつ子	92	菊池 三郎	129	佐々木 一麿
19	飯塚 英志	56	大西 チエ	93	岸 サク	130	佐々木 義隆
20	飯塚 多摩子	57	大野 紳一	94	北川 義男	131	佐竹 春江
21	生出 弘三	58	大野 浩	95	北澤 萬司	132	佐藤 カツ子
22	池田 仁	59	大橋 浩子	96	木原 徹也	133	佐藤 弘二
23	伊佐馬 悦子	60	岡野 助夫	97	木原 もと代	134	佐藤 修實
24	石井 敏夫	61	岡本 金夫	98	木村 正	135	佐藤 千代雄
25	伊沢 茂	62	小川 康治	99	木村 恵仲	136	佐藤 光夫
26	石川 辰三郎	63	小川 正雄	100	久木田 順子	137	宿岩 伸子
27	石塚 陳正	64	荻野 功夫	101	熊谷 正博	138	篠田 敏夫
28	石渡 ミチ	65	尾崎 孝一	102	倉持 唯枝子	139	篠塚 義雄
29	泉 雅彦	66	押切 ナヲエ	103	栗田 勝行	140	篠原 陸郎
30	和泉 守	67	小野 肇	104	黒田 恵子	141	渋谷 正芳
31	磯谷 知子	68	小野田 吉秀	105	黒田 信子	142	島根 岱助
32	伊丹 常和	69	小野 博康	106	小泉 平八郎	143	清水 初江
33	市川 巳隆	70	小野 了子	107	甲田 美恵子	144	霜田 喜美枝
34	伊藤 貴美	71	小原 勘三郎	108	小島 千枝	145	神保 邦士郎
35	伊藤 靖二	72	小原 祐美	109	越村 英雄	146	菅 清子
36	井上 瑳久江	73	柿沼 孝行	110	小島 久枝	147	須賀 弘
37	井橋 義夫	74	笠原 良全	111	小杉 勝義	148	須賀 慶子

149	菅波 昌夫	191	寺田 勝彦	233	原田 秀一	275	三宅 宗議
150	菅原 貞良	192	寺田 佳子	234	原田 民自	276	武藤 淳次
151	須賀 由紀子	193	照井 春吉	235	樋口 武介	277	村上 瀨治
152	杉浦 健之	194	東條 悦子	236	平田 博子	278	村山 初江
153	鈴木 進志	195	殿山 悦三	237	深井 久子	279	室橋 和子
154	鈴木 タカネ	196	外山 澄子	238	符金 俊治	280	最上 忠二
155	鈴木 種雄	197	豊田 重	239	福井 勝衛	281	最上 みち子
156	鈴木 敏子	198	内藤 拙夫	240	福井 恵子	282	森田 傳一
157	鈴木 秀俊	199	内藤 録次	241	藤井 佐登子	283	森田 三男
158	鈴木 正男	200	仲井 美知子	242	藤川 吉洋	284	森中 重樹
159	鈴木 政子	201	中尾 浩久	243	藤田 浩行	285	八木下 邦夫
160	鈴木 裕司	202	中沢 正夫	244	古川 由二	286	矢口 博孝
161	関 幸保	203	中島 栄子	245	古澤 孝	287	谷塚 由紀子
162	関根 正直	204	中島 美代子	246	古田 美雄	288	柳田 明雄
163	瀬下 さつき	205	中村 梅子	247	古谷 京子	289	藪 高道
164	染谷 耕司	206	中村 栄子	248	古屋 賢一	290	山内 繁男
165	染谷 勇蔵	207	中村 幸夫	249	堀井 和由	291	山口 香
166	染谷 高行	208	永井 勇雄	250	堀井 静枝	292	山口 正夫
167	染谷 政之助	209	永作 公道	251	堀井 博之	293	山口 美津江
168	高久 昌代	210	長瀬 由木夫	252	堀川 静二	294	山崎 清
169	高崎 力	211	名倉 三津枝	253	堀場 孝至	295	山崎 弘治
170	高田すみえ	212	新野トモ子	254	本銚 文子	296	山崎 孝二
171	高田 哲夫	213	西川 信徹	255	本間 清利	297	山崎 定治
172	高野 仁	214	西川 峰雄	256	坊野 清之	298	山崎 治子
173	高橋 とき	215	西村 功	257	増岡 武司	299	山崎 ミツ
174	高山 はつ	216	沼倉 セツ	258	増田 好子	300	山本 昭
175	田中 典子	217	根岸 久子	259	松浦 節也	301	山本 希八
176	竹谷 フミ子	218	根岸 松日出	260	松岡 利器	302	山本 泰秀
177	橋 ふさ	219	野口 玉枝	261	真継 幸男	303	横川 静枝
178	田中 かよ子	220	野口 祐許	262	松沢 開作	304	吉井 ミチ子
179	田中 きく江	221	野沢 陽子	263	松澤 喜代子	305	吉川 輝男
180	田中 直子	222	橋田 早苗	264	松原 茂樹	306	吉田 和子
181	田中 利昌	223	橋本 ミツエ	265	松本 謙一	307	吉田 忠雄
182	谷岡 隆夫	224	長谷川 敦子	266	松本 マツエ	308	吉田 文子
183	田沼 隆司	225	長谷川 久一	267	松本 瑠美	309	吉野 夫美子
184	田端 功政	226	長谷川 義夫	268	間野 栄一	310	蓬田 敏晶
185	田村 芳枝	227	花町 文美	269	水上 清	311	渡辺 和照
186	田山 美保子	228	浜島 はじめ	270	峰 孝久	312	渡辺 景子
187	土屋 清江	229	林 知子	271	箕輪 象三郎	313	和田 尚之
188	堤竹 宏吉	230	林 美也子	272	三原 紀子		
189	角田 久	231	林 和江	273	宮内 和代		
190	津山 正幹	232	林 佳子	274	宮川 進		

## NPO法人 越谷市郷土研究会 役員

— 平成19年(2007)7月～平成21年(2009)6月

会 長	宮川 進			
副 会 長	加藤 幸一			
幹 事 長	藤川 吉洋			
常任幹事	中村 幸夫	藪 高道		
幹 事	永井 勇雄			
常任理事	青山 栄吉	小泉平八郎	小林 光男	
	柿沼 孝行	佐藤 光夫	菅波 昌夫	
	古澤 孝	水上 清	渡辺 和照	
理 事	安西 利夫	磯谷 知子	岩瀬 静江	
	上野 勉	木村 恵仲	篠原 陸郎	
	原田 民自	藤田 浩行	古谷 京子	
	福井 勝衛	山本 希八		
監 事	佐々木一磨	野口 祐許		
常任顧問	谷岡 隆夫	高崎 力		

## NPO法人 越谷市郷土研究会 実行委員

— 平成19年(2007)7月～平成21年(2009)6月

荒金 照登	伊藤 靖二	生出 弘三	北川 義男
渋谷 正芳	田端 功政	符金 俊治	宮内 和代
山崎 治子			

## NPO法人 越谷市郷土研究会 会友

会田 俊	池田 仁	小原勤三郎	木原 徹也
鈴木 種雄	鈴木 秀俊	堤竹 宏吉	林 和江
本間 清利	山口美津江		

## 『夢空感』へ

お越しください…

平成十七年(二〇〇五)十一月、越谷市本町商店街の一角のチャレンジ・ショップ「夢空感」に、越谷市郷土研究会の拠点を設け、情報発信をしております。内部には、史跡めぐりの資料・会報のバックナンバー・講演会の資料・各種カタログなど、越谷市郷土研究関連資料がたくさん取り揃えてあります。

また、史跡めぐりの資料作りや講演会のスケジューリングなど、会員相互間の情報交換、コミュニケーションの場としても活用しています。

さらに、ご来場のみならず、さまざまにいただいた越谷の歴史についての疑問や質問を受け付けております。即答できないものは後日ご連絡させていただいております。会員が常駐していますので、是非一度お立ち寄りください。



東武伊勢崎線「越谷駅」より徒歩約15分



『夢空感』を一つ奥が、越谷市郷土研究会です。

ます。これらの品々は越谷地域でかつて他地域に引けを取らないくらい盛んに作られていました。私たちは、「越谷の輝き」の再興を願い、アピールしようとするものです。これらは営利が目的ではなく、「越谷名物」の普及の一助になることを願ったものです。平成十八年(二〇〇六)五月十四日付け朝日新聞に「越谷名物・輝き再び」としてこの「夢空感」が紹介されました。

## 情報発信拠点として活用

住所 越谷市越ヶ谷本町8-3  
電話 048-962-2651

午前十時から午後五時半まで。月曜は定休日です。また、越谷特産「太郎兵衛もち」を使った「あられ」や、「越谷せんべい」(二種類)や、大小さまざまな「越谷だるま」、「五色だるま」、「越谷産桐箱」の越谷の名産品を展示・即売しております。

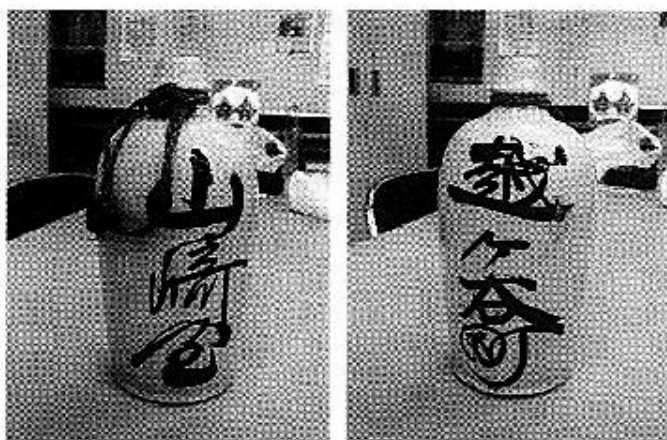
## 夢空感にある

### 「通い徳利」のこと

由来から使用方法まで

夢空感の片隅に、「通い徳利」（かよいどつくり）と書かれた紙が張りつけてある大きな徳利が置かれてあります。本体には「越ヶ谷町」「山崎屋」と書かれ、紙片には「これは、楠原昇さんからお借りしているものです」とあります。「通い徳利」？これは何なんだろう。と、いうことで調べて見ることにしました。

通い徳利は、酒を日常的に飲むようになって江戸時代から、酒屋の貸出し容器として普及し始めて、容量は、



高さ 25.7 センチ、胴周りの太いところが 40.7 センチの「通い徳利」

三合の小さいのから二升くらいまでの磁製の容器で、最も多いのは一升前後。大きさからすると店での酒の販売は、一升単位が多かったようだ。

造り酒屋から出荷された酒が、問屋を通じて個人経営の酒屋に送られ、それを個人がこの「通い徳利」を持って買いに行くという仕組み。徳利は何度も繰り返し使用でき、徳利本体には、徳利の貸し出し主である酒屋の屋号とか地名などが書かれてあった。お客がそれを持って買い物に出かければ、持ち歩く途中でお店の宣伝にもなり、また、店からの貸し出し用なので、客は次に買いに行く時にもその店に行くことになるので、酒屋としても売上げ向上を見込めたようだ。

江戸時代から昭和初期まで幅広く使われていたが、関東大震災を境として現在に見られるガラスの一升瓶に取って代わることになった。また、「貧乏徳利」ともいわれたが、なぜ貧乏といっていたのかは不明。

江戸や埼玉などで使われていた徳利は、主に美濃高田（現在の岐阜県）産の徳利で、夢空感にあるような灰色がかった白色で太く短い首と筒型の胴部をした特色を持っている。

通い徳利に書かれてある「山崎屋」は、明治三十五年に作成された「埼玉県営業便覧」の越ヶ谷地区での新石町・仲町・本町を見ると、酒商が数軒見られるが特定できなかった。山崎姓は新石町三丁目山崎長右衛門が米穀肥料商として存在していた。



## あとがき

編集委員会

多くのみなさまの投稿により、ここに会報「古志賀谷」第十四号が発刊の運びとなりました。貴重な原稿をお寄せいただいた方々にお礼を申し上げます。

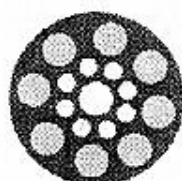
会報の取り掛かりが今年の三月と遅れたこともあり、半年遅れの発刊となってしまいました。内容的には充実した労作が多く、後世に残すに十分足るものと考えています。

史跡めぐりの記録では多くの方に執筆と写真撮影をお願いしました。ご協力ありがとうございました。

会報恒例のアンケートでは一五二名の方々から返事をいただき、充実した紙面を作成することができました。

高崎先生の講演会も今号は四回を数えました。紙面ではその雰囲気伝えることは難しく、貴重な講演の模様をDVDで記録してありますので、ご利用ください。

今後ともみなさまのご協力で更なる向上をめざし、会報の刊行を続ける所存です。ご支援をお願い致します。



編集委員

青山 榮吉

柿沼 孝行

加藤 幸一

篠原 陸郎

原田 民自

山本 希八



会 報 第十四号

発行日 平成十九年十一月二十五日

発行者 NPO法人 越谷市郷土研究会

代表者 宮川 進

印刷所 三光堂印刷所

越谷市大沢一ノ十五ノ十四

越谷市大沢一ノ十五ノ十四